熊本県文化財調査報告第160集

庵)前遺跡Ⅲ

一般国道3号熊本北バイパス改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1997. 3

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告第160集

魔)前 遺 跡 Ⅲ

一般国道3号熊本北バイパス改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1997.3

熊本県教育委員会



熊本北バイパス関係遺跡航空写真(建設省熊本工事事務所提供)

報告書抄録

フリガナ	アンノマエイセキ
書 名	庵ノ前遺跡 Ⅲ
副書名	一般国道3号熊本北バイパス改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻 次	
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第160集
編著者	濱田彰久
編集機関	熊本県教育委員会
所 在 地	〒862 熊本県熊本市水前寺6丁目18番1号
発 行 年	1997年3月31日

フ	IJ	ガ	ナ	フ	リ ガ	ナ	ם	— к	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所	収	遺	跡	所	在	地	市町村	遺跡番号	10/4	N/AI	W-1 EL/911-1	¥ A	
庵	Ź	前		熊			43201	1 1 1			H.4.7.1	350 m²	国道改築
"				字古関山				1 1 1			\$		(バイパス建設)
1							:	? ? ?			H.4.7.31		
				熊本市清				f 1 1			H.5.5.10	6,200m²	
				字前田							5	-,	
1											H.6.3.25		
								1 1			H.7.5.11	350 m²	
											\$		
							:				H.7.6.28		
岩	,						43201	,			H.7.6.13	4m²	国道改築
石							45201	; ; ;			\$		(バイパス建設)
								1 1 1			H.7.6.19		

所収遺跡	種 別	主な時代	主な遺構	主 な 遺 物	特 注 事 項
庵ノ前	包含地	旧石器		チャート製三稜尖頭器	弥生中期の甕棺墓のうち5
	集落			黒曜石製台形石器	基から人骨出土、3体は保
	墓地	縄文時代		押型文土器、撚糸文土器、条痕土器、塞	存状態良好
		早期		ノ神式土器	
		前期		轟 B 式土器	
		後期		磨消縄文土器、黒色磨研土器、粗製深鉢	
		晚期		土器、突帯文土器	
				石鏃、石匙、石錐、削器、抉入石器、楔	
				型石器、打製石斧、磨製石斧、石錘	
				磨石、敲石、不定形石器、使用痕ある剥	
				片、石核	
		弥生時代	住居跡1基	黒髪式土器	
		中期	甕棺墓12基	須玖式甕棺	
			土壙(木棺)	磨製石鏃、磨製石剣、石包丁、紡錘車	
			墓9基	ガラス玉	
		古墳時代	住居跡3基	土師器	
岩倉山中腹	包含地	弥生時代	甕棺墓1基		
	墓地	中期		<u> </u>	

序 文

熊本県教育委員会では、建設省の委託を受け、一般国道3号熊本北バイパス改築事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施いたしました。

今回報告する庵ノ前遺跡の発掘調査は、平成4年度から7年度にかけて実施され、 縄文時代、弥生時代を中心とする多数の遺物が出土いたしました。中でも弥生中期の 甕棺墓から出土した3体の人骨は、保存状態も良好で、この時代の人類を知るための 貴重な資料となると思われます。

この報告書が、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解を深め、さらには学術研究の 進展にいささかでも寄与するところがあれば、まことに喜びに堪えません。

なお、本調査を実施するにあたり、文化財保護の観点から多大の御協力を惜しまれなかった九州地方建設局熊本工事事務所ならびに、御指導御助言をいただきました諸 先生方に深く感謝申し上げたいと思います。

平成9年3月31日

熊本県教育委員会 教育長 松尾隆 樹

例 言

- 1. 本書は、一般国道3号熊本北バイパス改築事業に関連して、平成4年度から7年度にかけて実施した熊本市龍田町上立田および、清水町楡木に所在する「庵ノ前遺跡」の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2. 調査は、建設省九州地方建設局熊本工事事務所の委託を受けて、熊本県教育委員会が行った。
- 3. 現地での調査は、長谷部善一、濱田彰久、池本利直、長尾至明、山田大輔が行った。
- 4. 遺物の整理、実測は、平成7年度に熊本県文化財収蔵庫で実施し、濱田、日置正香、赤坂希がこれにあたった。また、遺物実測の一部を村崎孝宏、前川真由美が行った。
- 5. 本書の執筆および編集は、熊本県文化財収蔵庫において、濱田が行った。また、第Ⅲ章第2節については岩谷史記が執筆した。なお、甕棺墓出土人骨の分析について、松下孝幸氏(土井ヶ浜遺跡人類学ミュージアム館長)に玉稿を頂き、第Ⅷ章に掲載した。
- 6. 遺物の写真撮影は、熊本県文化財収蔵庫において、今村龍太郎が行った。
- 7. 整理後の遺物は、熊本県文化財収蔵庫(熊本市渡鹿3丁目15-12)に保管されている。

本 文 目 次

口	絵
報台	占書抄録
序	文
例	言

坐 1 辛 · · ·	- -
第 章 序	
	調査に到る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
	調査組織
第2節	遺跡の概要と環境
1.	遺跡の概要
2.	周辺の地理的環境
	周辺の歴史的環境
4.	遺跡の基本層位・・・・・・・・・・・・10
第Ⅱ章 平	· 成 4 (1992)年度調査
第1節	調査の概要
第2節	調査の成果·······11
	土器
	石器
۷.	有敬
第Ⅲ章 平	² 成 5 (1993)年度第 I 調査区
第1節	調査の概要
第2節	旧石器時代の遺物
第3節	
	土器
	石器
第4節	弥生時代の遺構と遺物·······74
	竪穴住居跡····································
	土壙 (木棺) 墓
	工機 (NG) 基
	石器
6.	その他の遺物 ····································
第Ⅳ章 平	范成 5 (1993) 年度第 Ⅱ 調査区
第1節	調査の概要

第2節	古墳時代の遺構と遺物	15
1.	竪穴住居跡	15
2.	土師器	22
第3節	その他の時代の遺物 ······ 12	23
1.	土器	23
2.	石器	25
第Ⅴ章 平	² 成7(1995)年度調査	
第1節	調査の概要	28
第2節	調査の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	28
1.	土器	28
2.	石器	30
	台倉山中腹遺跡出土甕棺墓	
	調査の概要	
第2節	調査の成果	32
第Ⅷ章 ま	:とめ	
	: とめ 旧石器時代	
1.		36
1. 2.	旧石器時代	36 36
1. 2. 3.	旧石器時代 13 縄文時代 13	36 36 37
1. 2. 3. 4.	旧石器時代 13 縄文時代 13 弥生時代 13 古墳時代 13	36 36 37
1. 2. 3. 4. 第 W 章 分	旧石器時代 13 縄文時代 13 弥生時代 13 古墳時代 13	36 36 37 39

挿 図 目 次

第1図	庵ノ前遺跡調査区位置図	
第2図	谷口遺跡出土石器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
第3図	庵ノ前遺跡周辺遺跡分布図	6
第4図	基本土層図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	…10
第5図	平成4年度調査区遺構分布図	…12
第6図	平成4年度調査区出土土器	…13
第7図	平成4年度調査区出土石器	…14
第8図	平成5年度第 I 調査区遺構分布図	…16
第9図	I 区出土旧石器······	…17
第10図	I 区出土縄文土器(1)·····	…20
第11図	I 区出土縄文土器(2)·····	…21
第12図	I 区出土縄文土器(3)·····	…22
第13図	I 区出土縄文土器(4)·····	23
第14図	I 区出土縄文土器(5)·····	24
第15図	I 区出土縄文土器(6)·····	25
第16図	I 区出土縄文土器(7)·····	26
第17図	I 区出土縄文土器(8)·····	29
第18図	I 区出土縄文土器(9)·····	30
第19図	I 区出土縄文土器(10)·····	31
第20図	I 区出土石器(1)·····	38
第21図	I 区出土石器(2)·····	39
第22図	I 区出土石器(3)······	40
第23図	I 区出土石器(4)·····	41
第24図	I 区出土石器(5)·····	42
第25図	I 区出土石器(6)·····	44
第26図	I 区出土石器(7)·····	45
第27図	I 区出土石器(8)·····	46
第28図	I 区出土石器(9)·····	47
第29図	I 区出土石器(10)·····	48
第30図	I 区出土石器(11)·····	49
第31図	I 区出土石器(12)······	50
第32図	I 区出土石器(13)·····	51
第33図	I 区出土石器(I4)·····	52
第34図	I 区出土石器(15)·····	53
第35図	I 区出土石器(I6)·····	54
第36図	I 区出土石器(I7)·····	55
第37図	I 区出土石器(18)······	56

第38図	I 区出土石器(19)······	57
第39図	I 区出土石器(20)······	58
第40図	I 区出土石器(21)······	59
第41図	I 区出土石器(22)·····	60
第42図	I 区出土石器(23)······	61
第43図	I 区出土石器(24)·····	62
第44図	I 区出土石器(25)······	63
第45図	I 区出土石器(26)······	64
第46図	I 区出土石器(27)······	65
第47図	I 区出土石器(28)·····	66
第48図	I 区出土石器(29)······	67
第49図	I 区出土石器(30)·····	68
第50図	I 区 1 号住居跡実測図	75
第51図	1、2、3、4号甕棺墓実測図	79
第52図	5、6、7号甕棺墓実測図	80
第53図	8 号甕棺墓実測図	81
第54図	9 号甕棺墓実測図	82
第55図	10号甕棺墓実測図	83
第56図	11、12号甕棺墓実測図	84
第57図	1 号甕棺実測図	85
第58図	2、3、11号甕棺実測図	86
第59図	4 、 5 、 6 、12号甕棺実測図	87
第60図	7 号甕棺実測図	88
第61図	8 号甕棺実測図	89
第62図	9 号甕棺実測図	90
第63図	10号甕棺実測図	91
第64図	1 、 2 号土壙(木棺)墓実測図	93
第65図		
第66図	6 、 7 号土壙(木棺)墓実測図	
第67図	8 、 9 号土壙(木棺)墓実測図	96
第68図	I 区出土弥生土器(1)······	99
第69図	I 区出土弥生土器(2)······	100
第70図	I 区出土弥生土器(3) ·······	101
第71図	I 区出土弥生土器(4) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	102
第72図	I 区出土弥生土器(5) ······	
第73図	I 区出土弥生土器(6) ······	
第74図	I 区出土弥生土器(7) ······	
第75図	I 区出土弥生土器(8) ····································	
第76図	I 区出土弥生土器(9) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	107
第77図	I 区出土弥生土器(10) ····································	108

第78図	I 区出土弥生土器(II
第79図	I 区出土弥生石器及びその他の遺物
第80図	平成5年度第Ⅱ調査区遺構分布図
第81図	Ⅱ 区 1 号住居跡実測図及び出土土器
第82図	Ⅱ 区2、3号住居跡実測図及び2号住居跡出土土器120
第83図	Ⅱ 区 3 号住居跡出土土器
第84図	Ⅱ 区出土土師器
第85図	Ⅱ 区出土土器
第86図	Ⅱ 区出土石器(1)
第87図	Ⅱ 区出土石器(2)
第88図	平成7年度調査区遺構分布図
第89図	平成7年度調査区出土土器
第90図	平成7年度調査区出土石器
第91図	岩倉山中腹遺跡調査地点位置図
第92図	岩倉山中腹遺跡出土甕棺墓実測図
第93図	岩倉山中腹遺跡出土甕棺実測図
第94図	組織痕土器
第95図	深水谷川遺跡 2 号住居跡出土土器
第96図	昭和63年度調査竪穴住居跡及び出土土器
),re = [
),io - L	THE TRUE TO A THE TENT OF THE
),,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,	
,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,	表目次
	表目次
第1表	表 目 次 熊本北バイパス関係埋蔵文化財一覧 1
第1表	表 目 次 熊本北バイパス関係埋蔵文化財一覧 1 庵ノ前遺跡周辺遺跡一覧表(1) 7
第1表 第2表 第3表	表 目 次 熊本北バイパス関係埋蔵文化財一覧 1 庵ノ前遺跡周辺遺跡一覧表(1) 7 庵ノ前遺跡周辺遺跡一覧表(2) 8
第 1 表 表 表 表 表 表	表 目 次 熊本北バイパス関係埋蔵文化財一覧 1 庵ノ前遺跡周辺遺跡一覧表(1) 7 庵ノ前遺跡周辺遺跡一覧表(2) 8 I区出土縄文土器観察表(1) 32
第 第 第 第 第 第 第 5 表 表 表 表	表 目 次 熊本北バイパス関係埋蔵文化財一覧 1
第 第 第 第 第 第 第 第 5 6	表 目 次 熊本北バイパス関係埋蔵文化財一覧・ 1 庵ノ前遺跡周辺遺跡一覧表(1) 7 庵ノ前遺跡周辺遺跡一覧表(2) 8 I 区出土縄文土器観察表(1) 32 I 区出土縄文土器観察表(2) 33 I 区出土縄文土器観察表(3) 34
第 第 第 第 第 第 第 第 3 4 4 5 6 7 7 8 7 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8	表 目 次 熊本北バイパス関係埋蔵文化財一覧 1 庵ノ前遺跡周辺遺跡一覧表 (1) 7 庵ノ前遺跡周辺遺跡一覧表 (2) 8 I 区出土縄文土器観察表 (1) 32 I 区出土縄文土器観察表 (2) 33 I 区出土縄文土器観察表 (3) 34 I 区出土縄文土器観察表 (4) 35
第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 表 表 表 表 表 表 表 表 表	表 目 次 熊本北バイパス関係埋蔵文化財一覧 1 庵ノ前遺跡周辺遺跡一覧表(1) 7 庵ノ前遺跡周辺遺跡一覧表(2) 8 I 区出土縄文土器観察表(1) 32 I 区出土縄文土器観察表(2) 33 I 区出土縄文土器観察表(3) 34 I 区出土縄文土器観察表(4) 35 I 区出土縄文土器観察表(1) 70
第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 3 4 5 6 7 8 9 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8	表 目 次 熊本北バイパス関係埋蔵文化財一覧・ 1 庵ノ前遺跡周辺遺跡一覧表 (1) 7 庵ノ前遺跡周辺遺跡一覧表 (2) 8 I 区出土縄文土器観察表 (1) 32 I 区出土縄文土器観察表 (2) 33 I 区出土縄文土器観察表 (3) 34 I 区出土縄文土器観察表 (4) 35 I 区出土和文土器観察表 (1) 70 I 区出土石器観察表 (2) 71
第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第	表 目 次 熊本北バイパス関係埋蔵文化財一覧 1
第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 3 4 5 6 7 8 9 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8 8	表 目 次 熊本北バイパス関係埋蔵文化財一覧・ 1 庵ノ前遺跡周辺遺跡一覧表 (1) 7 庵ノ前遺跡周辺遺跡一覧表 (2) 8 I 区出土縄文土器観察表 (1) 32 I 区出土縄文土器観察表 (2) 33 I 区出土縄文土器観察表 (3) 34 I 区出土縄文土器観察表 (4) 35 I 区出土和文土器観察表 (1) 70 I 区出土石器観察表 (2) 71
第第第第第第第第第第第第第第 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 11 11 11 11 11 11 11 11 11 11 11	表 目 次 熊本北バイパス関係埋蔵文化財一覧 1 庵ノ前遺跡周辺遺跡一覧表 (1) 7 庵ノ前遺跡周辺遺跡一覧表 (2) 8 I 区出土縄文土器観察表 (1) 32 I 区出土縄文土器観察表 (2) 33 I 区出土縄文土器観察表 (3) 34 I 区出土縄文土器観察表 (4) 35 I 区出土和文土器観察表 (4) 35 I 区出土石器観察表 (1) 70 I 区出土石器観察表 (2) 71 I 区出土石器観察表 (3) 72 I 区出土石器観察表 (4) 73 出土売者観察表 (4) 73
第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第	表 目 次 熊本北バイパス関係埋蔵文化財一覧 1 庵/前遺跡周辺遺跡一覧表 (1) 7 庵/前遺跡周辺遺跡一覧表 (2) 8 I 区出土縄文土器観察表 (1) 32 I 区出土縄文土器観察表 (2) 33 I 区出土縄文土器観察表 (3) 34 I 区出土縄文土器観察表 (4) 35 I 区出土君器観察表 (4) 35 I 区出土石器観察表 (1) 70 I 区出土石器観察表 (2) 71 I 区出土石器観察表 (3) 72 I 区出土石器観察表 (4) 73 出土種棺観察表 (7) 78 I 区出土が生土器観察表 (1) 110
第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第第	表 目 次 熊本北バイパス関係埋蔵文化財一覧 1 庵ノ前遺跡周辺遺跡一覧表 (1) 7 庵ノ前遺跡周辺遺跡一覧表 (2) 8 I 区出土縄文土器観察表 (1) 32 I 区出土縄文土器観察表 (2) 33 I 区出土縄文土器観察表 (3) 34 I 区出土縄文土器観察表 (4) 35 I 区出土和文土器観察表 (4) 35 I 区出土石器観察表 (1) 70 I 区出土石器観察表 (2) 71 I 区出土石器観察表 (3) 72 I 区出土石器観察表 (4) 73 出土売者観察表 (4) 73

写 真 図 版

図版 1	平成4年度調査区	図版 36	I 区 6 号土壙(木棺)墓
図版 2	平成4年度調査区遺構確認状況	図版 37	I 区 9 号土壙(木棺)墓
図版 3	平成4年度調査区溝状遺構	図版 38	I 区完掘状況 (南より)
図版 4	平成5年度I区表土剥ぎ後	図版 39	平成5年度 🛚 区表土剥ぎ後(南より)
図版 5	I区F-4区遺物出土状況	図版 40	平成5年度 🛚 区表土剥ぎ後(北より)
図版 6	I 区 I - 9 、 I -10区遺物出土状況	図版 41	Ⅱ区1号住居跡遺物出土状況
図版 7	I 区 I - 9 区壺出土状況	図版 42	Ⅱ 区 1 号住居跡甕出土状況 (1)
図版 8	I 区 I - 9 区紡錘車出土状況	図版 43	Ⅱ 区 1 号住居跡甕出土状況 (2)
図版 9	I 区1号住居跡(東より)	図版 44	Ⅱ 区 1 号住居跡
図版 10	I 区1号住居跡(北より)	図版 45	Ⅱ 区 2 号住居跡
図版 11	I 区 1 号甕棺墓	図版 46	Ⅱ区3号住居跡遺物出土状況
図版 12	I 区 2 号甕棺墓	図版 47	Ⅱ区完掘状況(南より)
図版 13	I 区 3 号甕棺墓(正面)	刈版 48	平成7年度調査区表土剥ぎ(北より)
図版 14	I 区 3 号甕棺墓(横)	図版 49	平成7年度調査区完掘状況(北より)
図版 15	I 区 4 号甕棺墓	図版 50	岩倉山中腹遺跡出土甕棺墓確認状況
図版 16	I 区 5 号甕棺墓	図版 51	岩倉山中腹遺跡出土甕棺墓(正面)
図版 17	I 区 6 号甕棺墓	図版 52	岩倉山中腹遺跡出土甕棺墓(横)
図版 18	I 区 7 号、 9 号、10号甕棺墓	図版 53	発掘作業
図版 19	I 区 7 号甕棺墓	図版 54	麻生田小学校遺跡見学
図版 20	I 区 7 号甕棺墓人骨出土状況	図版 55	平成4年度調査区出土石器・土器
図版 21	I 区 8 号甕棺墓	図版 56	I 区出土縄文土器 (1)
図版 22	I 区 8 号甕棺墓人骨出土状況	図版 57	I 区出土縄文土器 (2)
図版 23	I 区 9 号甕棺墓(横)	図版 58	I 区出土縄文土器(3)
図版 24	I 区 9 号甕棺墓(正面)	図版 59	1 区山上畑立上県 (4)
			I 区出土縄文土器 (4)
図版 25	I 区 9 号甕棺墓人骨出土状況	図版 60	I 区出土縄文土器 (5)
図版 25	I 区 9 号甕棺墓人骨出土状況 I 区10号甕棺墓		
		図版 60	I 区出土縄文土器 (5)
図版 26	I 区10号甕棺墓	図版 60 図版 61	I 区出土縄文土器 (5) I 区出土縄文土器 (6)
図版 26 図版 27	I 区10号甕棺墓 I 区10号甕棺墓人骨出土状況	図版 60 図版 61 図版 62	I 区出土縄文土器 (5) I 区出土縄文土器 (6) I 区出土縄文土器 (7)
図版 26 図版 27 図版 28	I 区10号甕棺墓 I 区10号甕棺墓人骨出土状況 1 区11号甕棺墓(全体)	図版 60 図版 61 図版 62 図版 63	I 区出土縄文土器 (5) I 区出土縄文土器 (6) I 区出土縄文土器 (7) I 区出土縄文土器 (8)
図版 26 図版 27 図版 28 図版 29	I 区10号甕棺墓 I 区10号甕棺墓人骨出土状況 1 区11号甕棺墓(全体) I 区11号甕棺墓	図版 60 図版 61 図版 62 図版 63 図版 64	I 区出土縄文土器 (5) I 区出土縄文土器 (6) I 区出土縄文土器 (7) I 区出土縄文土器 (8) I 区出土縄文土器 (9)
図版 26 図版 27 図版 28 図版 29 図版 30	I 区10号甕棺墓 I 区10号甕棺墓人骨出土状況 1 区11号甕棺墓(全体) I 区11号甕棺墓 I 区12号甕棺墓	図版 60 図版 61 図版 62 図版 63 図版 64 図版 65	I 区出土縄文土器 (5) I 区出土縄文土器 (6) I 区出土縄文土器 (7) I 区出土縄文土器 (8) I 区出土縄文土器 (9) I 区出土縄文土器 (10)
図版 26 図版 27 図版 28 図版 29 図版 30 図版 31	I 区10号甕棺墓 I 区10号甕棺墓人骨出土状況 1 区11号甕棺墓(全体) I 区11号甕棺墓 I 区12号甕棺墓 I 区12号甕棺墓	図版 60 図版 61 図版 62 図版 63 図版 64 図版 65	I 区出土縄文土器 (5) I 区出土縄文土器 (6) I 区出土縄文土器 (7) I 区出土縄文土器 (8) I 区出土縄文土器 (9) I 区出土縄文土器 (10) I 区出土縄文土器 (11)
図版 26 図版 27 図版 29 図版 30 図版 31 図版 32 図版 33	I 区10号甕棺墓 I 区10号甕棺墓人骨出土状況 1 区11号甕棺墓(全体) I 区11号甕棺墓 I 区12号甕棺墓 I 区12号甕棺墓 I 区1 区、2 号土壙(木棺)墓 I 区 1 号土壙(木棺)墓	図版 60 図版 61 図版 62 図版 63 図版 64 図版 65 図版 66	I 区出土縄文土器 (5) I 区出土縄文土器 (6) I 区出土縄文土器 (7) I 区出土縄文土器 (8) I 区出土縄文土器 (9) I 区出土縄文土器 (10) I 区出土縄文土器 (11) I 区出土縄文土器 (12)

図版 71	I 区出土石器(1)	図版 89	I 区出土弥生土器 (1)
図版 72	I 区出土石器(2)	図版 90	I 区出土弥生土器 (2)
図版 73	I 区出土石器(3)	図版 91	I 区出土弥生土器 (3)
図版 74	I 区出土石器(4)	図版 92	I 区出土弥生土器 (4)
図版 75	I 区出土石器(5)	図版 93	I 区出土弥生土器 (5)
図版 76	I 区出土石器(6)	図版 94	I 区出土弥生土器 (6)
図版 77	I 区出土石器(7)	図版 95	I 区出土弥生土器 (7)
図版 78	I 区出土石器(8)	図版 96	I 区出土弥生土器(8)
図版 79	I 区出土石器(9)	図版 97	I 区出土弥生土器 (9)
図版 80	I 区出土石器(10)	図版 98	I 区出土弥生土器 (10)
図版 81	I 区出土石器(11)	図版 99	I 区出土弥生土器 (11)
図版 82	I 区出土石器(12)	図版100	I 区出土弥生石器及びその他の出土品
図版 83	I 区出土石器(13)	図版101	Ⅱ区1号住居跡、2号住居跡出土土師器
図版 84	I 区出土石器 (14)	図版102	Ⅱ区3号住居跡出土土師器(1)
図版 85	I 区出土石器(15)	図版103	Ⅱ区3号住居跡出土土師器(2)
図版 86	I 区出土甕棺(1)		及びI区出土土師器
図版 87	I 区出土甕棺(2)	図版104	Ⅱ区出土縄文土器(1)
	及び岩倉山中腹遺跡出土甕棺	図版105	Ⅱ区出土縄文土器(2)
図版 88	I 区出土甕棺(3)	図版106	Ⅱ区出土石器
		図版107	平成7年度調査区出土石器・土器

第1章 序 説

第1節 調査に到る経緯と経過

1. 調査に到る経緯

昭和47年度、建設省九州地方建設局熊本工事事務所から、松橋バイパスや玉名バイパスと共に、熊本北バイパスの路線について、分布調査の依頼があった。依頼を受けた熊本県教育庁文化課では、3路線の踏査を行い、松橋バイパス9ケ所、玉名バイパス12ケ所、熊本北バイパスについては、下記の「熊本北バイパス関係埋蔵文化財一覧表」(第1表)の12ケ所を確認して、熊本工事事務所に報告した。

このうち、新南部遺跡は昭和59年度、龍田陳内遺跡(調査時に龍田陳内南遺跡を改称)は昭和61年度にそれぞれ発掘調査を実施した。また、龍田陳内北遺跡、緑ヶ丘遺跡、緑ヶ丘山ノ神遺跡については、確認調査を行ったが、遺構、遺物等は検出されなかった。

平成2年、熊本工事事務所との協議により、庵ノ前遺跡、迫ノ上遺跡に加えて、試掘調査の結果、新たに確認された古閑山遺跡(調査後に山ノ神遺跡を改称)の3ケ所を対象に発掘調査を実施することとなり、平成3年度から7年度にかけて、発掘調査が実施された。

庵ノ前遺跡の発掘調査は、道路用地の買収状況や工事の進捗状況等に応じて、平成4年10月、平成5年5月から平成6年3月、平成7年6月の3次にわたって行った。このうち、平成4年度調査は学芸員長谷部善一、平成5、7年度調査は文化財保護主事濱田彰久がそれぞれ主査として担当した。

また、平成7年6月に清水町兎谷の熊本北バイパス工事現場において甕棺墓1基が発見された。現地は周知の遺跡である岩倉山中腹遺跡に隣接していたが、分布調査においては、遺物等は確認されていなかった。 熊本工事事務所との協議の結果、庵ノ前遺跡の調査の一環として、緊急に調査が実施された。

なお、平成6年10月に麻生田包含地の確認調査を実施したが、遺構・遺物等は確認されなかったため、熊本工事事務所に発掘調査は不要であるとの通知をおこなった。

				_
遺跡名	面積(m)	所 在 地	時 代	内 容 等
四方寄御馬下遺跡	17,500	北部町四方寄御馬下	縄文、古墳	縄文時代、古墳時代の住居跡
鶴羽田横穴群	3,600	〃 鶴羽田	古墳	古墳時代後期の横穴群
須 屋 城 跡	11,500	西合志町須屋	中世	天正年間、菊池氏一族の須屋市蔵の居館跡 と伝えられる。 濠、土塁に囲まれた要害である。
新地包含地	19,400	熊本市清水町新地	弥生、古代、中世	弥生、古代、中世の集落跡
麻生田包含地	6,100	〃 〃 麻生田	弥生、古墳	弥生、古墳時代の集落跡、甕棺遺跡
楡木庵ノ前遺跡	10,900	""	縄文、弥生	縄文時代の集落跡 弥生時代の甕棺遺跡
迫の上遺跡	18,500	〃 竜田町迫	縄文、弥生	縄文時代の集落跡、弥生時代の集落 甕棺遺跡
緑ケ丘山の神遺跡	5,400	" " 緑ケ丘	縄文	縄文時代の集落跡
緑ケ丘遺跡	14,000	" " 緑ケ丘	縄文、古墳、古代	縄文時代、古墳時代の集落跡、 古代の窯跡群
竜田陳内北遺跡	6,600	" " 陳内	縄文、古墳	縄文時代、古墳時代の集落跡
竜田陳内南遺跡	10,500	" " 陳内	縄文、古墳	同上
新 南 部 遺 跡	9,200	〃 新南部町	縄文~奈良	縄文、弥生、古墳時代の集落跡、弥生時代 の甕棺遺跡の他、奈良時代の寺院跡

第1表 熊本北バイパス関係埋蔵文化財一覧

2. 調査組織

調査主体 熊本県教育委員会 大塚 正信 (平成4、5年度主席教育審議員・文化課長) 調査責任者 桑山 裕好(平成7年度文化課長) 昭志 (平成4年度教育審議員) 平野 芳久 (平成5年度教育審議員) 丸山 秀人 (平成7年度課長補佐) 調査総括 松本 健郎 (主幹・文化財調査第二係長) 調査担当 長谷部善一(学芸員、平成4年度) 濱田 彰久(文化財保護主事、平成5、7年度) 池本 利直(文化財保護主事、平成5年度) 長尾 至明 (嘱託、平成4、5年度) 山田 大輔 (嘱託、平成7年度) 報告書担当 濱田 彰久 (文化財保護主事) 日置 正香 (嘱託) 赤坂 希 (嘱託) 前川真由美 (嘱託) 専門調査員 松下 孝幸(土井ヶ浜遺跡人類学ミュージアム館長) 調査指導及び協力者 清田 純一(城南町歴史民俗資料館) 杉村 彰一 (熊本北高校教諭) 岩谷 史記 (熊本大学大学院生) 松崎 厚生 (平成4、5年度課長補佐) 調査事務 白井 哲哉 (平成7年度教育審議員) 木下 英治(平成4、5年度主幹・経理係長) 藤本 和夫 (平成7年度主幹・総務係長) 高浜 保子(参事) 相馬 晴久 (平成4、5年度参事) 高宮 優美(平成7年度参事)

発掘作業 荒木えみ子 池袋 隆行 石田ミネ子 犬塚冨美代 岩崎 将 岩田 政秀 江藤 一也 小田 信子 貝瀬 千秋 有働 春美 甲斐美紀代 甲斐由貴子 木村 智加 河上タツコ 熊谷 美里 合志カツ子 合志ミツ子 後藤 恵 後藤 幸子 白井 勝子 斉藤美由紀 境 喜美栄 島村 政和 清水たつよ 菅原 貴明 杉浦りえ子 高野 美香 立花 幸一 立原 恵子 田中 強 谷冨 久恵 谷口ヨシエ 土田ちえみ 土田 俊雄 内藤なおみ 長尾 彰心 中林るり子 中村 孝子 中山 森重 西坂スマ子 西村 栄子 野口 康雄 野口ヨシノ 野崎千枝子 畠田 壮仁 野田 橋本スミ子 馬場美智子 隆 早田 輝美 原田 菊代 番山 明子 淵上久美子 本田 貴博 松田 計子 松村喜代子 三浦キエ子 水野美知子 宮田 日文 宮本 典美 三好 伴典 村上 春枝 森 せい子 山内真千代 山城 玲子 山田 友子 横田 浩士 大塚トシ子 整理作業 今村龍太郎 江島 園子 興梠富貴子 重永 照代 白井美恵子 松岡 美穂 水本 佳子 宮本 幸子 徳永みどり 橋本由美子 山切 律子 山下千栄子 吉本 清子

第2節 遺跡の概要と環境

1. 遺跡の概要 (第1図)

庵ノ前遺跡は、熊本市の北東部、清水町大字兎谷、清水町大字楡木、龍田町大字上立田に広がる遺跡で、 遺跡名は兎谷の小字名より採られている。

遺跡の存在は早くから知られており、戦後間もなく、縄文時代早期、後期、晩期、及び弥生時代の甕棺などの遺物が採集されて熊本市立熊本博物館に保管されている。

昭和57年度に遺跡の南側に県立熊本北高等学校が新設され、その工事用取付道路建設に伴い、約500㎡の発掘調査が実施され、県下で初めての縄文時代早期の竪穴住居跡が4基確認された。うち3基は切り合った状態であったが、いずれも平面は小判形で、規模は2m×3m程度であった。また、断面は皿状で、深さは13~30cm、一部ロームによる貼り床がなされていた。他に3基の土坑、2か所の礫群が確認されている。遺物としては、押型文、斜行縄文を主体として、無文、塞ノ神式、轟A式等の土器や、磨石、石鏃、楔型石器等の石器が出土している。

また、昭和63年度には、熊本北高校の登校道路建設に伴って約1,300㎡の発掘調査が実施され、弥生時代の 竪穴住居跡1基、柱穴などが確認された。住居跡は3.5m×3mの不整方形で、深さは18~28cm、2本柱と 思われる。遺物は、押型文や塞ノ神式等の縄文土器、弥生土器、土師器等が出土している。

この2回にわたる調査は、いずれも小規模で、調査面積も狭く、遺跡の全容を確認するまでには至らなかったが、今回の北バイパス建設に伴う調査は、遺跡の中心部に当たり、また、調査面積も合計6,500㎡に及ぶ大規模なもので、遺跡の性格を考えるうえで重要な遺構、遺物が多数出土した。

なお、今回の調査地点及び調査面積は、平成4年度調査区が清水町大字楡木字前田1,219-1番地の約350㎡、 平成5年度第Ⅰ調査区が龍田町大字上立田字古閑山2,378番地、2,382番地を中心とする約5,200㎡、第Ⅱ調査 区が楡木字前田1,218番地の約970㎡、平成7年度調査区が上立田字古閑山2,380番地の約350㎡である。

2. 周辺の地理的環境

庵ノ前遺跡は、白川北岸に展開する合志台地の西端にある立田山山系の一部にあたる岩倉山の南東麓の台地(低地段丘)上に位置する。一帯の地質は阿蘇溶結凝灰岩(阿蘇4火砕流)を基底とし、上層に阿蘇4風化層、洪積世堆積層、沖積世堆積層をのせている。遺跡付近はほぼ平坦で、平均標高は約70mである。

遺跡の南から南東側にかけては、谷をはさんで、同じ立田山山系の天拝山が位置する。天拝山の尾根上から北側斜面には古閑山遺跡が広がり、庵ノ前遺跡と向かい合う形になっている。

また、遺跡の南側には県立熊本北高校がある。この高校は岩倉山と天拝山の間の谷を埋め立てて造成されており、この谷は兎谷川に沿って西方向、清水町万石方面に開けている。

一方、遺跡の北側は、急傾斜の崖になっており、北西方向、清水町麻生田方面に開ける谷によって楡木台地と分断されている。この谷に沿って県道託麻北部線が走っている。また、この谷を流れる小川 (新地排水路) はせきとめられて、2つの溜池がつくられており、周辺の農地の灌漑に利用されている。

遺跡の東側は、北側に比べると比較的緩やかな傾斜で下り、谷を隔てて楠方面と向かい合う形となっている。

この一帯は、表土が保水性の悪い火山灰堆積層であるため、ゴボウやニンジン、サツマイモなどを主とする畑作地帯であったが、戦後間もなく開田が行われ、多くが水田に転換した。昭和40年頃から、近くの楠、



第1図 庵ノ前遺跡調査区位置図

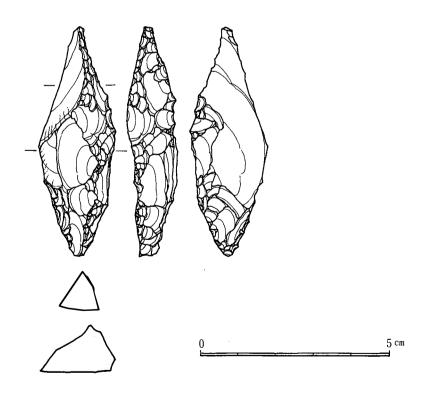
武蔵ヶ丘などに大型の住宅団地が造成され、また岩倉山一帯など、周辺の宅地開発が相次ぎ、急速な市街地 化が進んでいる。平成11年度に予定される熊本北バイパスの開通によって、市街地化は一層進み、周辺の環 境も大きく変わっていくものと思われる。

3. 周辺の歴史的環境

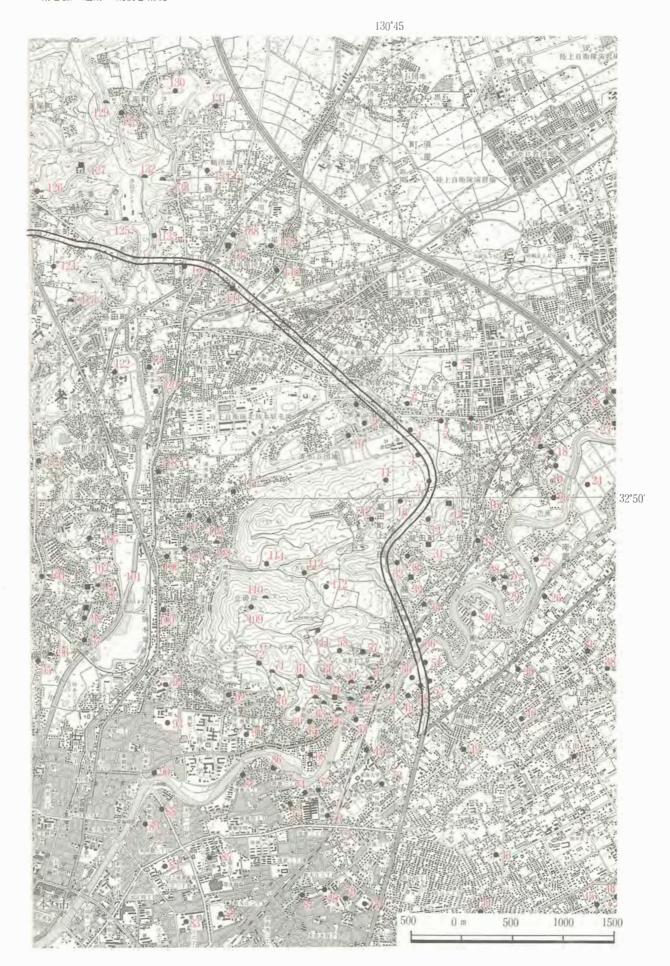
庵ノ前遺跡の周辺には、各時代の遺跡が集中的に分布しており、熊本市内でも有数の遺跡群を形成している。詳しくは「庵ノ前遺跡周辺遺跡分布図」(第3図)及び「庵ノ前遺跡周辺遺跡一覧」(第2、3表)にまとめたが、ここでは周辺の主な遺跡について、簡単にまとめてみたい。

(1) 旧石器時代

熊本地方における歴史上の最初の痕跡である旧石器時代の遺跡であるが、最近では発見される遺跡数も増加し、次第にこの時代の文化の様相が明らかにされつつある。天拝山A遺跡からは安山岩製の尖頭器、楡木遺跡からは黒曜石製の細石核、龍田陳内遺跡からは三稜尖頭器、さらに、平成7年度に発掘調査が行われた清水町万石の谷口遺跡からはナイフ形石器が出土している(第2図)。また、国体主会場予定地である熊本市平山町の石の本遺跡からは約22,000年前の火山灰堆積層である「姶良・丹沢(AT)層」の下にあたる赤褐色土層から局部磨製石斧や剥片石器などの石器が出土し、熊本のみならず九州でも最も古い段階の石器群として注目されている。



第2図 谷口遺跡出土石器



第3図 庵ノ前遺跡周辺遺跡分布図

第2表 庵ノ前遺跡周辺遺跡一覧表(1)

番号		所 在 地	時 代	備考
1	た 前遺跡	熊本市龍田町上立田古開山	旧~古	旧石器、縄文早前後晩期土器、弥生中期甕棺、古墳時代住居跡
2	古閑山遺跡	熊本市龍田町上立田古閑山	細・古	縄文土器、土師器、円墳、箱式石棺
3	迫ノ上遺跡	熊本市龍田町上立田迫ノ上	縄・古・古代	縄文土器、須恵器・土師器、カマド付き住居跡
4	一丁霍進跡	熊本市龍田町上立田	縕	縄文後晩期土器、石器
5	堂ノ前遺跡	熊本市清水町楡木堂ノ前		須恵器窯跡
6	楡木遺跡	熊本市清水町楡木堂ノ前	縄・弥	縄文早前晩期、弥生甕棺、上師器・須恵器
7	楠遺跡	熊本市楠 3 丁目		
8	岩倉山中腹遺跡	熊本市清水町兎谷岩倉山	弥	- 弥生塑棺
9	岩倉山山頂遺跡	熊本市清水町兎谷岩倉山		
10	岩倉山遺跡 天拝山A遺跡	熊本市清水町兎谷岩倉山 熊本市龍田町上立田天拝山	102 . 201 . 25:	 安山岩製尖頭器、縄文早前後晩期土器・石器、弥生土器片
! 1	天拝山 B 遺跡	熊本市龍田町上立田天拝山	117 - 1942 - 1717	女国有农夫项品、相关于刑技机划工品、"3" (4) (4) (7) (2) (4) (4) (4) (4) (4) (4) (4) (4) (4) (4
1 1	緑ヶ丘山ノ神遺跡	熊本市龍田町上立田緑ケ丘	細	御文土器・石器
1 1	緑ヶ丘遺跡	熊本市龍田町上立田緑ケ丘		縄文早晩期土器・石器、土師器・須恵器
15	堂ノ前屋敷窯跡	熊本市龍田町上立田堂前屋敷	古代	須恵器窯跡
16	三の宮遺跡	熊本市龍田町上立田宮脇	縄	縄文晩期土器
17	吉ノ平遺跡	熊本市龍田町上立田吉ノ平		
1 1	竹ノ後遺跡		組	縄文後期土器 土偶 配石
19	竹ノ後甕棺群	熊本市龍田町上立田竹ノ後	弥	甕棺墓、甕棺、人骨片
20	芭蕉遺跡 コポース・エムントロオ	熊本市龍田町上立田芭蕉鶴		
21	弓削平ノ下A進跡	熊本市龍田町弓削平ノ下		
22 23	弓削平ノ下B遺跡 片彦瀬遺跡	熊本市龍田町弓削平ノ下	縄・古	縄文後晩期・土師器
24	上南部遺跡	熊本市上南部町	細	程文後晩期・工師語 縄文後晩期土器・石斧・土偶・住居跡・埋鞭
1 1	王田遺跡	熊本市上南部町王田	縄・弥・古	須恵器・土師器、縄文土器・石器、弥生土器・甕棺
1 1	平ノ山遺跡	熊本市上南部町平ノ山		Commence of the Commence of th
1 1	牧鶴古墳群	熊本市龍田町上立田中牧電	古	数基の小円墳
28	中牧鶴遺跡	熊本市龍田町上立田中牧霍	弥	弥生甕棺
29	牧鶴石棺	熊本市龍田町上立田牧鶴	弥・古	箱式石棺 1 基、弥生式土器、須恵器
30	下南部遺跡	熊本市下南部2丁目	縄~古	縄文後晩期土器、弥生~古墳時代集落跡、甕棺墓
1 1	長蓮寺窯跡	熊本市龍田町陳内長蓮寺		須恵器窯跡
32	上ノ園A遺跡	熊本市龍田町陳内上ノ園	縄・弥	縄文後期土器、弥生土器、方形周溝墓
33	上ノ園B遺跡	熊本市龍田町陳内上ノ園	縄~古	縄文早晩期土器、弥生土器、土師器・須恵器
	龍田陳内館跡	熊本市龍田町陳内上ノ園	縄・中世	空堀、土塁、堀立柱建物跡、青磁、縄文土器 縄文晩期土器、須恵器・土師器
35 36	陳内宮の前遺跡 龍田陳内遺跡	熊本市龍田町陳内東西小路	旧・縄・古	神文呪刃工器、須思器・工師器 三稜尖頭器、縄文早前後晩期土器、古墳時代住居跡
	北古迫遺跡	熊本市御領町北小迫	144 · Li	一夜天现命。福久平削夜晚朔工命、日填崎八任冶卿
	八反田居屋敷遺跡	熊本市長嶺町八反田居屋敷		
39	松の窪遺跡	熊本市西原3丁目		
40	乾原遺跡	熊本市八反田2丁目	細	縄文中後晩期土器・住居跡・埋甕
41	迎八反田遺跡	熊本市長嶺町迎八反田居屋敷	縄・古	縄文早~晩期土器・石器、土師器・須恵器、瓦
42	南原遺跡	熊本市西原1丁目		
1 1	保田窪東一本松遺跡	熊本市帯山7丁目		
44	三郎塚遺跡	熊本市三郎1丁目	古	古墳
1 1	新外A遺跡	熊本市新外2丁目	細	縄文(御領式) 土器
	新外B遺跡 新南部A 謝跡	熊本市月出5丁目	细~十件	 縄文土器・石器、弥生土器、土師器・須恵器、竪穴住居跡、瓦
1 (新南部A遺跡 新南部B遺跡	熊本市新南部2丁目 熊本市新南部5丁目	縄~古代 縄~古代	縄文工器・石器、小生工器、工師器・須思器、 竪八 住居跡、 瓦 縄文土器・石器、土師器・須恵器、布目瓦
1	新南部C遺跡	熊本市新南部5丁目	古	土師器・須恵器
i 1	新南部D遺跡	熊本市新南部5丁目	縄・弥	縄文、弥生、須恵器・土師器・石器
1 1	西谷遺跡	熊本市新南部5丁目	弥・古代	竪穴住居跡、柱穴群、土師器・須恵器、石器、鉄製品
1 1	新南部(上西原)遺跡	熊本市新南部5丁目	古	竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土師器・須恵器、鉄製品など
53	新南部三ツ石遺跡	熊本市新南部1丁目	弥	弥生住居跡群
1 [熊本市黒髮7丁目	縄~古	縄文土器、弥生土器、須恵器・土師器
1 1	長葉寺横穴群	熊本市黒髪7丁目	古	横穴、須恵器、人骨
1 1	長薫寺古墳	熊本市黒髪7丁目		円墳 1 基(横穴石室)、鉄鏃、須恵器
1 1	九女グランド遺跡 宇留毛浦山市営墓地遺跡	熊本市龍田町陳内女瀬平 熊本市黒髪7丁目	縄・古	 細文 上師哭・須恵哭 万哭
1 1	宇留毛浦山第三横穴群	熊本市黒髪7丁目	横・古古	縄文、土師器・須恵器、石器 横穴、土師器・須恵器
1 1	宇宙毛浦山第二横穴群	熊本市黒髪7丁目	古	横穴、上師器・須恵器、金環、玉類
1 1	立田山南麓古墳(上)	熊本市黒髪8丁目	古	円墳、横穴式石室
62	立田山南麓古墳 (下)	熊本市黒髪6丁目	古	小型横穴式石室、鉄鏃、須恵器片
63	宇留毛神社境内古墳群	熊本市黒髮6丁目	古	円墳2基
64	立田山城跡	熊本市黒髮7丁目	中世	立田伊賀守重雄、小太郎重治居城という
65	つつじケ丘横穴群	熊本市黒髪7丁目	古	土師器・須恵器、金属製品、鉄滓、玉類、貝、貝輪、炭化材、石製品、人骨、獣骨
1 1	宇留毛小碩橋際横穴群	熊本市黒髪7丁目	古	横穴、鉄器、金環、玉類、土師器、須恵器、人骨、獣骨
1 1		熊本市黒髪6丁目	細士	石器片
1 1	宇留毛B遺跡	熊本市黒髮6丁目 熊本市黒髮8丁目	古縄	土師器 縄文早前後期土器
70	カブト山遺跡 白石古墳	熊本市黒髪8丁目	古	類
	E = E > X			- 23 MH
71	城床古墳群	熊本市黒髮8丁目	古	

第3表 庵ノ前遺跡周辺遺跡一覧表(2)

番号	遺 跡 名	所 在 地	時 代	備考
73	新南部西原遺跡	熊本市保田窪本町·新南部町	縄・弥・古代	縄文早期土器、道路、溝、土師器・須惠器、瓦など
74	小関小松山遺跡	熊本市渡鹿6丁目	弥	弥生塑棺
75	小関原遺跡	熊本市渡鹿7丁目	縄~古	縄文早前晩土器、弥生甕棺、土師器・須恵器、瓦
- 1	北久根山遺跡	熊本市渡鹿7丁目	旧~古代	縄文後期土器、住居址、竪穴住居、土壌、土師器・須恵器、鉄斧など
- 1	辻遺跡	熊本市渡鹿7丁目	古代	竪穴住居、掘立柱建物、土師器・須恵器、瓦、鉄鏃、ヘラ描・墨書
	帯山遺跡	熊本市帯山1丁目	縄・古代	縄文土器・石器、土師器・須恵器、瓦
	保田窪遺跡	熊本市帯山1丁目	古代	須恵器・土師器、布目瓦少量出土
	南平上遺跡	熊本市新大江3丁目	古代	火葬墓、土師器・須恵器、瓦、骨臟器、鉄製品
- 1	大江新町遺跡	熊本市新大江3丁目	古代	土師器・須恵器、瓦
- 1	熊高敷地遺跡	熊本市新大江1丁目	縄・古代	竪穴住居、土師器・須恵器、瓦、鉄製品、陶硯、縄文土器少量 綾・溝、掘立柱建物、竪穴住居、土師器・須恵器、瓦、鉄製品、瓦質土器、陶
	大江東原遺跡 大江遺跡	熊本市大江6丁目 熊本市大江3丁目	古代 縄・古代	磔・痹、痴立仕壁物、竪八住店、工師器・須思語、凡、妖穀品、凡員工器、阿 土偶、土師器・須恵器、瓦など
- 1	大江青葉遺跡	熊本市大江 2 丁目	対代	工商、工師語・気息器、見など 竪穴住居、溝、道路、掘立柱建物、井戸、近世土壙墓、土師器・須恵器、瓦
86	液鹿北原遺跡	熊本市渡鹿6丁目	弥~古代	弥生型棺、須恵器
87	渡鹿貝塚	熊本市渡鹿5丁目	縄文・古代	郑文中後晩期土器住居址、屋外炉、竪穴住居、土師器・須恵器、鉄製品、紡錘
88	大江白川遺跡	熊本市大江1丁目	縄・弥	縄文早前期土器・弥生甕棺片一括
89	新屋敷遺跡	熊本市新屋敷2丁目	弥・古	竪穴住居、環濠、溝、道路、水田、溝状遺構、土師器・須恵器、陶磁
90	子飼遺跡	熊本市子飼本町	組	縄文後期土器
91	桜山中学校校庭遺跡	熊本市黒髪5丁目		須恵器包含
92	小峰遺跡	熊本市黒髪4丁目	縄・古代	土師器、須恵器、瓦
93	黒髮町 (済済黌敷地) 遺跡	熊本市黒髪2丁目	弥·古代~中世	甕棺、竪穴住居、土師器・須恵器、黒色土器、瓦、石鍋、瓦器、瓦質土器など
94	九州女学院遺跡	熊本市黒髮3丁目	縄~古代	弥生土器、甕棺墓、古代住居址、縄文土器、須恵器・土師器、瓦質土器、石
95	舟場遺跡	熊本市津浦町		
- 1	舟場山古墳	熊本市津浦町	古	石棺、円墳
- 1	打越貝塚	熊本市打越町	縄	縄文土器、磨製石斧
98	打越甕棺遺跡	熊本市打越町		塑 棺墓
- 1		熊本市打越町	中世	
100	室園遺跡	熊本市室園町		[
101	白川学園石棺遺跡	熊本市打越町永浦		箱式石棺
102		熊本市打越町永浦	古	円墳1基(横穴式石室)、鏡、玉類、武具、馬具、土師器・須恵器、人
103	永浦城跡	熊本市打越町永浦	中世	代官職永浦氏の本拠、建長5年以降不詳 1874 1875
104	山伏塚遺跡	熊本市高平2丁目	弥・古	弥生土器、土師器・須恵器 四株・ダギスター「名燕工程」の独立(
105 106	名義尾塚古墳(髙平箱式石棺) 松崎八幡箱式石棺遺跡	熊本市高平2丁目	古	円墳、箱式石棺、「名薙王塚」の碑立つ 人骨・鉄剣、華山天神内
107	松崎甕棺遺跡	熊本市清水本町 熊本市清水本町	古 弥	恐棺墓、恐棺
108		熊本市清水万石 4 丁目	古	円墳、2基内1基消滅
109	立田山山頂遺跡	熊本市室園町	古	土師器、須恵器
	万石茶山古墳群	熊本市室園町	古	横穴式石室
111		熊本市黒髪8丁目	"	
	秣野遊跡	熊本市龍田町陳内秣野	縄・古	 縄文土器・石器、土師器・須恵器
113	万石茶山遺跡	熊本市龍田町陳内		夜臼、弥生
114	万石乗越遺跡	熊本市乗越ヶ丘		
115	谷口遺跡	熊本市清水万石4丁目	旧・縄・古代	三稜尖頭器、縄文後晩期土器、カマド付き住居跡
116	古閑前遺跡	熊本市清水本町	旧?	
117	万石昭和団地前遺跡	熊本市滑水町兎谷岩倉		
118	龟井遺跡	熊本市清水亀井町	縄・古代	縄文、土師器、瓦器など
119		熊本市徳王町	弥・古代	【縄文土器、弥生土器、溝、道路、土師器、須恵器、鏡
- 1	八景水谷遺跡	熊本市八景水谷1丁目	縄~古	縄文前後晩期土器、弥生土器、土師器
	八景水谷甕棺群	熊本市八景水谷1丁目	弥	
122	山室遺跡	熊本市清水町山室	古工工	上師器、石斧
123		熊本市飛田町	弥・古	円墳、方形周溝墓、箱式石棺、弥生土器、土師器・須恵器、鉄器、磁器、瓦質土 柳本吟舞
- 1	飛田塔の木遺跡	熊本市飛田町塔の木	縄・古	縄文晩期、石斧、土師器出土
- 1	辻横穴群 四七字知 原 玉 為 財	熊本市四方寄町辻	古	
1	四方寄御馬下遺跡	熊本市四方寄町		住居址、土偶、紡錘形土製品、石斧、後晩期土器 田螺の貝塚が検出されている。
- 1	城ケ辻城跡 梶尾横穴群	熊本市四方寄町城ケ辻 熊本市梶尾町宮の本	中世 古	田螺の貝啄が使出されている。 風化、防空壌利用、数原型不詳
129	梶尾遺跡	熊本市梶尾町中尾原	^白 弥	弥生後期、台付髙杯・杯
		熊本市梶尾町古閑原	יער	加工技術、日刊同和・和
- 1	梶尾立野遺跡	熊本市梶尾町		
	竹の下横穴群	熊本市鶴羽田町竹の下	古	
	鶴羽田かぶと塚古墳	熊本市鶴羽田町兜塚	눔	円墳
134		熊本市鶴羽田町	縄・古	縄文後晩期、須恵器・土師器
135		熊本市鶴羽田町山際畑		
136		熊本市鶴羽田町	古代	土師器
137		菊池郡西合志町須屋		
	宿の山(須屋)遺跡	菊池郡西合志町須屋宿の山	弥・古	弥生合口塑棺・土師器片一括
138	## C + Jak D+	菊池郡西合志町須屋梨の木		
138 139	梨の木遺跡			1 -1
139 140	向島遺跡	菊池郡西合志町須屋向島	1	型 棺
139 140		菊池郡西合志町須屋向島 菊池郡西合志町須屋下屋敷	中世	^要 棺 天正年間、菊池氏一族・須屋市蔵の居館

(2) 縄文時代

白川両岸の河岸段丘を中心に遺跡が点在している。一般には丘陵地で傾斜のある地形が多い北岸より、平 坦な南岸の方に大規模な遺跡が立地しており、縄文早~晩期にわたる多量の土器が採集された新南部遺跡群、 縄文後期の土器や土偶が多数出土した上南部遺跡、鐘崎式土器などが出土した渡鹿貝塚、後期中葉の北久根 山式土器を出土し、その標識遺跡となった北久根山遺跡などが代表的な遺跡としてあげられる。

一方、北岸では、縄文早~晩期にわたる各種の土器を出土したカブト山遺跡や、縄文前期の曽畑式土器が 多数出土した龍田陳内遺跡、縄文晩期の土器、土偶、配石遺構等が確認された竹ノ後遺跡が著名である。

(3) 弥生時代

弥生時代の遺跡は、立田山周辺を中心に多数分布している。特に甕棺遺跡は黒髪式土器の標識となった黒 髪町遺跡をはじめ、八景水谷遺跡や、竹ノ後遺跡、中牧鶴遺跡など、熊本市内でも有数の分布を示している。 また、庵ノ前遺跡の周辺でも、人骨の残る須玖式の合口甕棺が出土した迫ノ上遺跡や、楡木遺跡があり、岩 倉山でも、住宅団地造成の際に多くの甕棺が出土している。

住居跡を伴う遺跡では、白川南岸の西谷遺跡で、中・後期の住居跡や磨製石鏃、鉄器など、下南部遺跡で 後期の住居跡や磨製石鏃、石包丁などがそれぞれ出土している。また、県運動公園建設の際に調査が行われ た石原亀の甲遺跡からは後期を中心とする集落の跡が確認され、銅鏡や土器、石器など多くの遺物が出土し ている。

(4) 古墳時代

古墳時代になると、立田山一帯でも、万石茶山古墳や立田山南麓古墳などの古墳が築かれているが、その一方で、膨大な数の横穴群が立田山麓から白川北岸にかけて築かれている。これは、比較的加工しやすい凝灰岩の崖面が立田山周辺に多く存在するためで、宇留毛小碩橋際横穴群や宇留毛浦山横穴群など、一大横穴群地帯を形成している。特につつじヶ丘横穴群は墓前祭祀の様子がわかる好資料として注目され、県指定文化財になっている。

また、集落関係では下南部遺跡や龍田陳内遺跡、平成6年度に調査された迫ノ上遺跡などでかまどの付い た住居跡が確認されている。

(5) 歴史時代

奈良・平安時代になると、律令体制の導入に伴い、肥後においても行政組織の整備、条里制の施行が進められ、その影響が周囲に及んでくる。現在の熊本市北部は、白川を境に北は飽田郡、南は託麻郡に属し、飽田郡家は京町付近、詫麻群家は渡鹿付近にあったとされる。また、坪井川両岸の水田地帯では、条里制が実施された。また、立田山西麓を官道(西海道)が通り、現在の子飼に蚕養駅が設置されたと推定されている。

立田山の東部では、須恵器の生産が行われるようになり、窯が作られた。当時の生産遺跡として長蓮寺窯跡や堂の前屋敷窯跡などがある。

また、白川南岸の大江一帯の調査では、須恵器、土師器を伴う住居跡が多く確認され、西谷遺跡からは平安期の住居跡が出土している。

中世、立田山周辺では、南麓の宇留毛に城が築かれたが、生活の中心は主に白川と坪井川の沿岸の低地にあり、台地上は未開発であった。

近世になると、肥後藩によって、台地上の開拓が行われるようになった。現在の清水町、竜田町一帯は五

町手永に属し、細川忠利は麻生田、楡木、兎谷などに地筒をおいて、開拓と防御の任にあたらせている。

現在の遺跡周辺は、熊本市域の拡大に伴う農地の宅地化が進み、また、造成によって旧地形が削られるなど、急速に昔の面影を失いつつある。また、交通混雑の緩和など、市街地化に伴う道路、施設などの環境整備が、早急な課題となっている。

4. 遺跡の基本層位 (第4図)

庵ノ前遺跡の層序は、熊本平野に基本的に見られるもので、阿蘇山の火 山灰堆積土層である。

[層は、耕作土層である。

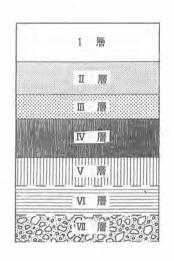
Ⅱ層は、黒色土層で、開田によりほとんど削平され、部分的にしか残存 していない。

Ⅲ層は、しまりのない、サラサラした褐色土層で、色調はアカホヤを含むためか、やや明るい。

IV層は、暗褐色土層である。状態はⅢ層とほとんど変わらず、明確な線引きはできないが、色調はかなり暗くなる。

V層は、ニガシロと通称される黒色土層で、層全体が塊状に硬化している。中には長石、石英、火山ガラスなどを多量に含んでいる。

VI層は、明褐色ローム質土層で、いわゆる「ハードローム」と称される



第4図 基本土層図

ものに類似し、かなり硬くしまっている。あずき粒大の軽石を少量含む。 VII層はVI層と同じ明褐色ローム質 土層であるが、粒子がやや粗く、色調がやや淡くなる。

なお、ローム層の下には礫層があり、更に凝灰岩層が続くものと思われる。

以前の調査より、Ⅱ層が弥生時代、Ⅲ層上面が縄文前期・晩期、Ⅲ層下面~Ⅳ層上面が縄文早期にそれぞれ対応するものと考えられるが、今回の調査においても、出土状況は概ね同様であった。

第Ⅱ章 平成4 (1992) 年度調査

第1節 調査の概要

平成4年度調査区は、遺跡の範囲の一番北側にあたり、台地上の平坦部より崖面に向かって一段下がった 部分で、南側の平成7年度調査区より2mほど低くなっている。

調査は、平成4年7月1日より開始した。まず、重機による表土剥ぎを行ったが、竹林であったため、竹根によって作業が難航した。このため、表土剥ぎを途中でやめて、手作業による掘り下げに切り替えた。竹根による撹乱が激しく、包含層の残りは良くなかったが、ある程度掘りすすめて撹乱が少なくなった段階で、10m四方のグリッドを設定し、土層観察用のブリッジ(畔)を残して掘り下げることにした。グリッドの軸は道路予定地のセンター杭を基準にして設定し、道路中心線に沿う軸をアルファベット、直交する側を数字で表した(第5図)。

包含層からは、縄文早期、前期、晩期の遺物、古墳時代の土師器などが出土した。また、地表から約1m掘り下げた位置で、溝状遺構が確認された。この溝の埋土からは土師器が出土したが、埋土の状況などから見て比較的新しい時代のものであると思われる。

包含層の調査が終了すると同時に土層の実測と全体写真の撮影を行って、7月31日にすべての調査を終了した。

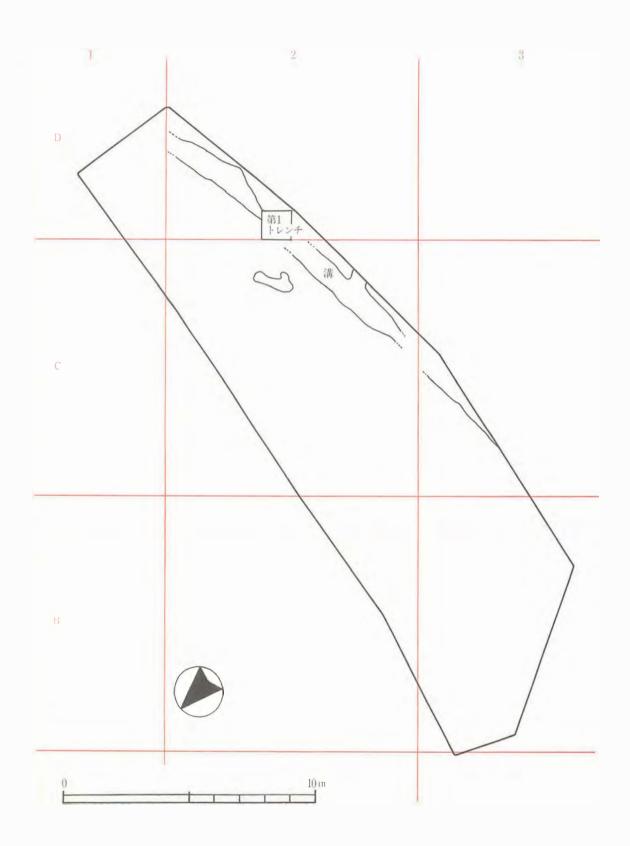
第2節 調査の成果

1. 土器 (第6図)

平成4年度調査区からは、約250点の土器が出土した。縄文早、前、晩期の土器及び古墳時代の土師器がそのほとんどを占める。その中から、口縁部を中心に器形の推定が可能なものを8点掲載した。いずれもC-2区からの出土である。以下、これらの土器について、個別に見ていきたい。

縄文土器 (1~6)

1は、縄文早期の押型文土器の口縁部で、現存高8.4cm、最大器厚1.3cmである。やや外傾する直口口縁をもち、外面には山形押型文が施文されている。色調は明褐色で、胎土は砂粒と長石を含む。焼成は良好である。2は、縄文早期の条痕土器の口縁部で、現存高3.3cm、最大器厚1.0cmである。1と同じくやや外傾する直口口縁をもち、外面には条痕調整が行われている。にぶい褐色を呈し、胎土には砂粒、長石、石英、雲母を含む。焼成は良好である。3と4は、同一個体であると思われるが、接合することはできなかった。3は口縁部で、現存高5.3cm、最大器厚0.6cm、4は胴部で、最大器厚は0.9cmである。胴部で屈曲し、内弯しながら外反する口縁をもつ器形になると推定される。外面には絡条体による回転施文が行われ、口縁部と胴部にめぐらされた突帯には同じ絡条体原体による刻目がある。色調はにぶい黄橙色で、内面にはススが付着している。胎土には砂粒、長石、石英を含み、焼成はやや不良である。器形の特徴などから、縄文早期の手向山式に類する土器と考えられる。5は、縄文前期の轟式土器の口縁部で、現存高は3.4cm、最大器厚は0.8cmである。直口口縁で、内外面とも貝殻による条痕調整が行わており、口唇部に刻み目、口縁下に3条の小突帯がある。胎土には砂粒、長石、石英を含み、焼成はやや不良である。色調はにぶい橙色で、内面に薄くススが付着している。6は、縄文晩期の深鉢の口縁部である。強く外反する口縁をもち、口唇部は丸くなっている。推定口径は13.8cm、現存高5.7cm、最大器厚は0.7cmである。内面は摩耗して判別しにくいが、内外面と



第5図 平成4年度調査区遺構分布図

も丁寧なナデ調整が行われている。にぶい黄橙色を呈し、胎土には砂粒、長石、石英、角閃石を含む。焼成 は良好で、内外面ともにススが付着している。

土師器 (7、8)

7は、土師器の碗の口縁部である。現存高5.3cm、最大器厚0.7cmで、口縁部はほぼ直立しているが、口唇が少し外反気味になっている。内外面ともナデ調整が行われている。色調は橙色で、焼成は良好、胎土には数個の小石と、砂粒、長石、石英、角閃石を含む。8も土師器の碗の口縁部である。推定口径は17.0cm、現存高5.3cm、最大器厚は0.7cmで、直口口縁である。内外面ともナデ調整である。色調は橙色で、焼成は良好、胎土は長石と角閃石を含む。

2. 石器 (第7図)

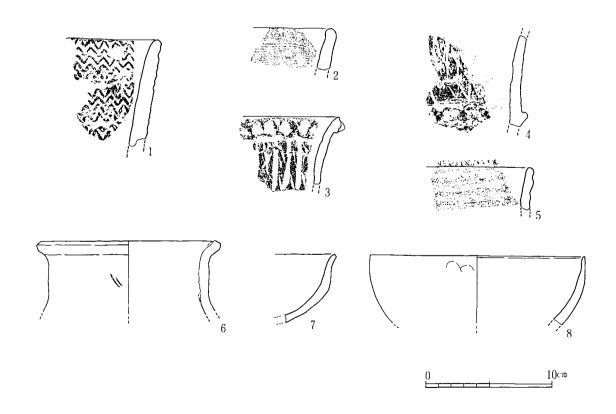
平成4年度調査区から出土した明らかに加工の痕の見受けられる石器は、全部で4点で、内訳は石鏃2点、石錐1点、磨製石鏃1点である。ここでは、これらの石器に、特徴のある剥片5点を加えた計9点を掲載した。いずれもC-2区からの出土である。以下、これらについて、器種別に見ていきたい。

石鏃(1、2)

1は、安山岩製の石鏃である。長さ1.7cm、幅1.5cm、厚さ0.3cm、重さ0.4gを計る。平基で二等辺三角形の形状をしている。 2も安山岩製の石鏃である。長さ1.9cm、幅1.5cm、厚さ0.4cm、重さ1.0gを計る。左基部を欠損している。凹基で二等辺三角形の形状をしている。

石錐(3)

3は、黒曜石製の石錐である。長さ3.7cm、幅1.1cm、厚さ0.7cm、重さ2.2gを計る。



第6図 平成4年度調査区出土土器

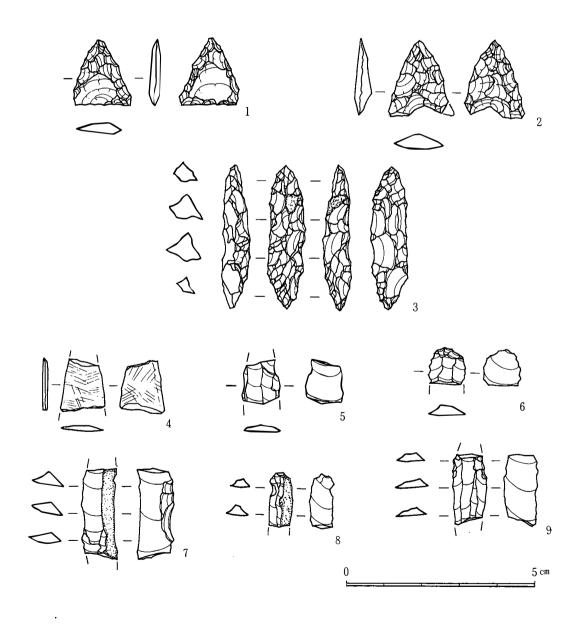
磨製石鏃(4)

4 は、頁岩製の磨製石鏃である。先端部と基部を欠損している。残存部分の長さ2.0cm、幅1.7cm、厚さ0.2cm、重さ1.0gを計る。

使用痕のある剥片 (5~8)

 $5\sim8$ は、いずれも黒曜石の縦長剥片で、側縁の一部に使用痕がある。形態の特徴から細石刃の可能性もある。

5 は長さ1.2cm、幅1.0cm、厚さ0.2cm、重さ0.2gを計る。6 は長さ0.9cm、幅0.9cm、厚さ0.3cm、重さ0.3 gを計る。7 は長さ2.4cm、幅0.9cm、厚さ0.3cm、重さ0.8gを計る。8 は長さ1.4cm、幅0.6cm、厚さ0.2cm、重さ0.2gを計る。9 は長さ1.8cm、幅0.9cm、厚さ0.2cm、重さ0.4gを計る。



第7図 平成4年度調査区出土石器

第Ⅲ章 平成5 (1993) 年度第Ⅰ調査区

第1節 調査の概要

第 I 調査区 (I 区と略す) は、熊本北高校の北方の畑の中にあり、北バイパスの本道部分のの建設予定地にあたる。台地上の平坦部の中で、最高所にあたる部分で、庵ノ前遺跡の中心部にあたると考えられる。

南東側の谷部については、平成3年度に行われた確認調査において、遺構、遺物等が検出されなかったため、遺跡は広がっていないと判断し、調査対象から外した。

平成5年、本調査に先立つ熊本工事事務所との協議の中で、調査区東側の水田と西側の農道との連絡が遮断されて農耕に支障をきたすため、農耕車両用の通路を確保して欲しいとの要望が出された。このため、調査区の一部を通路にあて、調査対象から外すことにした。また、調査区の中を灌漑用の水道管が通っているため、表土剥ぎは慎重に行うこととした。

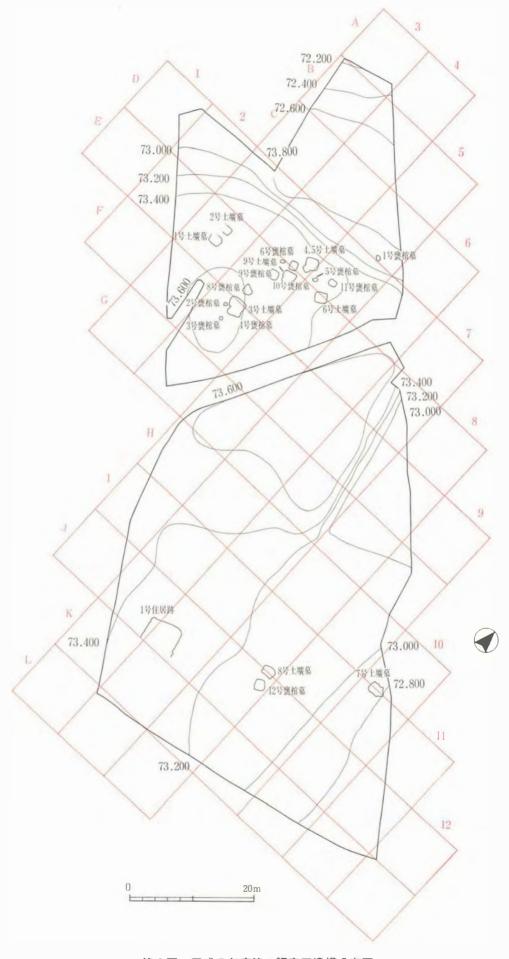
本調査は、平成5年5月10日から開始した。最初に重機で表土(I層)を剥いだあと、調査区全体を、磁北を基準として、10m四方のグリッドに分割した。グリッドの名称に関しては、南北軸をアルファベットで、東西軸をアラビア数字でそれぞれ表すことにした(第8図)。グリッド設置後、調査区全体の平面図を平板測量で作成した。

表土剥ぎ後、調査区の北西部D・E・F-1・2区で、昭和57年度の調査区と重複している部分があり、この部分も調査対象から外すことにした。

掘り下げは、グリッドごとに土層観察のためのブリッジを適宜残しながら行った。出土した遺物は、平面図に出土位置を記し、同時に絶対高を記入して取り上げた。この調査区は、以前のゴボウ栽培に伴ってできた、V層にまで達する溝状の撹乱が全体を縦横に走っており、また、開田による削平で、包含層が失われている部分もあって、遺物の出土層位を明確にすることはできなかったが、旧石器をはじめ、縄文早期・前期・後期・晩期、弥生中期の遺物が多数出土した。

また、包含層の掘り下げごとに遺構の確認をおこない、確認された遺構は掘り下げた後、平面や断面の実 測及び写真撮影を行った。主な遺構としては、V層上面を確認面として、弥生中期の住居跡 1 基、甕棺墓12 基、土壙墓 9 基が確認された。特に甕棺墓は、5 基から人骨が確認され、うち 3 基は保存状態が良好であっ た。このため、土井ヶ浜遺跡人類学ミュージアム館長松下孝幸氏に人骨の取り上げ及び関連調査を依頼し、 9月28日から30日まで、3 日間にわたって取り上げ作業を行った。

平成6年1月28日に包含層調査、遺構実測、写真撮影等の作業をすべて終了し、Ⅱ区に移動した。



第8図 平成5年度第1調査区遺構分布図

第2節 旧石器時代の遺物

I区から出土した旧石器時代の遺物は、三稜尖頭器1点のみである。

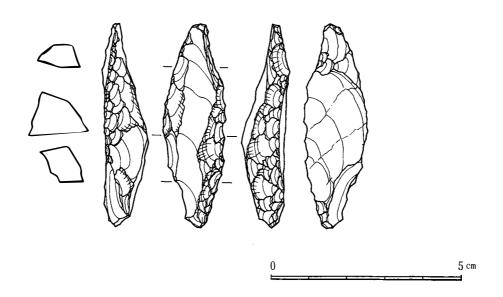
三稜尖頭器 (第9図)

K-6区からの出土である。後世の遺物と混在しており、一括取り上げの資料のため本来包含されていた層位は不明である。完形品で、長さ5.3 c m、幅1.6 c m、厚さ1.1 c m、重さ8.9 g を計る。

石材は縄文時代以降の石器には用いられていない、風化が激しく、光沢を失ったチャートである。また、素材となる剥片は横長剥片を使用している。背面側は両側縁から急角度の調整が施され、断面は三角形、平面は紡錘形の形状に成形されている。しかし、その調整は背面中央まで至っておらず、先端から基部にかけて1枚の素材面が残存している。稜上からの調整は認められない。更に腹面側は先端部、基部ともにわずかに平坦剥離が施され、尖鋭な先端部と基部を形成している。

旧石器時代の遺物としては1点のみの出土であるが、本遺跡において確実に旧石器時代にも人々が生活していたという確かな証拠となるものである。

第 I 章第 2 節でも触れたとおり、近接する谷口遺跡からも同様の出土状況で安山岩製のナイフ形石器が 1 点出土しており (第 3 図)、天拝山 A 遺跡からは安山岩製の尖頭器が 1 点表面採集されている。また、龍田陳内遺跡からは安山岩製の三稜尖頭器が 1 点、弥生時代の包含層より出土している。いずれも立田山山麓一帯での旧石器時代人の狩猟生活が想定できる資料である。



第9図 I区出土旧石器

第3節 縄文時代の遺物

1. 土器 (第10~19図)

I 区から出土した縄文土器は、採集遺物や細片を含めると1,000点を越える。時期は、早、前、後、晩期に わたるが、特に早期の押型文土器は全体の5割以上を占めている。このうち、口縁部と底部を中心に器形の 推定が可能なものを239点掲載した。以下、これらの土器について時期別に見ていきたい。

なお、個別の土器の計測値および観察結果については「I区出土縄文土器観察表」(第4~7表) にまとめている。

(1) 縄文早期土器

押型文土器、撚糸文土器、条痕土器、無文土器、塞ノ神式土器などが出土した。

押型文土器 (第10図1~第15図119、第85図8)

I区から出土した押型文土器は、格子目文(1~13)、楕円文(14~59)、山形文(60~119)の3種類である。 口縁部周辺の施文の特徴から、外面のみに押型文を施文したもの(Ⅰ類)、外面は押型文、内面は原体条痕が施文されたもの(Ⅱ類)、内外面とも押型文が施文されたもの(Ⅲ類)、外面は押型文、内面に原体条痕と押型文が施文されたもの(Ⅳ類)の4つに分けることができる。

また、口縁部の器形からは、口縁部が直口するもの(A類)と、口縁部が外反するもの(B類)に分けることができる。

これらを組み合わせた形で、出土した押型文土器を I A 、 I B 、 II B

IA類(格子1~11、楕円14~21、山形60~91)

直口口縁で、外面に押形文を施文しているものである。内面は主にナデ調整である。 I 類以外に直口口縁のものは出土しなかった。施文は横位施文が多くを占めるが、縦位施文のもの($2\sim4$ 、7)もある。 90、 91は口唇部にも施文が行われている。また、60は焼成後に穿孔が行われている。

IB類(格子12、13、楕円22~31、山形92~96)

外反する口縁で、外面に押形文を施文しているものである。内面は主にナデ調整である。横位施文が多くを占めるが、縦位施文のもの(26、27、30)や、縦横複合のもの(12)もある。31は口唇に刻目がある。

Ⅱ B類(楕円32、33)

外反口縁で、内面口縁部に原体条痕、外面に押形文を施文しているものである。2点とも横位施文である。 ⅢA類(山形第85図8)

直口口縁で、内面口縁部と外面に押形文を施文しているものである。

Ⅲ B類(楕円34~36、山形97~100)

外反口縁で、内面口縁部と外面に押形文を施文しているものである。内外面とも横位施文のもの(34、36) と、外面縦位施文、内面横位施文のもの(35、97~100)がある。また、98~100は口唇部にも施文が行われている。

IV B類(楕円37~50、山形101~105)

外反口縁で、内面口縁部に原体条痕と押形文、外面に押形文を施文しているものである。内外面とも横位 施文のものが多くを占めるが、外面縦位施文、内面横位施文のもの(45)もある。

41、48、101、104は波状口縁で、48は口唇にも原体条痕がある。なお、37~40の残存部の外面はナデ調整

のみであるが、他の例から見て、下部に押形文が施文されている可能性が強いためIV B 類に含めた。 底部(楕円51~59、山形106~119)

出土した押形文土器の底部は、平底になるものが多くを占めるが、丸底のものも 2 点(51、52)ある。平底のものは底部と胴部が直線的につながるもの($54\sim59$ 、106、 $109\sim119$)と、外反気味に開いてつながるもの(53、107、108)に分けられる。

また、108、110、115、116は底面に組織痕をもつ。

撚糸文土器 (第15図120~129)

撚糸文土器についても、形態的に押型文土器と同様の分類が可能である。

口縁部(120~126)

I A類 (120~122、124)、 I B類 (123、125)、ⅢB類 (126) に分けられる。施文方向は120~122が斜位施文、123~125が横位施文で、126は内外面とも斜位施文である。124は絡条体を施文原体としている。125は焼成前に穿孔が行われている。

胴部 (127、128)

127、128は燃糸文土器の胴部破片である。127は外面斜位施文で、途中まで穿孔が行われている。128は底部近くの破片で、外面斜位施文である。

底部(129)

129は丸底に近い平底で、胴部は横位施文が行われている。

条痕土器 (第15図130~第17図160)

口縁部周辺の器形から、口縁部が直口するもの(A類)と、口縁部が外反するもの(B類)に分けることができる。条痕は150以外は外面のみに残っており、内面はナデ調整である。

A類(130~151)

条痕が横方向のみのもの(131~136、139、141、142、146~149)、縦方向のみのもの(130、143)、縦横併用のもの(137、138、144、151)斜め方向のもの(140、145、150)に分けられる。

146には途中まで穿孔が行われている。150は内外面とも斜位の条痕で、さらに、細く鋭い施文具による沈線が入っている。また、口唇部には同じ施文具によると思われる刻み目がある。

B類 (152~155)

152は斜横併用の条痕、153は斜位のみ、154は斜縦併用、155は横位条痕である。

胴部 (156)

156は底部近くの破片で、縦横併用の条痕が施されている。

底部 (157、158)

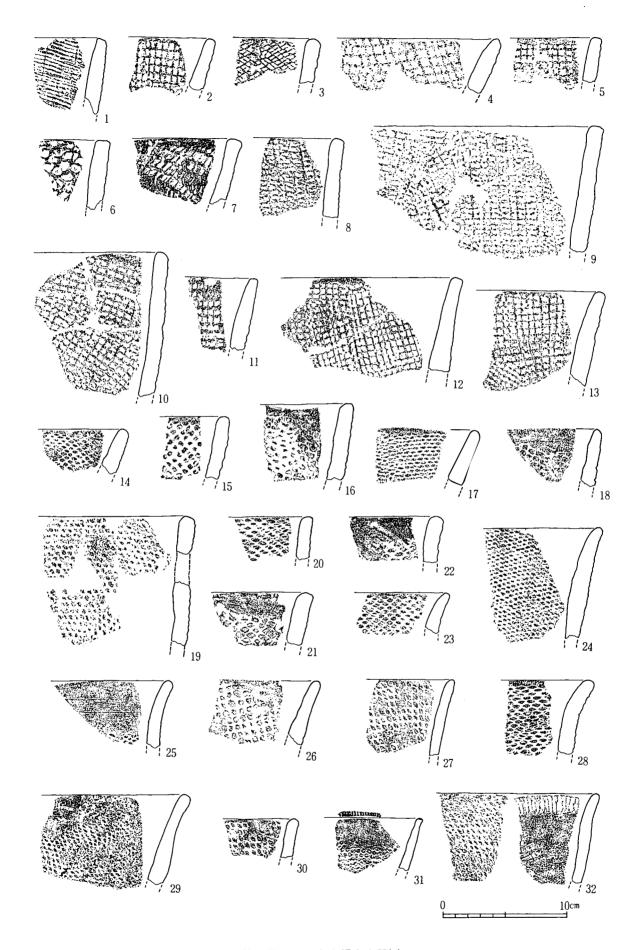
157は横位、158は斜位条痕である。2点とも平底で、底部と胴部が直線的につながった形態である。

無文土器 (第17図159、160)

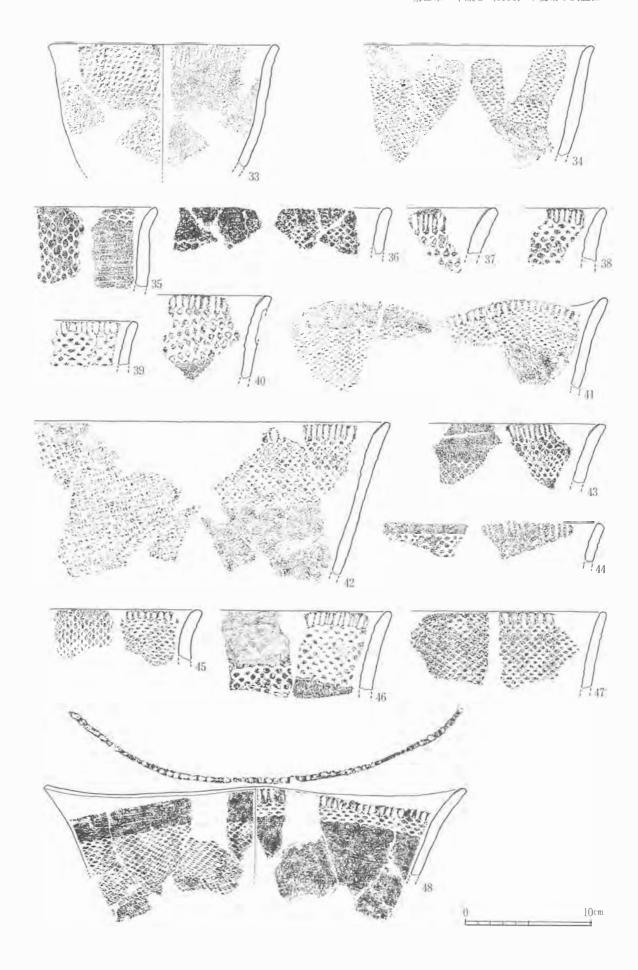
条痕土器とほぼ同じ形態であるが、内外面ともナデ調整で文様が残っていないものである。 2 点とも口縁 部の破片で、直口口縁である。

塞ノ神式土器 (第17図161、162、165、166)

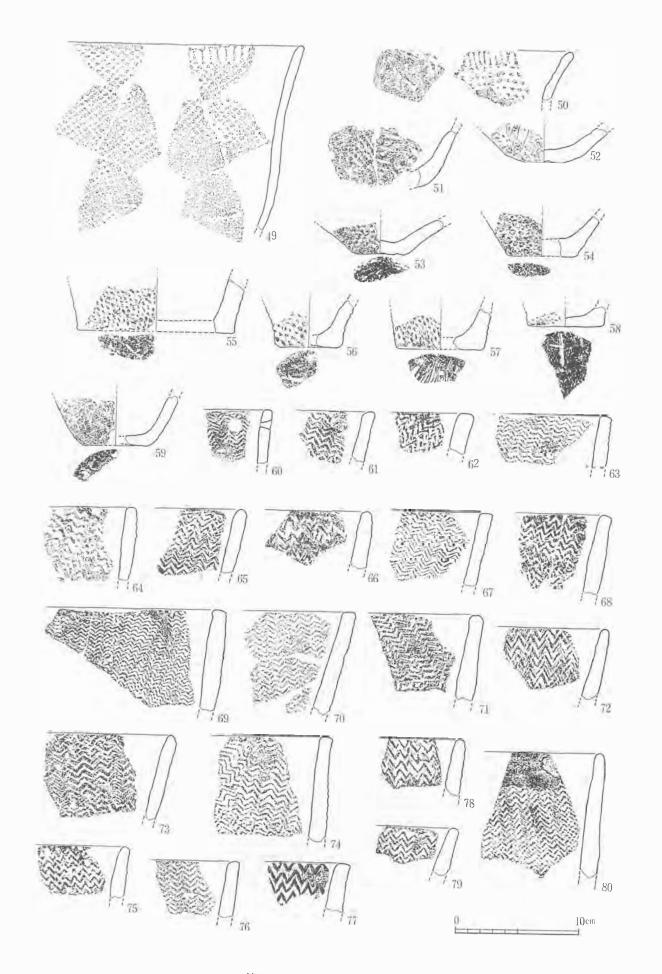
161は口縁から胴部上半にかけての破片である。やや外側に膨らむ円筒形の胴部を持ち、くの字形の口縁である。内面はナデ調整で、外面の胴部には条線文、口縁部は条線文と貝殻連続刺突文、口唇に貝殻刺突による刻目が施されている。162は口縁部の破片で、くの字形口縁である。内面ナデ調整、外面は条線文と貝殻連続刺突文、口唇に貝殻刺突による刻目がが施されている。165は胴部の破片で、外面に撚糸文を充填した文様帯をもつ。166は外反する胴部の破片で、貝殻の連続刺突文を持つ。



第10図 I区出土縄文土器(1)



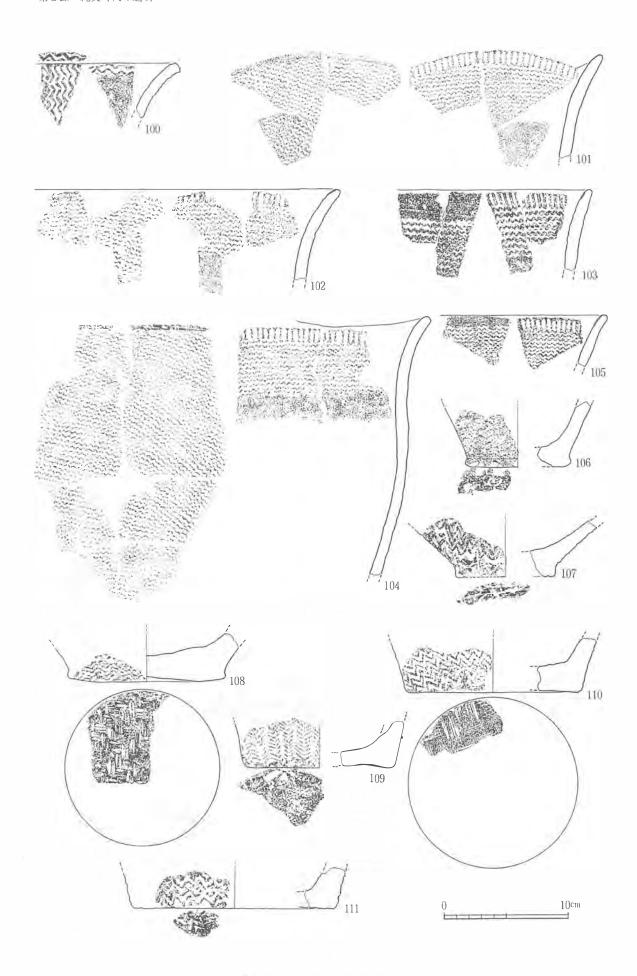
第11図 I区出土縄文土器(2)



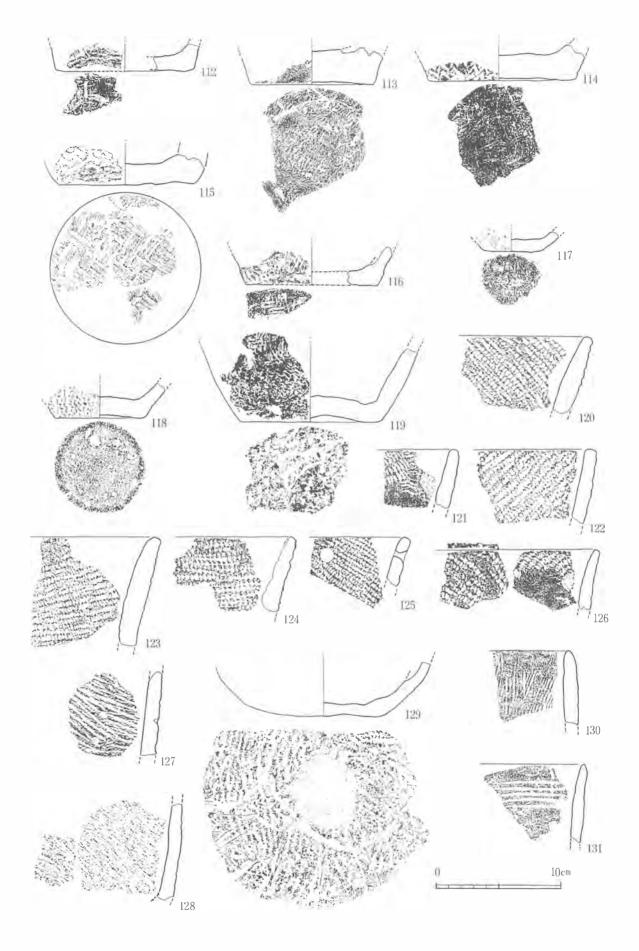
第12図 I区出土縄文土器(3)



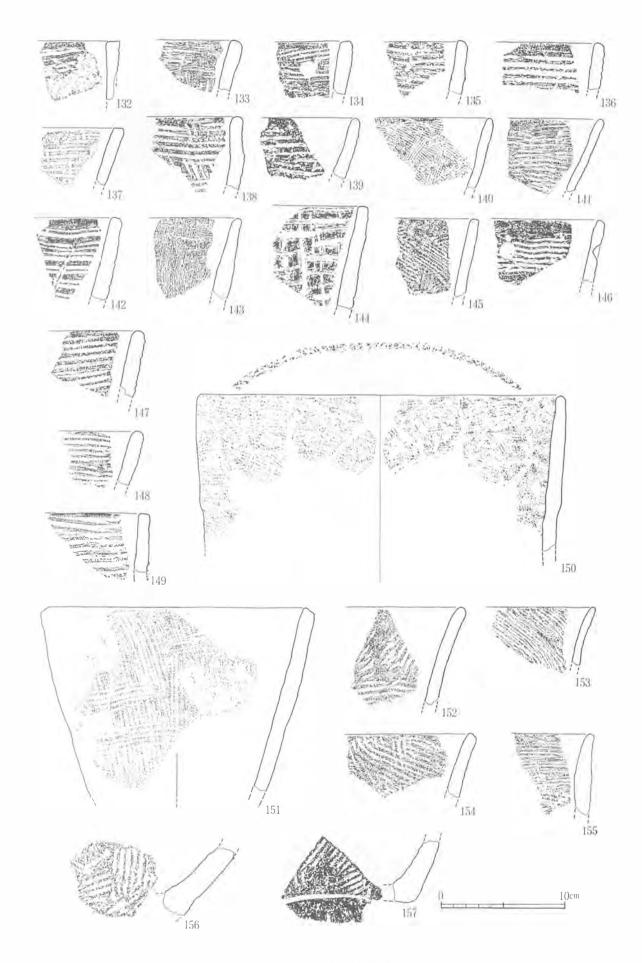
第13図 I区出土縄文土器(4)



第14図 I区出土縄文土器(5)



第15図 I区出土縄文土器(6)



第16図 I区出土縄文土器(7)

その他の早期土器 (第17図163、164、167~169)

163は平栫式土器の口縁部の破片である。外反口縁であるが、口唇近くで内弯して立ち上がっている。内面はナデ調整で、外面下部は沈線文、屈曲部に刻目、上部に刺突文と沈線文が施されている。164も口縁部の破片である。外反口縁で、口唇に突帯をもつ。内面はナデ調整で、外面には沈線文が施されている。167~169は底部の破片で、167、168の底面には組織痕がある。

(2) 縄文前期土器

出土した縄文前期の土器は、いずれも轟B式にあたるものである。

轟B式土器 (第17図170~第18図176)

いずれも口縁部の破片である。直口口縁で、内外面とも貝殻による条痕調整が施され、口縁下に平行する 3~5条の小突帯を巡らせている。口唇には刻目を持つ。

(3) 縄文後期、晩期土器

I 区からは多数の後、晩期土器が出土した。器形の特徴から深鉢型土器と浅鉢型土器に分け、さらに残存部、形態の特徴をもとに細分を行った。

深鉢型土器 (第18図177~209)

口縁部の形態によってA~I類に分類した。

A類 (177)

直口口縁で、外面に沈線文、口唇に刻目を持つ。

B類(178~182)

ほぼ直線的に外開きする頸部に断面くの字型の口縁を持つもの。内面の沈線の有無によって、a、b類に細分できる。

Ba類 (178)

内面に沈線を持たないもの。1点出土している。波状口縁になると思われ、内外面とも丁寧に研磨されている。

Bb類 (179~182)

内面に沈線を1条持つもの。いずれも内外面は研磨されている。

181は外面に沈線1条、182は沈線2条と屈曲部に磨消縄文を残す。179、180は外面の沈線が無い。なお、180~182は波状口縁である。

C類(183)

外反する頸部に断面くの字型の口縁を持つもの。1点出土した。内外面ともナデ調整である。口縁部を欠損しているが、外面には沈線を1条持っている。

D類 (184~188)

外反する頸部から直立、あるいは内弯気味に立ち上がる口縁帯を持つもの。 2 つに細分される。

Da類(184~187)

口縁帯外面に数条の平行沈線を持つ。

184~**186**は内外面とも研磨され、**184**は 4 条、**185**は 7 条、**186**は 3 条の平行沈線を持つ。また、**187**は内外面ともナデ調整で、6 ~ 7 条の平行沈線を持つ。

Db類(188)

口縁帯外面が条痕調整のもの。188の内面はナデ調整である。

E類(189~192)

頸部で屈曲し、外傾する口縁部を持つもの。

189、190は外面が条痕調整で、内面は研磨、191は内外面とも研磨、192、193は内外面とも条痕の上をナデで調整している。

F類(193~198)

外反気味に開く口縁部を持つもの。

194、196、197は内外面とも研磨、195は内面研磨で、外面は条痕調整、198は内外面ともナデ調整である。 G類 (199)

外反口縁に幅広の突帯を貼り付けたもの。1点のみの出土である。

H類(200~206)

口縁部または頸部に刻目突帯を持つもの。206は外反する口縁の口唇に刻目を持つ。

I類(207~209)

外反する口縁(如意形口縁)をもつもの。207、209は口唇に刻目を持つ。

浅鉢形土器 (第19図210~221)

口縁部の形態によってJ~P類に分類した。

J類 (210~214)

胴部から頸部にかけて内側に屈曲し、頸部から立ち上がる口縁帯を持つもの。いずれも内外面は研磨されている。

210~212は口縁帯外面に沈線 1 条、**213**は沈線 2 条を持つ。**214**は沈線を持たない。また、**212**は頸部に押点 文を持つ。

K類(215)

肩部と頸部が屈曲し、ほぼ直線的に外開きする口縁部を持つもの。

215は波状口縁で、口縁直下の内外面にそれぞれ1条の沈線を持つ。また、内外面とも丁寧に研磨されている。

L類(216)

頸部がくの字状に屈曲し、胴部は緩く外側に張り出すもの。調整は内外面ともナデである。

M類 (217)

胴部上半が直立気味に立ち上がり、強く外傾する口縁部を持つもの。口縁内面には沈線1条を持つ。

N類 (218)

肩部と口縁部の外側が突帯状に張り出すもの。

〇類(219)

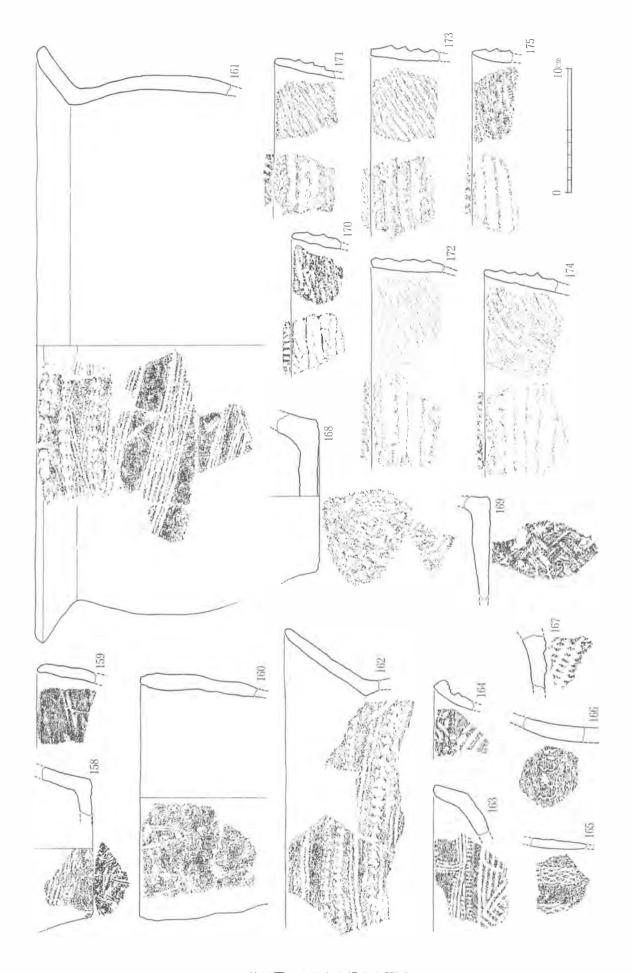
直口口縁であるが、胴部が外側に張り出し、内弯気味になっているもの。内外面とも丁寧に研磨されている。 P類 (220、221)

内傾する口縁を持ち、外面に沈線を持つもの。形態の特徴から、注口土器の可能性がある。

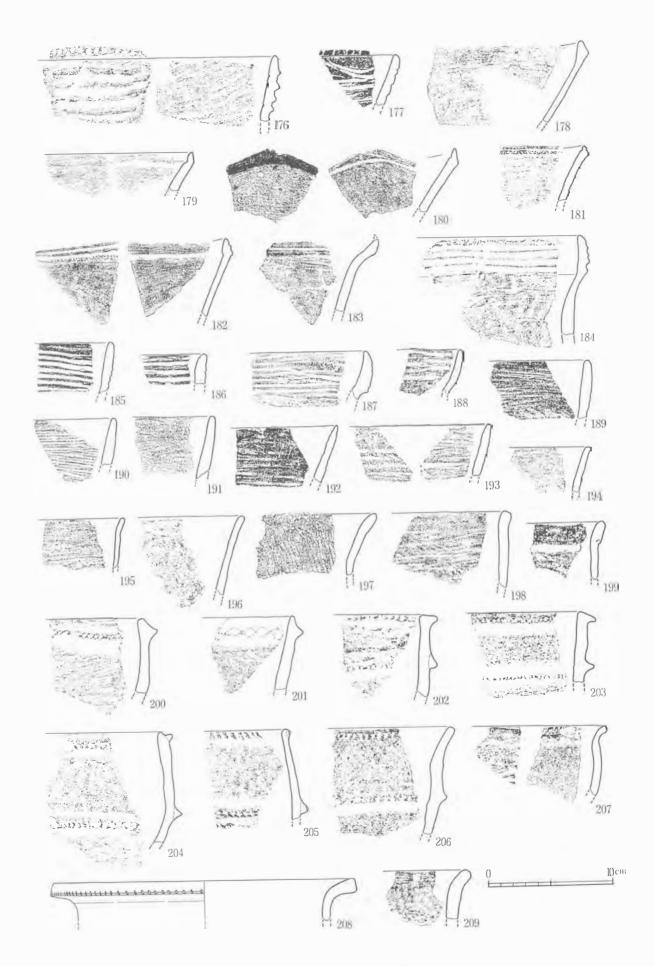
208は内外面とも研磨され、外面に 2条の沈線を持つ。また、沈線の間には細線羽状文が施されている。 **209** は外面に 1条の沈線を持つ。

胴部 (第19図222~224)

222は胴下半部の破片である。内外面とも研磨され、上部に沈線と磨消縄文の文様帯を持つ。223は屈曲した肩部と内弯する頸部を持つ。内面はナデ、外面は肩部より上がナデ、下が条痕調整である。224も胴部片である。内面は研磨され、外面には筵状の組織痕が押圧されている。



第17図 I区出土縄文土器(8)



第18図 I区出土縄文土器(9)

底部 (第19図225~239)

底部は形態によりQ~S類に分類した。

Q類 (225、228)

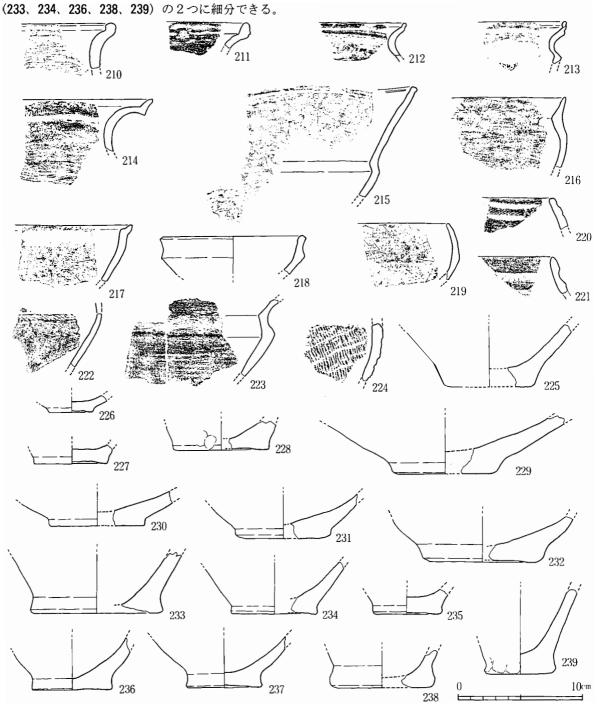
胴部から底部端にかけてほぼ直線的に連なるもの。

R類(226、227、229~232)

胴部が外反し、ほぼ垂直に底部端に連なるもの。底面の形状により、底面が上げ底のRa類(226、227)と、底面が平らのRb類(229~232)の2つに細分できる。

S類 (233~239)

底部端が張り出すもの。底面の形状により、底面が上げ底のSa類(235、237)と、底面が平らのSb類(233、234、236、238、239)の2つに細分できる



第19図 I区出土縄文土器(10)

第4表 I区出土縄文土器観察表(1)

図版 番号	遺物 番号	口·底 径(cm)	現存高 (cm)	器厚 (cm)	調整(内面)	調整 (外面)	色 調 (内面)	色 調 (外面)	胎土	 焼成	備考	取上番号
10	1	1主 (Ш)	6.0	1.2	ナデ	格子目文	にぶ橙	(パ面)	石英、長石	良好	両面薄くスス	K-8 66
10	2		4.4	1.3	ナデ	格子目文	にぶ黄橙	にぶ黄橙	細砂粒、石英、角閃石	良好	一門面待て入い	K-9 157
10	3		3.8	1.2	ナデ	格子目文	にぶ黄橙	橙	粗砂粒、長石、角閃石、石英	良好	両面スス	K-8一括
10	4		4.3	1.3	ナデ	格子目文	にぶ黄橙	褐灰	小石、粗砂粒、長石、角閃石	良好	両面スス	J -9 25
10	5		3.9	1.1	ナデ	格子目文	にぶ黄橙	にぶ黄橙	粗砂 粒、長石、角閃石	良好	1700	K-870
10	6		5.4	1.3	ナデ	格子目文	橙	橙	小石、粗砂粒、長石	良好	内面薄くスス	18号土坑
10	7		5.1	1.2	ナデ	格子目文	にぶ黄橙	にぶ黄橙	長石、角閃石	良好	77014 (777)	17号土坑
10	8		6.4	1.3	ナデ	格子目文	にぶ黄橙	にが橙	粗砂粒、長石、角閃石、石英	良好	内面薄くスス	K-6 106
10	9		10.1	1.4	ナデ	格子目文	褐	橙	角閃石、砂粒、雲母	良好	外面スス	K-6 108~110
10	10		11.4	1.2	ナデ	格子目文	橙	に赤褐	粗砂粒、長石、角閃石、石英、	良好	面スス	K-6 6,7
10	11		5.8	1.3	ナデ	格子目文	褐	褐	霎母 租砂粒、長石、角閃石、石英	良好	外面スス	K-9一括
10	12		7.6	1.9	ナデ	格子目文	にぶ黄橙	にぶ黄橙	粗砂粒、長石、角閃石、石英	良好	内面薄くスス	J-7 2,3
10	13		7.5	1.5	ナデ	格子目文	にぶ黄褐	にぶ黄橙	粗砂粒、石英、角閃石	良好	両面薄くスス	J-8一括
10	14		3.5	1.3	ナデ	楕円文	にぶ黄橙	にぶ黄褐	砂粒、長石、角閃石、石英	良好	外面スス・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	K-9 224
10	15		4.9	1.2	ナデ	楕円文	にぶ黄橙	にぶ黄橙	長石、角閃石、石英	良好	内面薄くスス	I -9 22
10	16		6.0	1.3	ナデ	楕円文	橙	橙	砂粒、長石、角閃石、石英	良好	外面スス	K-9 57
10	17		4.3	1.3	ナデ	楕円文	にぶ黄橙	にぶ黄橙	長石、角閃石	良好		K-10 84
10	18		4.3	1.2	ナデ	精円文	にぶ黄褐	にぶ黄褐	砂粒、長石、角閃石、石英	良好	両面スス	J -10 167
10	19		10.2	1.3	ナデ	楕円文	にぶ黄橙	橙	小石、粗砂粒、長石、角閃石	やや良	外面薄くスス	一括
10	20		3.4	1.0	ナデ	楕円文	にぶ黄橙	にぶ黄橙	長石、角閃石、石英	良好	外面スス	J-10一括
10	21		4.2	1.3	ナデ	桁円文	橙	にぶ橙	砂粒、長石、角閃石	良好	内面薄くスス	K-8 83
10	22		3.7	1.2	ナデ	ナデ、楕円文	にぶ橙	にぶ橙	細砂粒、角閃石、石英	良好	内面スス	K-10一括
10	23		3.2	1.1	ナデ	精円文	にぶ黄橙	にぶ祖	是石、角閃石、石英	良好	外面薄くスス	J -11 135
10	24		8.7									-
	25			1.5	ナデ	楕円文 ナデ、楕円文	にぶ黄橙	にぶ黄褐	粗砂粒、長石、角閃石、石英	良好	両面スス	J-10 150
10	1 1		5.3	1.0	ナデ		橙にが井口	にぶ黄褐	砂粒、長石、角閃石、石英	良好	両面スス	K-9 169
10	26		5.1	1.3	ナデ	楕円文	にぶ黄橙	にぶ黄橙	砂粒、長石、角閃石、石英	良好	両面スス	J -9 255
10	27		6.0	0.8	ナデ	楕円文	にぶ黄褐	にぶ黄橙	長石、角閃石、石英	良好	内面スス	J -9 220
10	28		5.8	1.2	ナデ	楕円文	にぶ黄橙	にぶ橙	粗砂粒、長石、角閃石	良好	両面薄くスス	I -10 44
10	29		7.1	1.3	ナデ	精円文 	にぶ黄褐	にぶ黄橙	小石、粗砂粒、長石、角閃石	やや良	両面スス	J -10 275
10	30		3.1	0.9	ナデ	精円文	にぶ黄橙	にぶ黄橙	砂粒、長石、角閃石	良好	両面スス	K-9 P-4
10	31		4.2	0.7	ナデ	ナデ、楕円文	にぶ黄褐	橙	砂粒、長石、角閃石、石英	良好	口唇部刻目、両面薄くスス	I-10 P-7
10	32		7.1	1.0	原体条痕、ナデ	楕円文	にぶ黄橙	にぶ黄橙	砂粒、長石、角閃石、石英	良好	両面スス	K-8 55
11	33	18.5	9.6	0.8	原体条痕、ナデ	精円文	にぶ黄褐	にぶ黄橙	小石、粗砂粒、長石、角閃石	良好	内面スス	K-8 97
11	34		8.7	1.1	楕円文、ナデ	格円文	にぶ黄褐	にぶ黄橙		良好	両面薄くスス	K-8一括
11	35		6.3	1.0	楕円文、ナデ	楕円文	灰黄褐	にぶ黄橙	砂粒、長石、角閃石、石英	良好	両面スス	J-9一括
11	36		3.6		桁円文	ナデ、楕円文	にぶ黄褐		長石、角閃石、石英	良好	内面スス	I-9 18
11	37		3.6	1.1					砂粒、長石、角閃石、石英	良好	外面スス	F-7一括
11	38		4.2	1.1	原体条痕、楕円文		にぶ黄橙	にぶ黄橙		良好	両面スス	J-9一括
11	39		3.4	0.8	原体条痕、楕円文	ナデ	にぶ黄橙	にぶ黄橙	砂粒、長石、角閃石、黒曜石	良好	外面薄くスス	J -9 223
11	40	25.6	6.5	1.0	原体条痕、楕円文	ナデ	にぶ黄褐	にぶ黄橙	粗砂粒、長石、角閃石	良好	両面スス	K-7一括
11	41		7.2	0.9	原体条痕、楕円文	ナデ、楕円文	にぶ黄褐	にぶ黄橙	粗砂粒、長石、角閃石、石英	良好	放状口縁、内面スス	J-9一括
11	42		12.0	1.0	原体条痕、楕円文	ナ楕円文	にぶ黄褐	にぶ黄褐	小石、粗砂粒、角閃石、石英	良好	両面スス 	J -9 232
11	43		4.7	0.9	原体条痕、楕円文、	ナデ、楕円文	橙	にぶ褐	粗砂粒、長石、角閃石、石英	良好	両面スス	K-9 285
11	44		3.0	0.7	原体条痕、楕円文	ナデ、楕円文	にぶ黄橙	にぶ黄褐	細砂粒、長石、角閃石	良好	外面スス	J -9 164
11	45		4.0	1.0	原体条痕、楕円文	楕円文	にぶ黄橙	にぶ橙	砂粒、長石、角閃石、石英	良好		J6一括
11	46		6.2	1.0	原体条痕、楕円文、 ナデ	ナデ、楕円文	にぶ黄褐	浅黄橙	小石、砂粒、長石、角閃石、石英	良好	両面スス	K-9 127
11	47		6.0	0.8	原体条痕、楕円文	楕円文	にぶ黄橙	にぶ黄橙	小石、粗砂粒、長石、角閃石石英	良好	外面スス	K-10一括
11	48	33.8	12.2	0.7	原体条痕、楕円文、ナデ	ナデ、楕円文	橙	橙	小石、粗砂粒、長石、角閃石、石英	良好	ロ暦部原体条痕、両面スス、 波状口縁	J -9 158ほか
12	49		14.6	0.8	原体条痕、楕円文、 ナデ	楕円文	にぶ黄橙	灰黄褐	粗砂粒、長石、角閃石、石英	良好	両面スス	K-9 288
12	50		3.9	0.7	原体条痕、楕円文	ナデ、楕円文	にぶ黄褐	にぶ黄褐	砂粒、長石、角閃石、石英	良好	両面薄くスス	K-9 147
12	51		4.4	1.3	ナデ	楕円文の上ナデ	にぶ黄褐	にぶ橙	小石、細砂粒、長石、角閃石、雲海	良好	内面スス	D-3一括
12	52		2.8	1.2	ナデ	楕円文	にぶ黄褐	橙	粗砂粒、長石、角閃石、	良好	内面スス	J -10 64
12	53	4.2	2.7	1.2	ナデ	楕円文	にぶ黄橙	にぶ橙	粗砂粒、長石、角閃石	良好	内面スス	J-6一括
12	54	5.8	3.2	1.4	ナデ	楕円文の上ナデ	にぶ橙	にぶ橙	砂粒、長石、角閃石	良好	内面薄くスス	K-9一括
12	55	12.6	4.2	1.5	ナデ	楕円文	にぶ黄橙	にぶ黄橙	小石、粗砂粒、長石、角閃石	良好	外面薄くスス	J-10一括
12	56	5.5	3.7	1.2	ナデ	楕円文	灰黄褐	にぶ褐	小石、砂粒、長石、角閃石、石英	良好	両面スス	J -10 4
12	57	7.1	3.3	1.4	ナデ	楕円文	にぶ黄褐	にぶ黄橙	小石、砂粒、長石、角閃石	良好	内面スス	K-10一括
12	58	6.2	1.6	1.0	ナデ	楕円文	にぶ黄橙	橙	細砂粒、長石、角閃石	良好		I -7 5
12	59	5.2	3.9	0.9	ナデ	楕円文	にぶ黄橙	にぶ赤褐	砂粒、長石、角閃石	良好	内面薄くスス	K-10 28
12	60		4.2	0.9	ナデ	山形文	褐灰	にぶ黄橙	角閃石、長石、雲母	良好	穿孔 (後)、内面スス	K-6 P-1

第5表 I区出土縄文土器観察表(2)

図版番号	遺物 番号	口・底	現存高	器厚	調整(内面)	調整(外面)	色調	色 調	胎土	焼成	備考	取上番号
<u> </u>		径(cm)	(cm)	(cm)			(内面)	(外面)				
12	61		4.3	1.1	ナデ	山形文	にぶ黄橙	にぶ黄橙	石英、角閃石、長石	良好	外面スス	K-7一括
12	62		3.2	1.3	ナデ	山形文	にぶ褐	にぶ褐	長石	良好	+-*/	K-8 一括
12	63		4.2	1.1	ナデ	山形文	灰黄褐	橙	石英	良好	内面薄くスス	J-9 88
12	64		5.8	1.1	ナデ	山形文	にぶ褐	にぶ褐	石英、角閃石	良好	両面スス	K-7 298
12	65		5.0	1.1	ナデ	山形文	黒褐	にぶ橙	石英、角閃石、長石	良好	両面スス	J-8一括
12	66		4.5	1.3	ナデ	山形文	にぶ橙	にぶ橙 石英、角	石英、微細な角閃石、長石	良好		J-9 一括 K-6 56
12	67		4.7	1.0	ナデ	黄灰 山形文	黄灰 褐	閃石 褐	良好 角閃石	良好良好	両面スス 外面薄くスス	K-7 271
12	68		6.2 8.0	1.4	ナデ ナデ	山形文	にが橙	にぶ褐	円八九 石英、長石	良好	外面ス	表採
12	70		8.2	1.3	ナデ	山形文	灰黄褐	にぶ黄褐	石英、角閃石	良好	両面スス	」-7一括
12	71		6.8	1.5	ナデ	山形文	にぶ黄橙	灰黄褐	石英、角閃石、長石	良好	外面スス	K-6 99
12	72		5.4	1.2	ナデ	山形文	にぶ黄褐	にぶ褐	石英、角閃石	良好	内面薄くスス	K-10 16
12	73		6.7	1.1	ナデ	山形文	にぶ黄橙	にぶ褐	石英、角閃石、長石	良好		K-8 146
12	74		8.3	1.3	ナデ	山形文	にぶ黄橙	にぶ黄橙	角閃石、長石、雲母	良好	外面薄くスス	K-8 252
12	75		4.2	1.1	ナデ	山形文	灰黄褐	にが橙	石英、角閃石、長石	良好	内面薄くスス	18号土坑
12	76		4.5	1.1	ナデ	山形文	にぶ黄褐	にぶ黄褐	石英	良好	外面薄くスス	J -7一括
12	77		3.9	1.4	ナデ	山形文	にぶ橙	にぶ橙	石英、角閃石、雲母	良好	内面薄くスス	D-5 38
12	78		4.5	1.2	ナデ	山形文	にぶ橙	にぶ褐	砂粒、角閃石、長石	良好	外面スス	K-7 193
12	79		3.8	1.3	ナデ	山形文	にぶ黄橙	にぶ黄橙	石英、角閃石、長石	良好		K-7一括
12	80		9.5	1.3	ナデ	ナデ、山型文	灰黄褐	にぶ黄橙	小石、粗砂粒、長石、石英、角閃石	やや良	両面スス	J -9一括
13	81	39.2	31.1	1.3	ナデ	山形文	明赤褐	明赤褐	粗砂粒、長石、角閃石	良好	両面スス	K-8 122ほか
13	82		4.8	1.1	ナデ	山形文	にぶ黄褐	にぶ黄褐	石英、角閃石、長石	良好	両面スス	K-6一括
13	83		5.3	1.1	ナデ	山形文	黒褐	にぶ黄橙	石英、角閃石、雲母	良好	両面スス	K-7 16
13	84		3.5	1.3	ナデ	山形文	にぶ黄橙	にぶ黄橙	石英、角閃石、長石	良好		I -9 53
13	85		4.7	1.0	ナデ	山形文	暗灰黄	暗灰黄	石英、角閃石	良好	両面スス	K-9 116
13	86		5.8	1.5	ナデ	山形文	にぶ褐	にぶ褐	石英、角閃石	良好		J-7一括
13	87		5.3	1.5	ナデ	山形文	にぶ褐	にぶ褐	角閃石	良好	外面薄くスス	J-7一括
13	88		3.9	1.2	ナデ	ナデ、山型文	褐	褐	石英、角閃石	良好	外面スス	F-4 P-2
13	89		6.4	1.1	ナデ	山形文	灰黄褐	灰黄褐	石英、角閃石、長石	良好	外面薄くスス	K-8括
13	90		4.5	1.2	ナデ	山形文	灰黄褐	灰黄褐	角閃石、長石	良好	口暦部山形文、両面スス	一括
13	91		6.9	1.0	ナデ	山形文	にぶ褐	明赤褐	石英、角閃石、長石	良好	口唇部山形文、内面スス	K-7 58
13	92		5.5	1.1	ナデ	山形文	にぶ黄橙	橙	角閃石	良好	外面スス	K-9 2
13	93		4.7	1.4	ナデ	ナデ、山型文	にぶ黄褐	にぶ黄褐	石英、角閃石	良好	両面薄くスス 	K-7一括
13	94		5.2	1.4	ナデ	ナデ、山型文	にぶ黄橙	にぶ橙	石英、角閃石	良好		K-7一括
13	95	10.0	4.8	1.1	ナデ	ナデ、山型文	橙	橙	石英、角閃石	良好		K-9 155
13	96 97	13.2	7.7 2.8	1.0	ナデ	山形文山形文	にぶ褐	にが橙	小石、砂粒、長石、石英、角閃石 ←MT =	やや良良好	両面スス 内面スス	K-10 119 K-9—括
13	98		2.3	1.1	山形文	· .	灰黄褐	にぶ黄橙	角閃石 云葉 色閃云		内面へへ 口唇部山形文、両面薄くスス	
13	99		6.0	1.5	山形文 山形文	山形文 山形文	にぶ黄橙	灰黄褐 灰黄褐	石英、角閃石 角閃石、長石	良好良好	口唇部山形文、阿山神くへへ	4,5号土城 <u>基</u> 埋土 K-9 284
14	100		4.2		山形文	山形文	にぶ黄橙		石英、角閃石	良好	口唇部山形文	K-9一括
14	101		8.2		原体条痕、山形文	山形文	にぶ黄橙	i i	砂粒、石英、角閃石、長石	良好	波状口縁、両面薄くスス	K-6一括
14	102		7.1	0.9	原体条痕、山形文	山形文	褐		石英、角閃石	良好	内面スス	K-7一括
14	103		6.3	1.0	原体条痕、山形文	山形文	暗灰黄	にぶ黄褐		良好	両面薄くスス	J-10 64
14	104		20.6	1.0	原体条痕、山形文	山形文	にぶ黄橙	にぶ黄橙	砂粒、石英、角閃石、長石	良好	波状口縁、両面スス	I -6 62
14	105		4.0	0.8	原体条痕、山形文	山形文	浅黄	浅黄	長石、石英、角閃石	良好	内面薄くスス	E-2一括
14	106	8.4	5.1	1.2	ナデ	山形文	にぶ褐	橙	小石、砂粒、長石、角閃石	良好	内面スス	J -9 48
14	107	8.0	4.3	1.4	ナデ	山形文	にぶ黄橙	にぶ黄橙		良好	内面スス	K-6 42
14	108	12.6	3.9	1.7	ナデ	山形文	にぶ黄橙		小石、砂粒、長石、角閃石	良好	底面組織痕、内面スス	K-6 49
14	109	12.2	3.6	1.7	ナデ	山形文	にぶ黄橙	にぶ橙	砂粒、石英、角閃石、長石	良好	内面スス	K-9 148
14	110	13.6	4.3	2.1		山形文	にぶ橙	橙	細砂粒、長石	良好	底面組織痕、内面スス	J -7 94
14	111	16.1	3.3	2.1	ナデ	山形文	にぶ橙	にぶ褐	粗砂粒、石英、角閃石	良好		K-7 一括
15	112	11.0	2.1	1.2	ナデ	山形文	灰黄褐	にぶ橙	小石、砂粒、石英、角閃石	良好	内面スス	J-10一括
15	113	10.0	2.9	2.5	ナデ	山形文	にぶ褐	にぶ褐	砂粒、石英、角閃石、長石	良好		K-7 215
15	114	11.8	2.8	1.9	ナデ	山形文	にぶ黄橙	にぶ褐	砂粒、石英	良好		K-6 121
15	115	12.3	2.3		ナテ	山形文	にぶ橙	にぶ橙	小石、粗砂粒、石英、長石	やや良	底面組織痕:	K-10 P-2
15	116	10.6	3.0		ナデ	山形文	にぶ黄橙	にぶ黄橙	粗砂粒、石英、角閃石	良好	底而組織痕	J-9一括
15	117	4.8	1.6		ナデ	山形文	にぶ黄褐	橙	砂粒、長石、角閃石	良好	内面スス	E-4一括
15	118	7.0	2.7		ナデ	山形文のよう	にぶ黄橙	浅黄橙	石英、角閃石、長石	良好	両面スス	K-6 18
15	119	11.0	5.8		ナデ	出形文の上ナデ	にぶ黄橙	にぶ黄橙	小石、粗砂粒、長石、石英、角閃石	良好	外面スス	K -8 210
15	120		6.1	1.6	ナデ	撚糸文	浅黄	にぶ黄橙	粗砂粒、石英、角閃石、長石、雲母	良好	外面スス	K-6 73

第6表 I区出土縄文土器観察表(3)

図版 番号	遺物 番号	口·底 径(cm)	現存高	器厚	調整(内面)	調整(外面)	色調	色調	胎 土	焼成	備考	取上番号
15	121	1± (uii)	(cm) 4.6	(cm)	ナデ	撚糸文	(内面) 浅黄橙	(外面) 浅黄橙	粗砂粒、石英、角閃石、長石			
15	122		5.9	1.1	ナデ		にぶ黄褐	黒褐	角閃石、雲母	良好	絡条体圧痕 	D-3一括
15	123		8.6	1.7		松示文 撚糸文	橙	橙	祖砂粒、石英、角閃石	良好良好	両面スス 外面スス	K-9一括
15	124		5.9	•	, ,		橙	にぶ赤褐	祖砂粒、石英、角閃石	良好	お条体圧痕	K-7 9 K-7 59
15	125		5.5	1.1	ナデ	燃糸文	橙	にぶ赤褐	細砂粒、石英、角閃石	良好	穿孔 (前)、外面スス	K-6一括
15	126		4.7	1.1		燃糸文	橙	橙	細砂粒、角閃石、長石	良好	縁辺に穿孔 (前)、内面スス	K-7一括
15	127			0.9	ナデ	燃糸文	にぶ褐	にぶ褐	石英、長石	良好	途中まで穿孔、内面スス	K-7一括
15	128			1.0	ナデ	燃糸文	にぶ黄橙	にぶ黄橙	角閃石、長石	良好	内面薄くスス	K-7 167
15	129	17.2	4.1	1.5	ナデ	燃糸文	黄橙	黄橙	小石、砂粒、長石、石英	良好	内面スス	K-7 12
15	130		6.0	1.2	ナデ	条痕	にぶ黄橙	にぶ黄橙	小石、石英、角閃石、長石	良好	7,100	K-9 292
15	131		6.2	0.9	ナデ	ナデ、条痕	灰黄褐	にぶ黄橙	石英、角閃石、長石	良好	両面スス	E-2 3
16	132		4.6	1.1	ナデ	条痕	にぶ黄橙	にぶ黄橙	石英、角閃石、長石	良好	内面スス	K-6一括
16	133		4.2	1.1	ケズリ	条痕	にぶ黄褐	にぶ黄褐	石英、角閃石	良好	両面スス	K-7一括
16	134		4.2	1.2	ナデ	条痕	にぶ黄褐	にぶ黄褐	粗砂粒、小石、石英、角閃石	良好		I-8一括
16	135		4.2	1.1	ナデ	条痕	褐	にぶ赤褐	小石、粗砂粒、角閃石、長石	良好	内面薄くスス	F-7 6
16	136		3.6	1.0	ナデ	条痕	にぶ黄橙	にぶ黄橙	角閃石、長石	良好	内面薄くスス	F-79
16	137		4.4	0.9	ナデ	条痕	にぶ橙	にぶ橙	小石、砂粒、角閃石、長石	良好	外面スス	K-7一括
16	138		5.7	1.1		条痕	橙	にぶ赤褐	小石、粗砂粒、角閃石	良好	外面スス	K-6一括
16	139		4.8	1.1	ナデ	条痕	にぶ黄橙	にぶ黄褐	石英、角閃石	良好	外面スス	I-5 P-4
16	140		5.5	0.8	ナデ	条痕	灰黄褐	にぶ黄褐	石英、角閃石、長石	良好	両面スス	K-9 126
16	141		5.7	0.7	ナデ	条痕	灰黄褐	灰黄褐	石英、角閃石	良好	両面薄いスス	K-9 171
16	142		6.5	1.3	ナデ	条痕	にぶ黄橙	黒褐	砂粒、角閃石	良好	外面スス	F-3 一括
16	143		5.6	1.4	ナデ	条痕	にぶ褐	褐	粗砂粒、石英、角閃石、長石	良好	外面スス	K-7 1
16	144		8.4	1.4	ナデ	条痕	暗褐	明赤褐	粗砂粒、角閃石、長石	良好	内面スス	K-7 269
16	145		6.1	0.8	ナデ	条痕	にぶ黄橙	灰黄褐	石英、角閃石、長石、雲母	良好	外面スス	K-8 115
16	146		5.0	0.9	ナデ	条痕	にぶ黄褐	にぶ黄褐	小石、粗砂粒、角閃石、長石	良好	途中まで穿孔、両面スス	E-4 40
16	147		5.3	1.2	ナデ	条痕	橙	にぶ橙	小石、粗砂粒、長石、石英、角閃石	良好	外面スス	J-7一括
16	148		4.2	1.2	ナデ	条痕	灰黄褐	にぶ黄橙	小石、砂粒、角閃石、長石	良好	両面スス	J -6一括
16	149		4.7	1.0	ナデ	条痕	にぶ黄橙	にぶ黄橙	砂粒、石英、角閃石、長石	良好	外面スス	K-8120
16	150	29.0	12.3	1.2	条痕の上ナデ	細沈線文、条痕	浅黄橙	にぶ黄橙	石英、角閃石、長石	良好	口唇部刻目、両面スス	F-5 14
16	151	21.9	14.4	1.2	ナデ	条痕	にぶ黄橙	にぶ黄橙	粗砂粒、角閃石、長石	良好	両面スス	K-6 57, J-7一 括
16	152		8.1	1.0	ナデ	条痕	明褐	灰褐	石英、角閃石、長石	良好	外面スス	K-7 8
16	153		4.6	0.6	ナデ	条痕	灰黄褐	灰黄褐	小石、砂粒、角閃石、長石	良好	両面スス	K-9一括
16	154		5.0	1.1	ナデ	条痕	にぶ黄橙	にぶ黄橙	小石、粗砂粒、角閃石、長石	良好	両面スス	K-8一括
16	155		6.6	1.4	ナデ	条痕	にぶ橙	にぶ橙	石英、角閃石、長石	良好	両面薄くスス	J -7一括
16	156		5.4	2.3	ナデ	条痕	にぶ橙	にぶ黄橙	粗砂粒、角閃石、長石	良好	内面スス	E-4 17
16	157		4.9	1.6	ナデ	条痕	にぶ黄橙	にぶ黄橙	小石、粗砂粒、長石、角閃石	良好	内面スス	K-7 198
17	158	10.8	4.0	1.1	ナデ	条痕	暗褐	にぶ褐	砂粒、石英、角閃石	良好	両面スス	K-8一括
17	159		4.6	0.7	条痕の上ナデ	条痕の上ナデ	にぶ橙	にぶ褐	角閃石、長石	良好	外面スス	H-8一括
17	160	15.6	9.3	1.3	条痕の上ナデ	ナデ	赤褐	にぶ黄褐	石英、角閃石、長石	良好		J -10 229
17	161	47.4	15.5	1.3	ナデ	貝殼条線文、連 続刺突文 日熱条線文	橙	にぶ橙	小石、粗砂粒、長石、石英	やや良	口唇部刻目、両面スス	K-8 197
17	162		7.6	0.9	ナデ	貝殼条線文、連 続刺突文 刺突文 オ線文	にぶ橙	橙	小石、粗砂粒、長石、石英、角閃石	良好	口唇部刻目、両面スス	K-8 94
17	163		4.3	1.3	ナデ	刺突文、沈線文、 刻目	灰黄	にぶ黄橙	石英、角閃石、長石	良好	内面薄くスス	K-10 50
17	164		1.1	3.1	ナデ	沈線文	にぶ褐	にぶ褐	石英	やや良	早期 (沈線文)	一括
17	165		4.5	0.7	ナデ	撚糸文文様帯	にぶ褐	にぶ褐	砂粒、長石、石英、角閃石	良好	内面スス	J -10 255
17	166			1.2	 ナデ _ト ー	貝殻文	にぶ橙	橙	小石、粗砂粒、長石、石英、角閃石	良好	外面スス	I -10一括
17	167			1.3	ナデ		にぶ黄橙	にぶ黄橙	砂粒、角閃石、長石	良好	底面組織痕	K-8—括
17	168	12.0	3.4	2.0	貝殻条痕	ナデ	にぶ赤褐	にぶ赤褐	石英	良好	*****	K-7 236
17	169		2.1	1.3	日加久之	貝殻文 貝殻条痕の上小	暗褐	にぶ黄橙	粗砂粒、石英、角閃石、長石	良好	内面スス、底面組織痕	J-9 94
17	170		3.2	0.8	貝殻条痕	突帯3条	にぶ黄橙	にぶ黄橙	石英、角閃石、長石	良好	口唇部刻目、外面薄いスス	一括
17	171		4.9 5.8	0.6	貝殻条痕 貝殻条痕	突帯 4 条 貝殻条痕の上小	橙 明赤褐	に が 橙	石英、角閃石、長石 砂粒、長石、石英、角閃石	良好良好	口暦部刻目、外面スス 口暦部刻目、外面薄いスス	K-10 125 K-9 153
17	172		5.5	0.9	貝殻条痕	突帯4条 貝殻条痕の上小	明赤褐	恒 灰褐	砂粒、長石、石英、用闪石 石英、角閃石、長石	良好良好	口唇部刻日、外面神いスス 口唇部刻目、外面スス	K-9 153 K-10 35
17	173		5.8	1.3	貝殻条痕	突帯4条 貝殻条痕の上小	灰黄褐	灰黄褐	石央、州以石、 安石 小石、砂粒、石英、長石	良好	口格部刻日、外面スス 口唇部刻目、両面スス	K-10 35 1号甕棺墓埋土
17	174	<u> </u>	3.2	0.9	貝殻条痕	突帯5条 貝殻条痕の上小	にぶ黄橙	にぶ黄橙	小石、砂粒、石英、长石 砂粒、石英、長石	良好	口唇部刻日、四面スス 口唇部刻目、外面薄いスス	1万號相基理工 K-7 205
18	176		5.1	0.9	貝殻条痕	突帯3条 貝殻条痕の上小	にぶ黄橙	にぶ黄橙	砂粒、石英、長石	良好	口唇部刻目、 が面 神 い へ へ 口唇部刻目、 両面 スス	K-7 205 K-7 237
18	177		4.0	0.8	ナデ	突排 4 条 沈線文	にぶ黄橙	にぶ黄橙	長石	良好	口唇部刻目、外面スス	K-7 237 K-8一括
18	178		6.6	0.7	ミガキ	ミガキ	灰黄褐	黒褐	細砂粒、長石、角閃石	良好	波状口縁、両面スス	J-6 60
18	179		3.0	0.8	ミガキ、凹線1条	ミガキ	にぶ黄橙	にが橙	細砂粒、長石、石英、角閃石	良好	外面スス	K-6一括
18	180		5.0	0.7	ミガキ、沈線1条	ミガキ	にぶ黄橙	にぶ黄橙	砂粒、石英、長石、角閃石	良好	波状口縁、両面スス	J-9一括
ت		L	لتنسا		1				L			

第7表 I区出土縄文土器観察表(4)

図版	遺物 番号	口:底	現存高	器厚	調整(内面)	調整(外面)	色調	色調	 胎 ±	焼成	備考	取上番号
番号		径(cm)	(cm)	(cm)		ミガキ、沈線1	(内面)	(外面)	細砂粒、長石、石英、角閃石	良好	波状口縁、両面スス	J-6一括
18	181	i	4.2	0.6	ミガキ、凹線1条	条 ミガキ、沈線 2	にぶ黄橙黒褐	にぶ黄橙にぶ黄橙	細砂粒、食石、石类、角闪石	良好	波状口縁、両面スス	K-10 61
18	182		6.1	0.8	ミガキ、凹線1条	条、磨消縄文 ミガキ、沈繰 1	無的 にぶ黄橙	暗灰黄	石英、角閃石、長石	良好	外面スス	J-11 94
18	184		5.7° 7.8	1.0	ミガキ	条 ミガキ、沈線 4	灰黄褐	にぶ黄橙	砂粒、角閃石、長石	良好	内面スス	J-8一括
18	185		3.0	0.8	ナデ	条 条痕	灰褐	褐灰	砂粒、角閃石	良好	両面スス	H-9一括
18	186		2.3	0.8	ミガキ	条痕	黒褐	にぶ黄橙	細砂粒、石英	良好	両面スス	K-8一括
18	187		3.8	1.1	ナデ	条痕、ナデ	浅黄橙	浅黄橙	砂粒、長石、石英、角閃石	良好	外面スス	G-9一括
18	188		3.5	0.6	ナデ	条痕、ナデ	褐灰	褐灰	細砂粒、長石	良好	両面スス	J -10一括
18	189		4.6	0.9	ミガキ	条痕	褐灰	にぶ黄橙	細砂粒、長石	良好	内面スス	J -7一括
18	190		5.3	0.8	ナデ	条痕	にぶ黄橙	にぶ黄橙	砂粒、長石、角閃石	良好	外面スス	K-7 145
18	191		5.0	1.0	ナデ	条痕の上ナデ	にぶ橙	にぶ赤褐	砂粒、長石、石英、角閃石	良好	外面薄くスス	F-5 3
18	192		4.4	0.7	条痕の上ナデ	条痕の上ナデ	にぶ黄橙	にぶ黄橙	角閃石、長石	良好		K-7 87
18	193		4.0	0.7	条痕の上ナデ	条痕の上ナデ	にぶ黄橙	にぶ黄橙	角閃石	良好		J-9 一括
18	194		3.5	0.5	ミガキ	ミガキ	にぶ黄橙	にぶ黄橙	角閃石、長石	良好	両面薄いスス	I -10 23
18	195		3.9	0.4	ナデ	条痕	黒褐	黒褐	石英、角閃石、長石	良好	両面スス	J-10 P-8
18	196		6.2	0.7	ミガキ	ミガキ	黄褐	にぶ橙	石英、角閃石、長石	良好	面スス	一括
18	197		4.8	0.8	ミガキ	ミガキ	にぶ黄褐	にぶ黄橙	石英、角閃石、長石	良好	両面スス	J-11 161
18	198		6.0	0.9	ナデ	条痕の上ナデ	浅黄橙	浅黄橙	砂粒、角閃石、長石	良好	両面スス	K-8一括
18	199		4.5	0.6	ナデ	突帯、ナデ	浅黄橙	浅黄橙	砂粒、長石	良好	内面スス	F-3 15
18	200		6.0	1.0	ナデ	ナデ、刻目突帯 1条	にぶ黄橙	にぶ黄橙	石英、角閃石、長石	良好	両面スス	K-7 53
18	201		5.8	0.9	ナデ	ナデ、刻目突帯 1条	にぶ黄橙	にぶ黄橙	角閃石、長石	良好		D-2 60
18	202		6.5	0.9	ナデ	ナデ、刻目突帯	にぶ黄橙	にぶ黄橙	石英、角閃石	良好	外面スス	F-4 25
18	203		5.6	1.0	ナデ	ナデ、刻目突帯	にぶ橙	にぶ黄橙	粗砂粒、石英、長石、雲母	良好	外面スス	E-6 6
18	204		8.7	0.9	ナデ	ナデ、刻目突帯 2条 ナデ、刻目突帯	浅黄橙	にぶ橙	細砂粒、長石、角閃石	良好	両面スス 	K-10 P-1
18	205		7.1	0.6	ナデ	クラス クラス 1 2 条 ナデ、刻目突帯	にぶ黄橙	橙	砂粒、角閃石、長石	良好		K-7 188
18	206		8.5	1.1	ナデ	1条	にぶ黄橙	にぶ黄橙	石英、角閃石、長石	良好	口唇部刻目、外面スス	K-8 31
18	207		6.5	0.7	ナデ	ナデ	にぶ黄橙	灰黄褐	石英、角閃石、長石	良好	口唇部刻目、外面スス	K-7 126
18	208 209	24.6	3.3	0.6	ミガキ	ミガキ	橙 にぶ赤褐	橙 灰赤	粗砂粒、長石、石英 砂粒、小石	良好 良好	│ 口唇部刻目、外面薄くスス │ 外面スス	H-9 P-2 17号土坑
19	210		3.5	1.0	ナデ	ミガキ、沈線1	にぶが他	にぶ黄橙	一	良好	外面スス	」 17 ラエ州
19	211		2.0	0.8	ミガキ	条 ナデ、沈線1条、	明赤褐	にが橙	角閃石、長石、雲母	良好	7下面 ハハ	G-5 一括
19	212		2.6	0.6	ミガキ	楕円形 ミガキ、沈線 1	黒褐	にぶ黄褐	長石	良好	両面スス	K-8一括
19	213		3.2	0.6	ミガキ	宋 ミガキ、沈線 2 条	にぶ黄橙	にぶ黄橙	長石	良好	両面スス	K-6→括
19	214		4.2	0.6	ミガキ	米 ミガキ	にぶ黄橙	にぶ黄橙	細砂粒、角閃石	良好		17号土坑
19	215	ı	8.8	0.6	ミガキ、沈線1条	ミガキ、沈線1 条	黒褐	褐	細砂粒、長石	良好	両面スス	一括
19	216		5.5	0.7	ミガキ	ナデ	にぶ黄橙	浅黄橙	砂粒、石英、長石、角閃石	良好	外面スス	I -10 114
19	217		4.5	0.6	ナデ、凹線1条	ナデ	にぶ黄橙	にぶ黄橙	角閃石、長石	良好	両面スス	J -10 103
19	218	11.8	3.0	0.8	ナデ	ナデ	にぶ橙	にぶ橙	長石、角閃石	良好		J -10 247
19	219		4.5	0.6	ミガキ	ミガキ	にぶ赤褐	褐灰	細砂粒、長石、石英、角閃石	良好		J -6
19	220		2.6	0.5	ミガキ	ミガキ、凹線 2 条、細線羽状文	黒褐	暗灰黄	角閃石	良好		I-10一括
19	221		2.9	0.7	ナデ	ミガキ、凹線2条	にぶ黄橙	灰黄褐	砂粒、長石、角閃石	良好	外面スス	J -7一括
19	222			0.5	ミガキ	磨消縄文、ミガ キ	にぶ黄橙	にぶ黄褐	細砂粒、長石、石英、角閃石	良好	外面スス	J-7一括
19	223			1.0	ナデ	条痕の上ナデ	にぶ黄橙	浅黄橙	細砂粒、長石、石英、角閃石、雲母	良好	内面スス 外面スス、晩期浅鉢(突帯文	H-8一括
19	224			0.9	ナデ	組織痕	暗褐	にぶ赤褐	砂粒、角閃石	良好	期)	E-4 16
19	225	7.2	4.9	1.2	ナデ	ナデ	浅黄橙	灰褐	粗砂粒、角閃石、長石	良好	外面スス	J-7一括
19	226	3.5	1.3	0.6	ミガキ	ミガキ	灰黄	暗灰黄	細砂粒、角閃石、長石 小粒	良好	両面スス	J-11 154
19	227	6.0	1.4	0.6	ナデ	ナデ	灰黄褐	にぶ橙	砂粒、石英、長石、角閃石 砂粒 角閃石 長石	良好	内面スス	J-6 64 J-6一括
19	228 229	7.8 8.4	2.2 4.6	1.5	ナデ	ナデ	橙 にぶ黄橙	にぶ橙 にぶ黄橙	砂粒、角閃石、長石 砂粒、長石、石英、角閃石、雲母	良好良好	底辺部は指頭痕 外面スス	J-6一括 4,5号土城基埋土
19	230	7.6	2.7	1.3	ナテ ナデ	ナデ	黄灰	にか更位	砂粒、食石、石英、用闪石、装饰砂粒、角闪石、長石	良好	外面スス	4,5岁工 <u>项垒埋于</u> K-10 4
19	230	7.8	3.5	1.2	ナデ	ナデ	浅黄橙	にぶ橙	砂粒、長石、石英、角閃石、雲母	良好	外面スス	K-10 4 K-7一括
19	232	9.5	3.7	1.4	ナデ	ナデ	灰黄	橙	砂粒、角閃石、長石	良好	外面スス	G-4一括
19	233	10.4	4.8	1.3	ナデ	ナデ	にぶ黄橙	にぶ橙	砂粒、角閃石、長石	良好	内面薄くスス	1号住埋土
19	234	7.0	4.1	0.9	ナデ	ナデ	橙	にぶ黄橙	砂粒、長石	良好	外面スス	一括
19	235	5.5	2.0	0.9	ナデ	ハケ	灰黄	にぶ黄橙	角閃石、長石	良好	両面スス	J -6 67
19	236	6.4	4.1	1.2	ナデ	ナデ	にぶ黄褐	橙	砂粒、長石、金雲母	良好	内面スス	G-9 6
19	237	6.1	5.2	0.8	ミガキ	ミガキ	にぶ橙	にぶ黄橙	砂粒、長石、石英、角閃石、雲	良好		K-7 125
19	238	8.4	3.0	0.8	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	砂粒、長石、石英、角閃石、雲母	良好	外面薄くスス	K-7 65
19	239	5.6	6.7	0.8	ナデ	ナデ	浅黄	にぶ黄橙	粗砂粒、長石、角閃石	良好	両面スス	I -6 12

2. 石器 (第20~49図)

I区から出土した縄文時代の石器は、総数283点である。その内訳は、石鏃67点、石匙8点、石錐7点、削器28点、抉入石器6点、楔型石器16点、打製石斧11点、磨製石斧2点、石錘1点、石皿1点、磨石・敲石65点、異形石器1点、石棒1点、二次加工のある不定形石器34点、使用痕のある剥片35点で、石鏃と磨石・敲石が多くを占めている。また、石核が21点出土している。ここでは、主要な遺物221点を掲載した。以下、器種ごとに、特徴について見ていきたい。

なお、それぞれの遺物の計測値については、「I 区出土縄文石器観察表」(第8~11表) にまとめている。 **石鏃**(第20~24図)

石鏃は、67点出土した。石材としては、黒曜石製が34点、チャート製が7点、安山岩製が26点となっている。

出土した石鏃は、すべて無茎鏃にあたるが、その形状によって、正三角形を呈するもの(A群)、二等辺三角形を呈するもの(B群)、側縁の角度が上半部で変化し、五角形あるいは砲弾形を呈するもの(C群)の3つに分けられる。

また、基部の形状の特徴から、平基のもの(Ⅰ類)、浅い抉りが入るもの(Ⅱ類)、V字状に抉りが入るもの(Ⅲ類)、U字状に抉りが入るもの(Ⅳ類)、深く抉られた長脚のもの(Ⅴ類)、円基のもの(Ⅵ類)に分けることができる。

この2つを組み合わせた20類のうち、実際に出土したのは13類で、BIV、BV類が共に9点で一番多く、 次いでBⅢ類が8点、BⅡ類が7点出土している。

A I 類 (1、2)

平基の正三角形石鏃である。 2点出土した。

1は表裏面とも調整が行われているが、2は素材剥片の剥離面を一部残している。

B I 類 (3~7)

平基で、二等辺三角形を呈する石鏃である。 4点出土した。

3は右基部、**4**は先端、**5**は左基部をそれぞれ欠損している。また、**7**は右側縁を欠損している。小型のもの(**3**、**4**)と大型のもの(**5**、**6**)がある。

C I 類 (8~10)

平基で、側縁が上半部で変化する石鏃である。3点出土している。側縁に角を持ち、五角形に近いもの(8)と、角がなく砲弾形に近いもの(9、10)がある。

A Ⅱ類 (11~13)

正三角形で、基部に浅い抉りの入る石鏃である。3点出土した。

11は小型で、風化と磨耗が激しく、調整がわかりにくくなっている。12は先端、13は先端と右基部を欠損している。

BⅡ類 (14~19、56)

二等辺三角形で、基部に浅い抉りの入る石鏃である。7点出土している。

14、18は小型の石鏃である。16は表面中央部、56は表裏面中央部を研磨した局部磨製石鏃である。なお、15は右基部、18は先端と左基部の一部を欠損している。

C II類 (20、21)

基部に浅い抉りが入り、側縁が上半部で変化する石鏃である。2点出土している。2点とも角はなく、砲

弾形に近い。

21は素材剥片の剥離面を一部残している。

ВⅢ類 (22~29)

二等辺三角形で、基部がV字状に抉られた凹基の石鏃である。8点出土している。側縁が直線状のもの(22~25、28、29)と、下半部で変化するもの(26、27)の2種類がある。

22は左脚の一部、23は先端部を欠損している。24は小型の石鏃で、右脚の一部を欠損している。26も小型で、先端部を欠損している。27は右脚部を欠損している。28は大型の石鏃で、先端と右脚部を欠損している。29は側縁が内弯気味で、素材剥片の剥離面を残す。また、先端と脚部を欠損している。

СⅢ類(30)

五角形で、基部がV字状に抉られた凹基の石鏃である。1点のみの出土である。側縁上半に角を持ち、右脚部を欠損している。また、表裏面に素材剥片の剥離面を残す。

AIV類 (31~33)

正三角形を呈し、基部がU字状に抉られた凹基の石鏃である。3点出土した。いずれも細かい調整がなされている。

32は側縁が下半部で弯曲した形状をしている。33は先端と右脚部を欠損している。

B IV類 (34~42)

二等辺三角形で、基部がU字状に抉られた凹基の石鏃である。9点出土している。側縁が直線状のもの(34、36、40)と、下半部で変化するもの(35、37~39、41)がある。

42は長さ4.5cmの大型の石鏃で、内弯した側縁を持つ。また、一部に素材剥片の剥離面を残しているもの (35、37~41) が多くある。36は風化、磨耗が激しく、調整がわかりにくくなっている。なお、34、36は先端と右脚の一部、37は右脚の一部、38は先端と左脚部を、それぞれ欠損している。

A V類 (43)

正三角形で、基部が深く抉られて長脚になる石鏃である。1点のみの出土である。右脚は欠損しているが、 左側縁は下半部で変化して、角をつくっている。

B V類 (44~52)

二等辺三角形を呈し、基部が深く抉られて長脚になる石鏃である。 9 点出土した。側縁が直線状のものが 1 点(51)で、内弯するものが 2 点(46、47)、外弯気味のものが 6 点(44、45、48~50、52)である。

51は表裏面、52は裏面に素材剥片の剥離面を残している。なお、45、49は左脚部、46、47、52は先端と左脚部、51は先端部を、それぞれ欠損している。

B VI類 (53~55)

二等辺三角形を呈する円基の石鏃である。3点出土している。

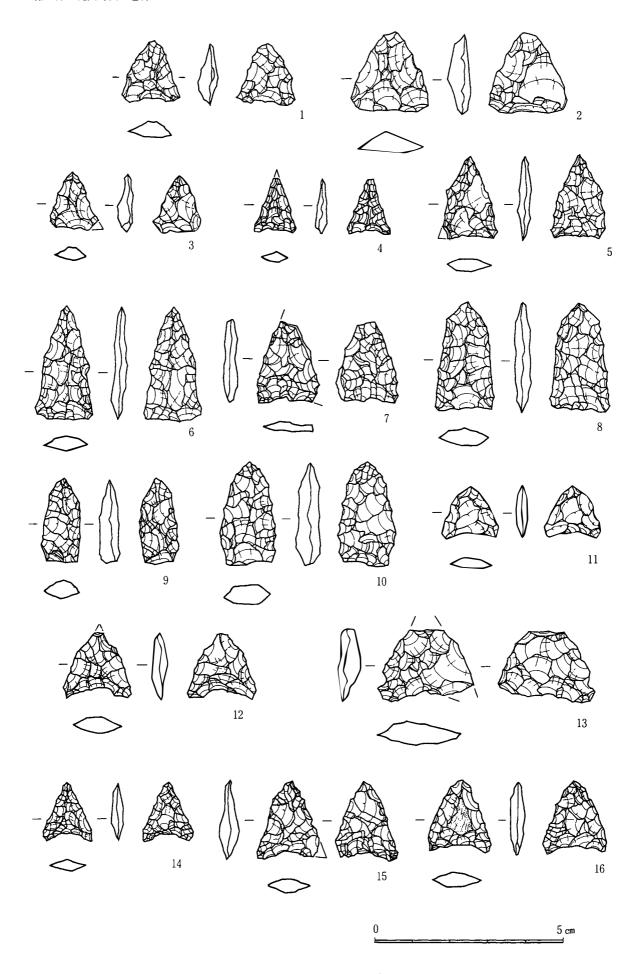
53、54は側縁が外弯気味、55は直線状である。54は調整が粗く、未加工品の可能性がある。55は右側縁を 欠損している。

所属不明の石鏃(57~63)

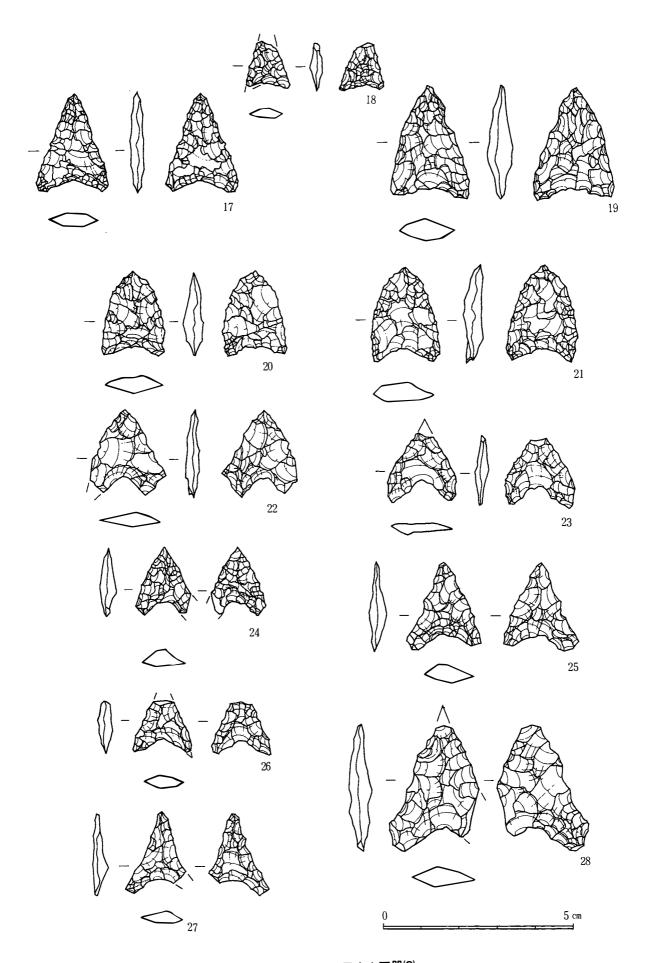
欠損によって、分類できなかった石鏃が7点出土している。

57、60は素材剥片の剥離面がかなり残っており、未加工品の可能性がある。61は側縁が内弯気味である。 未加工品(64~67)

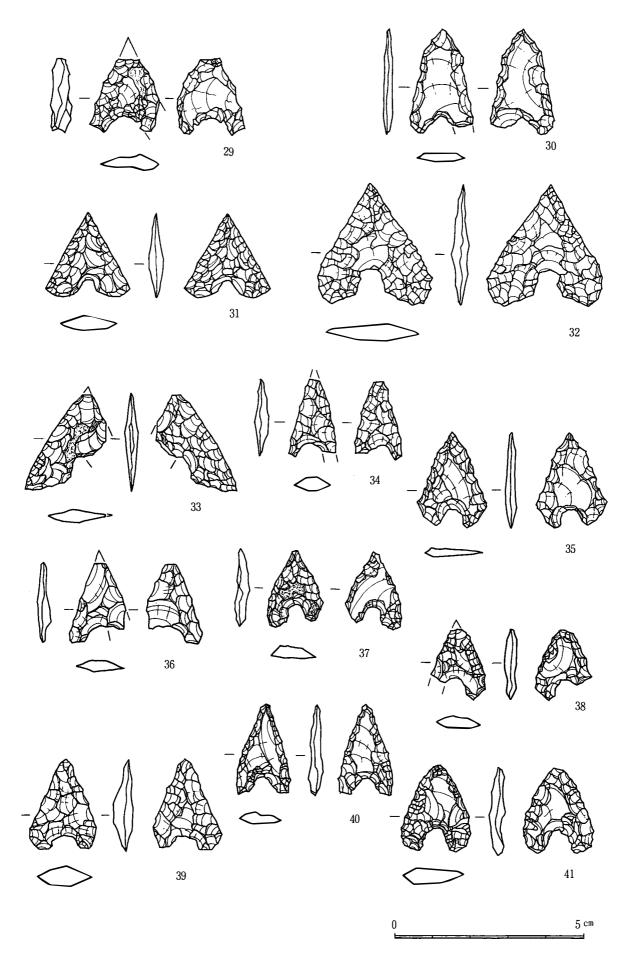
石鏃の未加工品と思われるものが4点出土している。いずれも縁辺の調整が中途で終わっており、製作に 失敗したか、製作途中に何らかの理由で放棄されたものと思われる。



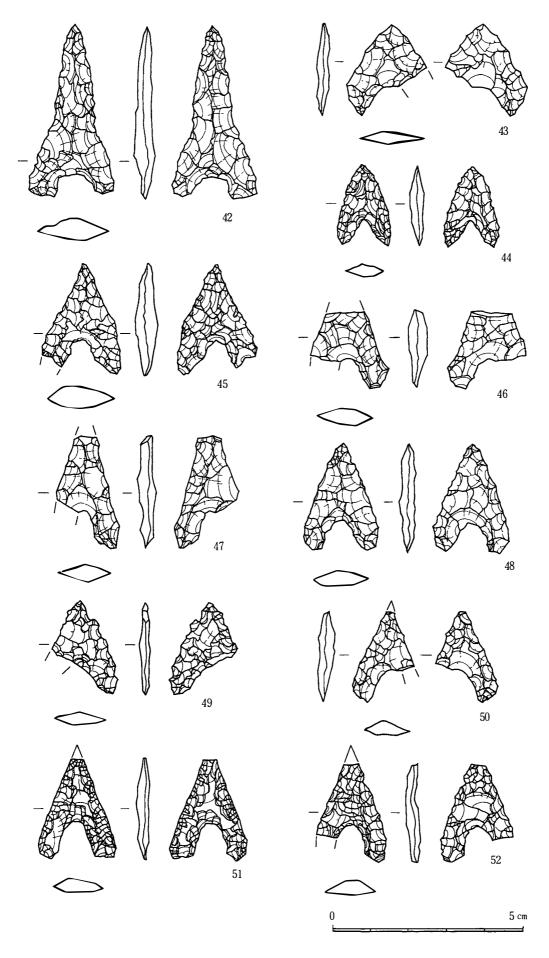
第20図 I区出土石器(1)



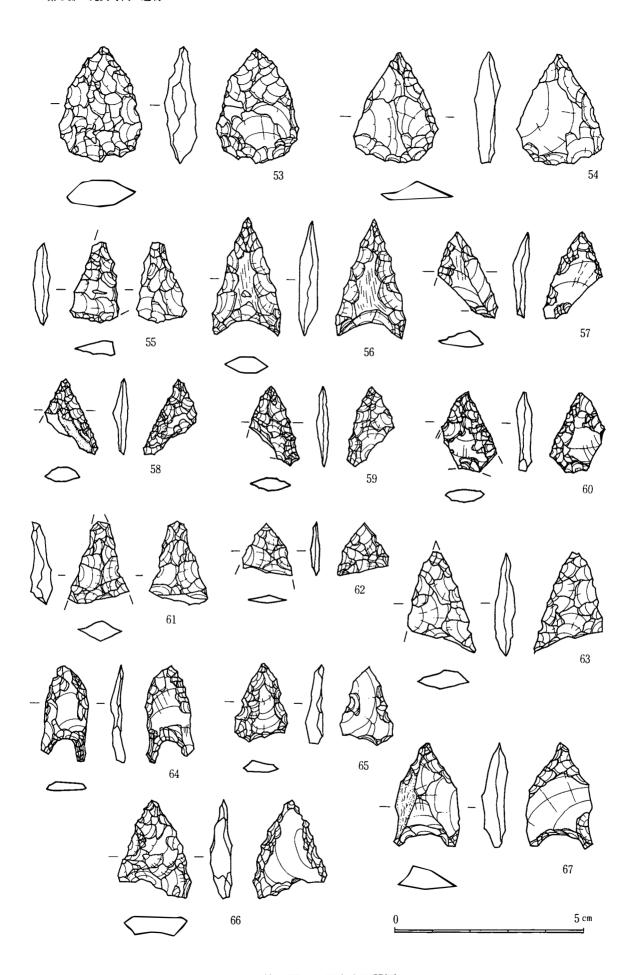
第21図 I区出土石器(2)



第22図 I区出土石器(3)



第23図 I区出土石器(4)



第24図 I区出土石器(5)

石匙 (第25、26図)

石匙は、全部で8点出土した。内訳は横型が6点(68~73)、縦型が2点(74、75)である。

66は、黒曜石製の小型の石匙である。67はつまみを欠損している。70、71は調整が一部にとどまっており、 未加工品の可能性がある。また、71は両端部を欠損している。72、73はともに縦型石匙で、先端部を欠損している。

石錐 (第27図76~82)

石錐は、7点出土した。明瞭なつまみ状の頭部を持つもの(78)と、不定形の剥片の一部を加工して錐部を作り出し、はっきりしたつまみ部を持っていないものに分けられる。また、形状は舟形のもの(79、80)、菱形のもの(76、81、82)、三角形のもの(77、78)に分けられる。

削器 (第27図83~第32図110)

剥片の側縁部に連続的に調整を加えて作られた刃部を持つ石器を削器として扱った。全部で28点出土した。 大きさによって、大型のもの(102~105)、中型のもの(93~101、109)、小型のもの(83~92、106~108、109、110)に分けられ、大型のすべて、中型も1点(109)を除くすべてが安山岩を石材としている。

107、109は石核の縁辺に調整を入れて、削器として転用している。

抉入石器(第32図111~第33図116)

石器本体の一部に抉入加工による弯入部が見られるもので、6点が出土している。

111は両側縁に弯入部があり、裏面からの片面調整が行われている。112は右側縁に弯入部があり、表面からの片面調整が行われている。113は上側縁に弯入部があるが、調整によって突起を作り出しており、錐として使われた可能性もある。114と116は右側縁下部、115は下側縁に表面片面調整の弯入部がある。

楔形石器 (第33図117~第35図)

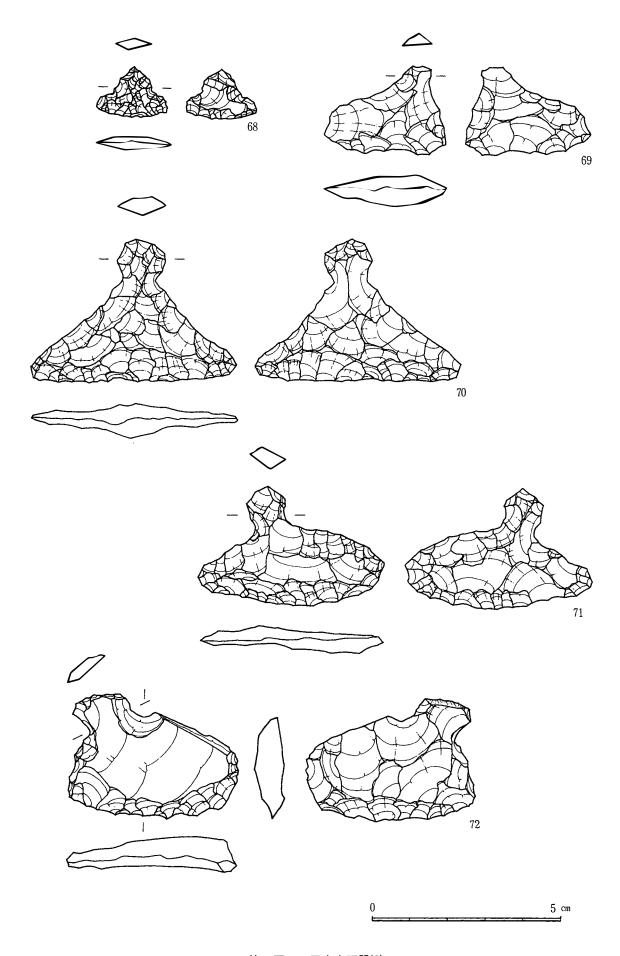
向かい合った2辺の縁辺部に階段状の剥離痕が対になる石器で、16点出土した。

117は表面に礫面を残し、上下両端に対向する剥離痕がある。118は上面に礫面を残し、上下両端に対向する剥離痕がある。また、左側縁には折れ面がある。120は表面と左側面に礫面を残し、上下両端に対向する剥離痕がある。121は上下両端に折れ面がある。120は表面と左側面に礫面を残し、上下両端に対向する剥離痕がある。121は上下両端に折れ面があり、両側縁に対向する剥離痕がある。122は表面に礫面を残し、上下両端に対向する剥離痕がある。123は上面に礫面を残し、両側縁に対向する剥離痕がある。124は上下両端に対向する剥離痕があり、右側端には折れ面が観察される。125は上下両端と両側縁に対向する剥離痕がある。126はチャート製で、上面と左側面に礫面を残し、上下両端と両側縁に対向する剥離痕がある。127は両側縁に対向する剥離痕がある。128と129は上下両端と両側縁に対向する剥離痕がある。130は上端部と両側縁に小剥離痕があり、下端には折れ面がある。131は頁岩製で、下端部に小剥離痕があり、両側端には折れ面が観察される。132は裏面と左側面に礫面を残し、上下両端に対向する剥離痕がある。

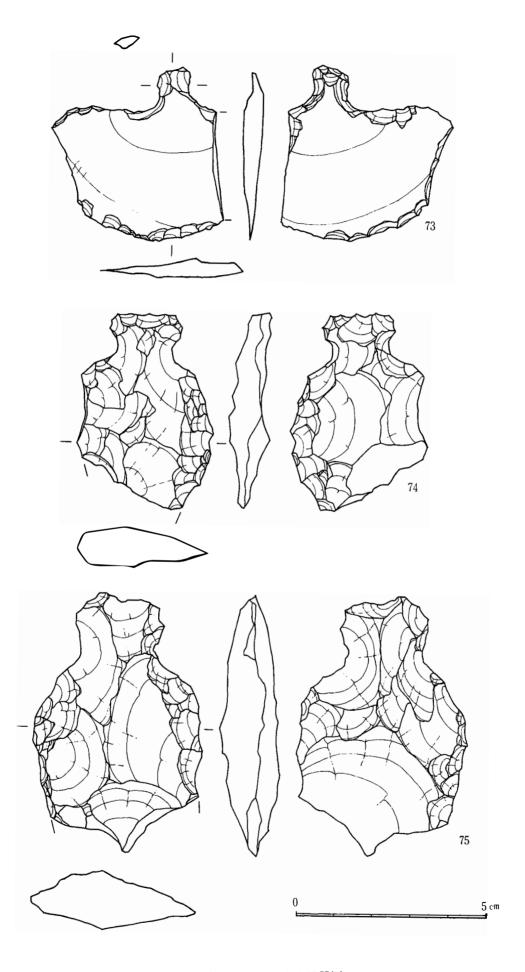
打製石斧 (第36図133~第37図143)

打製石斧は、11点出土した。形態によって、両側縁がほぼ平行な短冊形(長方形)のものがほとんどであるが、上下両端に比べて中央部がくびれた分銅形のものも1点(141)出土している。石材は砂岩製が多くを占める。

134は表面に礫面を残している。135は刃部、136~138は下半部を欠損している。139は玄武岩製、裏面に礫面を残し、両端を欠損している。140は安山岩製で、表面に礫面を残し、上端部と、刃部の一部を欠損している。141は刃部の一部を欠損している。142は頁岩製で、側縁上半部にゆるいくびれを持ち、刃部を欠損している。143も側縁上半部にゆるいくびれを持つ。



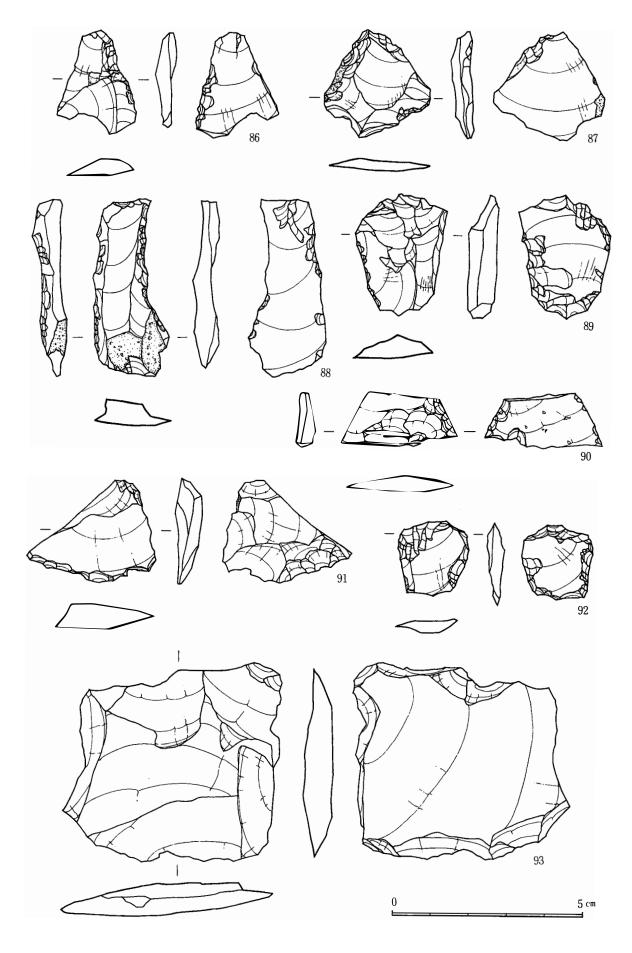
第25図 I区出土石器(6)



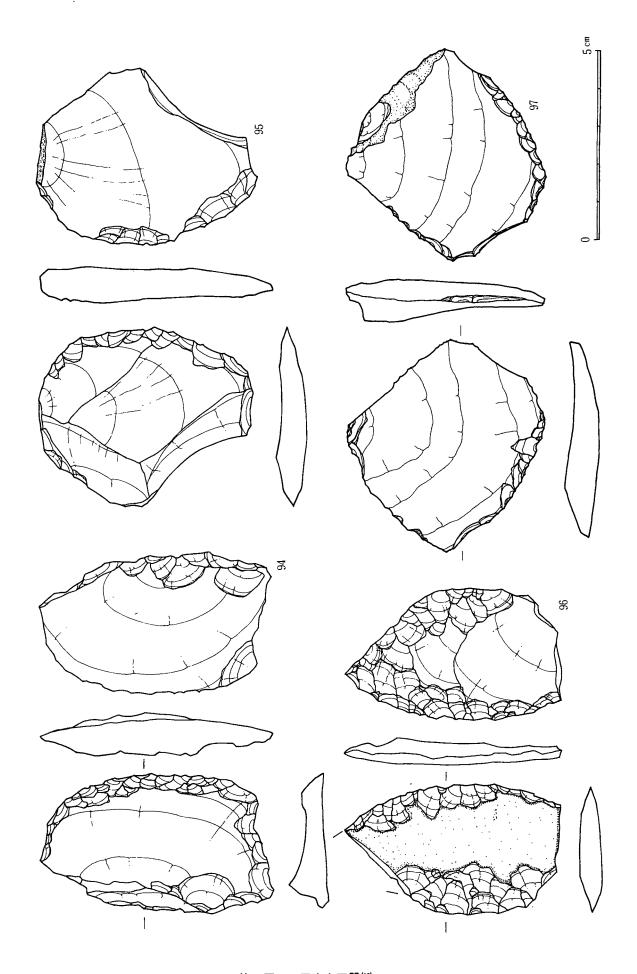
第26図 I区出土石器(7)



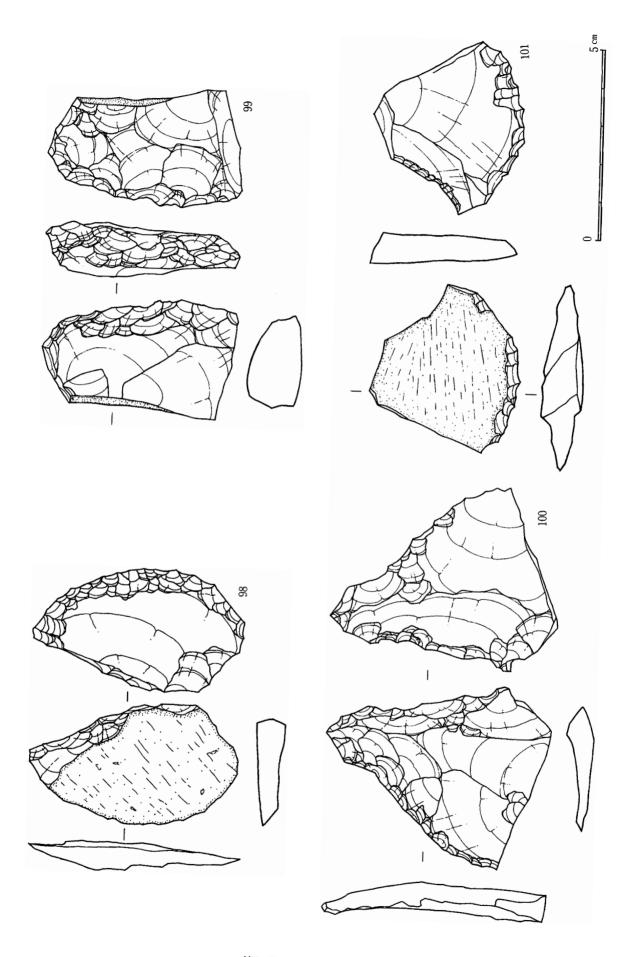
第27図 I 区出土石器(8)



第28図 I区出土石器(9) (90のみ%)



第29図 I区出土石器(10)



第30図 I区出土石器(11)

磨製石斧 (第37図144、145)

磨製石斧は、2点出土した。2点とも砂岩製である。

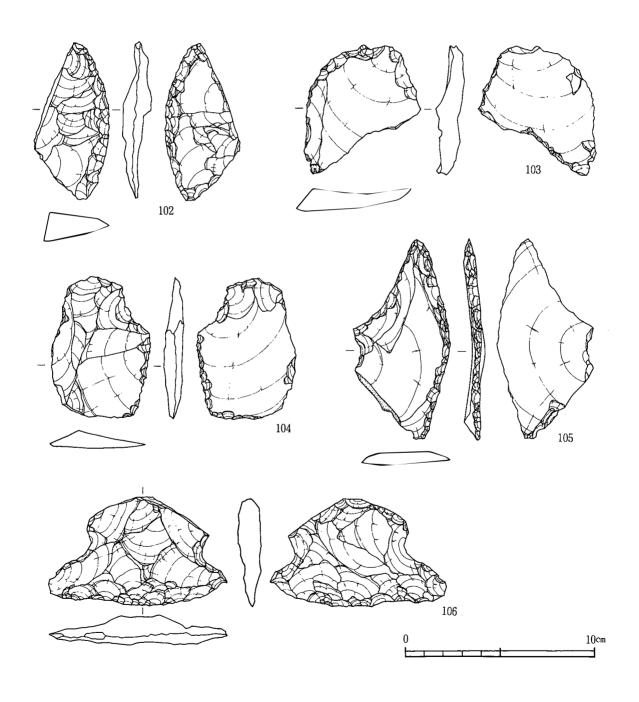
144は両端部を欠損している。表面と側面全体に敲打痕があり、裏面を磨いている。145は裏面、刃部および基部の一部を欠損している。上半部に敲打痕があり、下半部を磨いている。

石錘 (第38図146)

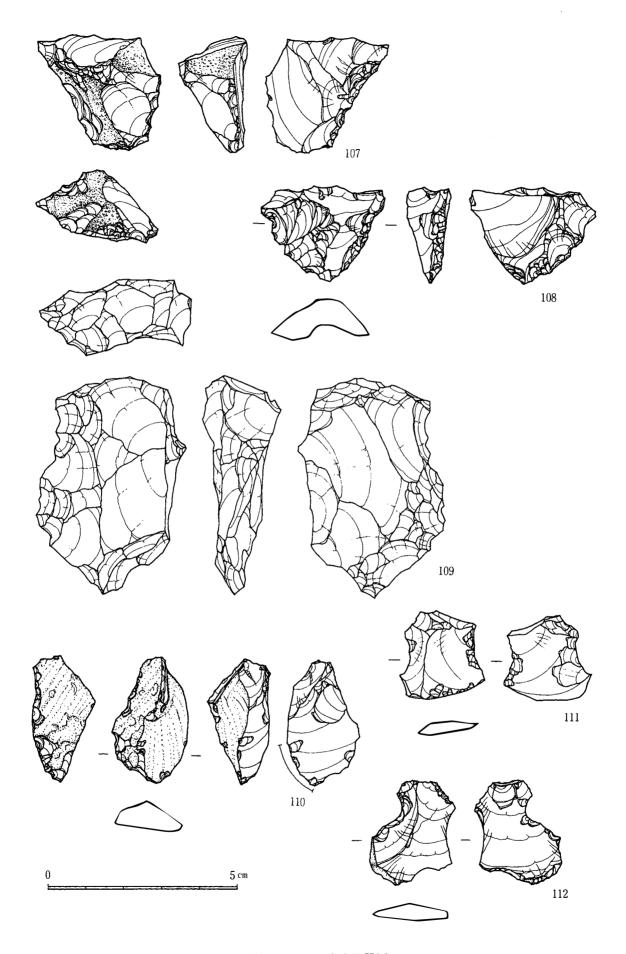
146は砂岩製の石錘で、1点のみの出土である。円礫の中央部に1本の溝を巡らした有溝石錘である。

石皿 (第38図147)

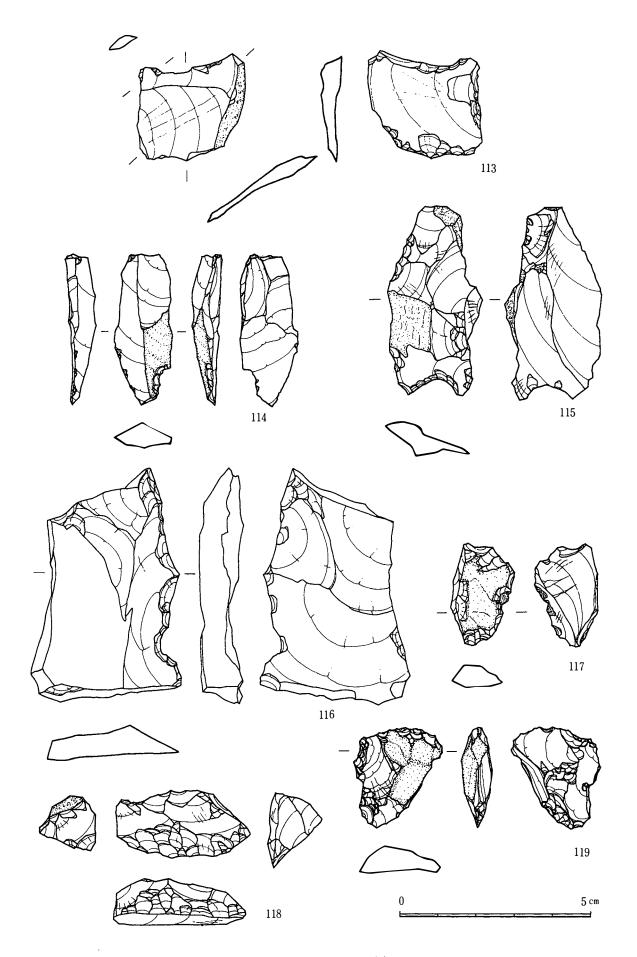
147は砂岩製の石皿の一部で、1点出土している。石の表面に凹状の磨痕を持つ。



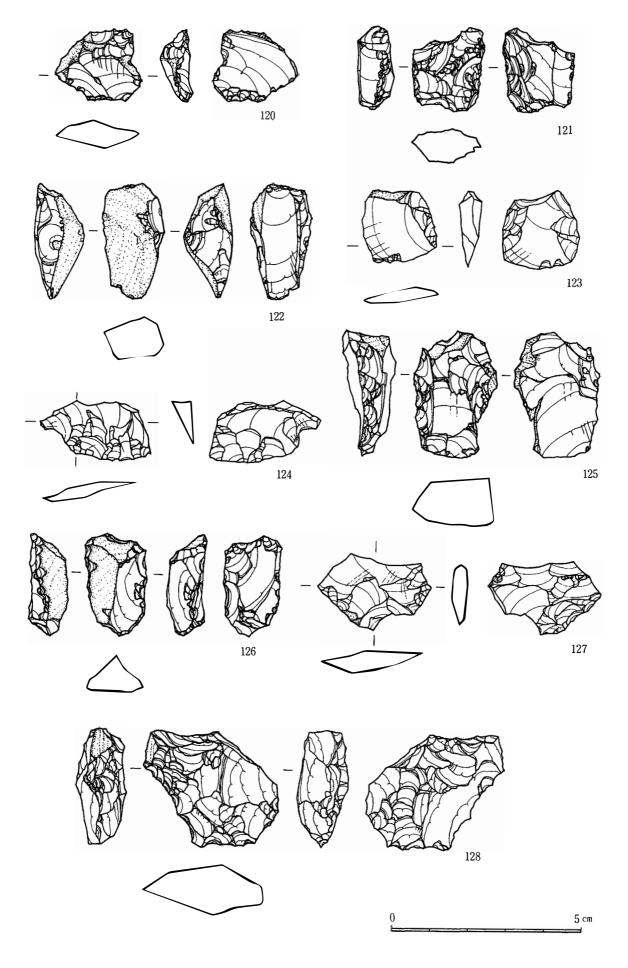
第31図 I区出土石器(12)



第32図 I区出土石器(13)



第33図 I 区出土石器(14)



第34図 I区出土石器(15)

磨石・敲石 (第38図148~第44図188)

磨石・敲石は、合わせて65点出土した。すべて砂岩製である。多くが円盤状の礫を使用し、一部に磨痕、 あるいは敲打痕を残している。また、一部を欠損しているものも多い。ここでは41点を掲載した。

152、161、176にはススが付着し、165、178、183は熱を受けて赤変している。

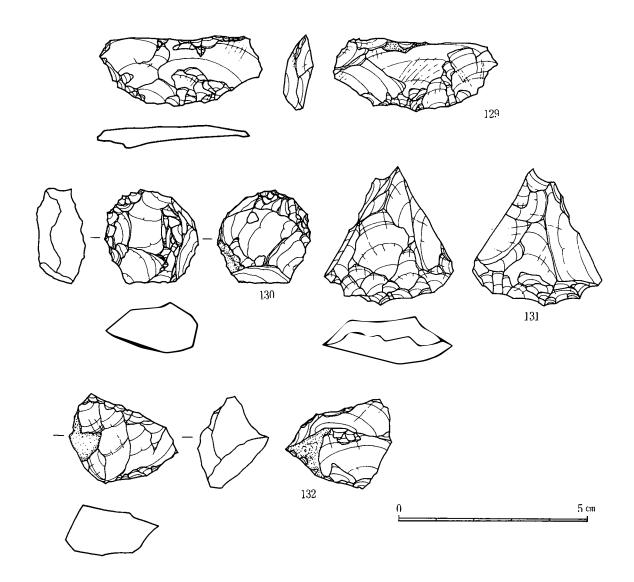
二次加工のある不定形石器 (第45図189~195)

二次加工のある不定形石器は、34点出土した。ここでは7点を掲載している。すべて黒曜石製である。

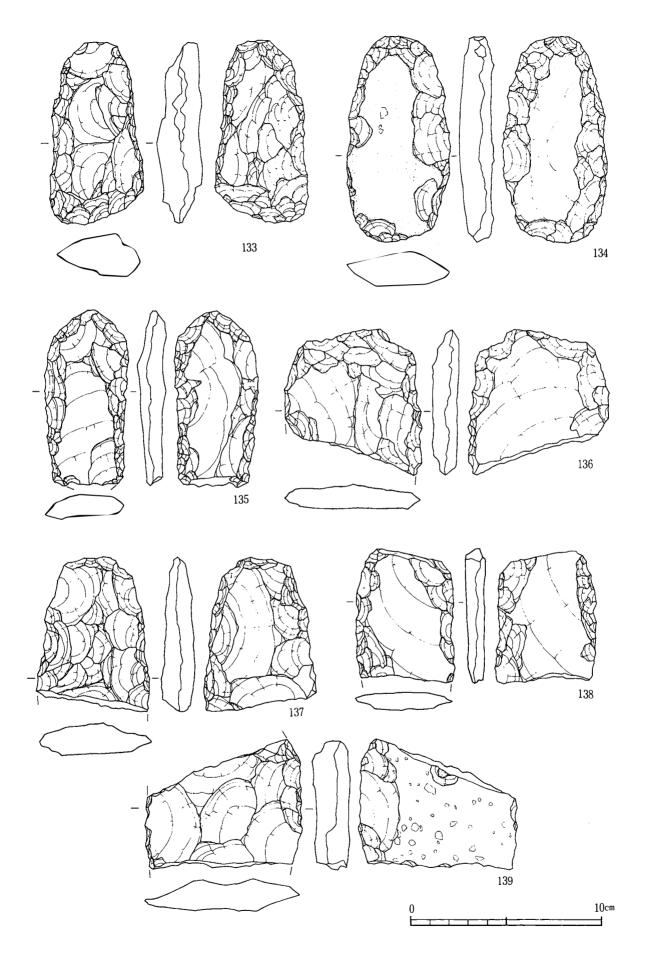
189は剥片の上半部の両側縁に調整を加えて突出部を作り出しており、石錐の未加工品の可能性がある。また、190、191も同様の加工が行われており、石錐の可能性がある。192は表面に礫面を残す。193は上半部を折損している。194、195は剥片の下半部に調整を加えている。

使用痕のある剥片 (第45図196~第46図202)

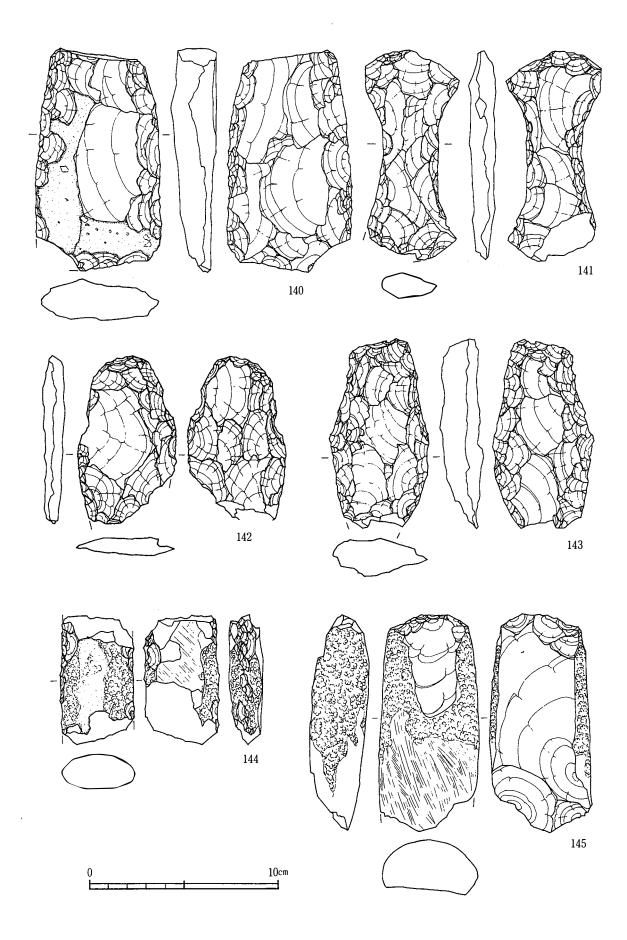
縁辺に刃こぼれ状の使用痕が残る剥片は、全部で35点出土した。ここでは7点を掲載している。両側縁が ほぼ平行している刃器状剥片を使用しているもの(196、198、202)と、それ以外の不定形剥片を使用してい るものの2つに分けることができる。



第35図 I 区出土石器(16)

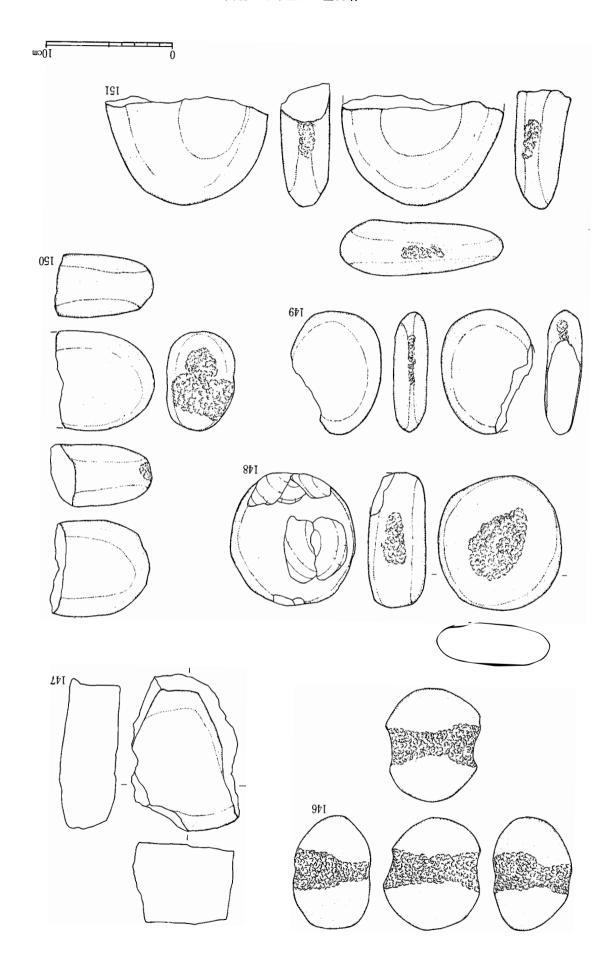


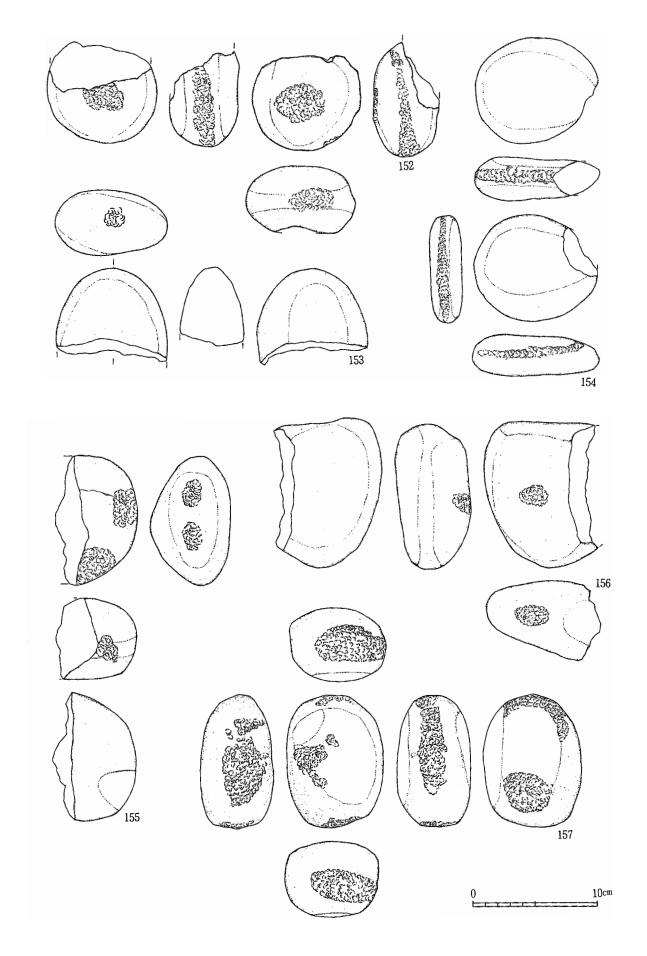
第36図 I区出土石器(17)



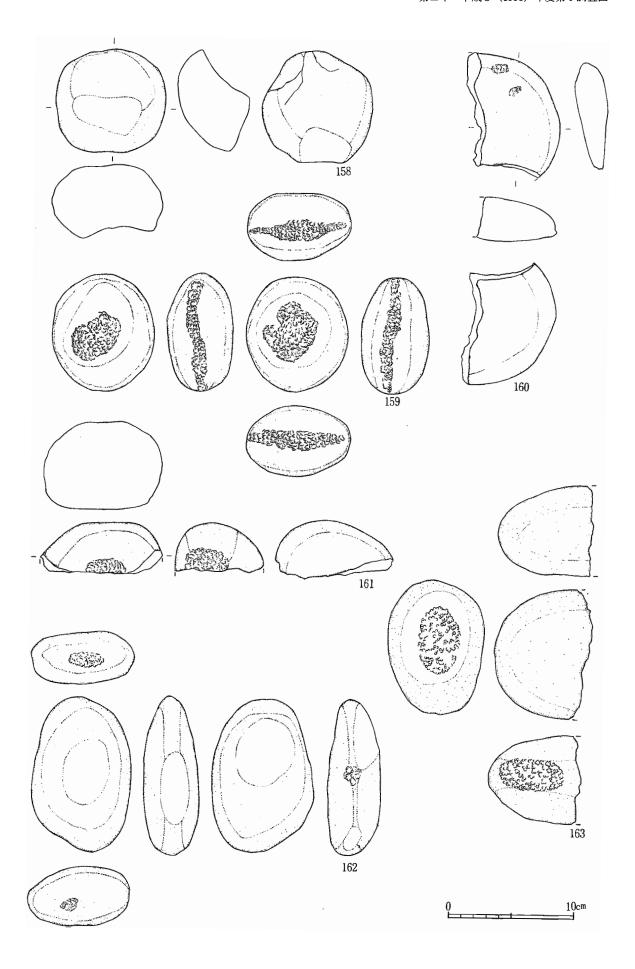
第37図 I区出土石器(18)

第38図 I 区出土石器(19)

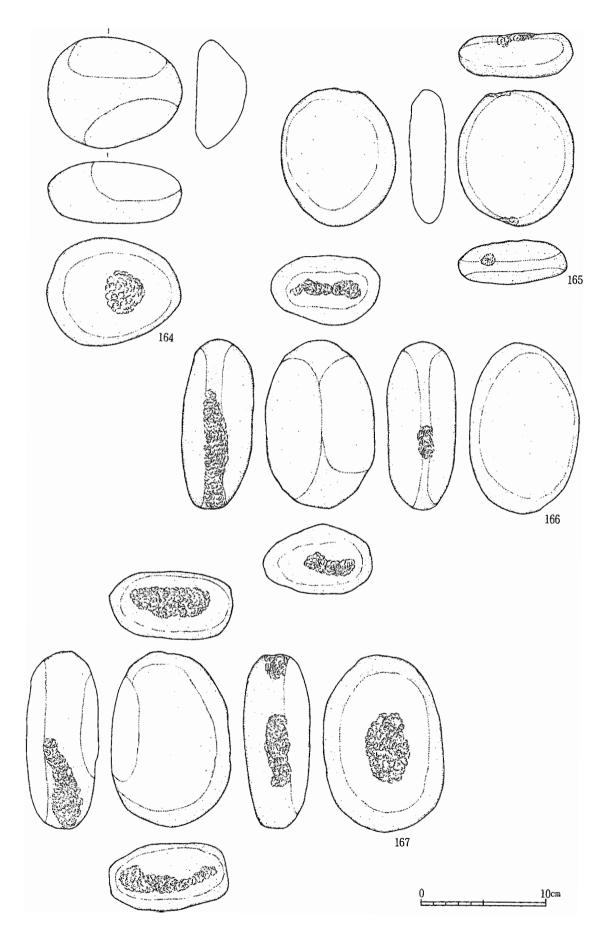




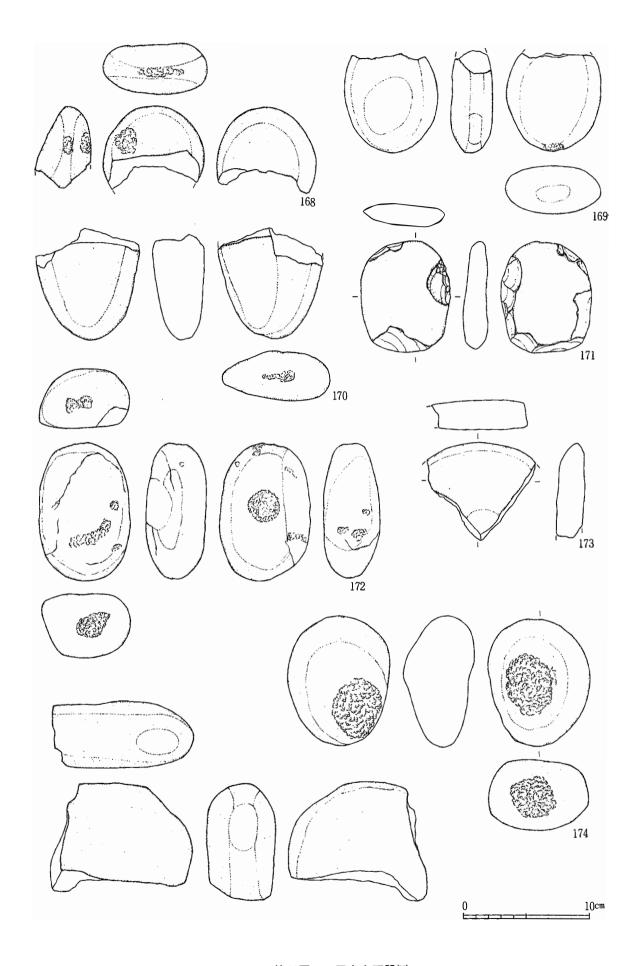
第39図 I区出土石器(20)



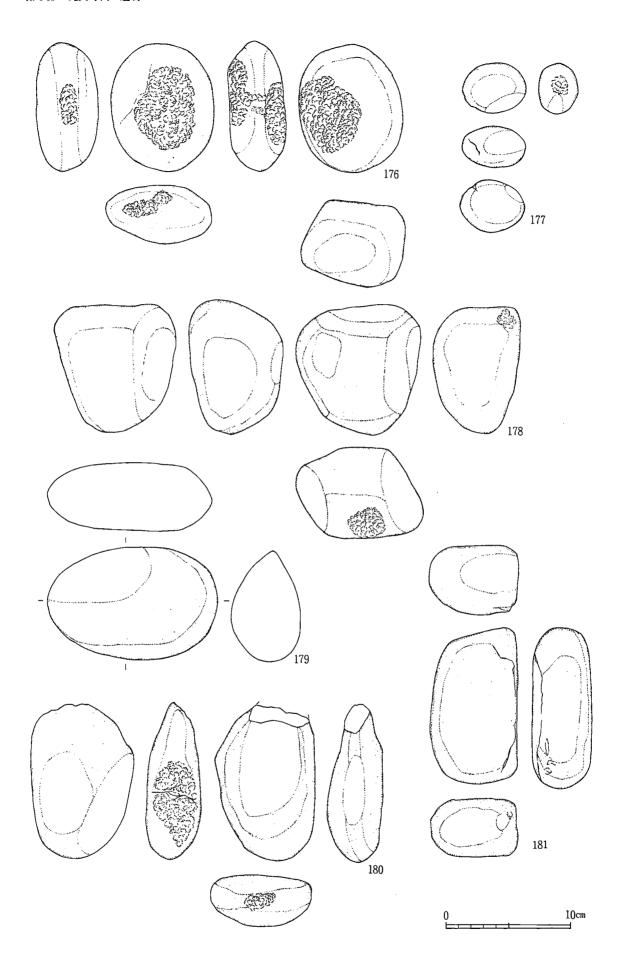
第40図 I区出土石器(21)



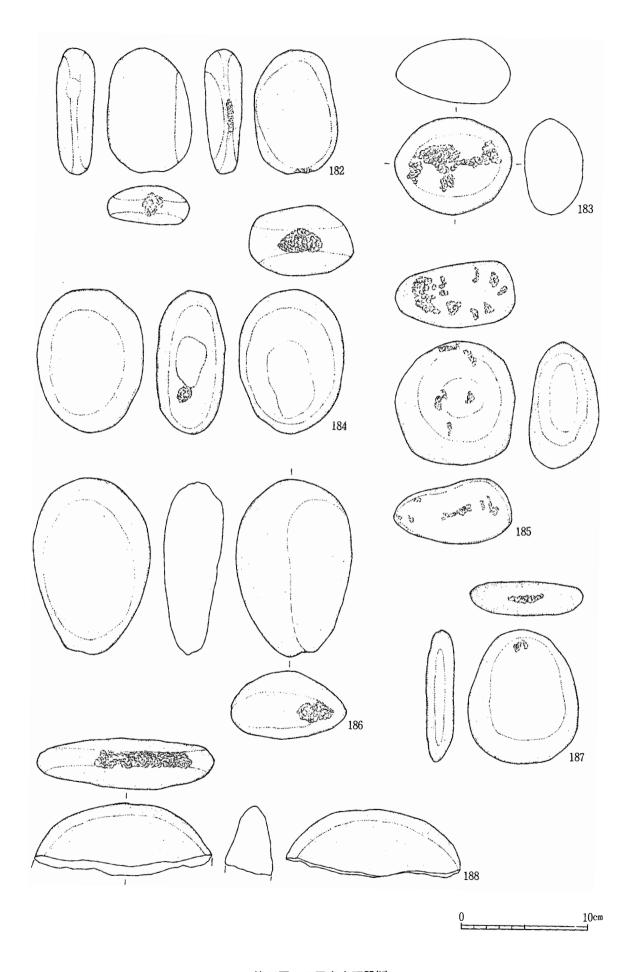
第41図 I区出土石器(22)



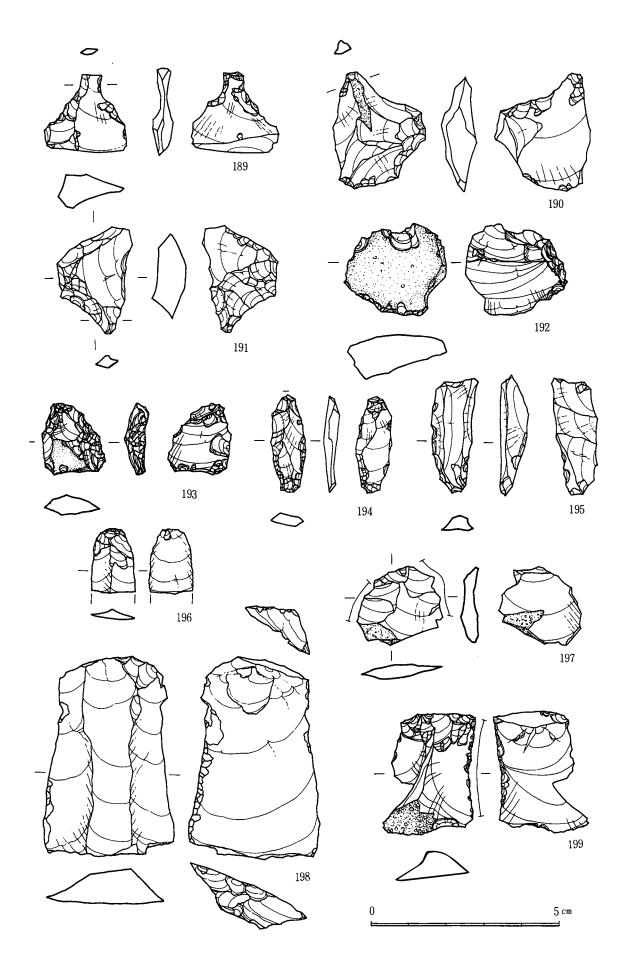
第42図 I区出土石器(23)



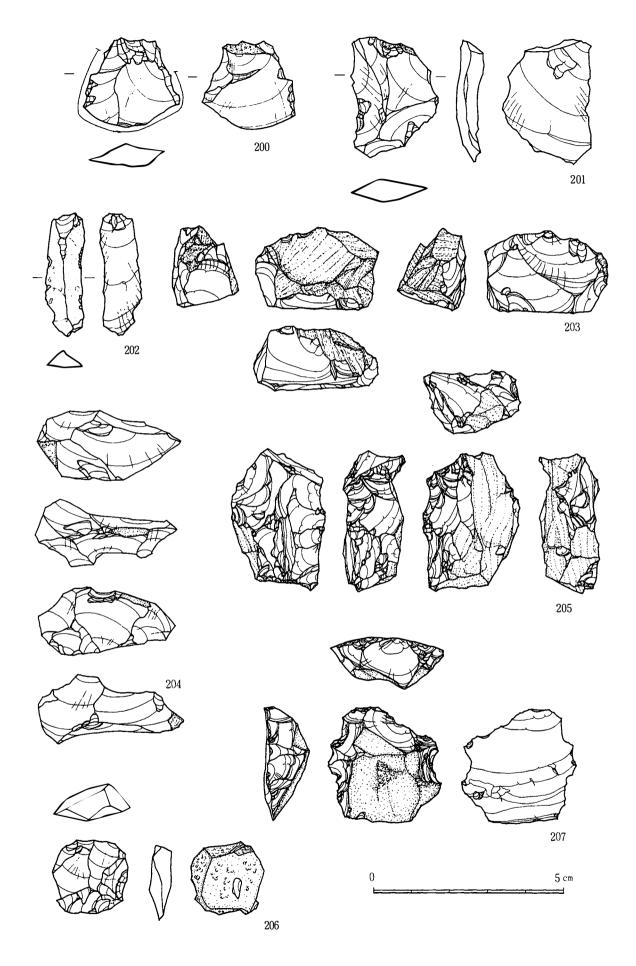
第43図 I区出土石器(24)



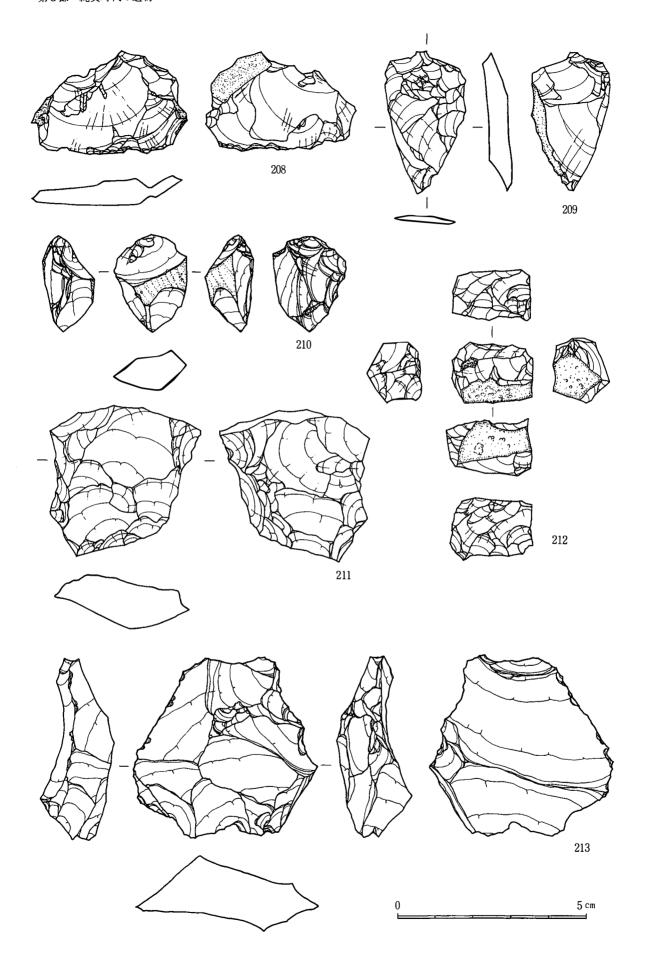
第44図 I区出土石器(25)



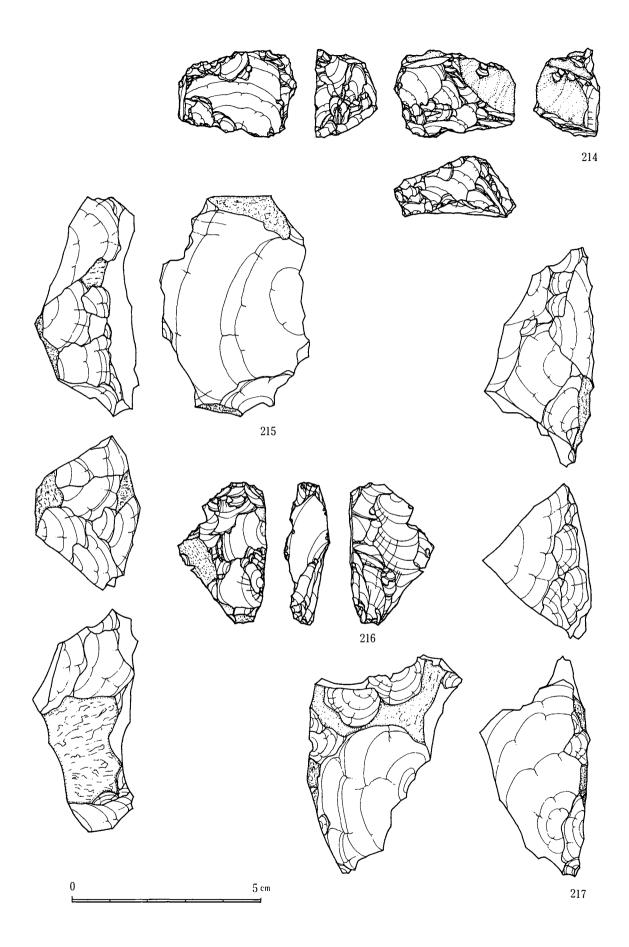
第45図 I区出土石器(26)



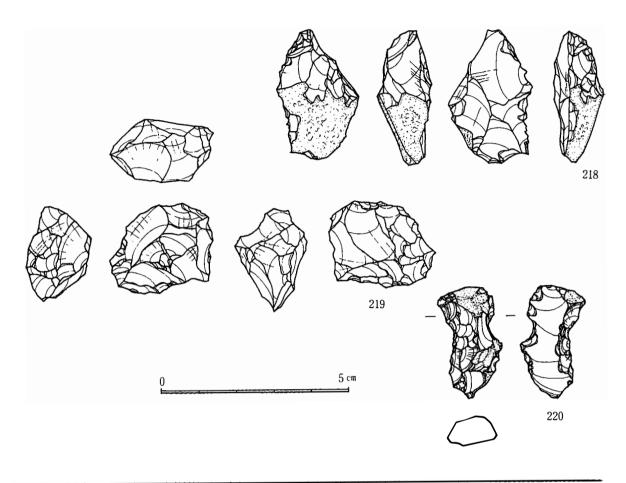
第46図 I区出土石器(27)

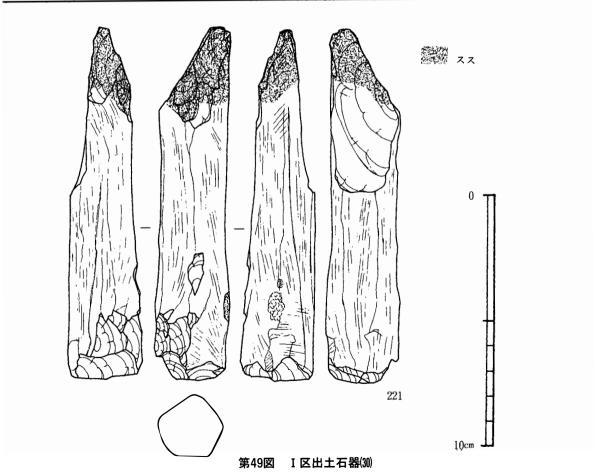


第47図 I区出土石器(28)



第48図 I区出土石器(29)





198はかなり風化したチャートの縦長剥片で、下半部を折損しており、両側縁には刃こぼれ状の使用痕が観察される。

石核 (第46図203~第49図219)

石核は、全部で21点出土した。ここでは17点を掲載している。主に一方向からの剥離痕が残るもの(203、204、207、208、214)と、その他の、多方向からの剥離痕が残るものに分けられる。

211、215、217は安山岩、213はチャートである。

異形石器 (第49図220)

220は両側縁の中央部にくびれをもつ、糸巻形石器とよばれるものである。黒曜石製である。

石棒 (第49図221)

221は砂岩製の石棒である。全体的に研磨されており、先端と、基部の一部を欠損している。また、先端の 折損部にはススが付着している。

第8表 I区出土石器観察表(1)

							_		
図版番号 遺	遺物番号	器 種	石 材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	取上番号
20	1	石鏃	 黒曜石	1.6	1.5	0.5	0.8		5号土坑
20	2	石鏃	安山岩	2.1	2.0	5.5	2.0		E-5一括
20	3	石鏃	安山岩	1.4	1.2	0.4	0.4	右基部欠損	表採
20	4	石鏃	黒曜石	1.4	1.1	0.3	0.3	先端欠損	表採
20	5	石鏃	安山岩	2.1	1.4	0.3	0.9	左基部欠損	G-7一括
20	6	石鏃	チャート	2.9	1.5	0.4	1.5		K-7 23
20	7	石錐	黒曜石	2.0	1.6	0.4	1.0	右縁辺、右側辺欠損	E-4 51
20	8	石鏃	安山岩	2.3	1.5	0.4	2.0		J-6一括
20	9	石鏃	黒曜石	2.2	1.0	0.6	1.1	左基部欠損	I -6 6
20	10	石鏃	黒曜石	2.7	1.5	0.6	2.4		一括
20	11	石鏃	安山岩	1.3	1.3	0.2	0.6	風化、摩耗激しい	K-9一括
20	12	石鏃	安山岩	1.7	1.7	0.4	0.8		I-10一括
20	13	石鏃	チャート	1.9	2.3	0.6	2.3	先端、右基部欠損	一括
20	14	石鏃	黒曜石	1.5	1.3	0.3	0.3	4-10 1-46-4-7-1-10	一括
20	15	石鏃	黒曜石	1.9	1.5	0.5	1.1	先端、右基部欠損	一括
20	16	石鏃	安山岩	1.9	1.6	0.3	0.9	局部磨製	K-7一括
21	17	石鏃	黒曜石	2.5	1.9	0.4	1.1	⊬₩ ++ +	17号土坑
21	18	石鏃	黒曜石	1.2	1.1	0.3	0.3	先端、左基部欠損 	一括
21	19	石鏃	黒曜石	2.9	2.0	0.6	2.3		J-8一括
21	20	石鏃	安山岩	2.2	1.6	0.5	1.3		K-10 23
21	21	石鏃	黒曜石	2.4	1.8	0.5	1.8	→ ₩n ☆n ~ +B	J-7 46
21	22	石鏃	安山岩	2.2	2.0	0.4	1.1	左脚部欠損	J-8一括 E-3 22
21	23	石鏃	安山岩	1.8	1.8	0.3	0.7	先端部欠損	K-6 16
21	24	石鏃	黒曜石	1.7	1	0.4	0.6	右脚部欠損 右脚部欠損	K-0 10 K-7 117
21	25	石鏃	チャート	2.3	1.9	0.5	1.1	↓ 石脚部久損 ┃ 先端、右脚部欠損	D-5 22
21	26	石鏃	黒曜石	1.3	1.5	0.3	0.5	元端、石脚部入損 右脚部欠損	K-6一括
21	27	石鏃	安山岩	2.1	1.3 2.1	0.4	2.7	石脚部入頂 先端、右脚部欠損	J -6 58
21	28	石鏃	安山岩	3.2	1.7	0.5	1.3		J-7一括
22	29	石鏃 石鏃	黒曜石 安山岩	2.7	1	0.3	I	右脚部欠損	一括
22 22	30 31	□ □ 石鏃	安山岩	2.2	2.2	0.2	1.1		│
22	32	□ 班 □ 石鏃	黒曜石	3.1	3.0	0.5	2.7		I -9 11
22	33	石鏃 石鏃	黒曜石	2.4		0.4	1	 先端、右脚部欠損	K-7 308
22		石鏃 石鏃	安山岩	2.0	1	0.4	0.7		K-9 126
22		石鏃	安山岩	2.5	1	0.2	0.8	73.111 13.111	E-5 28
22		石鏃	安山岩	2.1	1	1	1		E-3 一括
22	37	石鏃	黒曜石	2.0	1.4	0.2	0.6	1	J -6 46
22	38	石鏃	チャート	1.8	1.5	0.3	0.7		J-9一括
22	39	石鏃	黒曜石	2.3	1.7	0.5	1.4		K-7一括
22	40	石鏃	チャート	2.3	1.4	0.3	0.9		E-6一括
22	41	石鏃	黒曜石	2.2	1.8	0.4	1.1		K-7 195
23	42	石鏃	安山岩	4.5	2.2	0.6	3.0		E-6一括
23	43	石鏃	安山岩	2.4	1.9	0.3	0.9	右脚部欠損	G-9一括
23	44	石鏃	黒曜石	2.2	1.4	0.4	0.7	左脚部欠損	I -10 39
23	45	石鏃	黒曜石	3.8	2.0	0.5	1.7	l .	J -6 23
23	46	石鏃	チャート	2.0	1.8	0.4	1.5	先端、左脚部欠損	一括
23	47	石鏃	安山岩	2.9	1.4	0.4	1.4	先端、左脚部欠損	F-4攪乱
23	48	石鏃	安山岩	2.7	1.9	0.4	1.5		J-9 8
23	49	石鏃	黒曜石	2.4	1.5	0.3	0.7		I-10一括
23	50	石鏃	安山岩	2.3	1.5	1	0.9	1	K-9一括
23	51	石鏃	黒曜石	2.6	1	1	1.0		F-5 15
23	52	石鏃	黒曜石	2.6	1	1	1.1		K-7 274
24	53	石鏃	黒曜石	3.0	1	1	4.0	1	J-9一括
24	54	石鏃	安山岩	2.9	1	1	2.9		E-4 7
24	55	石鏃	黒曜石	2.1	1	1	0.9	I .	J-10一括
24	56	石鏃	安山岩	3.0	1				10号甕棺墓埋土
24	57	石鏃	黒曜石	2.3	1.2	1.2	0.7	右基部欠損	J-7一括

第9表 I区出土石器観察表(2)

図版番号	遺物番号	器 種	石 材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	取上番号
24	58	石鏃	黒曜石	1.9	1.0	0.3	0.4	左基部欠損	G-5 8
24	59	石鏃	黒曜石	1.9	1.1	0.3	0.5	基部欠損	J-6一括
24	60	石鏃	黒曜石	2.0	1.2	0.4	0.8	基部欠損	J-7一括
24	61	石鏃	チャート	2.1	1.5	0.5	1.3	先端、基部欠損	F-5一括
24	62	石鏃	黒曜石	1.3	1.3	0.2	0.3	基部欠損	F-4一括
24	63	石鏃	安山岩	2.6	1.7	0.5	1.6	先端、左基部欠損	E-4一括
24	64	石鏃	黒曜石	2.5	1.1	0.3	0.7		J -6 72
24	65	石鏃	黒曜石	2.1	1.4	0.4	1.0		一括
24	66	石鏃	黒曜石	2.5	1.9	0.5	2.0	右基部欠損	J-9一括
24	67	石鏃	安山岩	2.2	1.6	0.7	2.4		J-7一括
25	68	石匙	黒曜石	1.3	1.8	0.3	0.5		K-7一括
25	69	石匙	安山岩	2.3	3.2	0.8	3.8	つまみ部欠損	J -10 313
25	70	石匙	安山岩	3.7	5.4	0.9	9.5		I -10 21
25	71	石匙	安山岩	3.1	4.7	0.5	6.0		一括
25	72	石匙	安山岩	3.1	4.4	0.8	12.4		F-5-括
26	73	石匙	安山岩	2.1	4.5	0.7	7.4	両端欠損	J -9 287
26	74	石匙	安山岩	5.1	3.4	1.1	16.8	先端部欠損	J -9 234
26	75	石匙	安山岩	6.8	4.4	1.5	35.4	先端部欠損	J-6一括
27	76	石錐	黒曜石	2.3	2.1	0.4	1.9		K-9一括
27	77	石錐	黒曜石	2.0	2.3	0.7	2.2		J-7一括
27	78	石錐	黒曜石	1.8	1.4	0.5	0.9		K-7一括
27	79	石錐	黒曜石	2.5	1.6	0.5	1.4		E-6 38
27	80	石錐	黒曜石	3.2	1.2	0.2	0.8		K-9一括
27	81	石錐	黒曜石	3.0	2.0	0.4	3.1		D-3一括
27	82	石錐	安山岩	1.8	1.5	0.5	1.0		F-6一括
27	83	削器	黒曜石	4.1	3.2	0.7	11.4		K-10 19
27	84	削器	黒曜石	2.7	3.2	0.4	5.8	·	K-8一括
27	85	削器	黒曜石	2.4	1.8	0.4	1.8		7号土壙墓埋土
28	86	削器	黒曜石	2.8	2.2	0.5	1.8		一括
28	87	削器	黒曜石	2.8	2.8	0.3	3.9		I-6一括
28	88	削器	黒曜石	4.6	2.1	0.6	4.6 4.6		J-9一括 H-8 P-6
28 28	89	削器	黒曜石	3.2 2.1	2.4	0.6 0.7	7.4	 一部欠損	J-10 62
28	90	削器	安山岩 チャート	2.1	3.4	0.7	3.6	一部入損	」-10 62 一括
28	91 92	削器	フャート 黒曜石	2.0	1.9	0.7	1.4		」 J-7一括
28	93	削器	安山岩	5.2	5.7	0.9	21.4		K-9一括
29	94	削器	安山岩	5.6	3.6	1.1	20.6		K-8 100
29	95	削器	安山岩	6.7	4.7	0.8	24.2		E-5 2
29	96	削器	安山岩	5.7	3.4	0.8	14.8	一部欠損	K-7 31
29	97	削器	安山岩	5.2	5.5	1.1	20.4	HL><7K	B-4 1
30	98	削器	安山岩	5.5	3.1	0.8	12.4		一括
30	99	削器	安山岩	5.1	3.0	1.4	24.4	石核転用	J-11一括
30	100	削器	安山岩	5.9	4.7	0.8	16.8		E-4一括
30	101	削器	安山岩	3.9	4.3	0.4	10.6		J-6一括
31	102	削器	安山岩	8.1	3.9	1.5	31.2		J -10 65
31	103	削器	安山岩	5.7	6.0	1.3	37.6		D-5一括
31	104	削器	安山岩	7.4	5.2	9.5	37.0		J -10 149
31	105	削器	安山岩	9.5	5.0	0.7	35.2		K-8一括
31	106	削器	安山岩	5.6	9.4	1.2	62.5		E-5一括
32	107	削器	黒曜石	3.0	2.8	1.8	9.9	石核転用	G-7一括
32	108	削器	黒曜石	2.5	3.5	9.2	5.4		J-6 一括
32	109	削器	チャート	5.7	3.4	1.7	32.4	石核転用	G-7一括
32	110	削器	黒曜石	3.3	2.0	1.4	6.4	石核転用	一括
32	111	抉入石器	黒曜石	2.2	2.3	0.4	2.4		I-10一括
32	112	抉入石器	黒曜石	2.7	2.2	0.5	1.9		H-8一括
33	113	抉入石器	黒曜石	2.8	2.8	0.4	4.9	石錐の可能性	J-8一括
33	114	抉入石器	チャート	3.9	1.5	0.7	3.7		J-7 一括

第10表 I区出土石器観察表(3)

)					
図版番号	遺物番号	器 種	石 材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	取上番号
33	115	抉入石器	黒曜石	4.9	2.6	0.8	10.2		K-6一括
33	116	抉入石器	安山岩	6.2	4.0	1.0	28.6		K-7 161
33	117	楔型石器	黒曜石	1.6	1.7	0.6	3.5		D-5近辺一括
33	118	楔型石器	黒曜石	3.4	1.8	0.8	6.7		J-7一括
33	119	楔型石器	黒曜石	2.6	2.2	0.8	3.7		E-3一括
34	120	模型石器	黒曜石	1.9	2.2	0.8	2.3		K-8一括
34	121	楔型石器	黒曜石	2.2	1.8	1.0	3.7		J-9一括
34	122	楔型石器	黒曜石	3.0	1.6	1.2	5.5		J-8一括
34	123	楔型石器	黒曜石	1.9	1.9	0.4	2.3		K-9 297
34	124	楔型石器	黒曜石	3.3	1.4	0.6	3.3		J-9一括
34	125	楔型石器	黒曜石	3.3	2.2	1.2	8.0		J-7一括
34	126	楔型石器	チャート	2.4	1.6	0.9	4.2		一括
34	127	楔型石器	黒曜石	3.0	2.1	0.4	2.6		E-4一括
34	128	楔型石器	黒曜石	3.0	3.1	1.2	10.4		K-7 275
35	129	模型石器	黒曜石	4.3	1.9	0.5	5.3		K-6一括
35	130	楔型石器	黒曜石	2.5	2.4	1.3	7.1		J-7一括
35	131	楔型石器	頁岩	3.6	3.3	1.2	13.0		J-8一括
35	132	楔型石器	黒曜石	2.1	2.7	1.2	4.4		K-9一括
36	133	打製石斧	砂岩	9.5	4.9	2.2	121.1		K-8一括
36	134	打製石斧	砂岩	10.8	5.5	1.8	127.7		16号土坑 10
36	135	打製石斧	砂岩	9.1	4.4	1.3	74.5	先端部欠損	1号甕棺墓埋土
36	136	打製石斧	砂岩	7.5	7.2	1.3	98.5	下半部欠損	I -10一括
36	137	打製石斧	砂岩	8.0	5.9	1.7	101.5	下半部欠損	K-7一括
36	138	打製石斧	砂岩	6.9	5.1	1.0	51.0	下半部欠損	K-7一括
36	139	打製石斧	玄武岩	6.8	8.2	2.0	118.5	両端欠損	J -9 98
37	140	打製石斧	安山岩	11.6	6.6	2.3	207.7	両端欠損	J -6 71
37	141	打製石斧	砂岩	10.9	4.9	1.4	81.5	先端の一部欠損	一括
37	142	打製石斧	頁岩	8.8	5.2	1.2	62.0	先端部欠損	J -9 241
37	143	打製石斧	安山岩	9.8	5.2	2.0	113.2	先端部欠損	E-5 51
37	144	磨製石斧	砂岩	6.7	3.9	1.8	62.5	両端欠損	K-9一括
37	145	磨製石斧	砂岩	21.4	5.3	2.6	250.0	先端部裏面欠損	E-6 7
38	146	石錘	砂岩	8.8	7.7	8.9	510.0		K-7 278
38	147	石皿	砂岩	12.3	13.5	6.4	830.0		J-7一括
38	148	磨石 敲石	砂岩	10.7	9.9	3.6	760.0		J -9 216
38	149		砂岩	9.8	7.2	2.0	250.0		H-9 144
38	150	l .		7.2					J -10 222
38	151	磨石 敲石	砂岩	8.7	12.9	4.4	620.0		I -10 97
39	152	磨石 敲石	砂岩	7.7	8.8	5.3	430.0	スス付着	J-7 15
39	153	磨石 敲石	砂岩	7.4	8.9	5.2	390.0		J-11 1
39	154	磨石 敲石	砂岩	9.9	8.4	2.7	390.0		H-7 10
39	155	磨石 敲石	砂岩	6.5	10.3	6.3	480.0		16号土坑 12
39	156	磨石敲石	砂岩	11.5	9.0	6.3	850.0		F-3 14
39	157	磨石 敲石	砂岩	10.6	7.9	6.1	740.0		J -10 259
40	158	磨石 敲石	砂岩	8.2	8.8	5.9	650.0		J -9 97
40	159	磨石 敲石	砂岩	9.2	8.4	5.5	550.0		I -10 67
40	160	磨石 敲石	砂岩	7.5	10.0	2.6	430.0	/ 1 3/5	K-9 129
40	161	磨石 敲石	砂岩	4.2	9.7	6.9	350.0	スス付着	K-9 83
40	162	磨石 敲石	砂岩	12.3	7.7	4.1	610.0		J -9 12
40	163	磨石 敲石	砂岩	6.6	10.3	7.7	660.0		K-6 53
41	164	磨石 敲石	砂岩	10.7	8.9	4.1	580.0		K-6 44
41	165	磨石 敲石	砂岩	10.8	9.1	3.4	520.0	赤変	J-10 176
41	166	磨石 敲石	砂岩	13.2	8.8	5.5	910.0		K-7 233
41	167	磨石 敲石	砂岩	13.7	9.4	5.5	1220.0		I -10 6
42	168	磨石 敲石	砂岩	8.2	5.9	4.0	250.0		I -10 94
42	169	磨石 敲石	砂岩	7.7	7.5	3.7	310.0		I -9 52
42	170	磨石 敲石	砂岩	8.9	8.5	4.1	325.0		J-10 158
42	171	磨石 敲石	砂岩	8.7	7.1	1.9	190.0		I-9 43

第11表 I区出土石器観察表(4)

図版番号 42	遺物番号	器種	石 材	長さ(cm)	恒()	同 ナ /\	舌ャ(~)	備考	取上番号
42			1	DC (CIII)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	1/H 1/5	<u> </u>
	172	磨石 敲石	砂岩	11.2	7.4	5.1	550.0		I -9 50
42	173	磨石 敲石	砂岩	7.8	8.7	2.5	250.0		K-6 68
42	174	磨石 敲石	砂岩	10.1	8.1	5.6	550.0		J-10 1
42	175	磨石 敲石	砂岩	7.8	11.1	5.3	720.0	/-	K-10 25
43	176	磨石敲石	砂岩	10.1	8.3	4.6	540.0	スス付着	K-8 19
43	177	磨石敲石	砂岩	5.1	4.0	3.2	80.0	+ 1/5	K-6 48 H-7 5
43	178	磨石 敲石	砂岩	10.1	9.7	7.3	970.0	赤変 	K-6 87
43	179	磨石 敲石 磨石 敲石	砂岩砂岩	13.6	8.9 8.1	5.7 4.1	940.0 580.0		K-0 87
43 43	180 181	磨石 敲石	砂岩 砂岩	12.4	6.9	5.6	720.0		J -7 116
43	182	磨石 敲石	砂石 砂岩	9.9	6.8	3.2	300.0		K-9 151
44	183	磨石 敲石	砂岩	9.4	5.1	4.6	430.0	 赤変	K-8 227
44	184	磨石 敲石	砂岩	11.4	8.5	6.4	760.0	31-2	K-7 232
44	185	磨石敲石	砂岩	9.9	9.7	5.2	750.0		K-9 132
44	186	磨石敲石	砂岩	10.4	9.5	5.5	900.0		H-7 4
44	187	磨石 敲石	砂岩	10.7	8.7	3.0	490,0		J -10 282
44	188	磨石 敲石	砂岩	5.8	15.2	4.1	320.0		J -9 281
45	189	二次加工	黒曜石	2.5	2.2	0.4	1.6	石錐の可能性	K-7 278
45	190	二次加工	黒曜石	2.4	3.0	0.8	5.4	石錐の可能性	I-6一括
45	191	二次加工	黒曜石	2.0	2.8	0.9	3.0	石錐の可能性	J-7一括
45	192	二次加工	黒曜石	2.4	2.7	1.0	5.1		F-6 59
45	193	二次加工	黒曜石	2.0	1.5	0.5	1.5		G-4一括
45	194	二次加工	黒曜石	3.0	0.9	0.4	0.7		I -7 18
45	195	二次加工	黒曜石	3.0	1.2	0.5	2.6		F-6 P-3
45	196	使用痕	黒曜石	1.7	1.1	0.4	0.7		K-6 67
45	197	使用痕	黒曜石	2.1	2.3	0.4	1.7		E-4 23
45	198	使用痕	チャート	5.3	3.5	1.0	22.0		H-4 P-1
45	199	使用痕	黒曜石	3.2	2.3	0.8	4.2 3.2		K-7 291 K-10 22
46 46	200 201	使用痕 使用痕	黒曜石	2.3	2.6 2.3	0.6 0.6	3.4		17号土坑
46	201	使用痕	黒曜石	3.1	0.9	0.5	1.2		K-10一括
46	203	石核	黒曜石	2.1	3.2	1.6	11.4		J-7一括
46	204	石核	黒曜石	3.6	1.8	2.0	7.2		I-10一括
46	205	石核	黒曜石	3.4	2.4	1.6	12.6		J-8一括
46	206	石核	黒曜石	1.9	2.0	0.7	2.9		J-8一括
46	1	石核	黒曜石	2.9	2.9	1.2	7.5		K-10 43
47	208	石核	黒曜石	2.9	4.1	0.8	8.2		E-4一括
47	209	石核	黒曜石	3.8	2.2	0.4	5.8		K-6 P-3
47	210	石核	黒曜石	2.5	1.9	1.2	4.4		E-5 60
47	211	石核	安山岩	4.9	6.0	1.7	70.0		J-10 一括
47	212	石核	黒曜石	2.1	1.6	0.9	4.9		K-8 99
47	213	石核	チャート	4.6	4.8	1.7	31.0		J-10一括
48	214	石核	黒曜石	2.3	3.2	1.6	10.6		G-6近辺一括
48	215	石核	安山岩	3.8	5.7	2.5	52.0		J-10 243
48	216	石核	黒曜石	3.7	2.3	1.0	6.8		J-7一括
48	217	石核	安山岩	4.9	3.2	2.8	37.4		K-9 P-6 I-9一括
49 49	218 219		黒曜石	3.6	2.1 2.7	1.2 1.4	6.3 8.0		J-11一括
49	219	日100 異形石器	黒曜石	2.4	1.5	0.7	2.6	· · 糸巻形	F-6近辺一括
49	220	石棒	砂岩	13.8	2.9	2.9	135.0	│スス付着	K-9 61

第4節 弥生時代の遺構と遺物

I 区の弥生時代に関係する遺構としては、住居跡が1基、甕棺墓が12基、土壙墓が9基確認されている。 また、包含層からは、弥生中期を中心とする土器が多数出土し、磨製石鏃、石剣、石包丁などの石器、紡錘車、ガラス玉等の遺物も出土した。

遺構、遺物の詳しい内容については以下のとおりである。

1. 竪穴住居跡

I 区から確認された竪穴住居跡は、以下に述べる1基のみである。

1号住居跡 (第50図)

G-6、G-7 区に位置する。遺構確認面から床面まで非常に浅く、南側の壁は検出することができなかった。形状は長軸が約550cm、短軸が440cm以上の方形で、長軸の方向は $N-71^\circ$ -E である。床には硬化面が広がり、柱穴と思われる穴が4つある。また、南側の壁に近いと考えられる部分には、大きめの土坑があり、貯蔵穴ではないかと考えられる。壁際には壁の補強の跡と思われる小坑がめぐる。埋土からは遺物は検出されなかったが、住居跡の形態や周辺の遺物などから弥生時代のものであると考えられる。

2. 甕棺墓 (第51~63図)

甕棺墓は、全部で12基確認された。内容は、大型棺5基、中型棺4基、小型棺3基である。大型棺からはいずれも人骨が発見され、特に8号、9号、10号の3基は良好な保存状態であった。埋土はいずれも黒褐色土でローム及びニガシロのブロックを含む。

詳しい内容については、以下のとおりである。また、個別の土器の計測値および観察結果については、「出 土甕棺観察表」(第12表) にまとめている。

1号甕棺墓(第51、57図)

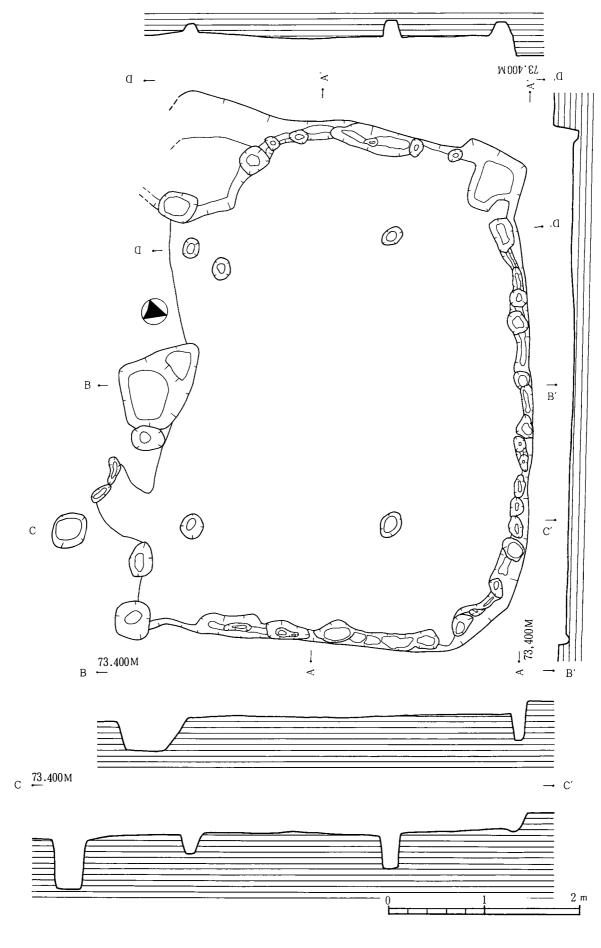
1号甕棺墓は大型の合口甕棺で、C-5区、D-5区の境付近で確認された。埋設軸はS-54°-Eで、埋納角度は水平面に対し約46°である。削平によって上部を削られ、下棺の下半部しか残存していなかったが、上棺及び下棺の残りの部分は中に落ち込んでおり、ほほ復元することができた。内部はほとんど土が詰まっている状態であったが、人骨の一部が出土した。人骨はほとんどが細片で、大変もろく、部位等は判別できなかった。

上棺は須玖式の鉢形土器である。平底で、わずかに内傾したT字状口縁を持つ。口縁直下に最大径を持ち、そのわずか下に1条の突帯をめぐらす。下棺も須玖式の甕型土器である。平底で、ほぼ平坦なT字状口縁を持つ。突帯は口縁下に1条、胴部中央よりやや下に2条ある。最大径は胴部中央よりやや上にある。また、外面のほぼ全面にわたってハケ目が施されている。

2号甕棺墓(第51、58図)

2 号甕棺墓はE-3 区で確認された。小型の甕型土器で、ほぼ完形である。上部は削平を受けているが、周辺に上棺の破片らしきものはなく、単棺であると思われる。埋設軸は $S-54^\circ-W$ で、埋納角度は約 62° である。

甕の形式は、いわゆる黒髪式で、大きくしゃくれて内傾し、内側に張り出しを持ったT字状口縁と、脚台 状の底部を持つ。口縁直下に1条の突帯をめぐらし、胴部上半に最大径を持つ。胴部上半から下の部分にハ



第50図 I区1号住居跡実測図

ケ目が残されている。

3号甕棺墓(第51、58図)

3号甕棺墓はF-4区で確認された。石蓋がされた単棺の小型壺型土器である。埋設軸は $S-47^{\circ}-E$ 、納角は約 43° である。墓壙の一部はゴボウ穴によって破壊され、壺の底部も壊されている。壺内部への土の流入は比較的少なかったが、遺物等は発見されなかった。

壺は黒髪式の広口壺である。レンズ状の底部で、最大径は胴部上半にあり、その部分と頸部にそれぞれ1 条の突帯を持つ。特に、胴部の突帯には刻目がある。外面全体と口縁部の内面にハケ目調整が行われているが、胴部上半はナデ消されている。

4号甕棺墓(第51、59図)

4号甕棺墓はF-4区で確認された。単棺で中型の甕型土器である。埋設軸はS-71°-Wで、埋納角は約22°である。北側は3号土壙(木棺)墓と切り合っているが、埋土の状況から4号甕棺墓が新しいものと思われる。墓壙の上半は削平を受け、甕の口縁部はゴボウ穴によって破壊されている。

甕の胴部は卵状で、大きくしゃくれて内傾したT字状口縁と、レンズ状の底部を持つ。胴部上半に最大径を持ち、そのやや上に1条、口縁下に1条の突帯を持つ。

5号甕棺墓(第52、59図)

5号甕棺墓はD-5区で確認された。単棺で中型の甕型土器である。埋設軸は $N-78^{\circ}-E$ 、埋納角は約35°である。墓壙の上半は削平を受けている。

甕は平底で、内傾した逆L字状の口縁を持つ。胴部は卵状で、上半に最大径を持ち、その部分に1条の突帯をめぐらせている。突帯の一部には刻目がある。

6号甕棺墓(第52、59図)

6号甕棺墓はE-4区で確認された。削平により、墓壙の大部分と、甕の4分の3近くか破壊されているが、単棺であると思われる。中型の甕型土器で、埋設軸は $N-45^{\circ}-E$ 、埋納角は 19° である。

甕は胴部中央に最大径があり、内傾したT字状口縁を持つ。最大径の部分に突帯1条を持つ。

7号甕棺墓(第52、60図)

7号甕棺墓はD-4、E-4区の境で確認された。一辺約135cmの方形の墓壙の一角を斜めに掘り込み、大型の合口甕棺を約39°の角度で埋納している。埋設軸はN-87°-Wである。また、甕棺を埋設した部分の反対側の一角に、横方向に掘られた小さな掘り込みがある。上棺と下棺の合口部には粘土で目張りが行われているが、土圧により全体にひびが入り、上棺の一部が壊れていた。下棺には多量の土が流れ込んでいたが、内部より頭蓋骨の一部と思われる人骨片が出土した。

上棺は須玖式の鉢型土器で、底部から口縁部に向かって直線状に大きく開く胴部を持つ。口縁は外傾する T字状である。また、底部は平底であるが、やや上げ底気味になっている。底部近くの外面にハケ目調整が 行われている。下棺は、須玖式の甕型土器である。最大径は胴部上半で、そこから口縁に向かってわずかに 内傾する。口縁は外傾するT字状である。突帯は胴部中央やや上に2条、口縁下に1条ある。

8号甕棺墓(第53、61図)

8号甕棺墓はE-4区で確認された。大型の合口甕棺で、長軸約155cm、短軸約135cmの台形状の墓壙の一辺を斜めに掘り込み、約44°の角度で埋納している。埋設軸はS-67°-Wである。合口部には粘土で目張りがしてある。甕棺は土圧によりひびが入っていたが、土の流入は比較的少なく、内部から保存状態が良好な、ほぼ全身の人骨が出土した。人骨は下棺の底を下にして、膝を曲げた状態で埋葬されており、頭蓋骨は重みで下側に落ちていた。

上棺は黒髪式の甕型土器である。しゃくれて内傾したT字状口縁と上げ底の底部を持つ。最大径は胴部上

半にあり、口縁下に1条の突帯を持つ。内外面ともハケ目調整がされているが、外面は底部を除きナデ消されている。下棺は胴部の張った甕型土器である。平底で、胴部中央に刻目突帯を1条めぐらし、最大径は突帯の上にある。口縁はT字状でややしゃくれて内傾している。内外面ともハケ目調整がなされている。

9号甕棺墓 (第54、62図)

9号甕棺墓も大型の合口甕棺で、E-4区で確認された。一辺約150cmの方形の墓壙の一辺を斜めに掘り込み、約25°の角度で埋納している。埋設軸はS-75°-Eである。合口部には粘土で目張りがしてある。甕棺は土圧によりひびが入り、上棺の一部が破壊されていたが、土の流入は比較的少なく、内部から保存状態が良好なほぼ全身の人骨が出土した。人骨は下棺の底を下にして、膝を曲げた状態で埋葬されていたものと考えられる。

上棺は須玖式の鉢形土器である。平底から大きく外反した胴部を持つが、上半はやや内傾する。口縁は外傾したT字型口縁である。内外面全体にわたってナデ調整が行われている。下棺は須玖式の甕型土器である。 最大径は胴部中央にあり、そこから口縁に向かってやや内傾する。口縁はややしゃくれて外傾するT字状口縁である。突帯は胴部中央やや下に2条ある。調整は内外面ともナデ調整である。

10号甕棺墓(第55、63図)

10号甕棺墓もE-4区で確認された大型の合口甕棺である。墓壙は9号土壙墓と切り合っていたが、切り合いの状況から、10号甕棺墓の方が新しいものと思われる。長軸が約190cmの方形と思われ、短辺側の一辺を斜めに掘り込んで甕棺を埋納している。埋設軸はS-78°-W、埋納角度は約29°である。甕棺は合口部に粘土で目張りがしてあるが、土圧により一部が破壊されていた。内部には土が流入していたが、下半身部分の人骨が良好な状態で出土した。人骨は下棺の底を下にして、埋葬されていた。

上棺は須玖式の鉢形土器で、平底から口縁に向かって大きく直線状に開く胴部を持つ。口縁は外傾するやや小ぶりのT字状口縁である。器面は内外面全体にわたってナデ調整が行われている。下棺は須玖式の甕型土器で、胴部中央に最大径を持ち、口縁に向かってほほ直立する。口縁はやや外傾するT字状である。突帯は胴部中央やや下に2条ある。全体にわたってナデ調整が行われている。

11号甕棺墓 (第56、58図)

11号甕棺墓は小型の合口甕棺で、D-5区で確認された。墓壙は他の土坑によって切られており、その形態は不明であるが、壁面を斜めに掘り込んで甕棺を埋納している。埋設軸は $S-53^{\circ}-E$ で、埋納角度は約45°である。ほぼ完形の状態で出土したが、内部からは何も出土しなかった。

上棺は脚部を欠いた高杯を転用している。わずかに内傾したT字状口縁で、全体に赤色顔料が塗られている。下棺は黒髪式で広口の壺型土器である。レンズ状の底部で胴部中央に最大径を持ち、それよりやや上の部分と、頸部下にいずれも1条の刻目突帯をめぐらす。胴部の突帯から頸部にかけて直線状に内傾する。胴部上半の外面はヘラミガキ状の調整、胴部下半はハケ目調整が行われている。また、胴部内面は指によるナデ調整が行われている。

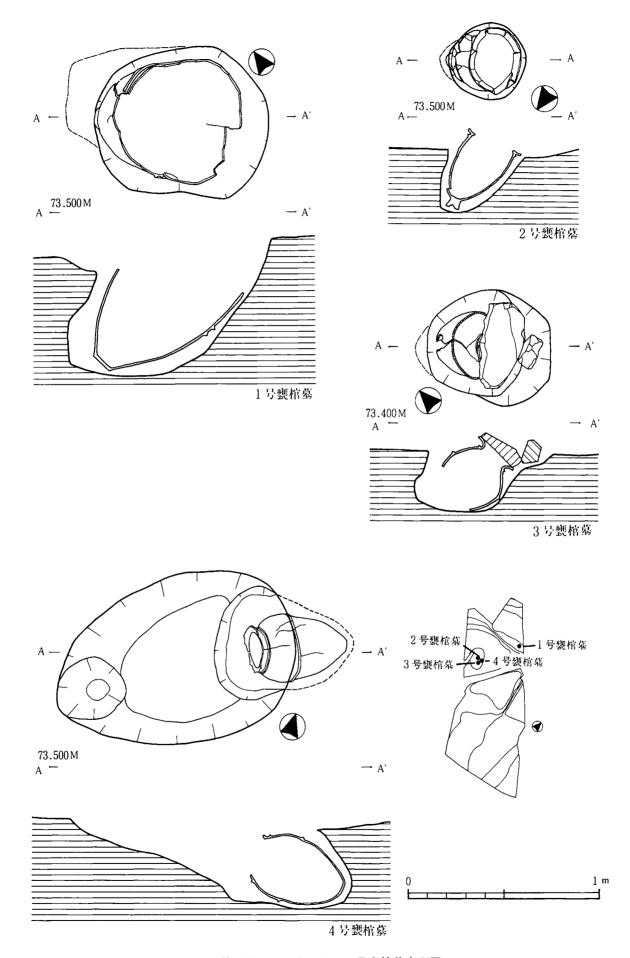
12号甕棺墓 (第56、59図)

12号甕棺墓は中型の甕型土器で、他の甕棺墓から離れたJ-9区で確認された。 180×160 cmの方形の墓壙の一角を斜めに掘り込んで、棺を埋納している。埋設軸は $S-37^{\circ}-W$ 、埋納角は約35 $^{\circ}$ である。棺の口縁近くからは目張り用と思われる粘土が出土しているが、上棺の破片らしきものがないことから、木の蓋がされた単棺であると考えられる。

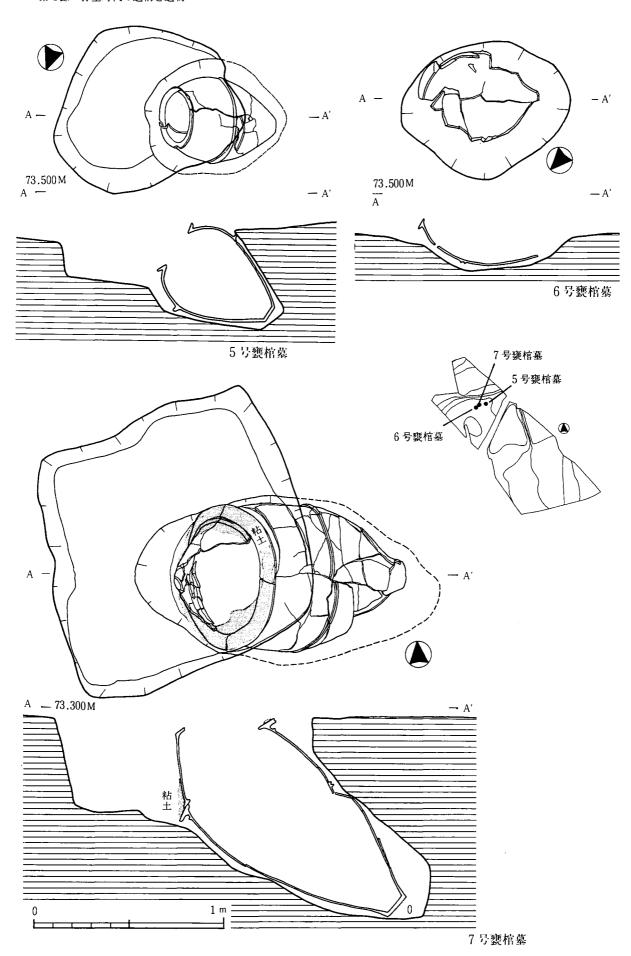
甕は胴部の張った形をしており、上半に最大径があり、その部分に2条の突帯を持つ。口縁は鋤状で、わずかにしゃくれて外傾し、底部は平底である。

第12表 出土甕棺観察表

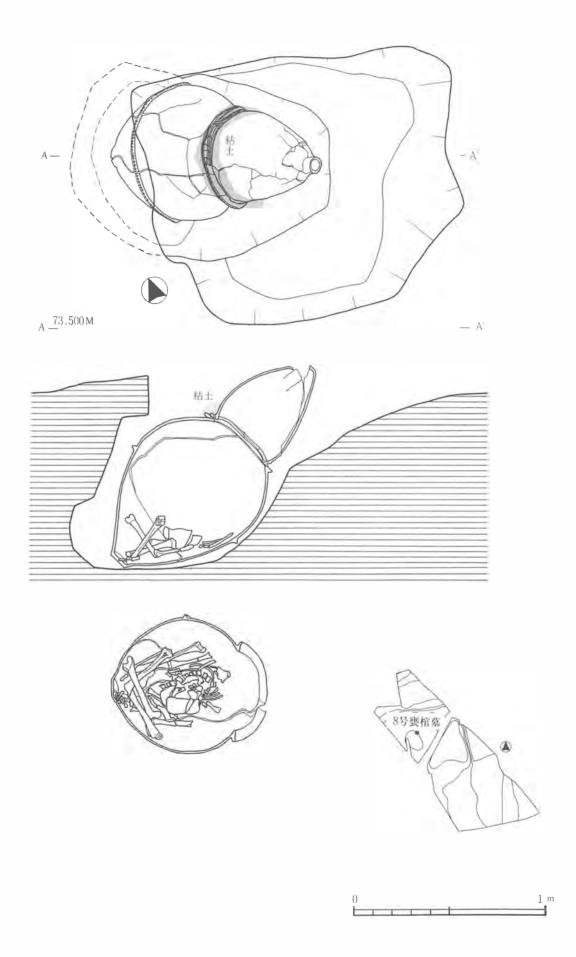
図版番号	遺物番号	口径	底径	高さ	厚さ	調整 (内) **	調整 (外)	色調(内)	色調(外)	胎生	焼成	
					-		, , ,					, , , , , , , , , , , , , , , , , , ,
65	1 号甕棺(上)	62.8	13	39		ナデ	ナデ	橙	浅黄橙	細砂粒を少量含	良好	
65	"(下)	59.5	13.2	102.8		ナデ、口縁ヨコナデ	縦ハケ、口縁下ナデ	浅黄橙	浅黄橙	細砂粒	良好	
63	2号甕棺	32	8.8	2.3		ナデ	ナデ消し、ハケ目、ナデ	にぶ黄橙	浅黄橙	砂粒を多く含む	良好	外面にスス付着
63	3号甕棺	23.3	8.1	1.7		ナデ、ハケ、ナデ	ナデ、ハケ	にぶ黄橙	にぶ橙	砂粒、小石	良好	外面にスス、黒斑、赤色 顔料の飛沫痕
64	4号甕棺	26	6.9	52.6		ョコナデ	ナデ	灰黄褐	にぶ黄橙	細砂粒	良好	一部スス付着
64	5号甕棺	30.2	10.4	65.2		ナデ	ナデ	黄橙	にぶ黄橙	砂粒	良好	中央部にスス付着
64	6号甕棺	37.8		62		ナデ	ナデ	橙	にぶ橙	砂粒	良好	外面にスス付着
66	7号甕棺(上)	60.9	12.4	31.7		ナデ	ナデ、ハケ目	明褐	橙	砂粒	良好底	辺部に黒斑
66	7 号甕棺(下)	74	15	119.8		ナデ	ナデ	赤褐	橙	細砂粒を多く含	良好	
67	8号甕棺(上)	45	8.8	60.4		ナデ、ハケ目	縦ハケ、ナデ	にぶ橙	灰褐	砂粒、小石	良好	底部ハケ、一部スス
67	8号甕棺(下)	51.6	10.4	90.6		縦ハケ	ヨコナデ、縦ハケ	明黄褐	にぶ橙	細砂粒	良好	突帯下に設計沈線
68	9号甕棺(上)	59.6	11.2	35.6		ナデ	ナデ	橙	橙	細砂粒	良好	
68	9 号甕棺(下)	72.1	14	116.6		ナデ	ナデ	赤褐	橙	細砂粒	良好	
69	10号甕棺(上)	67.7	9.8	31.4		ナデ	ナデ	淡黄橙	橙	砂粒	良好	
69	10号甕棺(下)	74.6	13.4	126.1		ナデ	ナデ	赤褐	橙	砂粒	良好	
63	11号甕棺(上)	26.2		8.5		ナデ	ョコナデ	朱塗	朱塗	砂粒をかなり	良好	脚部を欠いた高坏を使用
63	11号甕棺(下)	18.9	26.3	30.5		指によるナデ	ヨコナデ、縦ヘラミ	褐灰	にぶ黄橙	細砂粒	良好	外面にスス付着
64	12号甕棺	40.8	11.8	76		ヨコナデ	ヨコナデ	浅黄橙	にぶ橙	砂粒	良好	外面に黒斑
93	岩倉山 (上)	57.4	11	38.2		ナデ	ハケ目	にぶ赤褐	浅黄橙	砂粒	良好	
93	岩倉山 (下)	62	11	105.2		ナデ	縦ハケ、ナデ消し	黄褐	浅黄橙	細砂粒	良好	



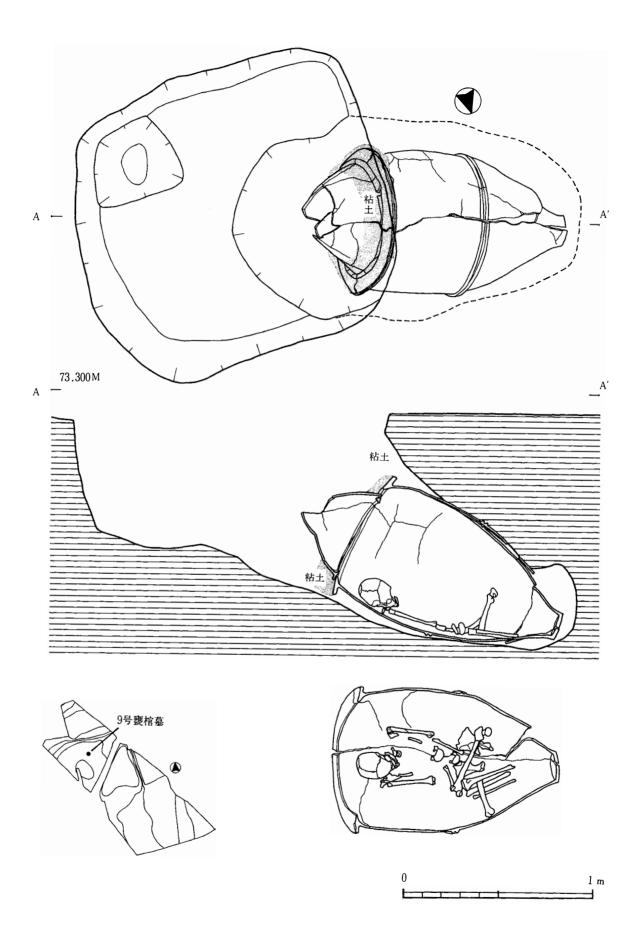
第51図 1、2、3、4号甕棺墓実測図



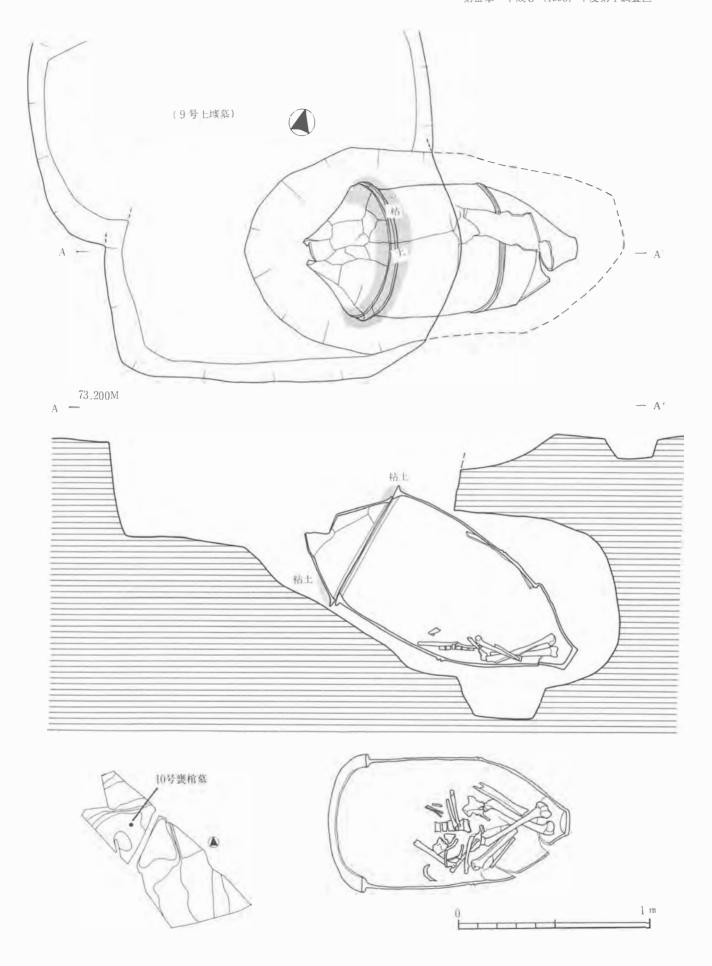
第52図 5、6、7号甕棺墓実測図



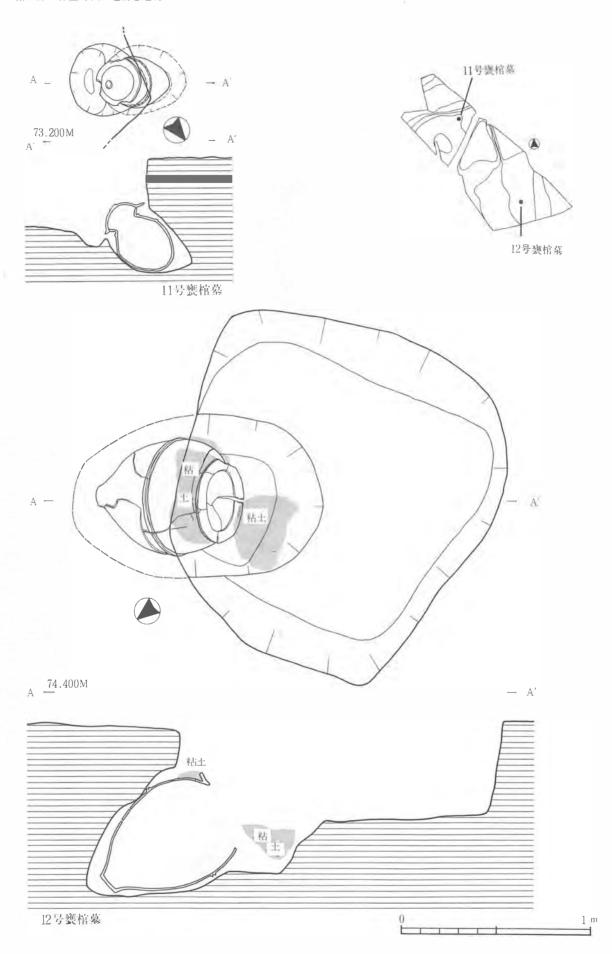
第53図 8号甕棺墓実測図



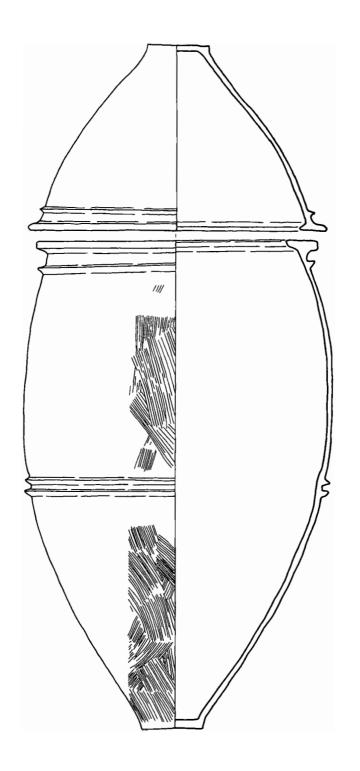
第54図 9号甕棺墓実測図

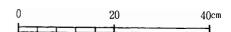


第55図 10号甕棺墓実測図

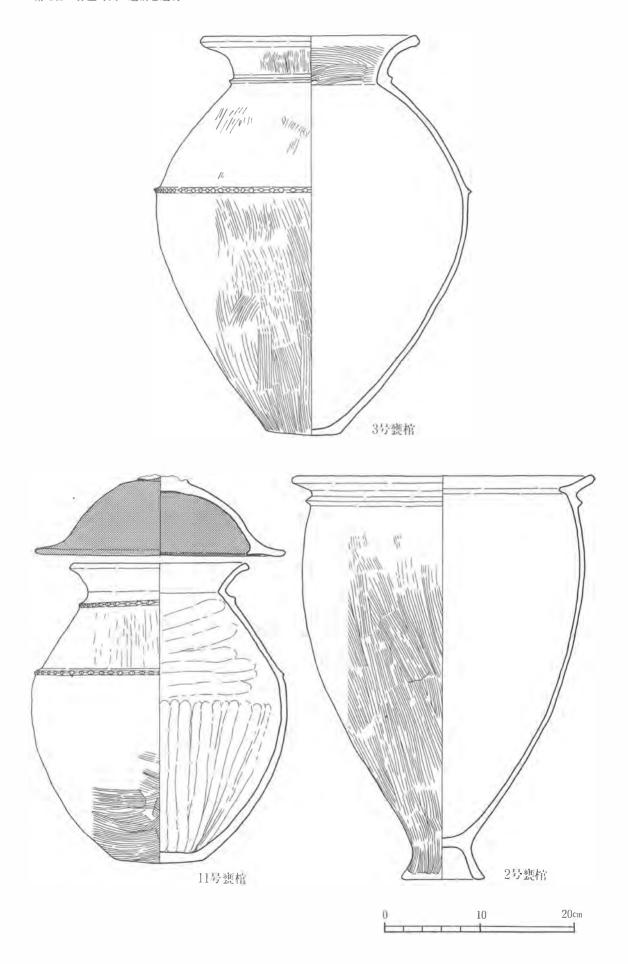


第56図 11、12号甕棺墓実測図

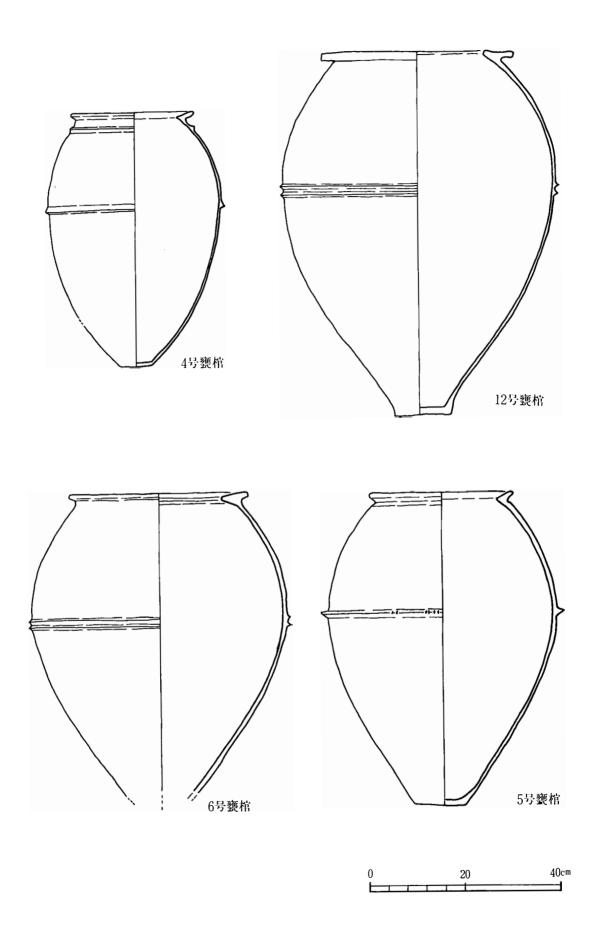




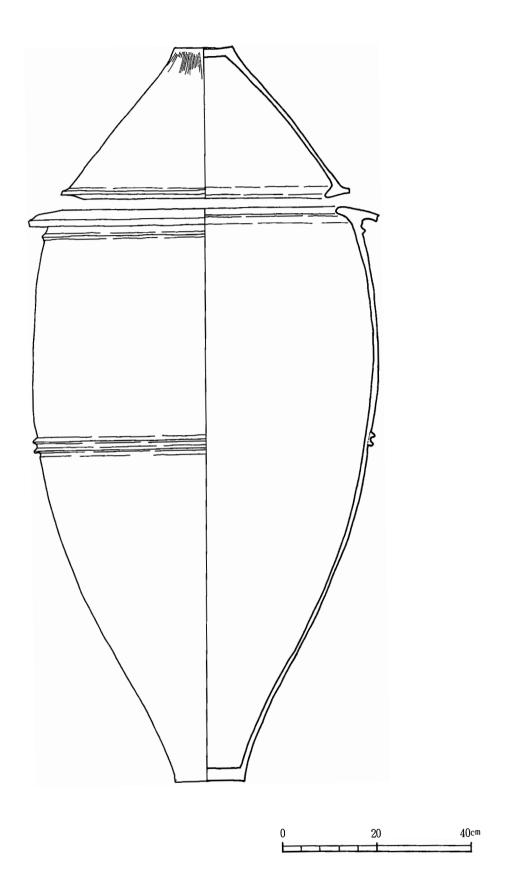
第57図 1号甕棺実測図



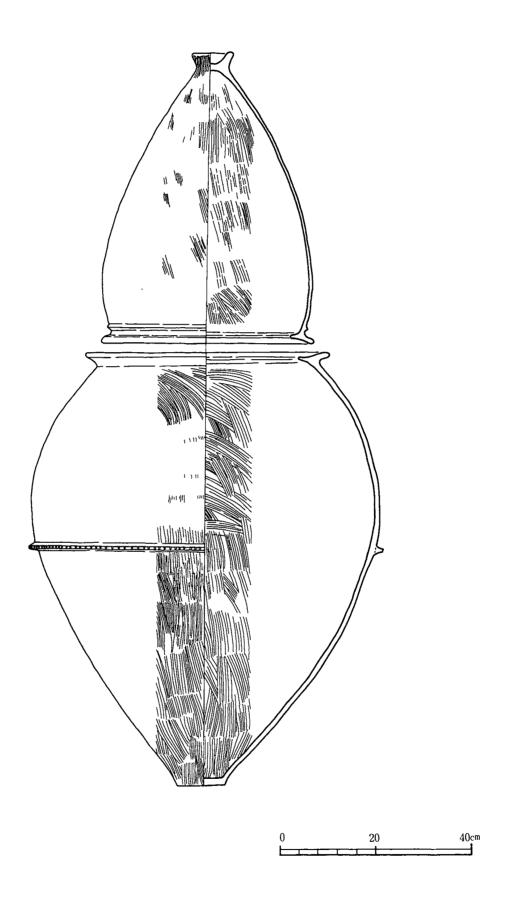
第58図 2、3、11号甕棺実測図



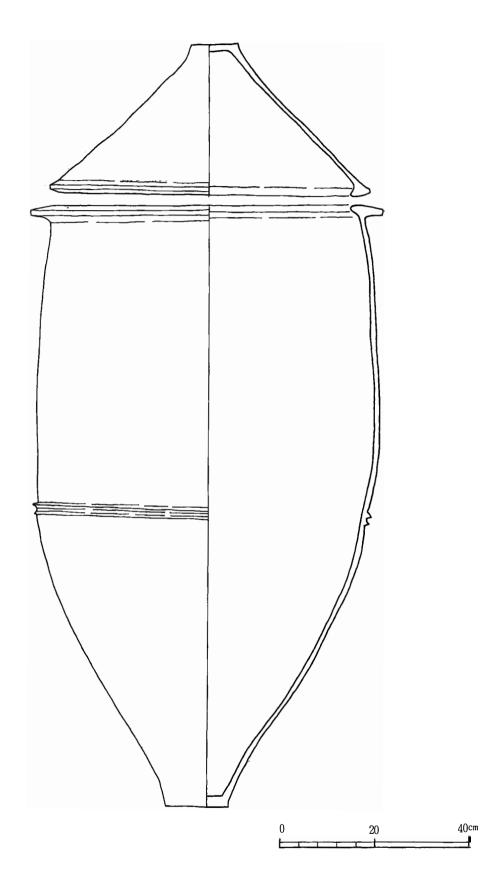
第59図 4、5、6、12号甕棺実測図



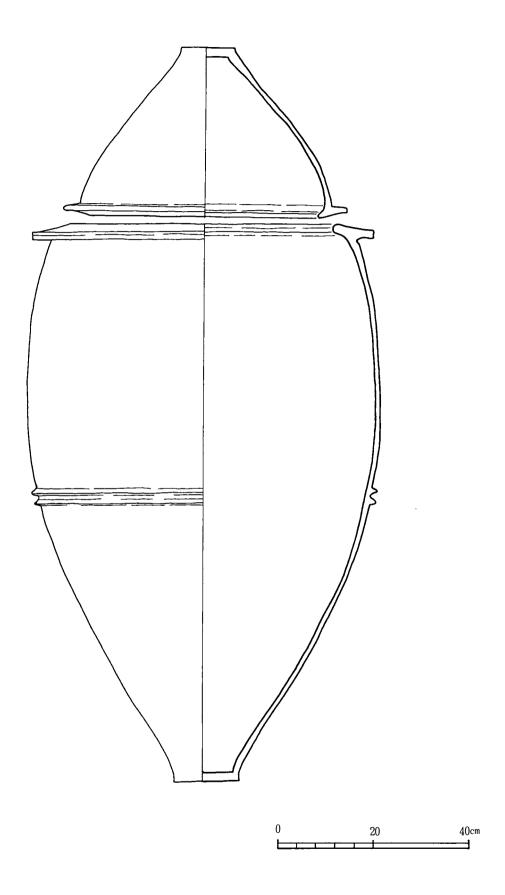
第60図 7号甕棺実測図



第61図 8号甕棺実測図



第62図 9号甕棺実測図



第63図 10号甕棺実測図

3. 土壙 (木棺) 墓 (第64~67図)

I 区からは、甕棺墓と非常に似た埋土を持つ比較的大きな土坑を全部で9基確認することができた。形状から土壙墓または木棺墓と考えられる。また、埋土の状況から、甕棺墓とほぼ同じ時期のものであると考えられる。

詳しい内容については以下のとおりである。

1号土壙(木棺)墓(第64図)

1号土壙(木棺)墓はE-3区で確認された。墓壙の北西側は、トレンチ掘削のため確認できなかったが、長軸195cm、短軸160cmの隅丸方形の土壙を掘り、40cm下がったところで、さらに中央部に長軸130cm、短軸55cmの土壙を約50cm掘り下げた形の二重土壙である。長軸の方位はN-80° -Eである。内部からは遺物等は出土せず、木棺の痕跡も確認できなかった。

2号土壙(木棺)墓(第64図)

2号土壙(木棺)墓もE-3区で確認された。1号土壙(木棺)墓の北にあり、南北に並ぶ形で位置している。墓壙西側の壁はトレンチのため不明である。長軸150cm以上、短軸115cm、深さ25cmの方形の土壙の底部から、さらに長軸125cm以上、短軸75cmの土壙を45cm掘り下げた二重土壙である。小さい方の土壙の長軸は $N-82^\circ-E$ である。内部からは遺物等は出土せず、木棺の痕跡も確認できなかった。

3号土壙(木棺)墓(第65図)

3号土壙(木棺)墓はF-4区で確認された。南側には4号甕棺墓があり、切り合う形になっているが、埋土の状況から、4号甕棺墓が新しいものと思われる。墓壙の上部は削平を受けている。長軸280cm、短軸160cm以上、深さ20cmの土壙の底部から、さらに長軸240cm、短軸90cmの方形土壙を約15cm掘り下げた二重土壙で、南側に空間がある。長軸の方位はN-82°-Eである。内部には遺物、木棺痕跡等は発見できなかった。

4号、5号土壙(木棺)墓(第65図)

4号、5号土壙(木棺)墓はD-4区において切り合う形で確認された。埋土が非常に似ているため、新旧関係は不明である。

南側の4号土壙(木棺)墓は長軸が150cmの円形に近い土壙で、深さは115cm、底部は長軸90cm、短軸30cm の楕円形で、長軸の方位はN-67°-Eである。埋土の特徴から土壙(木棺)墓としたが、土壙の規模や形態から考えると疑問が残る。

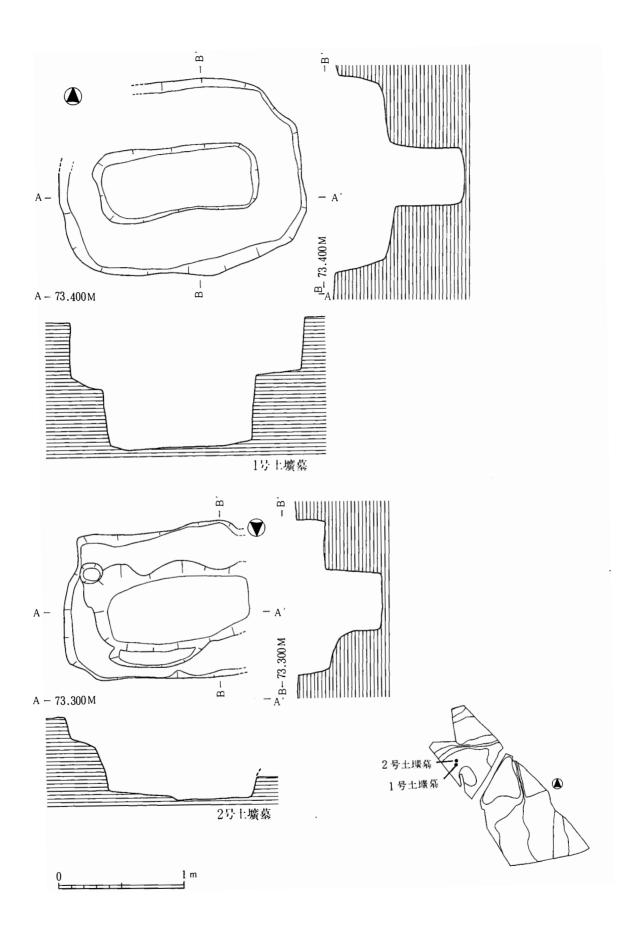
5号土壙(木棺)墓は長軸220cm、短軸190cm、深さ85cmの方形土壙で、南側にテラス状の空間がある。長軸の方位はN-70°-Eである。埋土中から遺物が数点出土したが、いずれも縄文土器で小片であることから、故意に埋められたものではなく、埋設時に周辺に散乱していた土器片がまぎれ込んだものと考えられる。

6号土壙(木棺)墓(第66図)

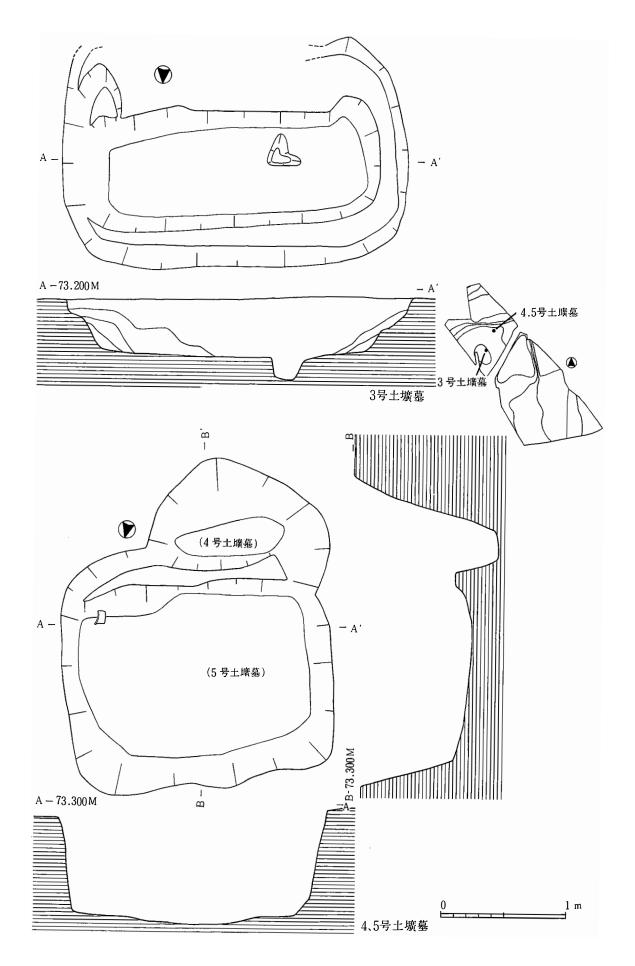
6号土壙(木棺)墓はE-5区で確認された。長軸205cm、短軸140cm、深さ40cmの方形土壙である。底部はいくつかの小土坑によって切られている。長軸の方位は $N-62^\circ-E$ である。内部には遺物、木棺痕跡等は発見できなかった。

7号土壙 (木棺) 墓 (第66図)

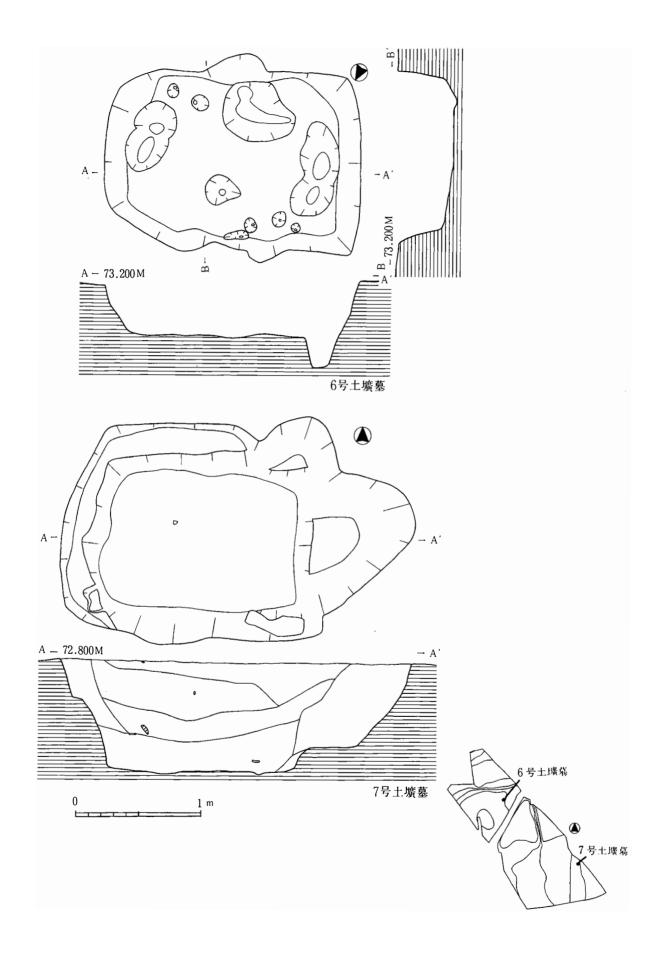
7号土壙(木棺)墓はH-11、I-11区の境で確認された。長軸285cm、短軸170cm、深さ約90cmの土壙で、長軸はほぼ東西方向を向く。底部は 150×105 cmの方形で、西側、北側の壁際と、南側にテラス状の空間がある。壁際は数個の小土坑によって切られている。埋土中から遺物が数点出土したが、いずれも縄文土器の小片で、埋設時のまぎれ込みであると思われる。



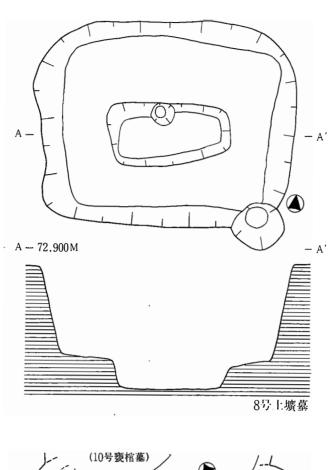
第64図 1、2号土壙(木棺)墓実測図

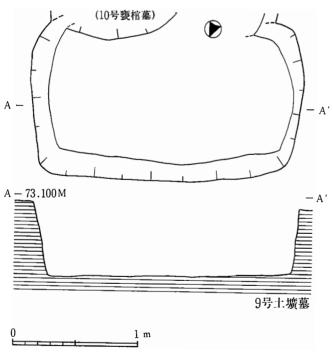


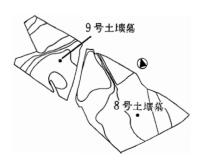
第65図 3、4、5号土壙(木棺)墓実測図



第66図 6、7号土壙(木棺)墓実測図







第67図 8、9号土壙(木棺)墓実測図

8号土壙(木棺) 墓(第67図)

8号土壙(木棺)墓は I-867、 J-8 区の境で確認された。長軸200cm、短軸160cm、深さ80cmの方形の土壙の底部から、さらに 100×50 cmの方形の土壙を20cm掘り下げた二重土壙である。長軸の方位は $N-81^\circ-E$ である。内部には遺物、木棺痕跡等は発見できなかった。

9号土壙(木棺)墓(第67図)

9号土壙(木棺)墓はE-4区で確認された。南側は10号甕棺墓と切り合う形になっているが、切り合いの状況から、10号甕棺墓が新しいものと思われる。長軸215cm、短軸120cm以上、深さ55cmの方形土壙で、長軸の方位はN-63° -Eである。内部には遺物、木棺痕跡等は発見できなかった。

4. 十器 (第68~78図)

I 区から出土した弥生土器は、中期のものがほとんどをしめる。器種から見ると、甕形土器、壺形土器、 高坏などが出土している。ほぼ調査区全体にわたって出土しているが、特に、調査区南側のJ、K区からか なりの数の土器が出土している。

甕形土器と壺形土器の中には日常用のものだけではなく、甕棺に使用されたと考えられる大型のものがある。また、土器の中には赤色顔料を塗布されたと思われるものが数点見られるのも特徴である。

ここでは、口縁部と底部を中心に器形の推定が可能なものを165点掲載した。これらの土器を器種別に見ていきたい。なお、個別の土器の計測値および観察結果については「I区出土弥生土器観察表」(第13~15表)にまとめている。

甕形土器 (第68図 1 ~第75図126)

甕形土器は口縁部の形態の特徴をもとに $A\sim H$ 類、また、底部の形態の特徴をもとに $I\sim L$ 類に分類した。 (1) 口縁部 ($1\sim 93$)

A類(1~15、83)

口縁部外側に断面が分厚い三角形、または台形の突帯を張り付けたもの。内側に張り出しを持たないA a 類($1 \sim 10$ 、83)と張り出しを持つA b 類($11 \sim 15$)に分けられる。最大径は胴部上半にあるものが多いと考えられる。

6、7は胴部上半に1条、**83**は口縁下に2条の突帯を持つ。また、**83**は口径が50cmを越える大型の土器で 甕棺として使用された可能性がある。

B類 (16~23)

口縁外側の突帯が I 類よりやや長くのびたもの。口縁の上面は平坦である。内側に張り出しを持たない B a 類($16\sim20$)と張り出しを持つ B b 類($21\sim23$)に分けられる。最大径は胴部上半にあると思われる。

16、18、19は焼成前に口縁部に穿孔している。

C類(24~34、84~86)

口縁外面の突帯はB類とほぼ同様であるが、やや内傾が強く、口縁上面がわずかにくぼんでいるもの。内側に張り出しを持つ。最大径はB類よりも上部になる。

30と84~86は口縁下に突帯を持つ。

D類 (35~39)

口縁上面は平坦で、口縁外面の突帯が B、C類よりも長くのびて、U字状になるもの。内側に張り出しを持たない Da類 (35、36) と張り出しを持つ Db類 (37~39) に分けられる。最大径はC類とほぼ同じ位置である。

36、37は口縁下に1条の突帯を持つ。また、39は口縁上面と外面に赤色顔料の塗布痕がある。

E類(40~62、87~92)

口縁外側の突帯がU字型で、上面にくぼみを持つもの。内側に張り出しを持ち、最大径は胴部上半の上寄りにある。

41、45、87~89、91、92は口縁下に1条の突帯があり、**46、55**は胴上半の最大径の部分に1条の沈線を持っている。

F類(63~80、93)

口縁外側の突帯が細長くなり、また内傾が強くなるため、くの字型に近い形態になるもの。内側に張り出しを持ち、最大径は胴部上半の上寄りにある。66、71、93は口縁下に1条の突帯を持つ。

G類(81)

口縁内側の張り出しが消滅し、完全なくの字型口縁になるもの。

H類(82)

口縁外側の突帯が細長く、口縁上面が平坦で、内側に張り出しを持つもの。T字状口縁に近い形態である。 82は口縁上面と外面に赤色顔料が塗布されている。

(2) 底部 (94~125)

弥生土器の底部のうち、上げ底と脚台を持つものを甕形土器の底部とした。

I類(94)

上げ底で底面がほぼ平坦なもの。

J類(95~107)

上げ底で底面が少しくぼむもの。底部端が大きく張り出す J a 類(95、97~99)と、あまり張り出さない J b 類(96、100~107)がある。

K類(9、108~115)

器壁が薄くなり、脚台に近い形状をもつが、底部は厚いもの。

L類(116~125)

底部が薄くなり、ほぼ完成した脚台を持つもの。

(3) 胴部 (126)

126は底部に近い胴部片である。底部の形状はK類になると思われる。

壺形土器 (第76図127~第77図157)

壺形土器は口縁部の形態の特徴をもとにA~H類、また、底部の形態の特徴をもとにI~L類に分類した。

(1) 口縁部(127~145)

壺形土器の口縁部には広口のものと鋤状口縁のものがある。

A類 (127~139)

朝顔形の広口口縁を持つものである。口縁は短く、強く外反する。

131は口唇に刻目、133、138は頸部に刻目突帯を持つ。135は口唇に刻目、頸部に刻目突帯を持つ。134は内面に赤色顔料の塗布痕がある。

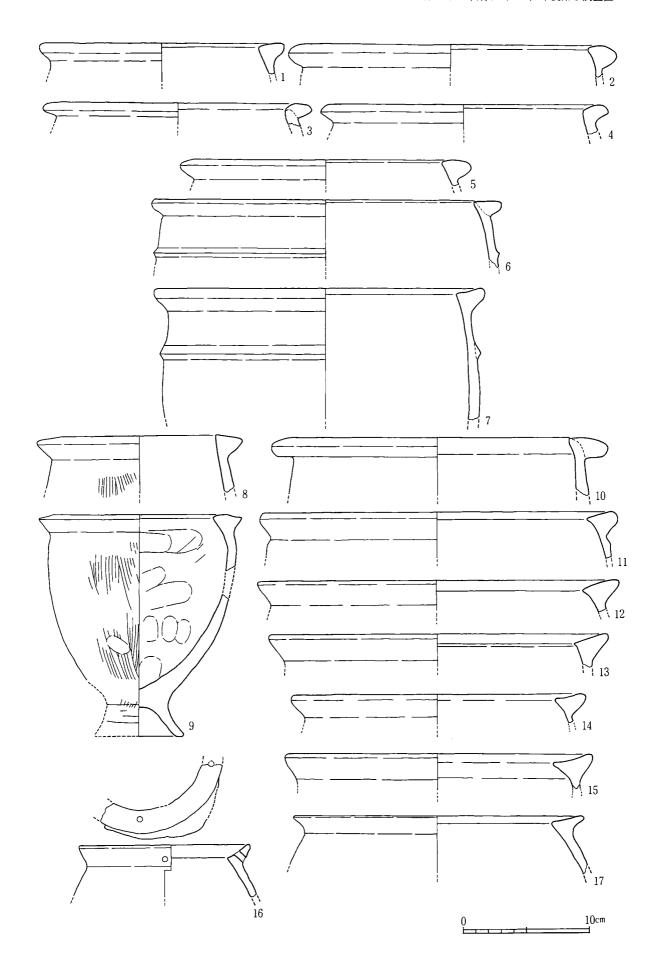
B類 (140~144)

鋤状口縁をもつもので、口縁上面が丸みを持つか、平坦なもの。

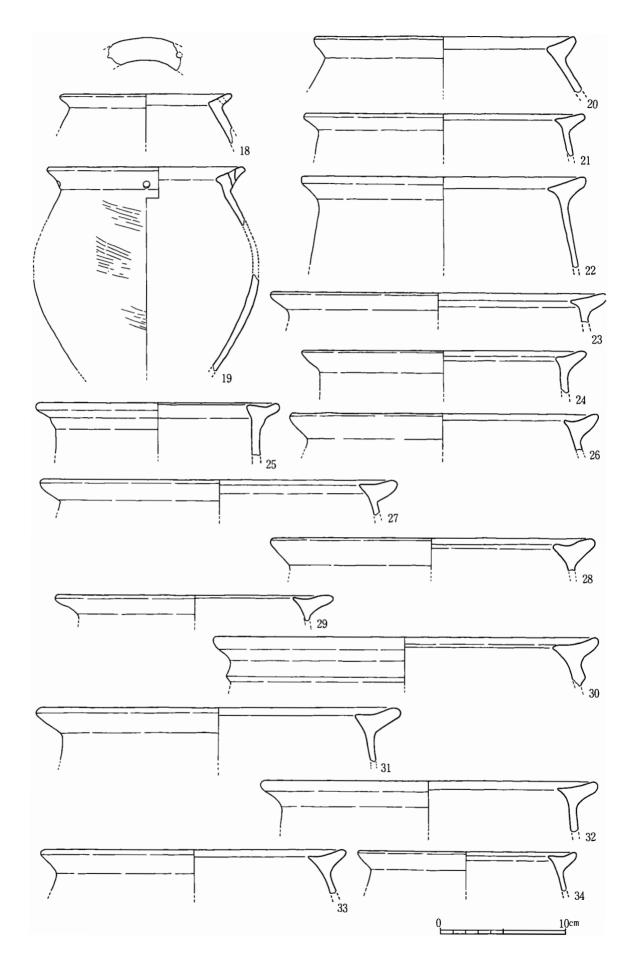
141は頸部に突帯1条をもち、胴部の外面には赤色顔料が塗布されている。

C類(145)

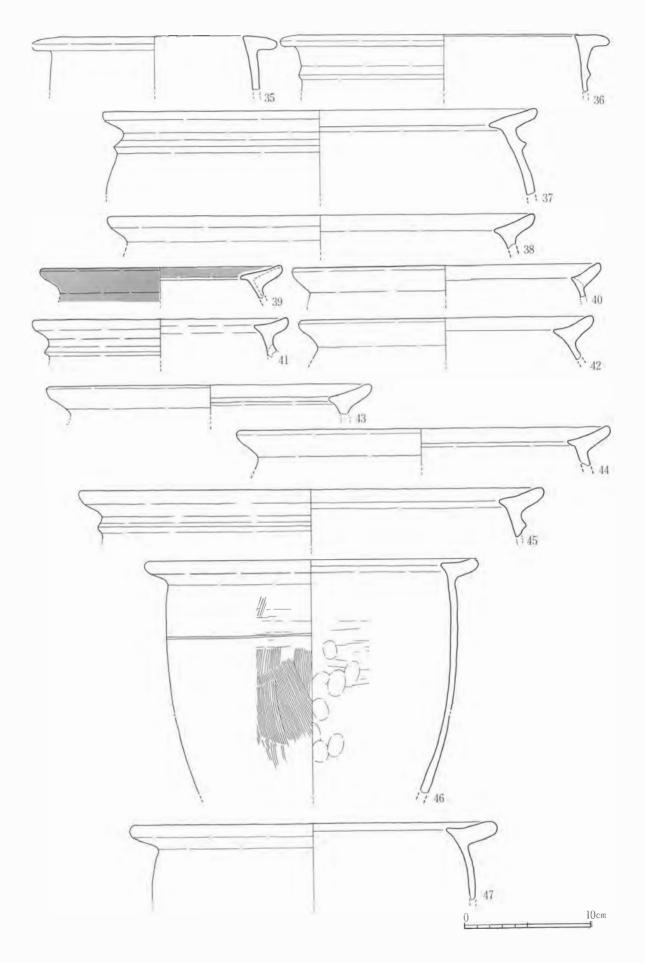
鋤状口縁で口縁上面がくぼむもの。



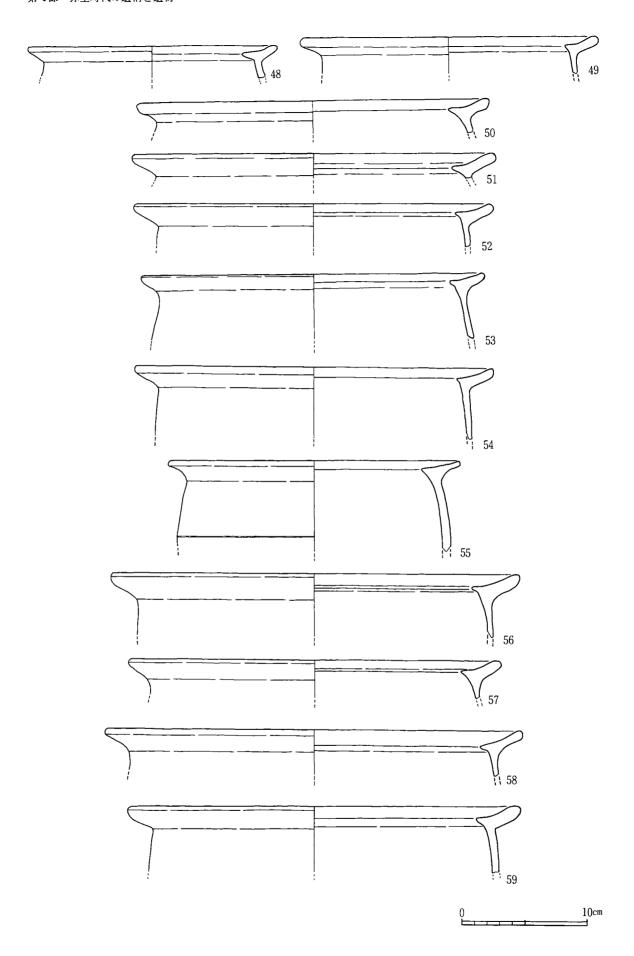
第68図 I区出土弥生土器(1)



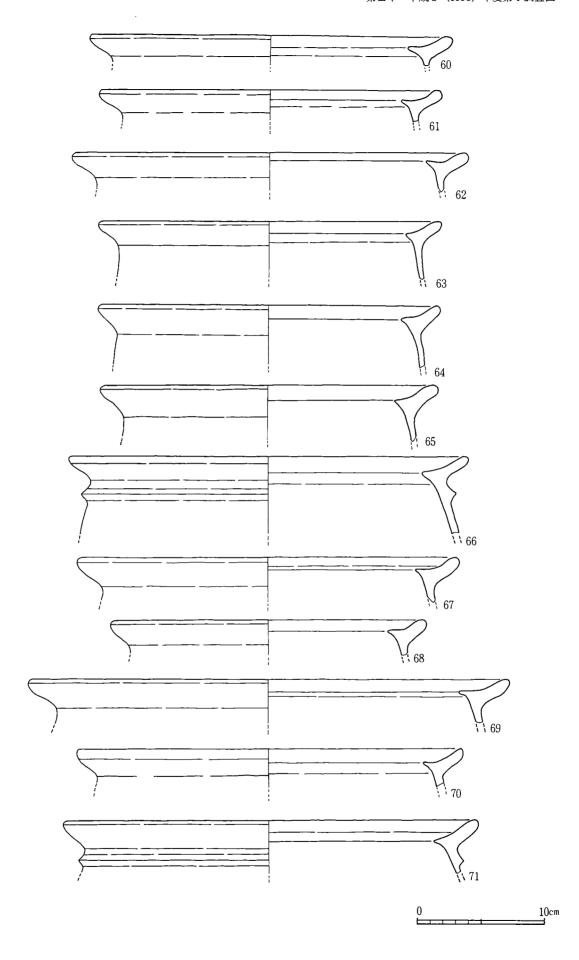
第69図 I区出土弥生土器(2)



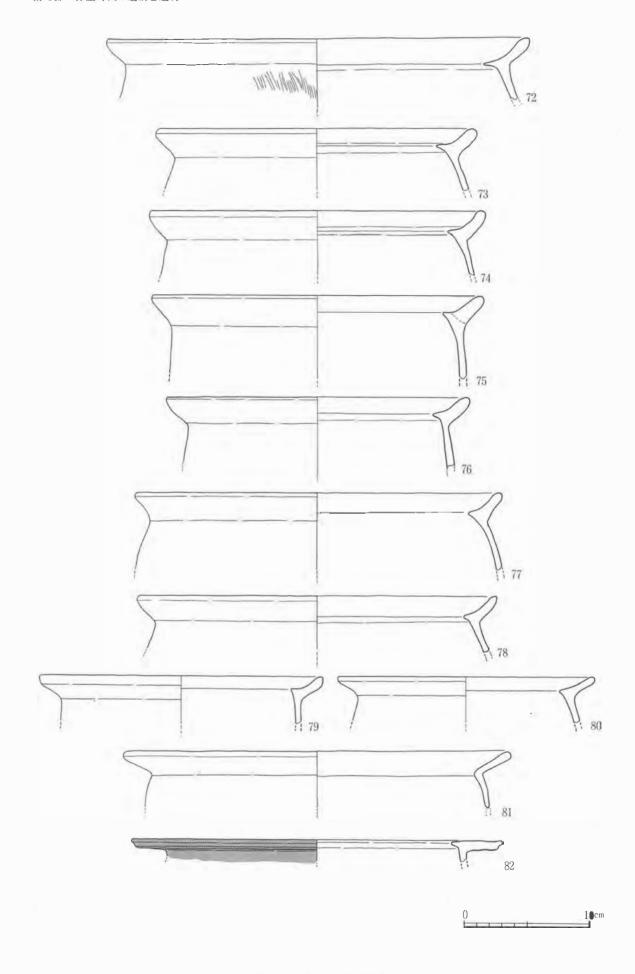
第70図 I区出土弥生土器(3)



第71図 I区出土弥生土器(4)



第72図 I区出土弥生土器(5)



第73図 I区出土弥生土器(6)

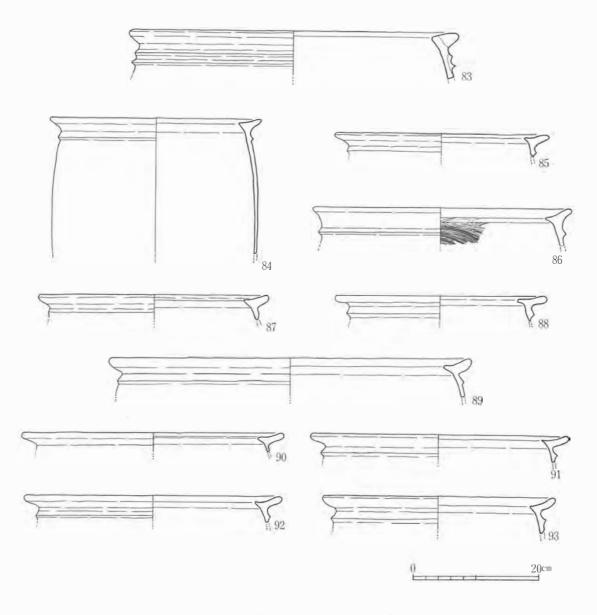
145は口唇に刻目があり、外面には赤色顔料の飛沫痕がある。

(2) 底部 (146~155、157)

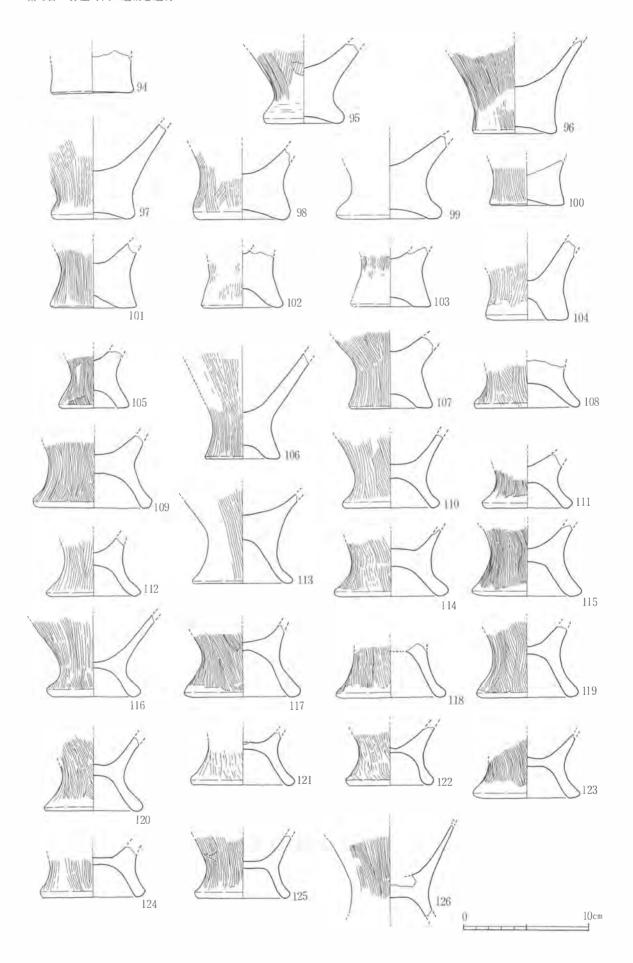
弥生土器の底部のうち、平底のものを壺形土器の底部とした。いずれも底部端と直線的に連なる胴部を持つ。 152、153はレンズ状に近い形状をしている。157は壺形土器の下半部である。平底で、外面に赤色顔料が塗布されており、上半部には鈎状突帯を持つ。

(3) 胴部 (156)

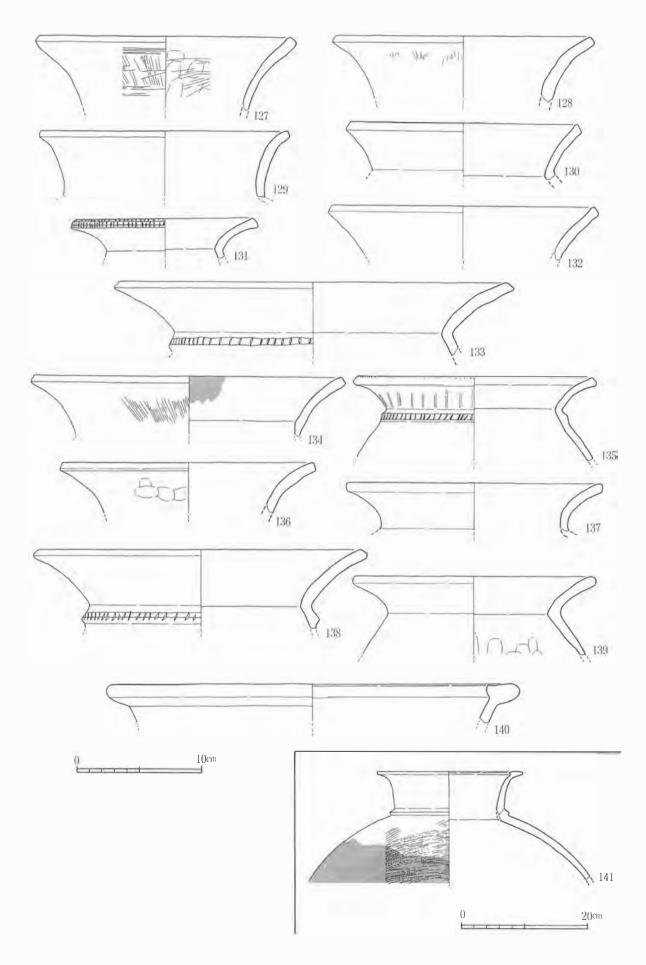
156は壺形土器の胴部である。内面ナデ調整、外面ヘラミガキで、最大径の部分に沈線文を持つ。



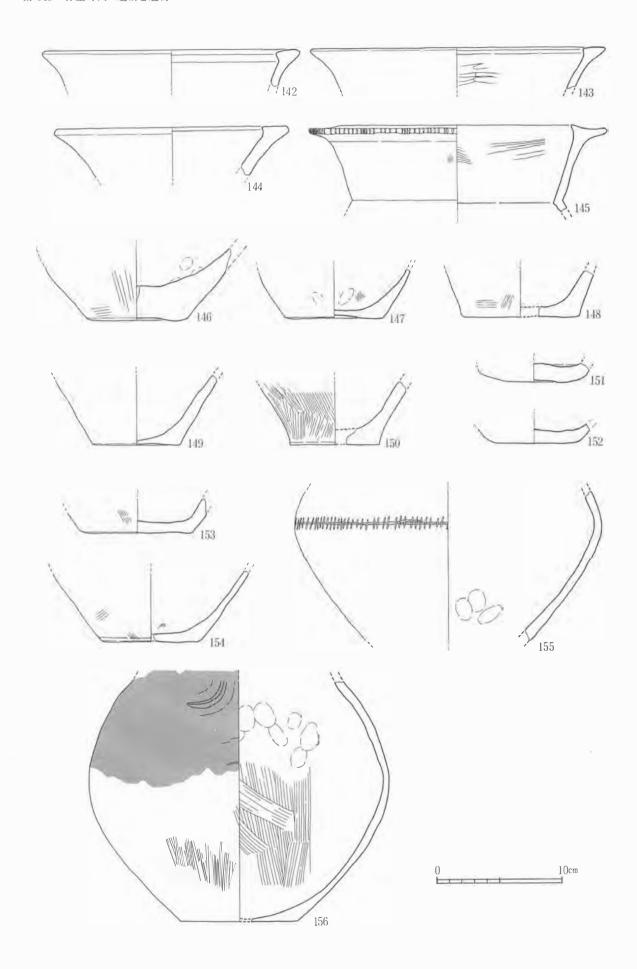
第74回 I区出土弥生土器(7)



第75図 I区出土弥生土器(8)



第76図 I区出土弥生土器(9)



第77図 I区出土弥生土器(10)

高坏 (157~165)

(1) 口縁部(157~163)

高坏はいずれも鋤状口縁を持つ。

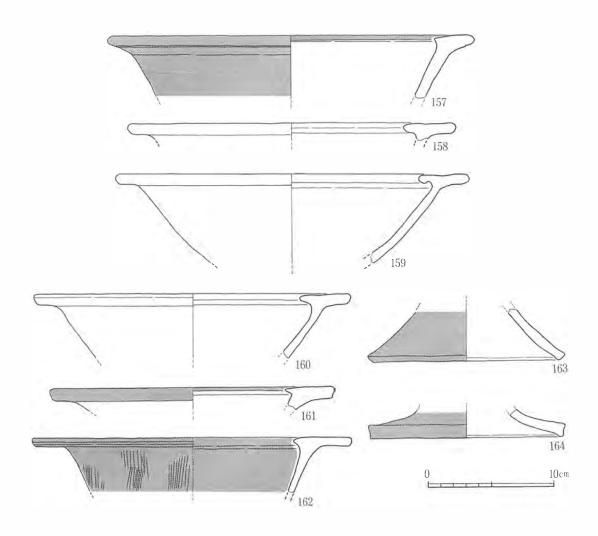
158は口縁がやや厚めで内側の張り出しも小さい。また、口縁外面に沈線を1条持つ。159~161は内側に大きく張り出すT字状口縁をもつ。162、163は口唇が面をなし、内側の張り出しがやや小さい。158、162、163は外面に赤色顔料が塗布されている。

(2) 底部 (164、165)

164、165は高坏あるいは脚台の底部である。2点とも外面に赤色顔料が塗布されている。

5. 石器 (第79図)

弥生時代のものと推定される石器は総数11点で、内訳は磨製石鏃 2 点、磨製石剣 1 点、石包丁 8 点である。出土層位は明確ではないが、I-10区、J-9区、K-10区など、調査区の南東部より多く出土しているのが特徴である。以下、これらについて、器種別に見ていきたい。



第78図 I区出土弥生土器(11)

第13表 I区出土弥生土器観察表(1)

図版 番号	遺物番号	口径	底径	現存高 (cm)	器厚 (cm)	調整(内面)	調整(外面)	色 調 (内面)	色 調 (外面)	胎 土	焼成	備考	取上番号
74	1	19.6		2.5	0.5	ナデ、指頭痕	横ナデ	にぶ黄橙	にぶ黄橙	粗砂粒、長石、雲母	良好	外面スス	F -6 32
74	2	26.2		2.5	0.5	 横ナデ	横ナデ	浅黄橙	にぶ黄橙	砂粒、石英	良好	外面スス	K-7 168
74	3	21.5		1.7	0.5	横ナデ	横ナデ	褐灰	橙	砂粒、角閃石、長石	良好	両面スス	I -5 10
74	4	23.0		2.1	0.8	横ナデ	横ナデ	浅黄橙	にぶ黄橙	粗砂粒、角閃石、長石	良好	外面スス	K-7 255
74	5	23.4		1.9	0.5	横ナデ	横ナデ	灰白	浅黄橙	小石、粗砂粒	良好	外面スス	K-6 28
74	6	28.0		5.2	0.7	横ナデ	横ナデ	にぶ黄橙	明黄褐	砂粒、長石、石英	良好	胴部上半突帯1条、薄くスス	J-7 95
74	7	25.6		10.3	0.8	横ナデ	横ナデ	にぶ橙	にぶ黄橙	粗砂粒、角閃石、長石、窶母、 金窶母	良好	胴部上半突帯1条、外面スス	J-93
74	8	16.4		4.4	0.6	横ナデ	縦ハケ目	にぶ黄橙	にぶ黄橙	砂粒、角閃石、長石、雲母	良好	両面スス	E-6 49
74	9	16.2	7.2	17.5	1.0	ナデ、指頭痕	横ナデ、ハケ目、 横ナデ	にぶ黄橙	浅黄橙	砂粒、長石、石英、角閃石	良好	外面スス	J-11 60ほか
74	10	26.9	1	4.5	0.9	横ナデ	横ナデ	にぶ橙	にぶ橙	細砂粒、角閃石、雲母	良好	外面スス	K-9 39
74	11	28.5		3.7	0.5	横ナデ	横ナデ	にぶ黄橙	にぶ黄橙	砂粒、角閃石、長石	良好	両面スス	J-7 107
74	12	28.9		2.2	0.8	横ナデ	横ナデ	明黄褐	橙	小石、砂粒、長石、石英	良好		6号土壙墓埋土
74	13	27.2		2.2	0.8	横ナデ	横ナデ	浅黄橙	にぶ黄橙	砂粒、角閃石、長石	良好		17号土坑
74	14	23.0		2.2	0.3	横ナデ	横ナデ	橙	橙	砂粒、角閃石、長石、雲母	良好		I -7 6
74	15	24.6		2.4	0.6	横ナデ	横ナデ	にぶ橙	にぶ黄橙	砂粒、角閃石、長石	良好	外面スス	J-6 40
74	16	13.7		5.8	0.4	横ナデ	横ナデ	にぶ黄橙	にぶ黄橙	砂粒、角閃石、長石	良好	口縁部小孔(焼成前)、外面スス	K-7 7
75	17	23.2		4.3	0.7	横ナデ	横ナデ	にぶ橙	にぶ橙	小石、砂粒、角閃石、長石	良好	外面薄くスス	J-9一括
75	18	13.7		3.9	0.6	横ナデ	ナデ	黒褐	にぶ黄褐	砂粒、角閃石、長石	やや良好	口縁部小孔(焼成前)、両面スス	I -10一括
75	19	15.8	16.1		0.4	横ナデ	横ナデ	にぶ黄橙	にぶ黄橙	砂粒、石英、角閃石	良好	口縁部小孔(焼成前)、両面スス	K-9 119, 121
75	20	21.0		4.i	0.5	横ナデ	横ナデ	にぶ橙	にぶ黄橙	砂粒、角閃石、長石	良好	外面スス	J-9 108
75	21	22.5		3.2	0.3	横ナデ	横ナデ	にぶ黄橙	にぶ黄橙	細砂粒、長石、雲母	良好	両面スス	H=91
75	22	22.8		7.1	0.5	横ナデ	横ナデ	にぶ黄橙	にぶ黄褐	長石、角閃石、石英	良好	外面スス	I -7 5
75	23	27.0		2.2	0.5	横ナデ	横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	小石、砂粒、長石	良好	外面薄くスス	F-6 36
75	24	22.8		2.8	0.5	横ナデ	横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	小石、砂粒、角閃石、長石	良好		K-8一括
75	25	19.6		4.1	0.7	横ナデ	横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	砂粒、角閃石、長石、雲母	良好		F-4 94
75	26	24.8		2.8	0.4	横ナデ	横ナデ	浅黄橙	にぶ黄橙	砂粒、角閃石、長石、雲母	良好	外面スス	I - 7 6
75	27	28.7		2.8	0.3	横ナデ	横ナデ	にぶ黄橙	にぶ黄橙	砂粒、長石、石英、角閃石	良好		H-8 16号土坑6
75	28	26.1		2.5	0.3	横ナデ	横ナデ	にぶ黄橙	にぶ黄橙	小石、砂粒、角閃石、長石	良好	外面スス	I -6 P-2
75	29	22.3		2.0	1.0	横ナデ	横ナデ	にぶ橙	にぶ黄橙	粗砂粒、角閃石、長石	良好	外面スス	K-9 90
75	30	30.8		3.8	1.0	横ナデ	横ナデ	にぶ黄橙	にぶ黄橙	粗砂粒、角閃石、長石	良好	口縁下突帯1条、内面薄くスス	J-9 49
75	31	29.3		3.7	0.5	横ナデ	横ナデ	浅黄橙	にぶ黄橙	砂粒、角閃石、長石、霎母	良好	外面スス	J-8 18号土坑
75	32		27.0	4.0	0.6	横ナデ	横ナデ	にぶ黄橙	浅黄橙	砂粒、長石、雲母	良好		12号甕棺墓埋土
75	33	24.7		3.4	0.4	横ナデ	横ナデ	にぶ橙	にぶ橙	砂粒、長石、雲母	良好		J-7 1
76	34	17.4		3.0	0.3	横ナデ	横ナデ	にぶ黄橙	にぶ黄橙	砂粒、角閃石、長石	良好		I-6 P-2
76	35	19.6		4.3	0.7	横ナデ	横ナデ	灰褐	にぶ褐	粗砂粒、長石、窶母	良好	両面スス	K-7 154
76	36	26.2		4.6	0.5	横ナデ	横ナデ	橙	にぶ橙	砂粒、長石、雲母	良好	口縁下突帯1条、外面スス	K-6 27
76	37	34.7	İ	6.8	0.6	横ナデ	横ナデ	明黄褐	浅黄橙	砂粒、長石	良好	口縁下突帯1条、外面スス	J-9 273
76	38	34.2		1.9	0.8	横ナデ	横ナデ	浅黄橙	にぶ黄橙	粗砂粒、角閃石、長石	良好		I -7 4
76	39	19.4		2.2	0.4	横ナデ	横ナデ	赤褐	にぶ橙	小石、砂粒、角閃石、長石	良好	外面赤色顔料	I -7 1
76	40	24.6		2.8	0.3	横ナデ	横ナデ	橙	にぶ橙	砂粒、角閃石、長石	良好	口縁部スス	K-7 147
76	41	20.5		3.2	0.5	横ナデ	横ナデ	にぶ黄橙	にぶ黄橙	細砂粒、長石、窶母	良好	口縁下突帯1条、外面スス	K-8 170
76	42	23.6		3.6	0.4	横ナデ	横ナデ	浅黄橙	横橙	砂粒、長石、雲母	良好		J-8 18号土坑
76	43	26.1		2.4	0.6	横ナデ	横ナデ	にぶ橙	橙	粗砂粒、角閃石、長石	良好	内面スス	H-7, 8 16号土 坑11
76	44	30.0		2.3	0.7	横ナデ	横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	砂粒、角閃石、長石、石英	良好	内面スス	H-7, 8 16号土 坑1
76	45	37.2		3.2	0.8	横ナデ	横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	小石、砂粒、角閃石、長石	良好	口縁下突帯1条	I -5 4
76	46	ł		18.5	0.4	横ナデ、指頭痕	横ナデ、縦ハケ 目	にぶ橙	にぶ褐	砂粒、角閃石、長石、雲母	良好	胴部上半沈線1条、両面スス	J -9 261
77	47			6.2	0.4	横ナデ	横ナデ	にぶ橙	にぶ橙	粗砂粒、角閃石、長石	良好		J -11 139, 143
77	48			2.6	0.4		横ナデ	灰白	浅黄橙	砂粒、角閃石、長石	良好	外面スス	I -10 70
77	49	1		2.2	0.3		横ナデ	橙	浅黄橙	砂粒、角閃石、長石、雲母	良好	口縁部薄くスス	F-4 78
77	50			2.7	0.4	横ナデ	横ナデ	橙	浅黄橙	砂粒、角閃石、長石、雲母	良好		K-9 223
77	51			1.9	0.3		横ナデ	橙	にぶ黄橙	細砂粒、長石	良好	外面スス	I -10 33
77	52	1		3.4	0.4		横ナデ	にぶ橙	にぶ橙	砂粒、長石、角閃石	良好	外面、口縁部スス	J-11 104, 140
77	53	1	1	5.1	0.4		横ナデ	にぶ黄橙	にぶ黄褐	細砂粒、長石、角閃石	良好	外面スス	J-9 227
77	54			5.5	0.4		横ナデ	浅黄橙	にぶ黄橙	砂粒、角閃石、長石、石英、雲母	良好	外面スス	J-8 18号土坑
77	55	23.5		6.8	0.5	横ナデ	横ナデ	にぶ黄橙	にぶ黄橙	砂粒、長石、雲母	良好	胴部上半沈線1条、両面スス	K-6 51

第14表 I区出土弥生土器観察表(2)

図版 番号	遺物 番号	口径	底径	現存高 (cm)	器厚 (cm)	調整(内面)	調整 (外面)	色 調 (内面)	色 調 (外面)	胎生	焼成	備考	取上番号
77	56	32.8		4.9	0.7	横ナデ		にぶ黄橙	にぶ黄橙	細砂粒、長石、角閃石	良好	外面、口縁部薄くスス	F -3 20
77	57	30.0		3.0	0.7	横ナデ	横ナデ	にぶ黄橙	にぶ黄橙	細砂粒、長石	良好	外面スス	J -9 64, 83
77	58	33.6		3.6	0.3	横ナデ	横ナデ	にが橙	にぶ黄褐	砂粒、長石、角閃石	良好	外面スス	K-8 110
78	59	31.6		4.6	0.4	横ナデ	横ナデ	にぶ黄橙	にぶ黄橙	細砂粒、角閃石、長石、雲母	良好		J-9 79
78	60	29.2		2.3	0.5	横ナデ	横ナデ	灰黄褐	にぶ黄橙	砂粒、角閃石、長石、雲母	良好	内面薄くスス	K-9 261
78	61	27.5		2.4	0.4	横ナデ	横ナデ	明黄褐	浅黄橙	砂粒、長石	良好	外面スス	I-7 16号土坑
78	62	31.7		3.1	0.4	横ナデ	横ナデ	浅黄橙	にぶ橙	粗砂粒、角閃石、長石	良好		K-9 86
78	63	27.5		4.4	0.3	横ナデ	横ナデ	灰黄褐	灰黄褐	粗砂粒、角閃石、長石	良好	両面スス	J-9 271
78	64	27.4		4.9	0.3	横ナデ	横ナデ	にぶ黄橙	にぶ黄橙	砂粒、角閃石	良好	外面スス	J - 6 31
78	65	27.1		3.6	0.4	横ナデ	横ナデ	にぶ黄橙	にぶ黄褐	粗砂粒、角閃石、長石	良好	外面スス	J -11 69
78	66	31.9		6.1	0.5	横ナデ	横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	角閃石、長石	良好	口縁下突帯1条、外面スス	K-8 129, 130
78	67	30.6		3.6	0.5	横ナデ	横ナデ	にぶ黄橙	にぶ黄橙	砂粒、角閃石、長石、雲母	良好		J-9 24, 35
78	68	25.2		2.8	0.5	横ナデ	横ナデ	にぶ黄橙	灰白	砂粒、角閃石、長石	良好		F-4 109
78	69	38.5		3.5	0.6	横ナデ	横ナデ	にぶ黄橙	にぶ橙	砂粒、角閃石、長石	良好	内面薄くスス	J-11 148
78	70	30.9		3.0	0.5	横ナデ	横ナデ	浅黄橙	にぶ黄橙	砂粒、角閃石、長石	良好	外面スス	K-9 65
78	71	33.2		3.1	0.6	横ナデ	横ナデ	にぶ黄橙	浅黄橙	小石、粗砂粒、角閃石、長石	良好	口縁下突帯1条、外面スス	F-7 20
79	72	34.0		3.3	0.6	横ナデ	縦ハケ目の上横 ナデ	浅黄橙	にぶ黄橙	砂粒、角閃石、雲母	良好	両面スス	F-6 73
79	73	25.8		4.9	0.3	横ナデ	横ナデ	浅黄	浅黄	砂粒、角閃石、長石	良好		J-7 55
79	74	27.0		5.1	0.5	横ナデ	横ナデ	にぶ黄橙	にぶ黄橙	砂粒、長石、石英	良好	両面スス	J-6 一括
79	75	26.6		6.3	0.5	横ナデ	横ナデ	にぶ黄橙	にぶ黄橙	砂粒、角閃石、長石	良好	外面スス	J-11 113, 122
79	76	24.4		5.9	0.4	横ナデ	横ナデ	にぶ黄橙	灰黄	 細砂粒、長石、角閃石	良好		H-7 9, 11
79	77	29.5		5.0	0.4	横ナデ	横ハケ目の上横 ナデ	にぶ橙	にぶ黄橙	砂粒、角閃石、長石	良好	外面スス	J-6 39
79	78	28.9		3.9	0.4	横ナデ	が 縦ハケ目の上横 ナデ	にぶ橙	にぶ黄橙	砂粒、角閃石、長石	良好	口縁部スス	J-11 51
79	79	22.8		3.5	0.4	横ナデ	横ナデ	にぶ橙	橙	 砂粒、角閃石	良好		K-9 P-7
79	80	20.5		2.7	0.5	横ナデ	横ナデ	浅黄橙	にぶ褐	砂粒、角閃石、長石	良好	外面、口縁部スス	K-7 120
79	81	31.2		4.4		横ナデ	横ナデ	にぶ黄橙	にぶ黄橙	細砂粒、長石	良好	外面スス	K-10一括
80	82	29.8		1.4	0.4	ナデ	横ナデ	浅黄橙	赤褐	砂粒、石英、角閃石、長石	良好	外面赤色顔料	J -9 120
80	83	52.9		7.1	1.2	横ナデ	横ナデ	褐灰	褐灰	砂粒、角閃石、長石	良好	口縁下突帯2条、両面スス	17号土坑
80	84	33.8		21.2	0.8	横ナデ	横ナデ	にぶ黄橙	橙	砂粒、角閃石、長石、雲母	良好	口縁下突帯1条、外面スス	K-7 273
80	85	34.0		3.4	0.7	横ナデ	横ハケ目の上横	にぶ黄橙	にぶ黄橙	粗砂粒、角閃石、長石	良好	口縁下突帯1条	P-6 112
80	86	41.3		4.9	1.2	横ナデ	横ハケ目	浅黄橙	浅黄橙	細砂粒、角閃石、長石	良好	口縁下突帯1条、外面スス	K-10 41
80	87	36.8		3.9	0.8	横ナデ	横ナデ	にぶ黄橙	にぶ黄橙	砂粒、角閃石、長石	良好	口縁下突帯1条、外面スス	J-7 19
80	88	33.7		4.1	1.0	横ナデ	横ナデ	にぶ黄橙	にぶ黄橙	砂粒、角閃石、長石	良好	口縁下突帯1条、内面薄く	K-7 153
80	89	58.2		8.2	0.7	横ナデ	横ナデ	にぶ黄橙	灰黄褐	砂粒、角閃石、長石、雲母	良好	口縁下突帯1条、両面スス	J -10 118
80	90	42.0		3.0	0.4	横ナデ	横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	粗砂粒、長石	良好		J -9 25
80	91	41.4		4.2	0.5	横ナデ	横ナデ	淡黄	にぶ黄橙	砂粒、長石	良好	口縁下突帯1条、外面スス	J-9 29
80	92	41.2		4.1	0.7	横ナデ	横ナデ	にぶ黄橙	にぶ黄橙	粗砂粒、長石	良好	口縁下突帯1条	J-10 296
80	93	47.0		5.7	0.7	横ナデ	横ナデ	浅黄	にぶ橙	砂粒、長石	良好	口縁下突帯1条、外面スス	J -7 39
81	94	ĺ	3.4	3.3		ナデ	ナデ		にぶ黄橙	砂粒、角閃石、長石	良好		J -9 224
81	95		6.6	6.3	2.1	ナデ	縦ハケ目、横ナ	オリーブ 黒	にぶ黄橙	細砂粒、角閃石、長石	良好	内面スス	E-5 49
81	96		6.8	7.3	1.0	ナデ	縦ハケ目	ポリーブ 黒	にぶ黄橙	細砂粒、長石	良好	両面スス	J-8一括
81	97		6.7	7.5	1.7	ナデ	縦ハケ目	暗灰黄	にぶ橙	砂粒、長石	良好	両面スス	K-8 73
81	98		7.8	5.8	1.2	ナデ	縦ハケ目	灰黄褐	にぶ黄橙	粗砂粒、角閃石、長石	良好	内面スス	I - 5 11
81	99		8.5	6.7	1.4	ナデ	縦ハケ目の上横 ナデ	灰黄褐	にぶ黄橙	粗砂粒、角閃石、長石	良好	両面スス	6号土壙墓埋土
81	100		5.9	3.6		ナデ	が 縦ハケ目	にぶ黄橙	にぶ黄橙	砂粒、長石	良好		K-9 133
81	101		6.9	5.1	1.2	ナデ	縦ハケ目	灰黄	にぶ黄橙	砂粒、長石	良好	両面スス	J-6一括
81	102	1	6.6	4.5	1	ナデ	縦ハケ目	にぶ黄橙	にぶ黄橙	粗砂粒、長石	良好	内面スス	J-7 1号住埋土
81	103		6.5	4.7		ナデ	縦ハケ目の上横 ナデ	褐灰	にぶ橙	粗砂粒、角閃石、長石	良好		J-7 24
81	104		6.2	6.2	1.6	ナデ	縦ハケ目	浅黄橙	淡黄	砂粒、長石	良好	底面スス	J-7 106
81	105		5.6	4.5	1.2	ナデ	縦ハケ目	灰黄褐	にぶ黄橙	細砂粒、角閃石、長石	良好	内面スス	J-9 146
81	106		6.0	8.3	1.0	ナデ	縦ハケ目	黒褐	にぶ橙	砂粒、長石、雲母	良好	両面スス	J-62
81	107		6.7	6.8	1.5	ナデ	縦ハケ目	暗オリー ブ褐	にぶ黄橙	砂粒、長石	良好	両面スス	H-7 7
81	108		8.5	3.8		ナデ	縦ハケ目	にぶ橙	にぶ橙	細砂粒、角閃石、長石	良好	内面スス	K-10 95
81	109		9.5	5.8		ナデ	縦ハケ目	にぶ黄橙	浅黄橙	細砂粒、角閃石、長石	良好	内面、脚台内スス	J-9 110
81	110		7.8	5.8	1.1	ナデ	縦ハケ目	黄灰	にぶ黄橙	細砂粒、角閃石	良好	両面、脚台内スス	一括

第15表 I区出土弥生土器観察表(3)

- T	120.01		1		Tan-						1		
図版 番号	遺物 番号	口径	底径	現存高 (cm)	(cm) 器厚	調整 (内面)	調整(外面)	色調 (内面)	色 調 (外面)	胎 土	焼成	備考	取上番号
81	111		7.2	4.2		ナデ	縦ハケ目	にぶ黄褐	浅黄橙	角閃石、長石	良好	内面スス	J-9 239
81	112		7.6	4.6	0.9	ナデ	縦ハケ目	褐灰	にぶ橙	角閃石、長石	良好	両面スス	J-11 153
81	113		8.9	8.1	0.9	ナデ	縦ハケ目	にぶ黄	浅黄	細砂粒、角閃石、長石	良好	両面、脚台内スス	J-9 43
81	114		9.2	5.2	1.1	ナデ	縦ハケ目	灰黄褐	にぶ黄橙	砂粒、角閃石、長石	良好	内面、脚台内スス	J-11 22, 130
81	115		8.8	5.6	0.9	ナデ	縦ハケ目	灰黄褐	浅黄橙	砂粒、長石	良好	両面スス	J -7一括
81	116		7.4	6.5	0.9	ナデ	縦ハケ目	暗灰黄	にぶ橙	長石、宝母	良好	内面スス	J -9 58
81	117		9.4	5.7	0.8	ナデ	縦ハケ目	褐灰	にぶ黄橙	砂粒、角閃石、長石	良好	内面薄くスス	K-10 11
81	118		8.8	4.2	}		縦ハケ目		にぶ黄褐	砂粒、角閃石、長石	良好	外面スス	I -10 91
81	119		8.1	7.0	1.1	ナデ	縦ハケ目	橙	浅黄橙	小石、長石、角閃石、黒曜石	良好		F-6 38
81	120		7.9	5.9	1.0	ナデ	縦ハケ目	黄灰	にぶ黄橙	小石、砂粒、角閃石、長石 	良好	両面スス	J-6 41
81	121		8.4	4.2	0.6	ナデ	縦ハケ目	灰黄褐	にぶ黄橙	粗砂粒、角閃石、長石	良好	両面、脚台内スス	K-9 78
81	122		8.0	4.5	1.0	ナデ	縦ハケ目	灰黄褐	にぶ黄橙	角閃石、長石	良好	内面、脚台内スス	K-9 114
81	123		8.6	5.3	1.0	ナデ	縦ハケ目	褐灰	にぶ橙	砂粒、角閃石、長石	良好	内面スス	F-6 94
81	124		8.4	4.0	1.1	ナデ	一縦ハケ目	にぶ黄橙	にぶ黄橙	砂粒、長石	良好	内面、脚台内スス 	J-11 41, 162
81	125		7.7	5.0	1.0	ナデ	縦ハケ目	褐灰	にぶ橙	砂粒、角閃石、長石	良好	両面スス	F-6 77
81	126			7.5	1.0	ナデ 横ハケ目の上横ナ	縦ハケ目 縦ハケ目の上横	灰	浅黄橙	砂粒、角閃石、長石	良好	両面、脚台内スス	J-11 83ほか
82	127	20.8		5.8	0.4	デ	サデ 縦ハケ目の上横	にぶ黄橙	にぶ黄橙	砂粒、角閃石、長石	良好	内面スス	I-71
82	128	20.8		5.2	0.8	ミガキ	サデ 縦ハケ目の上横	明赤褐	橙	砂粒、長石、雲母	良好		J -9 11
82	129	20.0		7.8	0.5	ミガキ	ナデ、ミガキ	灰黄褐	暗灰黄	細砂粒、長石、雲母	良好	両面スス	K-8 90, 93
82	130	18.7		4.4	0.5	横ナデ	横ナデ	にぶ橙	にぶ黄橙	砂粒、角閃石、長石	良好	- FM 10 - D	K-9 64
82	131	15.0		2.9	0.4	横ナデ	横ナデ	にぶ黄橙	にぶ黄橙	砂粒、長石	良好	口唇部刻目2列	J-8一括
82	132	21.4		4.2	0.6	横ナデ	横ナデ	にぶ黄橙	浅黄橙	砂粒、角閃石、長石	良好	内面スス	J-9 37
82	133	32.1		7.8	0.7	横ナデ	横ナデ 縦ハケ目の上横	にが橙	にぶ黄橙	細砂粒、角閃石、長石 粗砂粒、長石	良好	頭部刻目突帯 1条	J-9 137 V-6+€
82 82	134	19.3		4.6 6.6	0.5	横ナデ	ナデ 横ナデ、ヘラ描	浅黄橙 にぶ黄橙	浅黄橙		良好良好	内面赤色顔料 口唇部刻目、頸部刻目突帯	K-6一括 J-8一括
82		ĺ			0.4		文		にぶ橙	細砂粒、角閃石、長石 砂粒、角閃石、長石		1条	
82	136	20.5		4.0 3.7	0.8	横ナデ	横ナデ 横ナデ	にぶ橙 浅黄橙	にぶ橙 浅黄橙	砂粒、角闪石、设石 小石、砂粒、角閃石、長石	良好良好	内面スス	J -6 33
82	138	26.7		6.2	0.8	横ナデ	横ナデ	にが橙	にぶ黄橙	細砂粒、角閃石、長石	良好	頭部刻目突帯1条	J -9 137
82	139	19.3		6.2	1.0	サデ、指頭痕	横ナデの上へラ	にぶ黄橙	にぶ黄橙	細砂粒、角閃石、長石	良好	外面スス	K-10 17, 89,
82	140	33.1		3.1	0.8	横ナデ	ミガキ 横ナデ	にぶ黄橙		細砂粒、長石、雲母	良好	外面スス	90 J-8一括
82	141	23.0		17.4	0.6	横ナデ	縦ハケ目の上横	褐灰	赤褐	· 砂粒	良好	頸部三角突帯1条、外面赤	I -9 57, 60, 61
83	142	20.6		2.9	0.7	横ナデ	ナデ 横ナデ	にが橙	灰黄褐	^{10 12} 細砂粒、角閃石、長石	良好	色顔料	J -7一括
83	143	23.6		3.3	0.4	ミガキ	横ナデ	にぶ黄褐	にぶ黄褐	砂粒、角閃石	良好	7FB 7.7	J-66
83	144	18.8	ŀ	3.8	1.0	横ナデ	横ナデ	にぶ黄橙		細砂粒、角閃石、長石	良好		E-4一括
83		23.8	ĺ	6.9		横ハケ目の上横ナ	横ナデ		にぶ黄橙	砂粒、石英、長石、雲母	良好	口唇部刻目、外面スス、赤	J -7 72
83	146	20.0	8.0	5.6		テ ナデ、指頭痕	ヘラケズリ	黄橙	黄橙	砂粒、石英、角閃石、長石	良好	色顔料飛沫痕	F-4一括
83	147		7.8	3.6	2.0	ナデ、指頭痕	ナデ	にぶ黄橙		細砂粒、角閃石、長石	良好	両面スス	一括
83	148		9.4	4.6	1.5	ナデ	ナデ	にが橙	にが橙	砂粒、角閃石、長石	良好	内面スス	 J -9一括
83	149		7.0	5.6	1.0		ナデ	にぶ黄橙		砂粒、角閃石、長石	良好	両面スス	一括
83	150		7.2	4.3	1.3		が が が が が が が か が か か か か か か か か か か か	にぶ黄橙		砂粒、角閃石、長石	良好	1,700	 I -7 16号土坑
83	151		8.8	1.5		ナデ	ナデ	灰横褐	にぶ黄橙	石英、角閃石、長石	良好	内面スス	E-4一括
83	152		6.0	1.5	1.0		ナデ	にぶ黄橙		砂粒、角閃石、長石	良好	内面スス、底面スス	K-7 220
83	153		8.6	2.7	1.0		ナデ	にぶ黄橙		砂粒、角閃石、長石	良好	両面スス	C-4一括
83	154		7.6	5.6	0.4	ナデ	ナデ	灰黄	灰黄	砂粒、石英、角閃石、長石	良好		J -6 28, 75
83	155				0.5	ナデ	ヘラミガキ	にぶ黄橙		粗砂粒、長石、角閃石	良好	胴部沈線、刻目、外面スス	I -9 58
83	156		9.3	20.2	0.7	横ナデ、縦ハケ目	横ナデ、縦ハケ目	橙	褐	砂粒、角閃石、長石、雲母	良好	鈎状突帯、外面赤色顔料	F-6 P-3
84	157	29.3		5.3	0.8		日 横ナデ	にぶ黄橙		砂粒、石英、角閃石、長石	良好	口禄部沈線1条、内面赤色 厳料	J -9 74, 75
84	158	26.2		1.4		横ナデ	横ナデ	にぶ橙	にぶ橙	砂粒、角閃石、長石	良好	entil	J -8一括
84	159	28.6	1	7.0	0.5	横ナデ	横ナデ	にぶ橙	にぶ橙	細砂粒、角閃石	良好	外面スス	J -7一括
84	160	25.4		5.1	0.5	横ナデ	横ナデ	にぶ橙	橙	砂粒、角閃石、長石	良好		J -8一括
84	161	22.8		1.8	1.0	横ナデ	横ナデ	浅黄橙	浅黄橙	砂粒、角閃石、長石	良好	口録部赤色顔料	I -10 68
84	162	25.6		4.2	0.5	横ナデ	横ナデ、縦ハケ 目	橙	橙	砂粒、角閃石、長石	良好	全面赤色顔料	J-10 161
84	163	-	15.6	4.1	0.7	横ナデ	ミガキ	にぶ黄橙	赤褐	砂粒、長石、雲母	良好	外面赤色顔料	K-9 71
84	164		15.6	2.2	0.7	横ナデ	横ナデ	にぶ黄橙	赤褐	砂粒、長石、雲母	良好	外面赤色顔料	J-8 18号土坑
1													

磨製石鏃(1、2)

1は頁岩製である。I-10区出土で、ほぼ完形である。全長3.3cm、幅1.8cm、厚さ0.3cm、重さ2.4gである。平基で、最大幅が基部にある砲弾形になっている。また、全体にススが付着している。**2**も頁岩製である。J-9区出土である。全長4.6cm、幅3.3cm、厚さ0.3cm、重さ4.9gを計る。平基で、最大幅は基部にあり、側辺が緩い曲線になっている二等辺三角形状の形態である。また、基部は折れ面を磨いて再加工されている。このことから、石剣の先端部を石鏃に再生したものと考えられる。

磨製石剣(3)

J-6区出土、頁岩製である。残存長7.9cm、幅3.5cm、厚さ0.7cm、重さ23.0gである。両刃で、基部は茎(なかご)を作りだし、目釘穴と思われる穿孔がある。このことから、柄に装着して使用されたものと考えられる。なお、上半部と茎の先端を欠損している。

石包丁(4~11)

4はK-10区出土、左端部の破片で、頁岩製である。長さ3.5cm、残存幅3.8cm、厚さ0.4cm、重さ6.4gを 計る。刃部、背部ともに外弯し、穿孔は上半部にある。5は一括資料である。砂岩製で、両端を欠損してい る。長さ5.3cm、残存幅4.1cm、厚さ0.7cm、重さ28.2gを計る。刃部と背部は直線で、ほぼ平行し、穿孔は中 央部に左下がりで、両側から開けられている。6は1-9区出土、石包丁の一部の破片で、砂岩製である。 外弯した刃部を持つ。穿孔は両側から開けられている。長さ3.6cm、残存幅5.9cm、厚さ0.5cm、重さ16.6gを 計る。7はJ-9区出土である。砂岩製で、左半部を欠損している。背部は直線であり、刃部は直線で背部 に平行したあと、端部で弯曲して背部に至る刀状の形態をしている。穿孔は中央部やや上寄りに両側から開 けられている。長さ3.7cm、残存幅6.5cm、厚さ0.6cm、重さ28.0gを計る。8は頁岩製である。I-10区出土 で、ほぼ完形である。背部は弱く外弯し、刃部は強く外弯する半月形に近い形をしている。穿孔は上半部に 両側から開けられている。また正面穿孔部には糸擦れ痕、刃部には使用痕が残る。長さ4.6cm、幅10.4cm、厚 さ0.9cm、重さ50.0gである。**9**もI-10区出土である。砂岩製で、左半部を欠損している。長さ4.2cm、残 存幅8.2cm、厚さ0.7cm、重さ47.6gを計る。背部は直線であり、刃部は直線で背部に平行したあと、端部で 弯曲して背部に至る刀状の形態をしている。穿孔は中央部に左下がりで、両側から開けられている。10は一 括資料である。石包丁の一部の破片で、砂岩製である。外弯した刃部を持つ。長さ4.1cm、幅5.1cm、厚さ0.6cm、 重さ17.8g である。11も石包丁の一部の破片である。K-10区出土で、砂岩製である。刃部の形態は不明で あるが、背部は直線である。穿孔は両側から開けられている。長さ5.2cm、幅5.8cm、厚さ0.6cm、重さ31.6g である。

6. その他の遺物 (第79図)

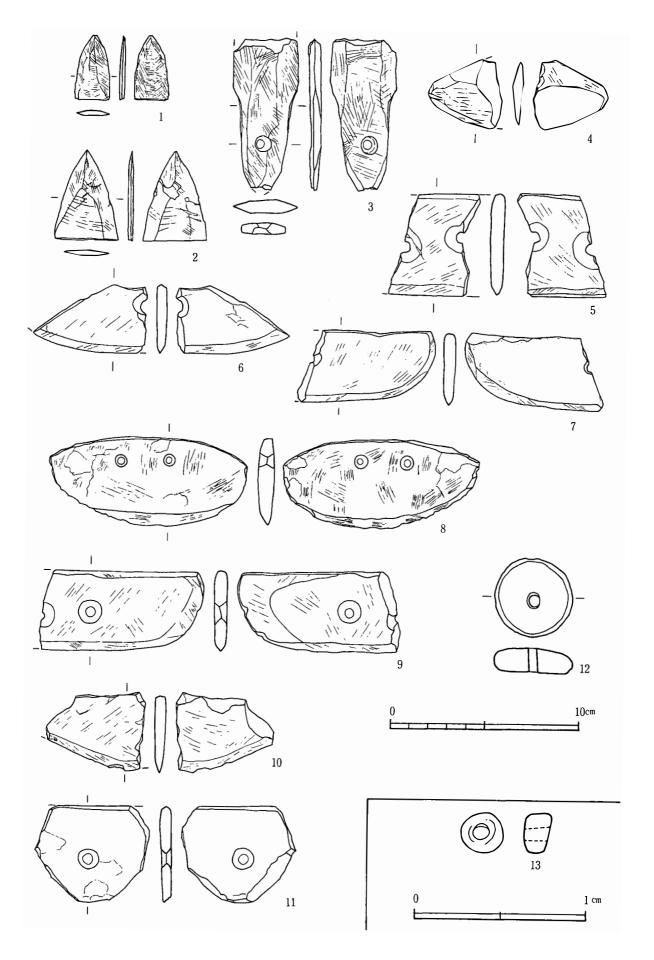
土器、石器以外の遺物としては、紡錘車が1点、ガラス玉が1点出土している。いずれも包含層からの出土である。

紡錘車 (12)

12は、土製の紡錘車である。I-9区から出土した。直径4.0cm、厚さ1.3cmである。

ガラス玉 (13)

13はF-5区から出土した。青色で直径0.25cm、厚さ0.15cmを計る。



第79図 I区出土弥生石器及びその他の遺物

第Ⅳ章 平成5 (1993) 年度第Ⅱ調香区

第1節 調査の概要

第Ⅱ調査区(Ⅱ区と略す)は、第Ⅰ調査区の東方約50mのところに位置する。北バイパスの建設に伴って 遮断される熊本北高校と県道託麻北部線を結ぶ登校道路の付け替え予定地にあたる。

調査区の西隣を通る現在の登校道路の建設の際に行われた昭和63年度の発掘調査では、弥生時代の住居跡をはじめ、押型文土器、弥生土器、土師器等が出土している。

今回の道路予定地からも遺物、遺構の出土が予想されたため、熊本工事事務所との協議の結果、平成5年度に発掘調査を行うことになった。このため、平成5年度の調査は本道部分をⅠ区、登校道路部分をⅡ区として区別することにした。

Ⅱ区の調査は、 I 区の調査の終了後、平成6年1月31日から開始した。重機による表土剥ぎの後、10m四方のグリッドを設定し、調査区全体の平面図を平板測量で作成した。グリッドの基準は I 区と同じ磁北に合わせ、南北軸のアルファベットも I 区に対応させた(第80図)。

表土剥ぎの結果、調査区の北側、B-4、5区は包含層は無く、VI層が露頭したため、調査対象から外すことにした。

調査区の清掃後、Ⅲ層上面で竪穴住居跡3基が確認できた。このため、調査はまず、住居跡の掘り下げおよび実測から始めることにした。住居跡の埋土からは土師器が出土したため、この住居跡は古墳時代のものであることが確認された。住居跡の調査と合わせて、包含層の調査も開始した。包含層からは、縄文早期、後期、晩期の土器および土師器が出土した。出土した遺物は、平面図に出土位置を記し、同時に絶対高を記入して取り上げた。

包含層の調査終了後、土層の観察と、縄文時代以前の文化層の有無の確認のため、グリッドの南北軸に沿ってトレンチを設定したが、遺物等は出土しなかった。このトレンチの実測が終了した平成6年3月25日に調査を終了した。

第2節 古墳時代の遺構と遺物

1. 竪穴住居跡 (第81~83図)

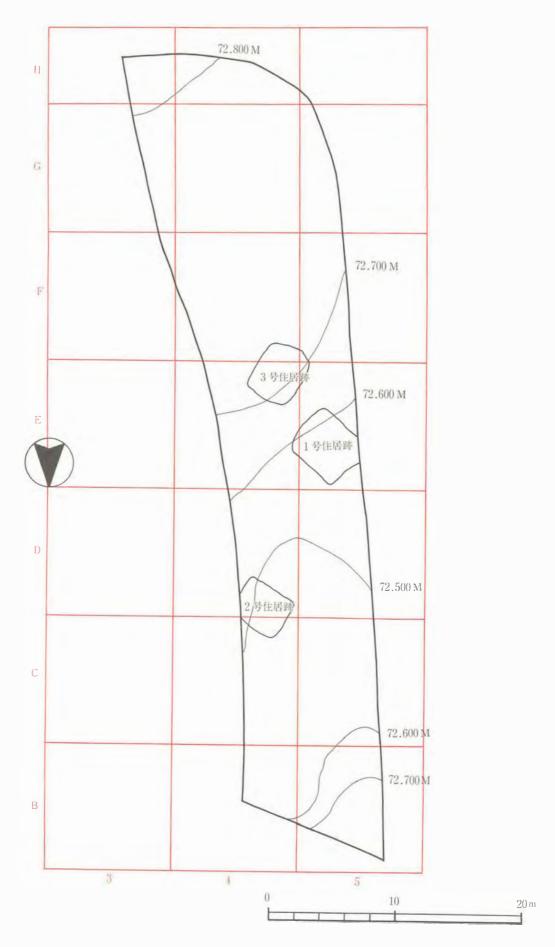
Ⅱ 区からは、竪穴住居跡が合計3基確認された。いずれも埋土中から土師器が出土したことから、古墳時 代の住居跡と思われる。出土した土師器については、主要なものを図化して、住居跡ごとに掲載した。

それぞれの住居跡の詳しい内容については、以下のとおりである。

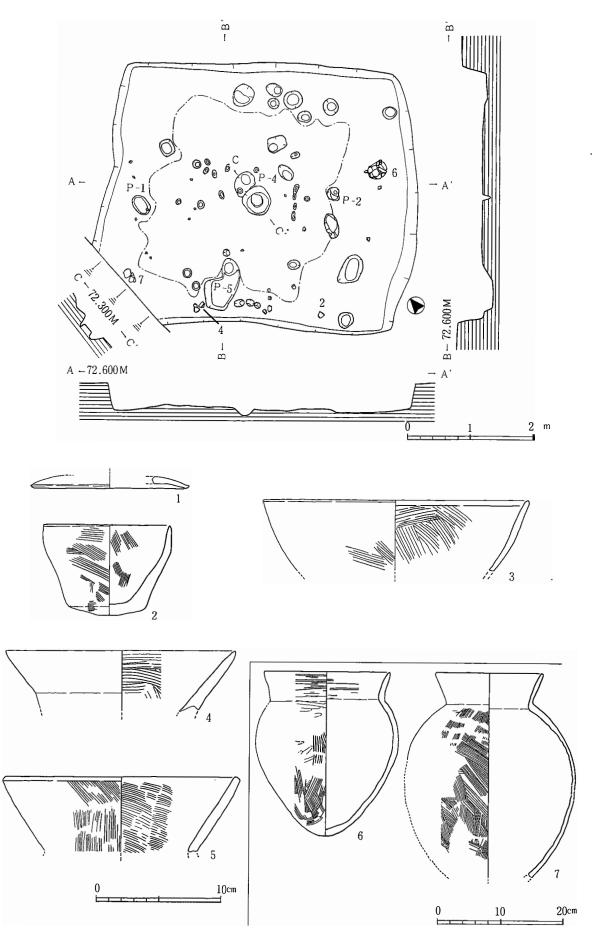
1号住居跡(第81図)

1号住居跡は、E-4、E-5区で確認された。西側の隅部は調査区外のため不明であるが、長軸500cm、短軸410cm、深さ約40cmの方形であると考えられる。なお、長軸の方位は $N-42^\circ$ — Wである。柱穴は位置関係から、P-1、P-2の2本柱と考えられるが、深さが $10\sim20$ cmと浅く、柱の痕跡も見られないことから確実なものではない。中央部に炭や焼土を埋土に含んだ土坑が2つ(P-3、P-4)があり、炉の跡ではないかと考えられる。また、南西側の壁際中央部に貯蔵穴と思われる大きめの土坑(P-5)がある。

出土した土師器のうち、実測可能な7点を掲載した。1は高坏の脚部と思われる破片である。橙色を呈し、 復元した底径は12.6cm、現存高は0.9cm、最大器厚は0.5cmである。胎土は長石、角閃石を含む。橙色を呈し、



第80図 平成5年度第Ⅱ調査区遺構分配布図



第81図 Ⅱ区1号住居跡実測図及び出土土器

焼成は良好である。2は小型の鉢型土器である。完形で出土した。口径10.1cm、底径6.1cm、器高7.1cm、最 大器厚は1.0cmを計る。直口する口縁と丸みを持ったレンズ状の底部を持ち、内面の調整は上部横ナデ、下部 ヘラケズリ、外面はハケ目調整である。胎土は小石、砂粒、長石、石英、角閃石を含む。色調はにぶい橙色 で、焼成は良好、外面にはススが付着している。3、4、5は壺または甕の口縁部と考えられる破片である。 3は、復元口径21.2cm、現存高は5.6cm、最大器厚0.5cmで、薄く、やや内弯気味の器形である。内面はハケ 目、外面はハケ目のあとナデ調整を行っている。胎土は砂粒、長石、角閃石を含み、色調はにぶい黄橙色で ある。焼成は良好で、外面にはススが付着している。4は、口径18.4cm、現存高4.8cm、最大器厚は1.0cmで、 外反する口縁をもつ。内面はハケ目調整、外面は横ナデ調整である。胎土は砂粒、長石、角閃石を含む。色 調はにぶい黄橙色で、焼成は良好、内面に薄くススが付着している。5は、復元口径19.0cm、現存高は6.0cm、 最大器厚0.7cmである。口縁は外傾するが、口唇部でやや内弯する。内外面ともハケ目調整である。胎土は砂 粒、長石、角閃石を含む。色調は内面にぶい橙色、外面はにぶい黄橙色で、焼成は良好、外面にススが付着 している。6は甕で、口縁の一部を欠くが、ほぼ完形である。床面直上から出土した。口径20.2cm、最大径 22.9cm、器高26.0cm、最大器厚0.9cmを計る。丸底で、やや外反気味の口縁をもつ。最大径は胴部上半にある。 調整は内面へラケズリ、外面ナデで、一部ハケ目を残す。胎土は砂粒、長石、角閃石を含む。色調は内面灰 黄褐色、外面にぶい黄橙色を呈す。焼成は良好で、内外両面ともススが付着している。7は壺である。口径 20.2cm、復元最大径22.9cm、現存高26.0cm、最大器厚は1.0cmを計る。直線的に立ち上がる口縁部をもち、最 大径は胴部中位にある。外面はハケ目調整のあと、口縁部を横ナデ、内面は胴部ヘラケズリ、口縁部横ナデ で仕上げている。なお、内面の胴部上半には、成形時の粘土の巻き上げ痕が残っている。胎土は砂粒、長石、 角閃石を含む。色調は内面にぶい黄褐色、外面はにぶい黄橙色で、焼成は良好、外面にススが付着している。

2号住居跡 (第82図)

2号住居跡は、C-4、D-4区で確認された。東側の隅部が調査区外になり全容は不明であるが、長辺210cm、短辺170cm、深さ40cmの方形の住居跡である。長軸の方位は $N-55^\circ$ -Wである。柱穴は位置関係からP-1、P-2の2本柱と考えられるが、深さは10cm程度しかなく、確実なものではない。ただ、中央部にある小土坑P-3は深さが60cmと深く、大きさや構造等からも柱穴の条件を備えており、この土坑を柱穴とする1本柱の住居跡であった可能性もある。P-3と北西側壁との中間にある小土坑P-4は埋土が焼土であった。このため炉跡である可能性もあるが、規模が小さく、確実なものとはいえない。また、南西側の壁際に貯蔵穴と思われる大きめの土坑(P-5)がある。

実測可能であった土師器は2点である。1 は高坏上部の破片である。復元口径18.6cm、現存高は5.6cm、最大器厚0.7cmである。上半部と下半部の接合部で段をなし、上半部は大きく開いて、全体は浅くなっている。調整は内面がナデ、外面は下半部がハケ目、上半部がナデである。胎土は砂粒、長石を含み、色調は内面が橙色、外面はにぶい黄橙色で、焼成は良好である。内外両面ともススが付着している。2 は小型丸底壺で、床面直上から出土した。口径13.8cm、最大径15.8cm、器高16.8cm、最大器厚0.7cmを計る。直線的に外傾するやや長めの口縁部をもち、最大径は胴部上半にある。内面へラケズリ、外面はハケ目調整である。胎土は砂粒、長石、角閃石を含む。色調は内面にぶい黄褐色、外面にぶい黄橙色を呈し、焼成は良好である。内外両面ともススが付着している。

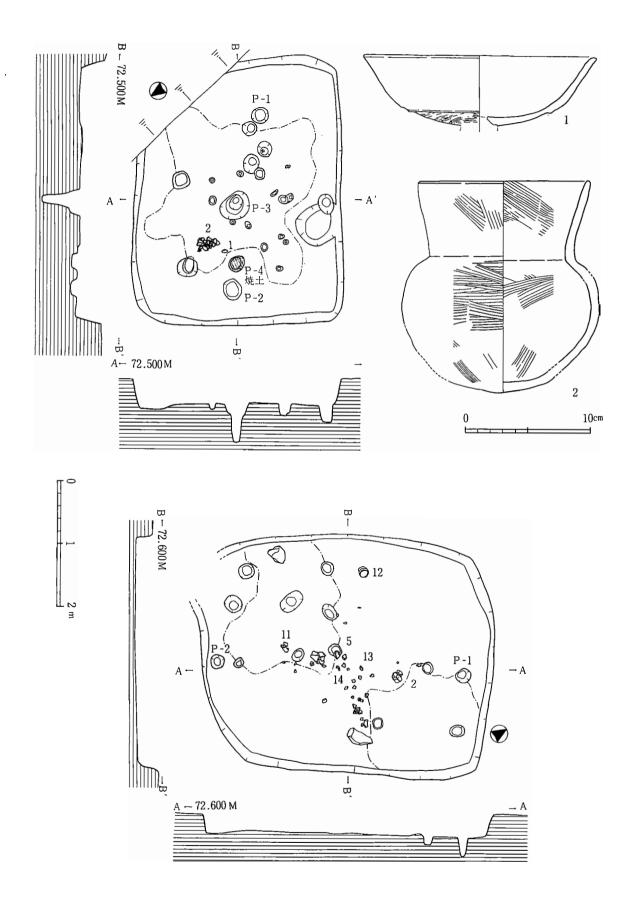
3号住居跡 (第82、83図)

3号住居跡は、E-4、5区とF-4、5区の境で確認された。埋土と地山の境が不明確であったため、トレンチを入れて壁面を確認しつつ掘り下げたが、西側の隅は確認することができなかった。また、掘り下げの際に、南側と北側の部分を掘り過ぎたため、床の硬化面を確認することができなかった。

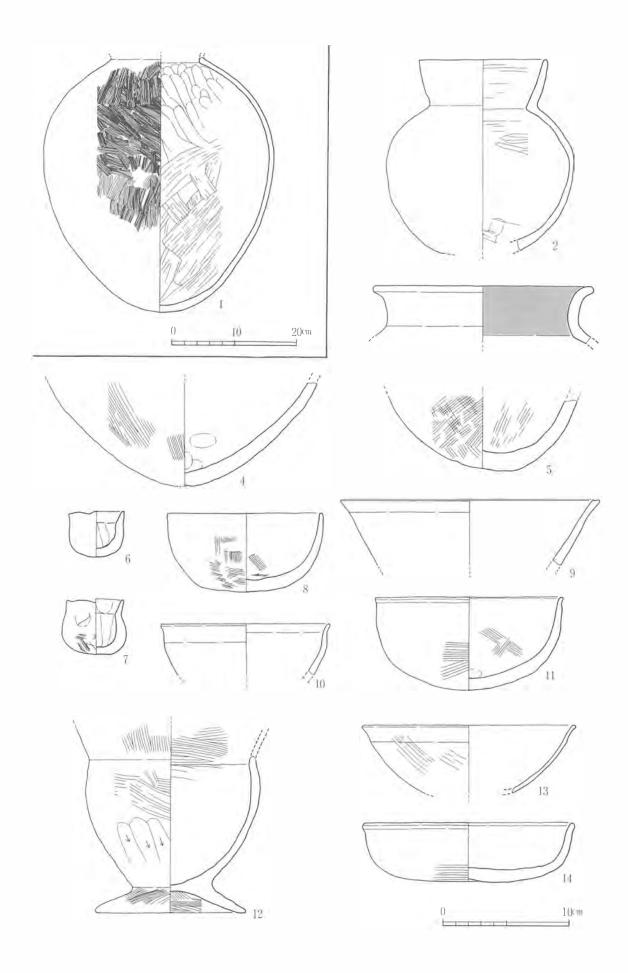
住居跡は長軸470cm、短軸380cm、深さ35cmの方形で、長軸の方位は $N-30^{\circ}-E$ である。柱穴は深さや大

きさ、位置関係などからP-1、P-2の2本柱であると考えられる。また、炉跡や貯蔵穴と思われる掘り込みは確認できなかった。

1 は大型の壺である。最大径36.8cm、現存高40.4cm、最大器厚は1.2cmを計る。丸底で、胴部中位やや上に 最大径をもつ。調整は内面の胴部上半が指によるナデ、下半がヘラケズリで、外面は全体にハケ目が施され ている。胎土は砂粒、長石、角閃石を含む。橙色を呈し、焼成は良好、外面にススが付着している。2は小 型の壺である。底部は丸底になると考えられる。口径10.2cm、最大径14.9cm、残存高15.2cm、最大器厚0.8cm を計る。口縁部は内弯して立ち上がり、最大径は胴部中位にある。調整は内面が胴部ヘラケズリ、口縁部横 ナデ、外面がナデで仕上げられている。胎土は砂粒、長石、角閃石を含み、色調は内面がにぶい橙色、外面 はにぶい黄橙色で、焼成は良好、外面はススが付着している。3は壺の口縁部の破片である。復元口径17.5cm、 現存高は4.6cm、最大器厚0.5cmである。口縁は外弯して立ち上がる。内外面ともナデ調整である。内面には 赤色顔料の塗布痕があり、外面にも塗られていた可能性がある。胎土は砂粒、長石、角閃石を含む。浅黄橙 色を呈し、内外両面ともススが付着している。4、5は甕、または壺の底部の破片である。いずれも丸底で ある。4は現存高8.2cm、最大器厚1.5cmで、内面がヘラケズリ、外面がハケ目で調整されている。胎土は粗 い砂粒、長石、角閃石を含む。色調は内面が褐色、外面にぶい黄褐色を呈し、焼成は良好である。内外両面 ともススが付着している。5は現存高5.8cm、最大器厚1.7cmで、4と同じく内面ヘラケズリ、外面ハケ目調 整である。胎土は粗い砂粒と長石、石英を含む。色調はにぶい橙色で、焼成は良好、内外両面ともススが付 着している。6、7は手捏ねのミニチュア土器である。いずれもほぼ完形の状態で出土した。6は、口径4.4cm、 器高3.6cm、最大器厚焼成は良好0.7cmを計る。胎土は砂粒、長石、角閃石を含む。色調は内面がにぶい黄褐 色、外面にぶい黄橙色を呈す。焼成は良好で、内外両面ともススが付着している。7は、口径4.6cm、器高4.4cm、 最大器厚0.9cmである。胎土は砂粒、長石、角閃石を含む。色調は内面がにぶい褐色、外面がにぶい黄橙色を 呈する。焼成は良好である。8~11、13、14は碗である。8は、口径12.4cm、器高6.2cm、最大器厚1.0cmを 計る。半球状の体部で、丸底である。内面はハケ目の上をナデで仕上げ、外面はハケ目調整である。胎土は 砂粒、長石、角閃石を含む。色調は浅黄橙色で、焼成は良好、外面にススが付着している。9は口縁部と思 われる破片である。復元口径は20.6cm、現存高は5.6cm、最大器厚は0.6cmである。外反気味の口唇をもち、 内外面ともナデ調整である。胎土は長石、石英、角閃石を含む。にぶい橙色を呈し、焼成は良好、外面にス スが付着している。10は口縁部の破片で、復元口径は13.6cm、現存高は4.0cm、最大器厚0.6cmである。口縁 部はいったんくびれて、口唇が外反する。内外面ともナデ調整で、にぶい黄橙色を呈する。胎土は砂粒、長 石、角閃石を含む。焼成は良好で、外面にはススが付着している。11は、復元口径15.0cm、現存高7.3cm、最 大器厚1.1cmを計る。半球状の体部で、口唇が少し外反する。調整は内面がナデ、外面がハケ目で、口縁部を ナデで仕上げている。胎土は砂粒、長石、角閃石を含む。色調はにぶい橙色で、焼成は良好、外面にススが 付着している。13は口縁部の破片で、復元口径は17.0cm、現存高は5.4cm、最大器厚0.3cmである。口縁部は いったんくびれて、口唇がわずかに外反する。内面はナデ調整、外面はヘラケズリで、口縁部をナデで仕上 げている。胎土は長石、石英、角閃石を含む。色調は橙色で、焼成は良好である。14は、復元口径16.8cm、 現存高4.5cm、最大器厚1.0cmを計る。浅い体部で、口縁部は直立し、口唇が少し外反する。内面ナデ調整、 外面はハケ目調整で、口縁部をナデで仕上げている。胎土は小石、砂粒、長石、石英、角閃石を含む。内外 両面とも赤褐色を呈し、ススが付着している。焼成は良好である。12は脚付鉢である。底径は12.0cm、胴部 最大径は13.9cm、現存高は15.2cm、最大器厚0.6cmを計る。口縁は外傾し、最大径は胴部上半にある。脚部は 低く、大きく開いている。内面の調整は胴部ヘラケズリ、口縁部がハケ目、外面は口縁部と胴部上半がハケ 目、胴部下半がヘラケズリである。また、脚部は内外面ともハケ目調整である。胎土は砂粒、長石、角閃石、 雲母を含む。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色を呈する。



第82図 Ⅱ区2、3号住居跡実測図及び2号住居跡出土土器

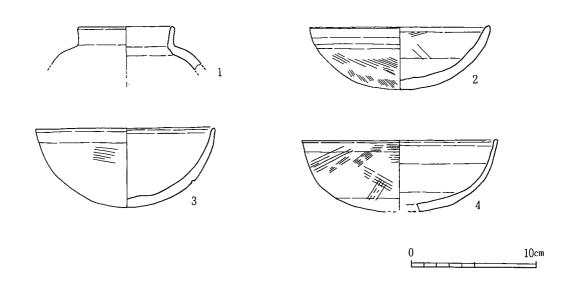


第83図 Ⅱ区3号住居跡出土土器

2. 土師器 (第84図)

Ⅱ区から出土した土師器のうち、実測可能なものは4点であった。

1は、小型の壺の口縁部の破片である。F-5区から出土した。復元した口径は7.8cm、現存高は3.4cm、最大器厚は0.8cmである。口縁はほぼ直立している。胎土は細砂粒を含む。内外面ともナデ調整で、焼成は良好、浅黄橙色を呈する。2、3、4はいずれも碗で、半円形の体部をもち、丸底である。2は、C-4、D-5区から出土した。復元口径は14.3cm、器高は4.9cm、最大器厚は1.0cmである。内面はナデ調整、外面はハケ目が施されている。胎土に砂粒、長石を含む。内外両面とも橙色で、焼成は良好、外面にススが付着している。3もC-4、D-5区から出土した。口径は14.6cm、器高は6.2cm、最大器厚は0.5cmである。内外面ともナデ調整で、胎土に砂粒、長石、角閃石を含む。色調は橙色、焼成は良好で、外面にススが付着している。4は、D-5区から出土した。復元口径は15.6cm、現存高は6.2cm、最大器厚は0.5cmである。調整は内面ナデ、外面ハケ目である。胎土は長石、角閃石を含む。内外両面とも橙色を呈し、焼成は良好で、外面にススが付着している。



第84図 II区出土土師器

第3節 その他の時代の遺物

1. 十器 (第85図)

■区から出土した古墳時代以外の土器は、ほとんどが縄文時代のもので、弥生時代のものがわずかにある。 縄文土器は時期的には早、前、後、晩期にあたり、I区とほぼ同じである。以下、これらの土器について時 期別に見ていきたい。なお、個別の土器の計測値および観察結果については「I区出土縄文土器観察表」(第 表)にまとめている。

(1) 縄文早期土器

押型文土器、条痕土器が出土した。

押型文土器(1~7)

1 が格子目文で、その他は山形文である。 I 区の項で述べた押形文土器の形態分類を当てはめると、 1 ~ 5 が I A 類、 6、 7 が I B 類になる。なお、 5 は口唇にも押形文が施文されている。

また、2と5は斜位施文、その他は横位施文である。

条痕土器 (9~13)

I 区の項で述べた条痕土器の形態分類を当てはめると 9、11、12が A 類、10、13が B 類になる。施文方向は10、12、13が横位、 9、11は縦横併用である。

無文土器 (14、15)

14は直口口縁、15はわずかに外反気味の口縁である。

(2) 縄文前期土器

轟B武士器の口縁部破片が2点出土している。(16、17)

16は条痕調整した器面の上に小突帯が傾方向に2条貼り付けられている。また、17は同じく条痕調整した器面の上に小突帯が口縁と平行に1条貼り付けられ、口唇には刻目がある。

(3) 縄文後晩期土器

I区と同じ深鉢形土器と浅鉢形土器に分けた。

深鉢形土器 (18~26)

18はが外反する頸部に断面くの字型の口縁を持つ。口縁外面には2条の平行する沈線を持ち、屈曲部は大きく外側に張り出す。内外面とも研磨され、外面には赤色顔料の塗布痕がある。19は外反する頸部から直立気味に立ち上がる口縁帯を持ち、口縁体の外面は条痕がある。外面には赤色顔料の塗布痕がある。20~22は頸部で屈曲し、外傾する口縁部を持つ。20は内外面とも条痕の上をナデ調整、21は内面ナデ、外面研磨、22は内面研磨で、外面は条痕調整である。23、24はともに外反口縁で、内面は条痕の上ナデ調整、外面は条痕調整で、口唇に刻目を持つ。25は口縁部が外反する如意形口縁で、口唇には刻目があり、内外面とも研磨を受けている。26は口縁部に刻目突帯を持つ土器で、肩部の外面には線刻文を持つ。

浅鉢形土器 (27)

浅鉢形土器は1点のみである。わずかに内弯する口縁を持ち、内外面とも研磨されている。

底部 (28~33)

I区の後晩期底部の分類を当てはめると、34がQ類、30、31がSa類、28、29、32がSb類にあたる。



第85図 耳区出土土器 (8は1区出土)

(4) 弥生土器

底部1点(34)を掲載した。平底で、中期の壺形土器のものと思われる。

2. 石器 (第86、87図)

Ⅱ区から出土した石器は、合計11点である。

台形石器 (第86図1)

B-4区出土である。 II 層からの出土であるが、一括遺物であるため、出土状況等は明確ではない。黒曜石製で、長さ1.9cm、幅1.8cm、厚さ0.4cm、重さ1.2gを計る。

石鏃(2)

1号住居跡の埋土中より出土した。期部にV字状の抉りの入った凹基の石鏃で、左脚部を欠損している。 黒曜石製で、長さ2.7cm、幅1.2cm、厚さ0.5cm、重さ1.2gを計る。

石匙(3)

G-4区出土である。安山岩製で、長さ2.4cm、幅5.3cm、厚さ0.9cm、重さ11.0gを計る。

楔形石器(4)

1号住居跡の埋土中より出土した。黒曜石製で、長さ2.5cm、幅2.3cm、厚さ0.4cm、重さ4.6gを計る。

二次加工のある不定形石器(5)

1号住居跡内の小土坑 P — 4の埋土中より出土した。黒曜石製で、左側辺に二次加工を施している。長さ 2.6cm、幅2.0cm、厚さ0.2cm、重さ1.6gを計る。

使用痕のある剥片(6~8)

使用痕のある剥片は、3点出土した。いずれも黒曜石製である。

6 は 3 号住居跡の埋土中より出土した。縦長剥片で、両側辺に使用痕がある。長さ2.8cm、幅1.6cm、厚さ0.3cm、重さ0.6gを計る。

7はG-3区出土である。底辺と左側辺に両側辺に使用痕がある。長さ3.0cm、幅3.4cm、厚さ1.1cm、重さ8.3gを計る。

8は1号住居跡の埋土中より出土した。縦長剥片で、両側辺に使用痕がある。長さ2.3cm、幅2.2cm、厚さ0.4cm、重さ2.0gを計る。

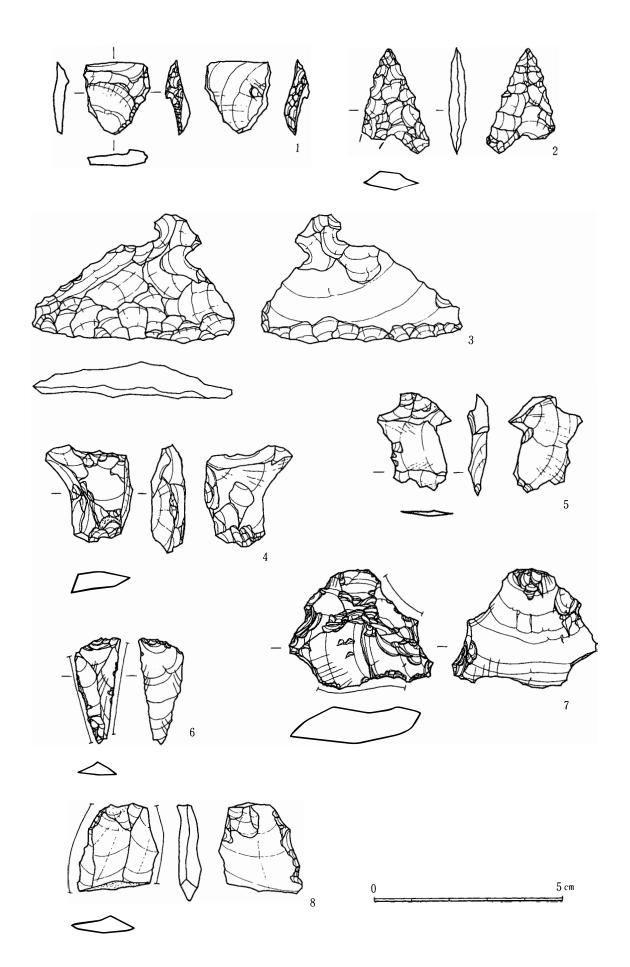
磨石・敲石 (第87図 9~11)

磨石・敲石は、3点出土した。いずれも砂岩製である。

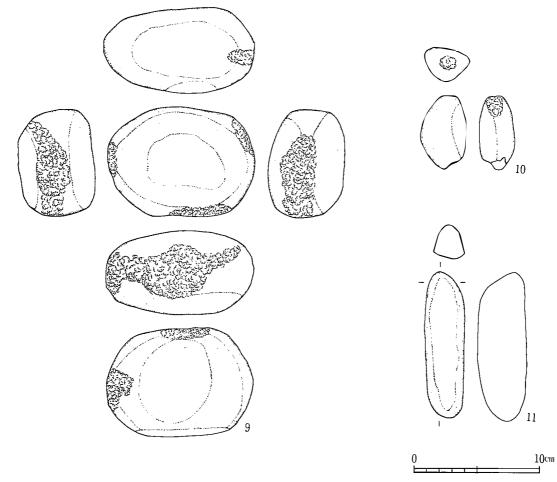
9は1号住居跡の埋土中より出土した。長さ11.7cm、幅8.4cm、厚さ6.1cm、重さ1,080.0gを計る。

10はD-5区より出土した。長さ5.8cm、幅3.7cm、厚さ2.7cm、重さ70.0gを計る。

11もD-5区より出土した。長さ11.4cm、幅3.1cm、厚さ2.7cm、重さ187.0gを計る。



第86図 II区出土石器(1)



第87図 II区出土石器(2)

第16表 Ⅱ区出土縄文土器観察表

図版番号	遺物 番号	底径 (cm)	現存高 (cm)	器厚 (cm)	調整(内面)	調整(外面)	色 調 (内面)	色 調 (外面)	胎 土	焼成	備考	取上番号
85	1	(CIII)	6.6	1.2	ナデ	格子目文	褐	灰褐	砂粒、石英、角閃石、長石	良好	 両面スス	C-4一括
85	2		3.6	1.4	ナデ	山形文	にが橙	にぶ橙	砂粒、角閃石、長石	良好		C-4一括
85	3		4.0	1.2	ナデ	山形文	にが橙	灰褐	砂粒、石英、角閃石	良好	両面スス	G-4一括
85	4		4.5	1.0	ナデ	山形文	にぶ黄橙	にが橙	砂粒、石英、角閃石、長石	良好	外面スス	D-5括
85	5		8.0	1.2	ナデ	山形文	浅黄	にぶ黄橙	石英、角閃石	良好	ロ暦部山形文、外面薄くスス	G-3一括
85	6		6.4	1.5	ナデ	山形文	橙	橙	砂粒、角閃石、長石	良好	内面スス	C-5 5
85	7		7.5	1.8	ナデ	山形文	橙	橙	粗砂粒、石英、角閃石、長石	良好	外面薄くスス	E-4一括
85	8		5.0	1.0	山形文	山形文	にぶ黄橙	にぶ黄橙	砂粒、角閃石、長石	良好	両而スス	K-9 154
85	9		5.2	1.0	ナデ	条痕	橙	明赤褐	砂粒、角閃石、長石	良好		一括
85	10		4.7	1.2	条痕の上ナデ	条痕	浅黄橙	浅黄橙	砂粒、角閃石、長石	良好		F-5一括
85	11		4.5	1.1	貝殼条痕	条痕	にぶ橙	にぶ橙	粗砂粒、石英、角閃石、長石	良好	暦部刻目、内面薄くスス	C-4一括
85	12		3.0	0.5	ナデ	条痕	にぶ黄橙	にぶ黄橙	角閃石、長石	良好	内面スス	一括
85	13		5.2	1.0	ナデ	条痕	にぶ黄橙	にぶ黄橙	石英、角閃石、長石	良好	外面薄くスス	G-5 10
85	14		4.7	0.9	ナデ	ナデ	明黄褐	明黄褐	砂粒、石英、角閃石、長石	良好		C-5一括
85	15		6.5	0.8	ナデ、指頭痕	ナデ	褐灰	褐灰	砂粒、石英、角閃石、長石	良好	両面スス	E-4一括
85	16		2.6	0.7	条痕	貝殻条痕の上小突帯2条	明赤褐	明赤褐	石英	良好		C-5一括
85	17		2.5	0.7	条痕	貝殻条痕の上小突帯1条	橙	橙	石英、角閃石	良好	口唇部刻目	D-4一括
85	18		6.0	0.6	ミガキ	ミガキ、凹線 2条	黄橙	黄橙	砂粒、角閃石、長石	良好	外面赤色顔料、外面スス	2号住上層
85	19		3.4	0.9	ミガキ	条痕の上ナデ	にぶ黄橙	橙	石英、長石	良好	外面赤色顔料、外面スス	F-4, E-5一括
85	20		5.9	1.3	条痕の上ナデ	条痕の上ナデ	淡黄	淡黄	砂粒、長石	良好		B-4一括
85	21		5.6	0.6	ミガキ	ミガキ	灰黄褐	灰黄褐	砂粒、石英、角閃石、長石	良好	両面スス	E-4一括
85	22		4.5	0.8	ナデ	条痕	暗灰黄	暗灰黄	石英、角閃石	良好		D-4 2層
85	23		4.8	0.8	条痕の上ナデ	貝殼条痕	橙	にぶ黄橙	石英、角閃石、長石	良好	口唇部刻目、外面スス	一括
85	24		6.0	0.8	条痕の上ナデ	貝殼条痕	橙	にぶ黄橙	角閃石、長石、小石	良好	口唇部刻目、外面スス	G-5 3
85	25		4.9	0.4	ミガキ	ミガキ	にぶ黄橙	にぶ黄橙	石英、角閃石、長石	良好	内面にスス付着	G-4一括
85	26		5.8	0.8	ミガキ	ナデ、ヘラ描文、刻目突帯1条	明黄褐	にぶ黄橙	砂粒、石英、角閃石、長石	良好	両面スス	1号住一括
85	27		3.8	0.5	ミガキ	ミガキ	浅黄橙	浅黄橙	砂粒、角閃石、長石	良好	両面スス	C-4一括
85	28	7.6	1.8	1.0	ナデ	ナデ	浅黄橙	浅黄橙	砂粒、石英、角閃石、長石	良好		F-5一括
85	29	7.8	2.4		ナデ	ナデ	にぶ橙	にぶ橙	砂粒、角閃石、長石	良好		F-4括
85	30	8.8	3.3	1.4		ナデ	浅黄橙	にぶ黄橙	砂粒、角閃石、長石、小石	良好	外面、底面スス	一括
85	31	8.2	3.4	1.0		ナデ	黄褐	にぶ黄褐	小石、砂粒、角閃石、長石	良好	内面薄くスス	一括
85	32	10.2	5.0	1.0	貝殼条痕	貝殼条痕	にぶ褐	にぶ褐	粗砂粒、角閃石、長石、小石	良好	内面薄くスス	D-4一括
85	33	6.5	2.3		ナデ	ナデ、指頭痕	にぶ黄橙	l	砂粒、角閃石、長石	良好		一括
85	34	3.0	2.2	1.0	ナデ	ナデ	にぶ黄橙	灰黄褐	砂粒、角閃石、長石	良好	外面、底面スス	F-5一括

第V章 平成7 (1995) 年度調査

第1節 調査の概要 (第88図)

平成7年度調査区は、平成4年度調査区の南隣、平成5年度第I調査区の西隣にある。本来、この部分は 平成5年度第I調査区と一連のものとして調査される予定であったが、用地買収の都合により、平成7年度 に調査することになった。

平成7年5月11日より調査区の表土剥ぎに入った。表土は、開田の際の盛り土が、深いところで2m近くあり、包含層であるⅢ層のレベルは南側の平成4年度調査区とほぼ対応することがわかった。調査は5月16日から開始した。まず、調査区全体を清掃し、グリッド設定と調査区の平面図作成を行った。グリッドの基準は、平成5年度第Ⅰ調査区を基準として磁北に合わせ、南北軸のアルファベットも第Ⅰ調査区に対応させた。

調査区清掃の時点で、Ⅲ層上面に溝状の遺構と道路状の硬化面が確認され、掘り下げと実測を行った。この結果、溝状遺構の埋土は表土と同じで、比較的新しいものであることがわかった。また、道路状遺構も、遺物等は出土しなかったものの、溝状遺構とほぼ同じ時期のものと考えられた。また、一部に礫の集中した部分があり、集石の可能性があったため、実測を行ったが、調査の結果、礫層が露頭したものとわかった。

包含層の調査では、縄文早期、晩期、弥生中期の土器や、石鏃、打製石斧等の石器が出土したが、遺物の 出土量は、それほど多くはなかった。

6月30日に、実測作業、写真撮影がおわり、調査を終了した。

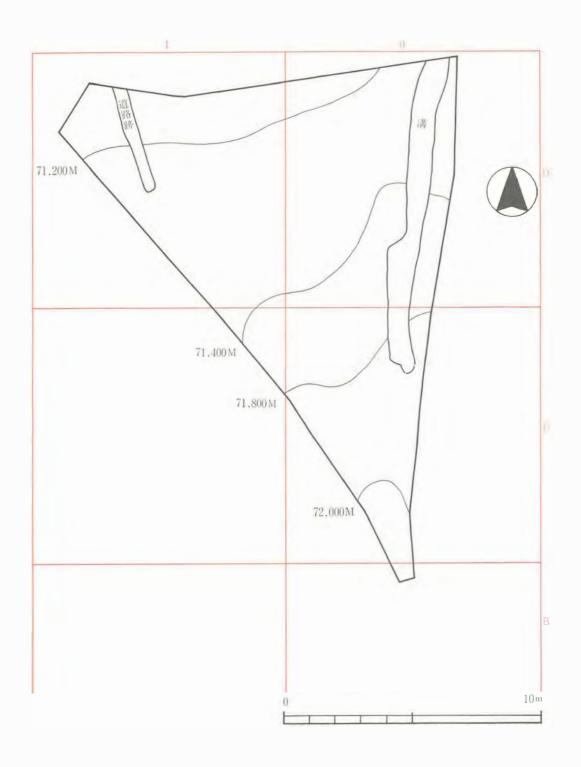
第2節 調査の成果

1. 土器 (第89図)

平成7年度調査区から出土した土器は、ほとんどが縄文土器であるが、弥生土器も数点出土した。このうち、口縁部と底部の破片6点を掲載した。詳しい内容は以下のとおりである。

縄文土器 (1~5)

1~3は縄文早期の山形押型文土器である。1は口縁部の破片である。現存高は9.2cmで、最大器厚は1.0cmである。直口口縁で、外面のみに施文が行われ、内面はナデ調整である。胎土には砂粒、長石、石英、角閃石を含む。色調は内面にぶい橙色、外面橙色で、焼成は良好である。2も口縁部の破片である。C-1区から出土した。現存高は2.8cm、最大器厚は1.0cmである。外反口縁で、内面は原体条痕と山形文、外面に山形文が施文されている。胎土は砂粒、長石、石英、角閃石を含む。にぶい黄橙色を呈し、焼成は良好である。3は底部の破片である。C-0区出土である。復元底径は4.4cm、現存高4.7cm、最大器厚は1.0cmを計る。平底で、外面に山形文が施文されている。胎土は砂粒、長石、石英を含む。4は縄文早期の条痕土器の口縁部の破片である。現存高9.2cm、最大器厚1.0cmで、直口口縁である。外面には条痕文があり、内面調整は磨耗で不明であるが、おそらくナデであると思われる。胎土には砂粒、長石、石英を含み、色調はにぶい褐色を呈する。焼成はやや不良で、両面にススが付着している。5は縄文晩期の鉢型土器の口縁部の破片で、現存高3.7cm、最大器厚0.8cmである。外反する頸部から、ほぼ直立する口縁部をもつ。内外両面ともナデ調整で、口縁部外面に条痕文が施されている。胎土に砂粒と角閃石を含む。にぶい黄橙色で、焼成は良好、外面に薄くススが付着している。



第88図 平成7年度調査区遺構分布図

弥生土器 (6)

6 は弥生中期の甕の口縁部の破片である。B-1 区出土で、復元口径23.0cm、現存高2.6cmを計る。口縁の 突帯は、上面がしゃくれてU字状にのび、内面に張り出しをもつ。内外面ともナデ調整で、浅黄橙色を呈す る。また、胎土は砂粒、長石、石英、角閃石を含む。焼成は良好で、外面に薄くススが付着している。

2. 石器 (第90図)

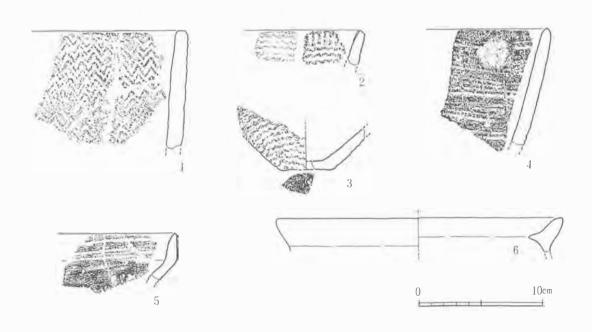
平成7年度調査区からは5点の石器が出土した。内訳は石鏃3点、二次加工のある不定形石器1点、打製石斧1点である。いずれも調査区西側のB-0、C-0区から出土している。いずれも包含層からの出土であるが、出土層位は明確にすることはできなかった。以下、これらについて、器種別に見ていきたい。

石鏃(1~3)

1は、C-0区出土で、安山岩製である。先端部を欠損している。二等辺三角形を呈し、抉りの浅い凹基の石鏃である。長さ2.0cm、幅1.9cm、厚さ0.3cm、重さ1.2gを計る。2は、B-0区出土で、黒曜石製である。右脚部の先端を欠損している。正三角形で、抉りがV字状の凹基の石鏃である。全長2.4cm、幅2.2cm、厚さ0.4cm、重さ1.4gを計る。3は、C-0区出土、黒曜石製である。二等辺三角形を呈し、抉りがV字状の凹基の石鏃である。全長2.4cm、幅2.2cm、厚さ0.4cm、重さ1.4gを計る。

二次加工のある不定形石器(4)

B-0区出土で、黒曜石製である。長さ2.1cm、幅3.2cm、厚さ0.5cm、重さ3.1gを計る。横長剥片の側辺に細かな調整加工を入れている。

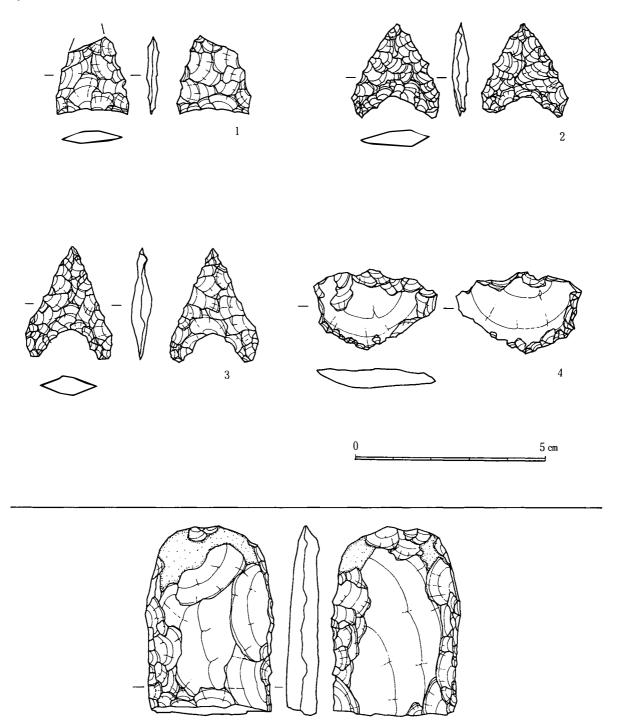


第89図 平成7年度調査区出土土器

5 cm

打製石斧(5)

B-0 区出土である。砂岩製で、下半部を欠損している。全体形は長方形(短冊形)になると推定される。 両側辺に調整加工が行われている。また、基部の両面に磨耗痕があることから、刃部として使われた可能性 もある。



第90図 平成7年度調査区出土石器

第VI章 岩倉山中腹遺跡出土甕棺墓

第1節 調査の概要

岩倉山中腹遺跡は、熊本市清水町兎谷に所在し、岩倉山(標高115.7m)の北斜面に広がる遺跡である。麓には県道託麻北部線が走る谷があり、それに並行して熊本北バイパスの予定路線がある(第91図)。

平成7年6月12日、熊本北バイパス工事現場において、甕棺墓が発見されたとの連絡があり、庵ノ前遺跡の調査中であった濱田、山田が現地に赴き、状況を確認した。甕棺墓は道路が岩倉山の尾根を切り通す部分の掘削中に発見され、1基が切り通し面に露出した状態であった。現地は岩倉山中腹遺跡に隣接していたが、分布調査においては、遺物等は確認されていなかった。

これを受けて、県文化課と熊本工事事務所との協議が現地で行われ、その結果、緊急に出土甕棺墓の調査を行うことになり、翌13日より調査に入った。

調査は、出土地点の測量、甕棺墓の平面及び断面図を作成、写真撮影などを行った。最後に周辺の調査を行い、出土甕棺墓は1基のみで、予定地内には、他に遺物・遺構は無いことを確認して、6月19日に調査を終了した。

第2節 調査の成果

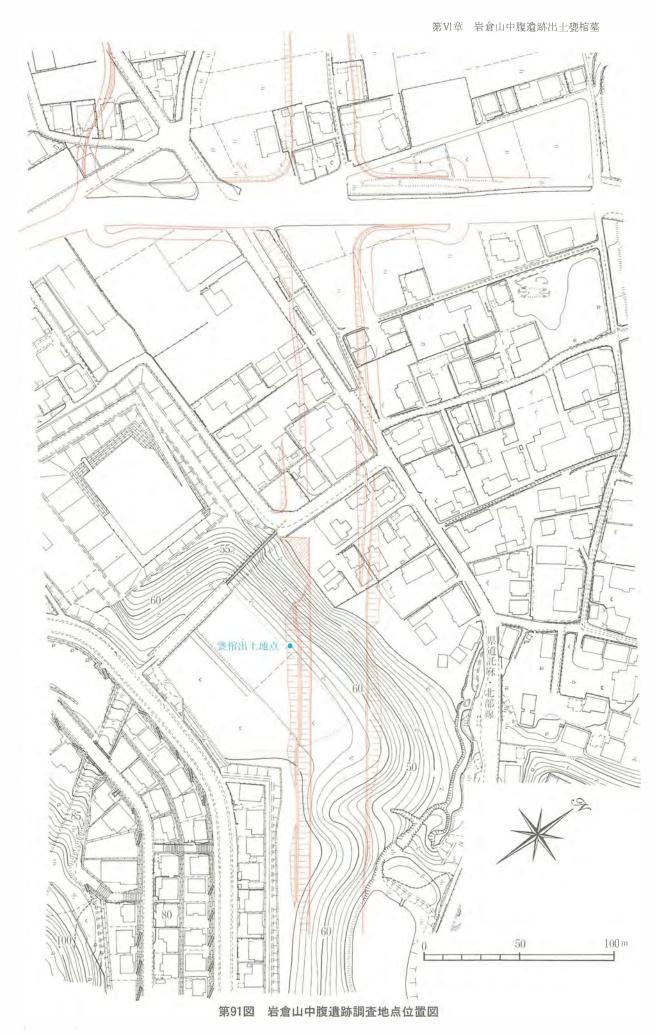
岩倉山中腹遺跡出土甕棺墓(第93、94図)

出土した甕棺墓は、大型の合口甕棺で、掘削により墓壙を削られ、上棺の大部分が破壊されていたが、下棺部分はほぼ原形をとどめていた。主軸はほぼ東西に一致しており、上棺が東方向を向いている。また、棺の埋納角度は約38°である。内部には土がかなり流入しており、人骨、遺物等は出土しなかった。また、合口部には目張り用と思われる粘土の一部が残っていた。

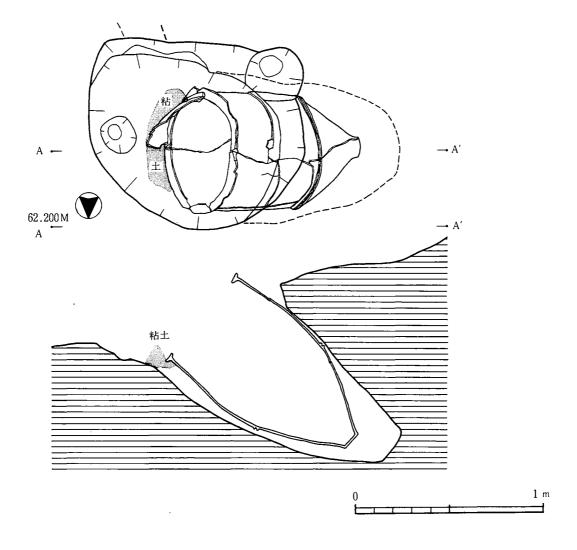
上棺は須玖式の鉢形土器である。底部から口縁部に向けて外反して開くが、胴部中央からやや内傾する。 口縁部は外傾したT字状、底部はやや上げ底状の平底で、外面の底部近くにハケ目調整が行われている。

下棺は須玖式の甕型土器で、胴部中央に最大径を持ち、そこから口縁に向かってほぼ直立する。突帯は2条で胴部中央よりやや下にある。口縁はほぼ平坦なT字状口縁である。胴部上半から下の外面はハケ目調整が行われている。

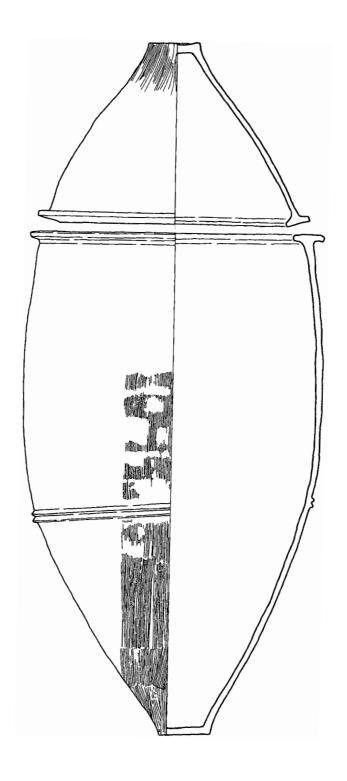
なお、この甕棺の計測値および観察結果については、「出土甕棺観察表」(第12表)にまとめている。

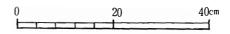


- 133 -



第92図 岩倉山中腹遺跡出土甕棺墓実測図





第93図 岩倉山中腹遺跡出土甕棺実測図

第Ⅷ章 ま と め

1. 旧石器時代

庵ノ前遺跡から出土した旧石器時代の遺物は、平成5年度第Ⅰ調査区から出土した三稜尖頭器と平成5年度第Ⅱ調査区から出土した台形石器の2点である。いずれも包含層からの出土であるが、削平、攪乱等により出土層位を明確にすることはできなかった。

ただ、熊本市付近においてはニガシロ層中にAT起源の火山ガラスが含まれており、庵ノ前遺跡の包含層はニガシロより上位にあることや、形態の特徴などから、これらの石器はAT上位のものであると考えられる。

2. 縄文時代

庵ノ前遺跡から出土した縄文時代の遺物は、早期、前期、後期、晩期にわたっている。遺構は検出されなかったが、特に、早期の土器は、各調査区から、押型文土器を中心に多量の土器が出土した。中期、後期、晩期の土器については、出土点数が少なく、細かい年代の特定までには至らなかったが、中期は轟B式、後期、晩期は三万田式〜山ノ寺・夜臼式にあたる土器が出土している。

早期土器の編年的位置について

熊本を中心とする中九州西部地方の早期土器については、近年、木崎康弘氏の論考によって、その編年的 位置づけが明らかにされつつある。

木崎氏は、中九州西部の早期前半の押型文土器を「川原田式一稲荷山式一早水台式一下菅生B式一沈目式一石清水式」という変遷で示している。それぞれの形式的特徴と庵ノ前出土押型文土器の特徴とを比較すると、IVB類が下菅生B式、ⅡB、ⅢB類が沈目式に当てはまる。また、IVB類の中には直口口縁に近く、早水台式と思われるものも数点ある。

一方、木崎氏は、同時期の円筒形条痕文土器について「中原 I 式~ V 式」という変遷を示し、さらに、円筒形条痕文土器と押型文土器には、撚糸文土器を介して、文様置換や併用による同時性や類縁性が認められることを明らかにした。このことから、庵ノ前遺跡の条痕文土器をみると、横位条痕のみの土器群 (131~136、139、141、142、146~149、155)が中原 IV 式、その他の条痕土器が中原 V 式にあたることがわかる。また、文様置換や併用による同時性、類縁性ということから見ると、押型文と撚糸文の間には、文様の置換が認められ、押型文 I A類、I B類と円筒形条痕文土器は形態が近似していることから、密接な関係が認められる。木崎氏の編年案によれば、中原 IV 式は早水台式、中原 V 式は下菅生 B 式~石清水式と併行するとするとされており、庵ノ前遺跡の出土状況もほぼこれに一致している。なお、早期土器で出土点数が最も多いのは、下菅生 B 一中原 V 期にあたるもので、主体となる時期もほぼこの時期になるのではないかと考えられる。

組織痕をもつ縄文土器について (第94図)

庵ノ前遺跡から出土した土器、特に早期土器の中で、底面に組織痕のあるものが数点出土した。土器の成形時に作業面に敷いていた敷物あるいは籠のようなものが、土器の底面に押圧転写されたものと思われる。 底面に組織痕を持つ早期土器は、大津町瀬田裏遺跡、庵ノ前遺跡の昭和57年度調査など、これまで数例出土例がある。

今回出土した早期土器の組織痕は、幅広の竹ひごのようなのものを編んだ網代状のもの(108、110、115、

116、169) と、蔓のようなもので編まれた筵あるいは簀の子状のもの(167)の2種類がある。特に後者は、 平行する緯糸に経糸をからませて編んだと推定される珍しいものである。

また、後期の土器と考えられる胴部片(224)の外面には、編布と思われるものが押圧されている。部位が 胴部であり、痕跡もかなりはっきりしたものであることから、文様の一種として意図的につけられたもので はないかと考えられる。

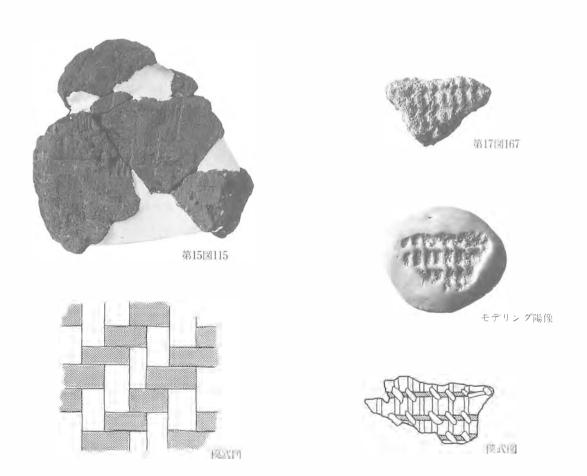
3. 弥牛時代

弥生時代の遺構は、平成5年度第1調査区から堅穴住居跡1基、甕棺墓12基、土壙(木棺)墓9基が確認されている。出土した甕棺と弥生土器は、器形の特徴などから、そのほとんどが北九州の中期にあたる須玖式、中九州の中期にあたる黒髪式と考えられ、中心的な時期も中期と見て良さそうである。また、堅穴住居跡と土壙(木棺)墓については、共伴する遺物がないが、埋土の特徴などから甕棺墓とほぼ同時期と考えることができる。

一方、出土状況を見ると、甕棺墓、土壙(木棺)墓などの埋葬遺構は調査区の北側で多く確認され、住居跡や日常用と思われる土器、石器などは調査区の南側から多くが出土する傾向があった。このことを考えると、遺跡の南側が生活空間、北側が墓域に区別されていた可能性がある。

甕棺について

中九州地方の弥生中期甕棺の編年については、西健一郎氏の論考によって、大まかな見通しが示されている。また、北九州地方の甕棺編年については、橋口達也氏が詳細な分類を行っている。ここでは、この2つ



第94図 組織痕土器

の見解を踏まえつつ、出土甕棺の時期設定を試みた。

まず須玖式の大型甕棺であるが、1号、9号、10号、および岩倉山中腹出土の甕棺は、西氏の論考における中期中葉の甕棺の特徴にあてはまる。上棺は、ほとんどが上半部が内弯する鉢形土器であるが、10号の上棺のみが外反する陣笠状の形態をしており、より後出的な要素を持つ。これらの甕棺は、橋口氏編年のKⅢ a 式に該当すると思われるが、1号甕棺以外の下棺には、口縁下の突帯がない。一方、7号下棺は、熊本市竹ノ後遺跡出土の甕棺とよく似た器形をしている。西氏はこの甕棺を中期後葉にあてており、7号甕棺も同時期に位置づけられるものと思われる。

中型の胴部に丸みを持つ甕棺では、6号、12号甕棺が、上面が平坦なT字型口縁をもち、西氏が中期中葉に位置づけた甕棺と近似している。また、5号甕棺も、L字形の口縁部と、薄い平底の特徴から、中期中葉にあたるものと考えられる。一方、8号下棺は、しゃくれたT字状口縁と、コの字形の胴部突帯を持ち、上棺も同様の口縁と、脚台状の底部を持つ甕形土器で、中期後葉の特徴を示している。4号甕棺も内側に張り出しを持つT字状口縁で、薄いレンズ状の底部をもち、中期後葉に位置づけることができる。

小型の甕棺を見ると、壺形土器である3号甕棺は、胴上半部が内弯しており、中期中葉の特徴を持つ。一方、同じ壺形である11号下棺は、胴上半部が直線的に内傾しており、中期後葉の特徴を持つ。また、甕形土器である2号甕棺と8号上棺は、しゃくれた丁字状口縁と、脚台状の底部を持つ甕形土器で、黒髪式の指標となる黒髪町遺跡出土の甕に近似しており、中期後葉に位置づけられる。

以上のことから、庵ノ前遺跡の甕棺墓は、中期中葉から後葉にかけて形成されたと考えられ、1号、3号、5号、6号、9号、10号、12号が中期中葉、2号、4号、7号、8号、11号が中期後葉に位置づけられる。また、岩倉山中腹遺跡出土の甕棺は、中期中葉に位置づけることができる。

その他の弥生土器について

今回の調査では、特に平成5年度第 I 調査区から多量の弥生土器が出土したが、遺構に共伴する資料はなく、口縁部および底部の形態をもとにした分類のみにとどまった。

中九州地方の中期土器は、甕棺を除いて、完形資料が少なく、また、住居跡などからまとまって出土する 例が少ないため、細分ができていないのが現状であるが、基本的に小型甕棺の形態変化をほぼ踏襲している ものと考えられている。また、谷頭遺跡(阿蘇郡西原村)と矢護川日向遺跡(菊池郡大津町)からは、弥生 中期土器が多量に出土し、日常用土器の組成や編年的位置づけを考える上での重要な資料となっている

甕形土器 A 類、 I 類、 J a 類は、中期前葉の甕棺に類似した特徴をもち、ほぼ同時期にあたると考えられるが、第68図 9 の甕形土器は底部が脚台に近い形状になっており、中期中葉の特徴を持っている。

甕形土器B~E類、Jb類、K類、壺形土器A類、B類は、中期中葉の甕棺の特徴をもつ。口縁外側の突帯と内側の張り出しが発達し、口縁上面にくぼみのある甕形E類が最も後出的であり、中期中葉の末に位置づけられるものと思われる。また、甕形H類は、北九州的な要素を持つ土器で、橋口氏編年のKⅡ c~KⅢ a 式にあたり、中期中葉に位置づけることができる。

甕形土器F類、L類、壺形土器C類は、黒髪式土器の指標となる土器の特徴に類似し、中期後葉の特徴を 持つ。甕形の口縁外側の突帯は次第に薄くなり、「く」の字形に近い形態になっていく。

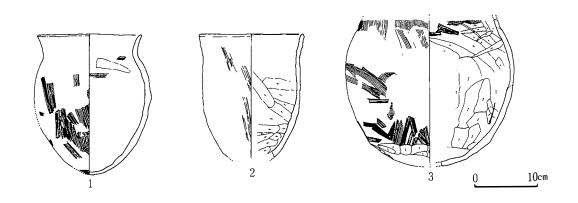
甕形土器G類は、口縁内側の張り出しがなくなって、完全な「く」の字型になっており、弥生後期の特徴をもっている。

以上のことから、庵ノ前遺跡出土の弥生土器は、中期前葉から後期初頭にあたるものであるが、出土土器の大部分が中期中葉から後葉にあたるものであり、甕棺墓の形成時期から見ても、この時期が遺跡の主体をなすものと考えることができる。

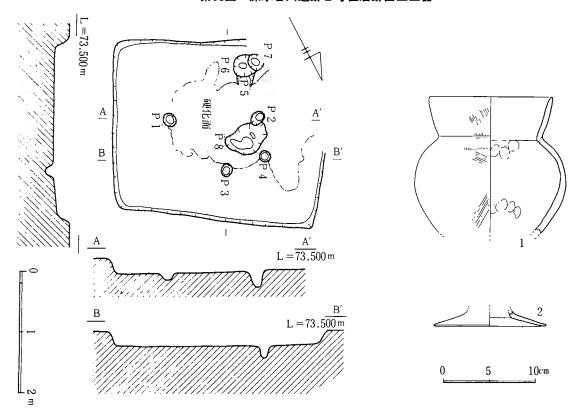
4. 古墳時代

古墳時代の遺構は、平成5年度第Ⅱ調査区で竪穴住居跡が3基確認されている。住居跡はいずれも方形で2本柱と考えられる。また、いずれの住居跡からも土師器が出土しており、須恵器は共伴していない。また、遺構以外から出土した土師器は、ほとんどがⅡ区からのもので、この時期の遺跡の中心はⅡ区周辺にあったと考えることができる。

中九州地方の古式土師器については、野田拓治氏が、白川・緑川流域に分布する遺跡より一括出土した土師器を資料にして編年を試み、4世紀~5世紀前半の時期を I~IVに区分し、I(古閑期) → II(沈目 I 期)



第95図 深水谷川遺跡 2号住居跡出土土器



第96図 昭和63年度調査竪穴住居跡及び出土土器

→Ⅲ(沈目Ⅱ期・塚原Ⅰ期)→Ⅳ(塚原Ⅱ期)の序列を示している。

今回出土した甕・壺は、丸底で、最大径が中位かやや上位にあり、球形に近い器形をもつ。また、小型丸底壺の口径は、体部径と同じかやや小さい。これらの特徴などから、出土した土師器はⅢ期に該当し、実年代は4世紀末から5世紀初頭に位置すると考えられる。一方、第81図6の甕は、短い口縁部、頸部径が大きい、尖り気味の丸底など、他の土師器とは違う特徴をもっている。この甕に似た特徴をもつ土師器が、球磨郡相良村の深水谷川遺跡の5世紀末から6世紀前半に位置づけられている竪穴住居跡から出土しており(第95図)、南九州から移入されたものと推定される。深水谷川遺跡の甕が胴部最大径がやや低い位置にあり、新しい要素をもつこと、また庵ノ前遺跡から出土した他の土師器がほぼ一時期に収まることから、この甕も他の土師器と同一の時期のものと考えて良いのではないかと思われる。

ここで、再び考えなければならないのが、昭和63年度調査で確認された竪穴住居跡(第96図)である。この住居跡は3.5m×3mの不整方形で、2本柱と思われ、弥生中期にあたるとされてきた。しかし、昭和63年度調査区と平成5年度第II調査区は隣接しており、この住居跡とII区の住居跡は十数mしか離れていない。また、出土土器を見ると、今回出土した土師器と近似した特徴を持った小型丸底壺や高坏の脚部が出土している。このことから、昭和63年度住居跡もII区の住居跡と同一時期の可能性が非常に強いと思われる。

【参考文献】

『日本地名大辞典43熊本県』 角川書店 1987

『熊本市北部地区文化財調査報告書』熊本市教育委員会 1969

『新熊本市史史料編第一巻 考古史料』新熊本市史編纂委員会 1996

大田幸博他『庵ノ前遺跡Ⅰ・Ⅱ』熊本県教育委員会 1991

浦田信智『西谷遺跡』熊本県教育委員会 1985

平岡勝昭『新南部・潤野遺跡』熊本県教育委員会 1986

平井浩一他『竜田陳内遺跡』熊本県教育委員会 1988

加藤晋平・鶴丸俊明『石器入門事典 先土器』柏書房 1991

木崎康弘『狸谷遺跡』熊本県教育委員会 1987

鈴木道之助『石器入門事典 縄文』柏書房 1991

可児通宏「押型文系土器様式」『縄文土器大観』小学館 1989

新東晃一「賽ノ神・平栫式土器様式」『縄文土器大観』小学館

新東晃一「九州貝殼文系土器様式」『縄文土器大観』小学館

宮本一夫「轟式土器様式」『縄文土器大観』小学館

松永幸男「九州磨消縄文系土器様式」『縄文土器大観』小学館

島津義昭「黒色磨研系土器様式」『縄文土器大観』小学館

山崎純男「凸帯文系土器様式」『縄文土器大観』小学館

渡辺誠「組織痕土器研究の諸問題」『交流の考古学』肥後考古学会 1991

尾関清子「女のオシャレ」『日本の美術No.369 縄文時代の装身具』至文堂 1997

緒方勉『瀬田裏遺跡調査報告 I』 大津町教育委員会・阿蘇大津ゴルフ場 1991

緒方勉『瀬田裏遺跡調査報告資料Ⅱ』大津町教育委員会・阿蘇大津ゴルフ場 1992

緒方勉『瀬田裏遺跡調査報告 🛘 🕽 大津町教育委員会・阿蘇大津ゴルフ場 1993

宮坂孝宏『白鳥平A遺跡』熊本県教育委員会 1993

宮坂孝宏『白鳥平B遺跡』熊本県教育委員会 1994

坂田和弘『深水谷川遺跡』熊本県教育委員会 1994

木崎康弘『無田原遺跡』熊本県教育委員会 1995

木崎康弘『蒲生・上の原遺跡』熊本県教育委員会 1996

松村道博他『谷頭遺跡』谷頭遺跡調査団·西原村教育委員会 1978

佐藤信二他『矢護川日向遺跡』矢護川日向遺跡調査団・九州電力株式会社 1980

緒方勉『神水遺跡Ⅱ』熊本県教育委員会 1986

木崎康弘『六地蔵遺跡 I 』熊本県教育委員会 1989

西健一郎「熊本県における弥生中期塾棺編年の予察」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会 1982

橋口達也「甕棺の編年的研究」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XXXI中巻』福岡県教育委員会 1979

清田純一「肥後における弥生時代遺跡の一様相」『交流の考古学』肥後考古学会 1991

野田拓治「古式土師器の成立と展開」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会 1982

野田拓治『上の原遺跡Ⅲ』熊本県教育委員会 1985

古庄浩明「中九州における古式土師器の成立」『國學院大學考古学資料館紀要第5輯』國學院大學考古学資料館 1989

第四章 分析

熊本市庵ノ前遺跡出土の弥生時代人骨

松 下 孝 幸*

【キーワード】: 熊本県、弥生時代人骨、甕棺墓、女性骨、短頭型、高身長

はじめに

熊本県熊本市清水町に所在する庵ノ前遺跡は道路工事に伴って調査された遺跡である。1993(平成5年) に行なわれた発掘調査で甕棺から人骨が検出され、合計5体の弥生時代人骨が発掘された。

熊本県では福岡県や佐賀県の平野部と同じように弥生時代中期になると、成人用の大型の甕棺が製作されるようになるが、福岡県や佐賀県ほど甕棺が集中的にしかも多数出土することがない。従って、弥生人骨の出土量も福岡県や佐賀県よりも少ないので、本県での弥生人の特徴は佐賀県、福岡県、長崎県ほど明確になっていない。報告例も熊本市の葉山弥生人(松下、1991)の例があるにすぎない。

このような意味からも、また弥生人の形質研究からも本例はきわめて貴重な資料となるものである。顔面 の特徴を知ることができたのは女性のみであったが、男性では頭型や推定身長値を算出することができた。 九州・山口地域の弥生人骨との比較などを行ったので、その結果を報告しておきたい。

資 料

表1 資料数

万	戈 ノ	\	合計
男性	女性	不明	_
1	2	2	5

今回の発掘調査で出土した弥生人骨は合計5体であった。表1に示すように、5体とも成人骨で、男性が 1体、女性が2体で、残りの2体は保存状態が悪く、性別を判別することができなかった。各人骨の性別、 年齢などは表2に示すとおりである。

各人骨の残存状態は図2に示すとおりで、全般的にその保存状態は良好である。

この5体の人骨は、考古学的所見より、弥生時代中期中葉と後葉とに属する人骨群である。

計測方法は、Martin-Saller (1957) によったが、一部は Howells (1973) の方法で計測した。また、脛骨の横径はオリビエの方法で計測し、鼻根部については鈴木 (1963) と松下ら (1983) の方法で、歯は藤田 (1949) の方法で小山田常一 (長崎大学歯学部口腔第一解剖) が計測し、齲歯の観察も小山田が行なった。

The Doigahama Site Anthropological Museum 〔土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム〕

^{*}Takayuki MATSUSHITA

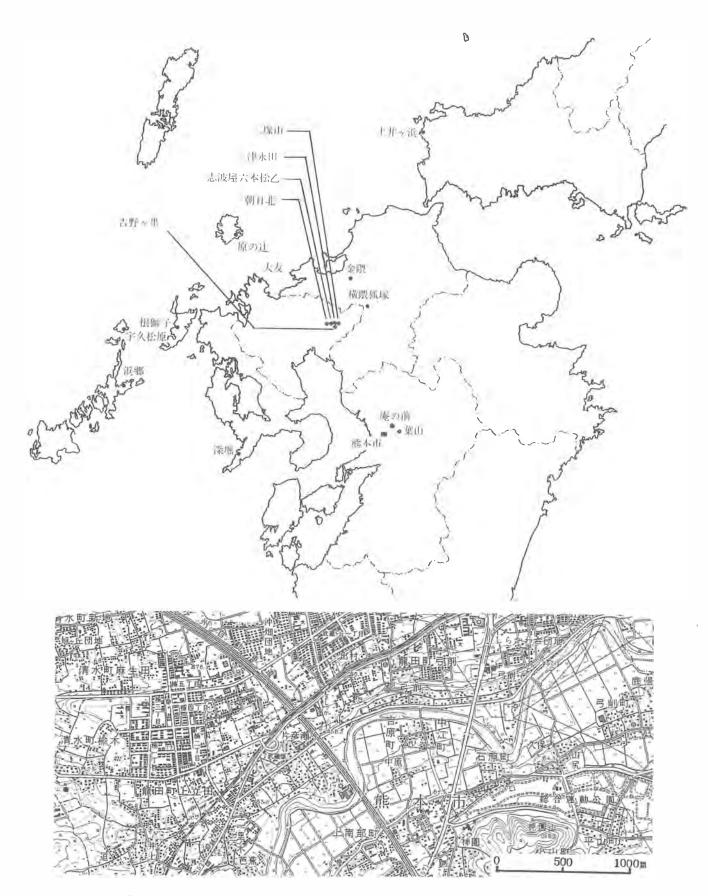


図 1. 遺跡の位置(Fig. 1. Location of the Annomae site, Kumamoto City, Kumamoto Prefecture)

表 2 出土人骨一覧

人骨番号	性別	年齢	備考	時期
1号墓人骨	不明	不明	保存不良、人骨片少量	中期中葉
7 号墓人骨	不明	不明		中期後葉
8 号墓人骨	女性	熟年		中期後葉
9 号墓人骨	女性	壮年	左側上腕骨骨折、右側橈骨遠位端骨折	中期中葉
10号墓人骨	男性	熟年	椎骨圧迫骨折(楔状椎)	中期中葉

所 見

各人骨の残存部は図2に示すとおりである。また、各骨の計測値は文末に一括して掲げた。

1号甕棺墓人骨(性別・年齢不明)

四肢骨の破片が残存していたにすぎない。骨片はやや大きいが、緻密質が剥落しており、形態がよくわからない。上腕骨か脛骨の一部と思われる。

性別と年齢はともに不明である。

7号甕棺墓人骨(性別・年齢不明)

脳頭蓋と遊離歯が残存していたにすぎない。脳頭蓋は取り上げると小片状態になり、頭型などを知ることはできなかった。

遊離歯を歯式で示すと、次のとおりである。

$M_3M_2M_1/$ / C	I 2	$I_1 I_2 C P_1 P_2 M_1 M_2 /$	[/:不明(破損)〕
$M_3M_2//P_1C$	//	/// P ₁ P ₂ M ₁ M ₂ M ₃	

咬耗度は Broca の $1 \sim 2$ 度である。なお、歯の咬合形式は不明である。

8号甕棺墓人骨(女性・熟年)

1. 頭蓋

(1) 脳頭蓋

左側側頭骨を除けばほぼ完全である。外後頭隆起の発達は見られない。乳様突起も小さい。外耳道は右側が観察できたが、骨腫は認められない。縫合は、三主縫合のうち矢状縫合の内板だけが完全に癒合している。 内板では冠状縫合の両側にも癒合が認められる。外板は三主縫合とも開離している。

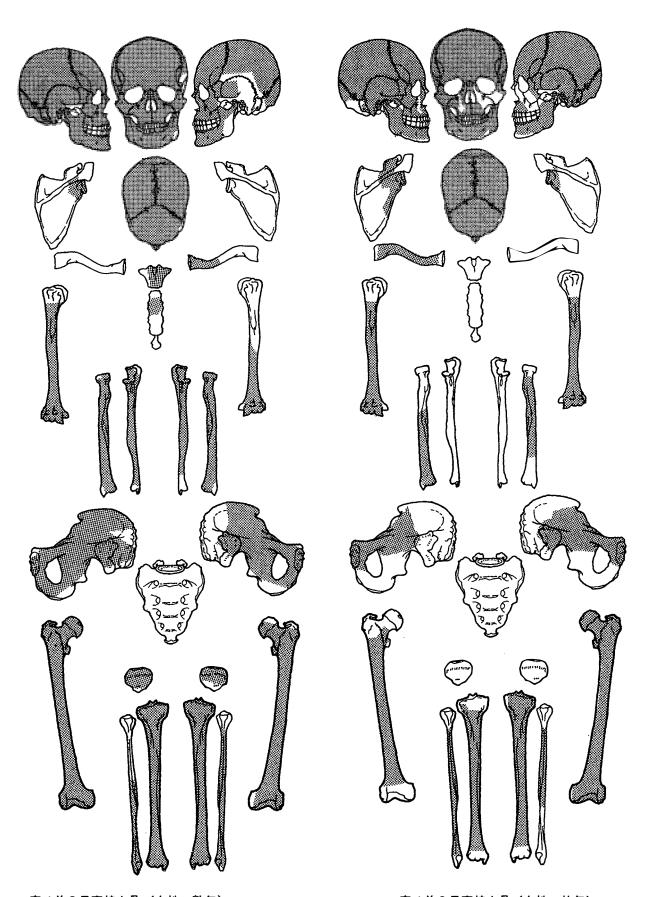
脳頭蓋の計測値は、頭蓋最大長が169mm、頭蓋最大幅は141mm、バジオン・ブレグマ高は131mmである。頭蓋 長幅示数は83.43、頭蓋長高示数は77.51、頭蓋幅高示数は92.91となり、頭型は brachy-,hypsi-,metriokran (短、高、中頭)に属している。また、頭蓋水平周は496mm、正中矢状孤長は358mmである。

(2) 顔面頭蓋

顔面頭蓋は両側の頬骨弓を欠損している以外はほぼ完全である。眉上弓の隆起は弱く、前頭結節もよく発達している。鼻骨は鼻根部がやや盛り上がっている。また鼻根部も狭い。

顔面頭蓋の計測値は、顔長が93mm、中顔幅は88mm、顔高は107mm、上顔高は61mmで、頬骨弓幅の推定値は、62mm×2=124mmである。これらの計測値からの示数値は、顔示数は [86.29] (K)、121.59 (V)、上顔示数は [49.19] (K)、69.32 (V) となり、顔面には狭顔傾向が認められる。

コルマンの顔示数と上顔示数は、中顔、広上顔、ウィルヒョーの顔示数と上顔示数は、中顔、低上顔に分

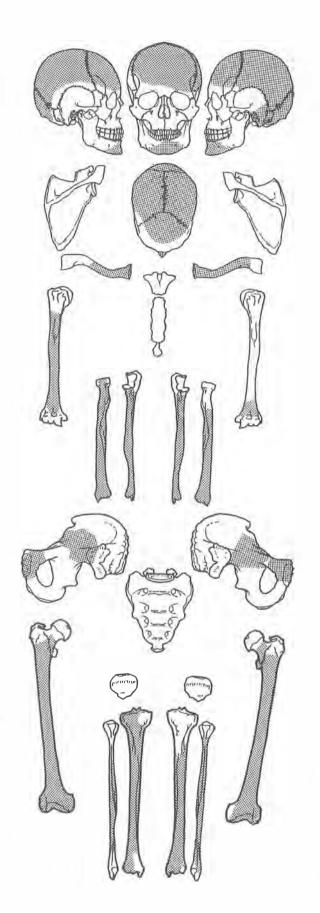


庵ノ前8号甕棺人骨 (女性・熟年)

図2. 人骨の残存部、アミかけ部分

庵ノ前9号甕棺人骨(女性・壮年)

(Fig. 2. Regions of preservation of the skeleton. Shaded areas are preserved.)



庵ノ前10号甕棺人骨(男性・熟年)

図2 (続き). 人骨の残存部、アミかけ部分

(Fig. 2. Regions of preservation of the skeleton. Shaded areas are preserved.)

類される。

眼窩幅は41mm(右)、40mm(左)、眼窩高は30mm(右)、30mm(左)で、眼窩示数は73.17(右)、75.00(左)となり、両側ともchamaekonch(低眼窩)に属している。

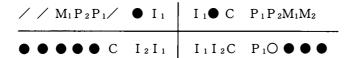
鼻幅は25mm、鼻高は49mmで、鼻示数は51.02となり、chamaerrhin(低鼻)に属している。

鼻根部の計測値は、前眼窩間幅が15mm、鼻根横弧長は19mm、鼻根彎曲示数は78.95となり、鼻根部は扁平ではない。両眼窩幅は93mmで、眼窩間示数は16.13となり、顔の幅に対して、眼窩間幅がかなり狭い。鼻骨最小幅は10mmである。前頭突起水平傾斜角は計測できないが、観察したところでは、前頭突起の向きは矢状方向である。

側面角は、全側面角が79度、鼻側面角が81度、歯槽側面角は68度で、歯槽性突顎の傾向がうかがえる。 下顎骨は左側下顎角部を大きく欠損している。径は小さく、下顎枝は幅広く、下顎切痕は浅い。

2. 歯

上下両顎には歯が釘植していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。



[/:不明(破損) ○:歯槽開存 ●:歯槽閉鎖]

咬耗度はBrocaの3度である。上顎左側と下顎両側の第三大臼歯は萌出後脱落したものか、未萌出だったか(先天性欠損)判別できなかった。上顎右側の中切歯と同じく上顎の左側側切歯の歯槽はともに閉鎖している。風習的抜歯の疑いもあるが、①周辺の歯根部がかなり露出して、歯周疾患の症状である。②閉鎖している歯槽部分がきれいでなく、ノミの先端状をしておらず、③隣接歯の捻転もみられないことから、これは風習的抜歯の跡ではないと推断した。また、歯の咬合形式は鉗子状咬合である。

3. 四肢骨

(1) 上肢骨

鎖骨、上腕骨、橈骨、尺骨が残存していた。

①上腕骨

骨体は細いが、三角筋粗面の発達は良好である。

計測値は、中央最大径が22mm(右)、中央最小径は15mm(右)で、骨体断面示数は68.18(右)となり、骨体には強い扁平性が認められる。骨体最小周は56mm(右)、中央周は63mm(右)で、骨体は細い。

②橈骨

骨体はやや細いが、骨間縁は鋭く発達している。

③尺骨

尺骨体もあまり大きいものではないが、骨間縁の発達は良好である。

(2) 下肢骨

寛骨、大腿骨、脛骨および腓骨が残存していた。

① 寛骨

左右とも腸骨を欠損している。大坐骨切痕の角度は大きいが、90度ではなく、これよりも小さい。両側に 耳状面前溝が認められる。また、恥骨下角は大きい。

②大腿骨

左右ともほぼ完全である。長さはやや長く、骨体は矢状径よりも横径の方が大きい。骨体上部は扁平である。

計測値は、最大長が404mm(右)、骨体中央周は81mm(右)、83mm(左)で、長厚示数は20.35(右)となり、 骨体はあまり頑丈なものではない。骨体中央矢状径は26mm(右)、25mm(左)、横径は26mm(右)、27mm(左) で、骨体中央断面示数は100.00(右)、92.59(左)となり、粗線や骨体両側面の後方への発達はよくない。 また、上骨体断面示数は73.33(右)、69.70(左)となり、骨体上部は扁平である。

③脛骨

右側はほぼ完全である。長さはやや長い。前縁は鋭くS字状のカーブを描いており、ヒラメ筋線の発達は悪い。骨体の断面形は両側ともヘリチカのV型を呈している。

計測値は、脛骨最大長が326mm (右)、327mm (左)、骨体周は73mm (右)、74mm (左)、最小周は69mm (右)、69mm (左) で、骨体は太く、長厚示数は21.56 (右)、21.56 (左) で、女性としては頑丈な方である。中央最大径は27mm (右)、26mm (左)、中央横径は20mm (右)、20mm (左) で、中央断面示数は74.07 (右)、76.92 (左)となり、骨体には扁平性は認められない。

4)腓骨

骨体はやや細く、稜の発達は悪い。

4. 推定身長値

右側大腿骨最大長から、Pearsonの公式を用いて推定身長値を算出すると、151.42cmとなり、高身長である。 また、脛骨全長からの推定値も150.04cm(左右)となり、大腿骨からの値と同じように高身長値である。

5. 性別・年齢

性別は、眉上弓の隆起も弱く、大坐骨切痕の角度や恥骨下角が大きいことから、女性と推定した。年齢は、 矢状縫合の内板すべてと冠状縫合の内板の一部が癒合し、外板はすべて開離していることから、熟年と考え られる。

9号甕棺人骨(女性・壮年)

1. 頭蓋

(1) 脳頭蓋

後頭骨後頭鱗の右側部を欠損している。外後頭隆起の発達は悪く、乳様突起は小さい。外耳道は両側とも 観察できたが、骨腫は左右とも認められない。縫合は、三主縫合のうち冠状縫合の内板は癒合しているが、 矢状縫合とラムダ縫合の内板はともに開離している。外板は三主縫合とも開離している。

脳頭蓋の計測値は、頭蓋最大長が175mm、頭蓋最大幅は139mm、バジオン・ブレグマ高は126mmである。頭蓋 長幅示数は79.43、頭蓋長高示数は72.00、頭蓋幅高示数は90.65となり、頭型はmeso-,ortho-,tapeinokran (中、中、平頭)に属している。また、頭蓋水平周は506mm、横弧長は293mmである。

(2) 顔面頭蓋

左側の頬骨の一部と上顎骨の左側の一部を欠損している。眉上弓の隆起は弱く、前頭結節はよく発達している。鼻骨は広くて低く、鼻根部は広く、扁平である。

顔面頭蓋の計測値は、顔長が91mm、上顔高は62mmであるが、顔高は計測できない。また、頬骨弓幅の推定値は68mm×2=136mm、中顔幅の推定値は55mm×2=110mmで、これらの推定値を用いた上顔示数は〔45.59〕(K)、[56.36](V)となり、前者は広上顔に、後者は過低上顔に属し、顔面には著しい低・広顔傾向が認められる。

眼窩幅は38mm(右)、38mm(左)、眼窩高は35mm(右)で、眼窩示数は92.11(右)となり、右側はhypsikonch(高眼窩)に属している。

鼻幅は27mm、鼻高は49mmで、鼻示数は55.10となり、chamaerrhin(低鼻)に属している。

鼻根部の計測値は、前眼窩間幅が18mm、鼻根横弧長は20mm、鼻根彎曲示数は90.00となり、鼻根部は扁平である。両眼窩幅は90mmで、眼窩間示数は20.00となり、顔の幅に対して、眼窩間幅がやや広い。鼻骨最小幅は12mmである。前頭突起水平傾斜角は計測できないが、観察したところでは、前頭突起の向きは前額方向である。

側面角は、全側面角が82度、鼻側面角が84度、歯槽側面角は73度で、歯槽性突顎の傾向は弱い。

下顎骨は下顎底を欠損している。下顎体の高径はやや高いようである。下顎枝はやや細く、下顎切痕はやや深い。角前切痕は浅い。

2. 歯

上下両顎には歯が釘植していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

咬耗度は Broca の $1\sim 2$ 度である。なお、風習的抜歯の痕跡は認められない。また、歯の咬合形式は鉗子 状咬合である。

3. 四肢骨

(1) 上肢骨

肩甲骨、鎖骨、上腕骨、橈骨が残存していたが、尺骨は残っていなかった。

(1)鎖骨

右側のみが残存していた。かなり細い。

②上腕骨

両側とも近位端を欠損している。また、左側骨体には変形治癒骨折の跡が認められる。健全な右側骨体は 細く、三角筋粗面の発達もよくない。

計測値は、中央最大径が19mm(右)、中央最小径は14mm(右)で、骨体断面示数は73.68(右)となり、骨体はかなり扁平である。骨体最小周は54mm(右)、中央周は57mm(右)で、骨体は細い。

③橈骨

両側が残存していた。右側には橈骨遠位端骨折(Colles fracture)がみられる。左側骨体は細いが、骨間縁は骨体近位 1/3 あたりで鋭く突出している。右側骨体はかなり細く、運動に制限のあったことがうかがえる。

(2) 下肢骨

寛骨、大腿骨および脛骨が残存していた。

①寛骨

両側とも腸骨と坐骨が残存していた。大坐骨切痕の角度と恥骨下角は大きく、両側とも耳状面前溝が認め られる。

②大腿骨

左側は最大長が計測できるくらい残っていたが、右側は骨体のみである。長さは短く、粗線の発達も悪いが、骨体上部は扁平である。

計測値は、最大長が377mm (左)、骨体中央周は73mm (右)、74mm (左) で、長厚示数は19.41 (左) となり、骨体はややきゃしゃである。骨体中央矢状径は22mm (右)、21mm (左)、横径は24mm (右)、24mm (左) で、骨体中央断面示数は91.67 (右)、87.50 (左) となり、粗線や骨体両側面の後方への発達はきわめて悪い。また、上骨体断面示数は75.00 (右)、72.41 (左) となり、骨体上部は扁平である。

③脛骨

骨体は細く、前縁は鈍円。ヒラメ筋線の発達もきわめて悪い。骨体の断面形は両側ともヘリチカのIV型を 呈している。

計測値は、中央最大径が24mm(右)、24mm(左)、中央横径は19mm(右)、19mm(左)で、中央断面示数は79.17(右)、79.17(左)となり、骨体には扁平性は認められない。骨体周は67mm(右)、68mm(左)、最小周は58mm(右)、60mm(左)で、骨体は細い。

④腓骨

脛骨の径のわりには骨体の径はやや大きく、扁平である。

4. 推定身長値

左側大腿骨最大長から、Pearson の公式を用いて推定身長値を算出すると、146.17cmとなり、低身長である。

5. 性別・年齢

性別は、眉上弓の隆起が弱く、大坐骨切痕の角度や恥骨下角が大きいことから、女性と推定した。年齢は、 冠状縫合の内板の大部分は癒合しているが、その他は開離していることから、壮年(の中ごろ)と考えられる。

10号甕棺人骨(男性・熟年)

1. 頭蓋

(1) 脳頭蓋

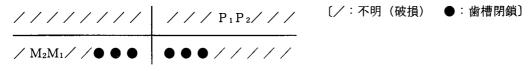
頭蓋冠が残存していた。外後頭隆起の発達は悪く、乳様突起は小さい。前頭部も丸い。外耳道は左側の観察ができたが、骨腫は認められない。縫合は、三主縫合のうちラムダ縫合の内板が開離している以外は矢状縫合も冠状縫合も癒合している。外板は三主縫合ともに開離しているが、矢状縫合には癒合が進行しつつある。

計測は脳頭蓋の一部だけができた。頭蓋最大長が176mm、頭蓋最大幅は146mmで、バジオン・ブレグマ高は 計測できない。頭蓋長幅示数は82.95となり、頭型は brachykran (短頭型) である。

(2) 顔面頭蓋

顔面頭蓋は下顎骨のみである。

下顎骨は高さが低く、前歯部の歯槽はすべて閉鎖していたようである。遊離歯が残存していた。歯式で示すと、次のとおりである。



咬耗度は Broca の1度である。歯の咬合形式は不明である。

3. 四肢骨

(1) 上肢骨

鎖骨、上腕骨、橈骨、尺骨が残存していた。

①鎖骨

長さは短いが、かなり太い。とくに胸骨端は大きい。

②上腕骨

骨体の径はやや大きいが、三角筋粗面の発達はよくない。

計測値は、中央最大径が23mm(右)、中央最小径は18mm(右)で、骨体断面示数は78.26(右)となり、骨

体の扁平性は弱い。骨体最小周は65mm(右)、中央周は70mm(右)で、骨体は太い。

③橈骨

骨体の径は大きく、骨間縁の発達は良好で、骨体近位1/3あたりで鋭く突出している。

4尺骨

尺骨も径が大きく、骨間縁の発達も良好である。

(2) 下肢骨

寛骨、大腿骨、脛骨および左側腓骨の骨体遠位部がわずか残存していた。

(1) 實骨

保存状態は良くない。恥骨結合部が残存していた。恥骨下角は小さい。

②大腿骨

骨体はやや太い。また、粗線の発達はあまりよくない。

計測値は、骨体中央矢状径が30mm (右)、28mm (左)、横径は26mm (右)、29mm (左)で、骨体中央断面示数は115.38 (右)、96.55mm (左)となり、右側の粗線や骨体両側面の後方への発達は良好であるが、左側は悪い。骨体中央周は88mm (右)、91mm (左)で、骨体は太い。また、上骨体断面示数は90.00 (右)、87.50 (左)となり、骨体上部には扁平性は認められない。

③脛骨

骨体の径は大きく、ヒラメ筋線はやや明瞭である。骨体の断面形は両側ともヘリチカのIV型を呈している。 計測値は、中央最大径が31mm(右)、31mm(左)、中央横径は25mm(右)、25mm(左)で、中央断面示数は80.65 (右)、80.65(左)となり、骨体には扁平性はまったく認められない。骨体周は88mm(右)、89mm(左)、最 小周は79mm(右)、81mm(左)で、骨体は太い。

④腓骨

骨体の径は大きく、扁平である。

4. 推定身長値

右側橈骨最大長から、Pearson の公式を用いて推定身長値を算出すると、161.49cmとなり、高身長である。

5. 性別・年齢

性別は、恥骨下角が小さく、四肢骨の径が大きいことから、男性と推定した。年齢は、ラムダ縫合以外の 内板が癒合し、外板はすべて開離していたことから、熟年と考えられる。

考 察

本遺跡からは出土した人骨のうち、頭蓋の保存状態がよかったのは女性のみであったので、頭蓋については女性を中心に考察していきたい。比較の対象としては、本県では同じ熊本市内の葉山弥生人を用いた。

1. 頭蓋

まず、男性の頭型をみてみることにする。表3は周辺地域での脳頭蓋の比較表である。本例は短頭型であるが、同じ熊本市の葉山弥生人も短頭型で、頭蓋長幅示数も両者はかなり近い値である。その他に短頭に傾いているのが、西北九州弥生人と根獅子弥生人で、根獅子も西北九州地域の弥生人である。福岡平野や佐賀平野の甕棺から出土する弥生人の頭型は中頭型であるが、西北九州地域は短頭に傾くことを筆者は指摘してきた(松下、1996)。わずか2例の資料ではあるが、頭蓋長幅示数が両者とも80を越えることから、どうやら、熊本市の甕棺から出土する弥生人は短頭型の可能性が強くなってきた。この短頭性はおそらく南九州や琉球列島につながっていく特徴だと筆者は考えている。

		Ā	医八前	į	美 山	西	北九州	7	大 友		根獅子	横	関狐塚		二塚山	1	全限	±	井ケ浜
		5	*生人	3	东生人	į	陈生人	5			弥生人	Š	东生人	5	陈生人	3	5年人	弥	生人
		_(松下)	_(松下)		(内藤)	_ ((松下)		(松下)	_ (松下)	_((松下)	(中	橘・他)	(金	関・他)
		Ð	M	ū	M	0	M	a	M	D	M	0	M	0	M	8	M	2	М
1.	頭蓋最大長	I	176	1	180	21	182.81	24	183.71	4	(185.50)	18	182.61	13	183.00	24	182.3	52	182.8
8.	頭蓋最大幅	1	146	1	[150]	20	144.95	24	143.29	3	147.33	16	142.25	14	143.50	23	142.0	54	142.6
1.	バジオン・プレグマ高		_	1	137	15	134.60	20	135.55	2	146.50	11	138.73	12	138.67	24	136.0	43	134.7
8/1	頭蓋長幅示数	1	82.95	l	(83.33)	20	79.17	21	77.93	3	(79.65)	14	77.90	12	78.05	23	11.8	48	78.1
17/1	頭蓋長高示数		-	1	76.11	15	74.15	16	74.52	2	77.94	9	75.51	11	76.02	21	75.0	42	73.7
17/8	頭蓋幅髙示数		-	1	[91.33]	14	93.11	18	94.38	1	91.56	10	97.60	11	97.42	21	96.6	43	94.3
1+8+17/3	頭蓋モズルス		-	1	(155.67)		-	15	154.31	1	161.67	9	155.55	10	155.23	21	153.7	42	153.5
23.	頭蓋水平周		-		-	19	530.42	18	531.44	2	537.00	9	527.44	13	526.00	23	526.6	44	526.8
24.	横 弧 長		-		-	15	324.67	22	317.27	3	317.67	8	314.50	15	314.07	25	315.7	50	315.2
25.	正中矢状弧長		_		_	17	376.47	13	382.62	2	381.50	8	378.38	11	368.45	16	373.7	47	375.3

表 3 脳頭蓋計測値(男性、mm)(Table 3. Comparison of male calvarial measurements and indices)

次に、女性の脳頭蓋をみてみよう。表 4 は周辺地域での比較表である。葉山遺跡からは女性人骨が出土していないので、熊本市内での比較資料は存在しない。頭蓋長幅示数は女性でも80を越え、大友弥生人の80.30に近く、頭型は短頭型である。男性ばかりでなく女性も短頭型であることは注目しておきたい。また、バジオン・ブレグマ高は西北九州弥生人、大友弥生人、土井ヶ浜弥生人の平均値にほぼ一致し、北部九州の甕棺出土の弥生人や根獅子弥生人よりも小さい。また、頭蓋水平周、横弧長、正中矢状弧長は他の資料よりも小さく、頭蓋の径が小さいことがうかがえる。

表 4 脳頭蓋計測値(女性、mm)(Table 4. Comparison of female calvarial measurements and indices)

		Ā	をノ前	西	北九州	7	ト 友		根獅子	横	隈狐塚	-	塚山	ź	金 隈	土井	<u>+</u> ケ浜
		9	东生人	ŝ	东生人	5	5年人		弥生人	9	东生人	ŝ	5 生人	3	5年人	弥	生人
		(松下)	(内藤)	(松下)		(松下)	(松下)	(松下)	(中	橋・他)	(金)	曷・他)
		п	M	n	M	. 1	M	0	M	п	M	Ð	M	n	M	1	M
1.	頭蓋最大長	2	172.00	15	178.07	18	178.11	6	177.50	10	176.50	7	176.43	26	176.8	3 2	176.0
8.	頭蓋最大幅	2	140.00	15	139.27	17	141.18	6	138.67	8	141.00	6	139.67	26	138.3	32	138.1
17.	バジオン・ブレグマ高	2	128.50	7	128.29	13	128.31	5	130.80	8	132.25	7	131.86	2 4	131.0	29	128.1
8/1	頭蓋長幅示数	2	81.43	15	78.23	16	80.30	5	77.39	7	79.67	5	78.57	25	78.0	30	78.5
17/1	頭蓋長髙示数	2	74.76	7	71.22	13	72.92	4	73.66	6	74.56	6	74.91	23	74.2	28	72.8
17/8	頭蓋幅髙示数	2	91.78	7	92.48	13	91.39	4	95.06	5	92.38	6	93.62	23	95.3	29	92.8
1+8+17/3	頭蓋モズルス	2	146.84		_			4	149.09	5	150.94		-	23	148.8	28	147.4
23.	頭蓋水平周	2	501.00	14	502.14	18	515.44	6	510.17	4	516.50	6	503.83	23	514.4	27	506.0
24.	横 弧 長	1	293	11	309.09	18	306.00	6	298.17	5	308.60	7	294.29	27	305.8	31	305.1
25.	正中矢状弧長	1	358	13	363.08	10	362.90	6	366.33	4	369.75	4	256.00	16	364.9	29	361.2

顔面頭蓋は、出土した2体でやや異なる特徴が認められるので、表5では一応別々に掲げておいた。個体別にみてみると、8号人骨の方が9号人骨よりも顔の幅が狭い。狭顔なのである。8号人骨は顔高や上顔高の絶対値は低いが、それ以上に幅径が狭いので、顔示数や上顔示数は大きな値となり、両示数とも西北九州地域の弥生人よりは大きく、北部九州・土井ヶ浜弥生人の値に近い。ところが一方、9号人骨は8号人骨よりも顔の幅が広く、広顔傾向が強い。上顔示数はかなり小さく、西北九州の弥生人よりもさらに小さい。眼窩は両者とも高径が低く、眼窩示数は西北九州弥生人に一致し、鼻高は北部九州・土井ヶ浜弥生人なみにやや高い。歯槽側面角は、8号人骨は小さく、9号人骨は大きく、歯槽性の突顎傾向が8号人骨にみられる。

そこで、鼻根部もみておきたい。鼻根部にも両者の間には著しい差が認められる。その差は鼻根彎曲示数によく表れている。この示数値は8号人骨が小さく、9号人骨は大きく、後者の扁平ぶりが目立っている。

表5 顏面頭蓋計測値(女性、mm、度)(Table 5. Comparison of female facial measurements and indices)

		Ä	を が	庵ノ前	庵ノ前	西	北九州	;	大 友	-	長獅子	横	隈狐 塚		二塚山	3	シ 隈	±,	井ケ浜
		3	东生人	8号	9 号	Š	东生人	ġ	弥 生人	-	东生人	3	东 生人	3	苏 生人	3		勞	生人
		(松下)			((内藤)	_ 1	(松下)		松下)	(松下)	_((松下)	(中	橋・他)	(金	関・他)
		1	M			0	M	0	М	D	М	11	М	n	М	0_	M	D	M
40.	顏長	2	92.00	93	91		_	5	97.60	1	98	5	95.40	7	93.14	20	95.9	23	94.6
15.	類骨弓幅	2	(130.00)	(124)	(136)	6	130.17	1	125	2	130.50	1 -	136	6	132.67	24	130.7	20	131.9
46.	中顏幅	2	(99.00)	88	(110)	11	95.91	10	94.90	3	94.67	4	102.25	6	101.17	26	99.4	23	98.5
47.	顏 髙	i	107	107	-	9	104.89	5	110.60	1	108	3	112.33	5	115.80	21	115.9	23	114.2
48.	上顏髙	2	61.50	61	62	12	60.92	6	62.17	3	(59.67)	6	66.33	7	68.14	26	70.4	22	68.3
47/45	顏示数(K)	1	[86.29]	(86.29) –	6	81.70		-	1	83.72		-	4	86.12	19	89.0	17	86.6
48/45	上顏示数(K)	2	(47.39)	49.19	[45.59]	6	47.64		-	2	46.00	1	43.38	6	50.62	22	54.1	17	51.8
47/46	顏示数(V)	1	121.59	121.59	-	9	109.50	4	111.82	1	114.89	1	100.95	4	112.80	20	116.8	21	115.9
48/46	上顏示数(V)	2	(62.84)	69.32	[56.36]	11	63.49	5	64.88	2	63.18	4	65.78	5	65.21	24	70.5	21	69.3
40+45+41	/3 顔面モズルス	1	(108.00)	[108.00) –		-		-	1	111.67		-	4	114.58		_		-
51.	眼窩幅(左)	2	39.00	40	38	10	41.10	9	42.67	3	42.33	7	41.86	1	42.86	25	41.9	24	40.3
52.	眼窩髙(左)	I	30	30		10	31.20	10	33.30	3	33.33	9	34.44	1	34.43	23	34.0	25	33.3
52/51	眼窩示数(左)	1	75	75.00	-	10	75.92	8	77.60	3	11.52	7	83.28	1	80.37	22	81.4	24	82.6
54.	鼻 幅	2	26.00	25	27	12	26.58	11	26.73	3	25.00	6	26.33	9	26.78	25	26.4	20	26.0
55.	鼻高	2	49.00	49	49	12	46.33	10	46.80	3	(49.00)	6	49.83	9	51.44	25	49.8	23	49.0
54/55	鼻示数	2	53.06	51.02	55.10	12	57.39	9	58.82	3	(51.53)	6	52.85	9	52.15	23	52.7	20	53.0
12.	全侧面角	2	80.50	79	82	10	81.50			l	82	4	82.75	1	85.29	-19	84.4	22	83.6
73.	鼻側面角	2	82.50	81	84		-			2	86.00	5	86.40	8	88.00	19	90.4	22	88.2
74.	歯槽側面角	2	70.50	68	13		-		-	1	76	4	12.50	1	75.71	19	69.8	22	70.5

表 6 鼻根部計測値(女性、mm、度)(Table 6. Comparison of female nasal root measurements and indices)

		庵ノ前	庵ノ前		転ノ前		獅子	*			関狐塚		塚山	金			ケ浜
		8号	9 号	3	5年人	剪	5生人	n	5生人		东生人		K生人		生人		生人
				(松下)	(松下)	(:	松下)	_(松下)	_(松下)	(松	下・他)	(金	関・他)
				1	M	1	M	Q	M	۵	M	1	M	۵	M	۵	M
50.	前眼窩間幅	15	18	2	16.50	4	18.25	9	17.4	6	17.33	7	19.29	25	18.1	24	19.0
50A	鼻根横弧長	19	20	2	19.50		-		_	6	19.50		-	23	19.7		-
50/50A	鼻根彎曲示数	78.95	90.00	2	84.48		-		-	6	88.69		-	23	91.6		-
51.	鼻骨最小幅	10	12	2	11.00	2	10.50	8	11.00	6	8.17	9	8.11	24	7.8	25	8.0
44.	両眼窩幅	93	90	2	91.50	3	97.67	1	97.57	4	99.00	7	98.00	24	98.0	23	97.
50/44	眼窩間示数	16.13	20.00	2	18.07	3	18.77	1	18.00	4	18.66	6	19.16		_	20	20.6
a	前頭突起上幅(右)	7	8	2	7.50		-		_	7	8.57		_		_		_
	(左)	7	-	1	7		_		-	7	8.86		_		-		-
b	前頭突起水平傾斜角	-	_	1	95		-			4	101.25		_	24	98.1		-
c	G - N投影距離	-	-		_		-		-	4	0.75		_		-		-
d	鼻根角	_	-		_		_		-	4	152.75		-		-		-
e	G - R 距離	_	-		-		-		-	4	32.25		-		_		-
ſ	垂線高	-	-		-		-		-	4	3.50		-		-		_
ſ/e	鼻根陷凹示数	_	_		-		_		-	4	10.83		-		_		_
11.	鼻類骨角	145	120	2	132.50		_		-		-		_		_		-

2. 四肢骨

(1) 上腕骨

まず、男性からみてみよう。骨体の太さを骨体最小周と中央周で比較してみると(表 7)、両径とも根獅子よりは小さいが、その他とは大差ない。骨体断面示数は表 7 ではもっとも大きな示数値を示し、骨体の扁平性は他の弥生人よりは弱く、とくに大友、根獅子の縄文系の弥生人との差は大きい。

一方、女性では骨体が細い。骨体最小周と中央周は表8では最小値を示しており、やはり根獅子との差はかなり大きい。骨体断面示数はやや小さく、根獅子弥生人や大友弥生人に近く、北部九州・土井ヶ浜弥生人よりは小さい。骨体には扁平性が認められ、その程度は強い。

表7 上腕骨計測值(男性、右、mm)(Table 7. Comparison of measurements and indices of male right humeri)

		夯	ノ前 生人 松下)	3	た 友 か生人 松下)	3	投獅子 尓生人 (松下)	3	隈狐塚 5年人 松下)	3	金 隈 尓生人 中橋・他)	3	井ケ浜 か生人 財津)
		n	M	n	M	п	M	n	M		M	<u> </u>	M
1.	上腕骨最大長		_	9	294.33	2	280.50	5	303.00	5	306.4	18	299.4
2.	上腕骨全長		_	8	291.75	2	274.50	5	294.80	5	303.2	17	295.2
5.	中央最大径	1	23	37	24.46	3	26.33	23	23.87	12	24.0	5 5	22.9
6.	中央最小径	1	18	37	17.97	3	19.00	23	18.17	12	17.8	5 5	16.4
7.	骨体最小周	1	65	37	64.57	3	70.00	22	63.32	15	65.3	5 6	64.7
7(a).	中 央 周	1	70	35	71.00	3	76.67	23	69.87	12	69.8		_
6/5	骨体断面示数	1	78.26	3 7	73.60	4	73.99	23	76.25	12	74.3	5 4	76.1
7/1	長厚示数		_	9	22.32	2	24.80	5	20.78	5	21.1	18	21.2

表8 上腕骨計測値(女性、右、mm)(Table 8. Comparison of measurements and indices of female right humeri)

		弥			左 左 (生人 松下)	剪	(獅子) (生人) 松下)	i	二塚山 弥生人 (松下)		: 隈 K生人 「橋・他)	弥	- ケ浜 生人 津)
		n	M	n	M	п	M	n	M	п	M	n	M
5.	中央最大径	2	20.50	25	21.68	6	23.00	6	22.00	5	21.4	28	20.6
6.	中央最小径	2	14.50	25	15.48	6	16.00	6	16.17	5	16.4	29	15.5
7.	骨体最小周	2	55.00	20	57.65	6	60.83	5	60.20	18	58.0	30	59.1
7(a).	中 央 周	2	60.00	23	61.96	6	66.33	6	64.00	5	62.2		_
6/5	骨体断面示数	2	70.93	25	71.53	6	69.56	6	73.57	5	76.7	29	75.9

(2) 大腿骨

男性の骨体の太さ(骨体中央周)は甕棺弥生人よりは小さく、大友、根獅子の縄文系弥生人の平均値に近い。骨体中央断面示数は弥生人としてはかなり大きな値で、表9では最大値となり、比較表にあげた資料のなかでは根獅子、大友に比較的近い。上骨体断面示数はかなり大きく、この値は表9中最大で、骨体上部には扁平性は認められない。

女性では最大長が計測できたが、この最大長はやや長く、金隈にもっとも近い長さである。骨体中央周はかなり細く、表10では最小値を示している。骨体断面示数は100.00以下となり、表10ではもっとも小さく、骨体には柱状性はまったく認められない。一方、上骨体断面示数は表10では最小値となり、骨体上部はかなり扁平である。

表9 大腿骨計測値(男性、右、mm)(Table 9. Comparison of measurements and indices of male right femora)

			庵ノ前	7	大 友	1	艮獅子		二塚山	4	定 隈	土扌	サケ浜
•			弥生人	9	东生 人	3	你生人	5	东生人	3	か 生 人	弥	生人
		(松下・他)	(松下)	(松下)	(松下)	(=	中橋・他)	(月	才津)
		n	M	מ	M	п	M	п	M	п	M	п	M
1.	最 大 長		_	15	413.60	2	399.00	7	441.29	7	428.0	12	431.5
2.	自然位全長		_	15	409.53	2	395.50	3	441.00	6	425.0	12	424.5
6.	骨体中央矢状径	1	30	41	28.85	6	29.17	25	30.40	31	30.1	56	28.6
7.	骨体中央横径	1	26	41	26.07	6	25.83	26	28.12	31	27.1	56	26.1
8.	骨体中央周	1	88	41	87.22	5	88.00	25	91.84	31	90.3	56	86.6
9.	骨体上横径	1	30	42	30.62	6	31.00	22	32.23	26	32.5	53	31.8
10.	骨体上矢状径	1	27	42	24.83	6	24.67	21	26.62	26	26.2	53	25.6
8/2	長厚示数		_	15	21.13	2	21.63	3	21.33	7	21.5	7	20.1
6/7	骨体中央断面示数	1	115.38	41	111.72	6	112.99	25	108.71	33	110.3	55	109.8
10/9	上骨体断面示数	1	90.00	42	81.34	6	79.65	21	82.50	28	80.6	51	81.0

表10 大腿骨計測值 (女性、右、mm) (Table 10. Comparison of measurements and indices of female right femora)

		月	を ノ前	7	大 友	ŧ	 艮獅子	=	塚山	4	2	±	井ケ浜
		3/	生人	3	5 生人	3	5生人	39	5生人	3	5生人	-	5生人
		(松下)	(松下)	(松下)	(松下)	_(4	橋・他)	(財津)
		п	M	n	M	п	M	n	M	1	M	n	M
	最 大 長	1	404	5	386.80*	2	393.00	2	391.00	9	404.8	14	399.5
2.	自然位全長	1	398	4	378.25*	2	390.00	1	382.00	3	387.0	14	393.5
	骨体中央矢状径	2	24.00	30	26.00	6	26.83	14	26.57	29	26.5	33	25.9
	骨体中央横径	2	25.00	30	25.03	6	25.17	14	25.86	29	25.4	33	25.0
١.	骨体中央周	2	77.00	28	80.32	6	82.00	14	82.71	29	80.7	33	79.6
).	骨体上横径	2	29.00	32	29.06	6	30.17	10	30.10	23	29.7	26	30.4
	骨体上矢状径	2	21.50	32	22.75	5	23.40	10	23.30	23	23.5	3 1	22.8
/2	長厚示数	1	20.35	4	20.30*	2	20.77	1	18.85	3	20.5	10	20.1
/7	骨体中央断面示数	2	95.84	30	104.05	6	106.74	14	102.79	29	104.8	33	102.8
0/9	上骨体断面示数	2	74.17	32	78.42	5	78.05	10	77.66	23	79.8	31	75.7

*=左側

(3) 脛骨

男性脛骨の骨体はかなり太く、骨体周も最小周も表11では最大値である。また、中央断面示数と栄養孔位 断面示数はともに大きな値で、表11ではもっとも大きな値となり、骨体には扁平性は認められない。

女性の脛骨は、長さが金隈に一致し、大友よりは長いが、根獅子、二塚山、土井ヶ浜よりも短い。男性とは反対に、骨体周も最小周も表12では最小値となり、骨体はかなり細い。中央断面示数と栄養孔位断面示数は男性と同様かなり大きく、表12に掲げた資料の大部分よりもかなり大きな値で、骨体には扁平性は認められない。

表11 脛骨計測値(男性、右、mm)(Table 11. Comparison of measurements and indices of male right tibiae)

			ノ前	*	て 友	栝	獅子	_	塚山	金	? 隈	土井	ケ浜
		劲	生人	砂	5生人	砂	5生人	势	5生人	夯	生人	弥:	生人
		_ (:	松下)	(松下)	(松下)	()	松下)	(中:	簡・他)	(鬼	(津)
		п	M		M	0	M	n	M	<u>n</u>	M	0	M
8.	中央最大径	1	3 1	35	31.26	6	31.83	20	30.95	18	31.8	48	29.5
8 a.	栄養孔位最大径	1	35	30	34.63	5	35.40	17	35.35	3 1	35.9	41	33.8
9.	中央横径	1	2 5	38	21.29	6	21.50	20	22.45	18	23.0	48	20.8
9a.	栄養孔位横径	1	27	32	23.22	5	24.60	16	25.00	31	25.4	40	24.0
10.	骨 体 周	1	8 8	34	82.85	5	84.20	20	84.20	18	86.6	47	80.7
10a.	栄養孔位周	1	97	30	92.00	4	96.25	16	95.81	31	96.9	38	92.3
10Ъ.	最 小 周	1	79	34	75.35	6	77.67	11	76.55	2 4	77.5	43	75.2
9/8	中央断面示数	1	80.65	3 4	68.03	6	67.83	20	72.71	18	72.4	47	70.5
9a/8a	栄養孔位断面示数	1	77.14	30	67.16	5	69.56	16	70.86	3 1	71.0	3 9	71.1

表12 脛骨計測値(女性、右、mm)(Table 12. Comparison of measurements and indices of female right tibiae)

		A	転ノ前	7	大友	1	艮獅子		二塚山	5	金 隈	土;	井ケ浜
		3	か生人	5	你生人	7	弥生人	9	5年人	· 9	东生人	弥	生人
		_(松下)	((松下)	((松下)	(松下)	(-	中橋・他)	()	け津)
		1	M	n	M	n	M	a	M	n	M	n	M
1.	脛骨全長	1	320	2	311.50	2	(331.50)	2	316.50*	5	310.8	10	327.5
la.	脛骨最大長	1	326	2	323.00	2	(337.00)	2	331.00	11	326.2	10	332.9
8.	中央最大径	2	25	27	27.26	5	26.80	9	27.78	14	25.9	28	26.0
8a.	栄養孔位最大径	2	27	25	30.56	5	30.40	9	32.44	23	30.7	26	30.1
9.	中央横径	2	19	29	19.48	5	19.80	9	20.78	14	20.3	28	19.0
9a.	栄養孔位横径	2	21	25	21.12	5	21.80	9	23.33	23	22.0	27	21.5
10.	骨体 周	2	70	27	74.74	3	72.33	9	77.00	14	73.1	27	71.8
10a.	栄養孔位周	2	78	24	82.13	3	82.33	9	87.33	23	83.3	27	82.2
10ъ.	最 小 周	2	63	23	68.17	6	68.83	8	69.38	22	68.1	28	67.3
9/8	中央断面示数	2	76.62	27	71.79	5	74.07	9	75.09	14	78.4	24	71.5
9a/8a	栄養孔位断面示数	2	79.67	25	69.24	5	71.79	9	72.16	23	71.8	27	73.0
10b/1	長厚示数	1	21.56	2	21.86	2	(20.96)	2	22.13*	5	21.7	4	19.6

*=左側

3. 推定身長値

Pearson の式で算出した推定身長値を表13と表14に掲げた。男性では橈骨の最大長からしか算出できなかったが、その値は161.49cmとなり、高身長値である。橈骨からの推定値で比較してみると(表13)、二塚山よりも大きく、大友、根獅子にもっとも近い値である。根獅子の場合は橈骨と大腿骨から算出した値に大きな差が認められるので、大腿骨からの値はあまり参考にならないかもしれないが、大友の場合は参考にできそうな値である。もし、四肢骨の比が大友と大差ないと仮定したら、庵ノ前の男性の大腿骨からの推定値は160cmをわずかに下回る程度で、大友や葉山に近い値になるのではないだろうか。

一方、女性では2例の値に大きな差があり、1体は150cmを越える高身長、残る1体は146cmの低身長である。平均すると148.80cmで、これは大友、二塚山、横隈狐塚に近い値となる。個体別にみると、庵ノ前8号は金隈にほぼ一致し、庵ノ前9号は、表14のどの資料よりも小さな値である。また、前者は顔の幅径がかなり狭い女性であった。

					_			•	
		庵ノ前	西北九州	大 友	根獅子	薬 山	二塚山	横隈狐塚	土井ケ浜
		弥生人	弥生人	弥生人	弥生人	弥生人	弥生人	弥生人	弥生人
		(松下)	(内藤)	(松下)	(松 下)	(松下)	(松下)	(松下)	(財津)
		n M	a M	a M	n M	n M	n M	a M	n M
Pearsonの式	上腕骨		-	15 154.47	2 151.82	_	3 159.29	8 157.79	16 157.50
	橈 骨	1 161.49	-	13 161.78	2 161.33	1 162.47	2 160.34	5 163.38	23 162.73
	大腿骨	_	16 158.79	22 159.75	2 156.32	1 160.64	7 164.27	14 162.00	18 162.81
	脛 骨	_	_	18 162.18	2 158.26	1 161.11	7 162.13	16 161.42	10 162.05

表13 推定身長値(男性、右、cm) (Table 13. Comparison of estimated male statures)

表14 推定身長値 (女性、右、cm) (Table 14. Comparison of estimated female statures)

_		庵ノ前	庵ノ前	Ā	もノ前	,	大 友	_	根獅子	-	二塚山	横	隈狐塚	金	隈	±	井ケ浜
		8号	9号	3	东生人	3	5 生人		弥生人	3	*生人	9	东生人	弥	生人	弥	生人
				(松下)	(松下)		(松 下)	(松下)	(松下)	(中	橋・他)	()	(津
				n	M	n	M	0	M	0	M	1	M	Ω	M	I	M
Pearsonの式	上腕骨	_	-		_	7	145.48	4	148.66	2	155.20	2	153.27		-	18	149.92
	橈 骨	-	-		-	2	150.43	2	156.11	2	155.11		_		-	20	152.67
	大腿骨	151.42	146.17	2	148.80	6	148.96	4	(150.60)	Ź	148.90	5	148.81	17	151.3	16	149.97
	脛 骨	150.04		1	150.04	5	151.59	2	152.74	2	152.63	9	151.89		_	12	151.92

4. 特殊所見一骨折

骨折が庵ノ前9号と10号とにみられた。

①上腕骨骨折

庵ノ前9号(女性・壮年)の左側上腕骨体中央部に変形性治癒骨折の跡が認められる。三角筋粗面部が大きく外側へ折れ、そのまま治癒している。

②橈骨遠位端骨折

庵ノ前9号(女性・壮年)の右側橈骨には橈骨遠位端骨折(Colles fracture)がみられる。右側骨体は左側よりもやや細く、骨体も丸い。

この橈骨遠位端骨折はおそらく左側上腕骨が骨折した際に一緒に起きたものと考えられる。

③楔状椎 (圧迫骨折)

庵ノ前10号人骨(男性・熟年)

第11胸椎と12胸椎は椎体が楔状化しており、第11胸椎はかなり前傾している。また、この部分(11胸椎か

ら12胸椎の椎体全面)では前縦靭帯が化骨し、いわゆる変形性脊椎症の症状を呈している。しかし、その他の胸椎や腰椎には嘴状の突起などはほとんど認められない。

要 約

熊本市清水町にある庵ノ前遺跡の発掘調査が1993年(平成5年)に行なわれ、甕棺から弥生人骨5体が発掘された。熊本県での甕棺からの弥生人骨の出土数は福岡県や佐賀県に比較すればかなり少ない。従って、本県での彼らの特徴がいまひとつ定かでない。出土人骨の保存状態は比較的良好であったので、人類学的観察と計測を行ない、周辺地域での検討を行なってみた。その結果は次のとおりである。

- 1. 今回出土した弥生人骨は合計 5 体で、5 体とも成人骨である。男性は 1 体、女性が 2 体で、残りの 2 体は性を判別することができなかった。
- 2. これら5体の人骨は、考古学的所見より、弥生時代中期中葉と後葉とに属する人骨である。
- 3. 男性の頭型は1例のみを知ることができた。頭蓋長幅示数は82.95となり、頭型は短頭型である。女性2 例の頭蓋長幅示数の平均値は81.43となり、女性も短頭型である。
- 4. 男性については顔面頭蓋の特徴を知ることはできなかった。女性は2体で特徴が異なり、1体は狭顔であり、他の1体は広顔傾向が強い。
- 5. しかし、女性は2体とも眼窩は低く、鼻高はやや高い。
- 6. 歯槽性の突顎傾向が1体(8号人骨)の女性にみられる。
- 7. 女性の1例(9号人骨)は鼻根部が著しく扁平である。
- 8. 男性の四肢骨は、上腕骨体の扁平性が弱く、大腿骨体の径はあまり大きくなく、骨体上部の扁平性は弱い。また、脛骨体は太く、扁平性は認められない。
- 9. 女性の四肢骨は、上腕骨体は細く、扁平で、大腿骨体は細長く、柱状性は認められないが、骨体上部は 扁平である。また、脛骨体はかなり細く、扁平性は認られない。
- 10. 推定身長値は、橈骨から算出した男性の値(10号人骨)が161.49cm、女性は1体が151.42cmの高身長、もう1体は146.17cmの低身長で、平均値は148.80cmである。
- 11.男性(10号人骨)に椎骨の圧迫骨折、女性(9号人骨)に上腕骨骨折と橈骨遠位端骨折とがみられた。
- 12. 本遺跡から出土した弥生人骨はわずか5体であったが、ある程度その特徴を明らかにすることができた。 男性は短頭型で、下肢骨、特に脛骨の径が大きな弥生人であった。一方、女性も頭型は短頭型であるが、 顔面は対照的な2体で、1例は顔の幅が狭く、もう1例は顔の幅が広いものであった。女性の四肢骨は細 く、身長は高身長を示すものと低身長を示すものの両方がみられた。特徴をまとめると次のようになる。

表33 人骨の特徴一覧

人骨番号	性別	頭型	顔	歯槽部	鼻根部	推定身長値
10号人骨	男性	短頭型	_	-	_	161.49cm (橈骨から)
8号人骨	女性	短頭型	狭顔	歯槽性突顎		151.42cm(大腿骨から)
9号人骨	女性	短頭に近い中頭型	広顔		鼻根部扁平	146.17cm(大腿骨から)

長崎などの西北九州弥生人の男性は短頭に近い中頭型を示しているが、どうやら熊本県の弥生人の男性も 短頭に傾きそうである。このような傾向はおそらく南九州・琉球列島へと連続していくのであろう。また、 葉山弥生人の身長値を考慮に入れれば、熊本県の弥生人男性の身長は西北九州弥生人ほど低身長ではないと 考えてもよさそうである。まだかなりあいまいであるが、熊本県の弥生人の特徴が少し見えてきたようであ る。

謝 辞

擱筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた熊本県教育庁文化課の諸先生方に感謝致します。

参考文献

- 1. 金関丈夫、他、1954:長崎県平戸島獅子村根獅子免出土の人骨に就いて、人類学研究、第1巻第3~4号:178-226.
- 2. 金関丈夫、他、1960:山口県豊浦郡豊北町土井ヶ浜遺跡出土の弥生式時代人頭骨について。人類学研究、7 (附録): 1-36.
- 3. 金関丈夫、1966: 弥生時代人。日本の考古学、河出書房、東京、: 460-471.
- 4. MARTIN SALLER, 1957: Lehrbuch der Anthropologie, Bd. 1. Gustav Fischer Verlag, Stuttugart: 429-597.
- 5. 松下孝幸、1979: 二塚山遺跡出土の弥生時代人骨。二塚山(佐賀県文化財調査報告書46): 242-255.
- 6. 松下孝幸、1979:宇宿貝塚出土の人骨。宇宿貝塚、鹿児島考古、13:210-220.
- 7. 松下孝幸、1980:佐賀市六本松遺跡出土の弥生時代人骨。大門西遺跡(九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書 (1):265-269.
- 8. 松下孝幸、1981:宮の本遺跡出土の人骨。宮の本遺跡(佐世保市埋蔵文化財調査報告書):93—109,114—118,145—146
- 9. 松下孝幸、1981:大友遺跡出土の弥生時代人骨。大友遺跡(佐賀県呼子町文化財調査報告書1):223-253.
- 10. 松下孝幸、他、1982: 佐賀県鳥栖市梅坂炭化米遺跡出土の弥生時代人骨。梅坂炭化米遺跡(鳥栖市文化財調査報告書10): 65-69.
- 11. 松下孝幸、他、1983:山口県豊浦郡豊北町土井ヶ浜遺跡出土の人骨。土井ヶ浜遺跡第7次発掘調査概報(豊北町埋蔵文化財調査報告2):19-30.
- 12. 松下孝幸、他、1983:長崎県宇久松原遺跡出土の弥生時代人骨。長崎県埋蔵文化財調査集報VI(長崎県文化財調査報告書第66集):97—134.
- 13. 松下孝幸、他、1983: 鹿児島県伊仙町面縄第1貝塚出土の弥生時代人骨。面縄第1・第2貝塚(伊仙町埋蔵文化財調査報告書1):51-64.
- 14. 松下孝幸、1983: 佐賀県鳥栖市安永田遺跡出土の弥生時代人骨。安永田遺跡(鳥栖市文化財調査報告書16):92-111.
- 15. 松下孝幸、他、1984:長崎県小値賀町神ノ崎遺跡出土の弥生・古墳時代人骨。小値賀町文化財調査報告書、第4集: 95-100,178.
- 16. 松下孝幸、1984: 広島市佐久良遺跡出土の弥生時代人骨。広島市安佐北区白木町所在佐久良遺跡発掘調査報告(広島市の文化財第27集): 25-46.
- 17. 松下孝幸、1984: 広島市末光遺跡群 B 地点出土の弥生時代人骨。広島市安佐北区高陽町所在末光遺跡群発掘調査報告 (広島市の文化財第28集):90-95.
- 18. 松下孝幸、1984: 鳥栖市フケ遺跡出土の弥生時代人骨。鳥栖市文化財調査報告書、20:54-56.
- 19. 松下孝幸 1984:鳥栖市安永田遺跡出土の弥生時代人骨(Ⅱ)。鳥栖市文化財調査報告書、20:57-60.
- 20. 松下孝幸、1984:久留米市西屋敷遺跡 II 出土の弥生時代人骨。西屋敷遺跡 II (久留米市文化財調査報告書第40集):46—48.
- 21. 松下孝幸、1984: 佐賀市金立開拓遺跡出土の人骨。佐賀県文化財調査報告書、第77集: 535-544.
- 22. 松下孝幸、1985: 鹿児島県笠利町長浜金久遺跡出土の人骨。長浜金久遺跡(鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書32): 213-222.
- 23. 松下孝幸、他、1985: 佐賀県鳥栖市城の弥生時代人骨。安永田遺跡一佐賀県鳥栖市に所在する安永田遺跡銅鐸鋳型出土地点の調査一(鳥栖市文化財調査報告書第25集): 550-570.
- 24. 松下孝幸、1985:福岡県小郡市横隈狐塚遺跡出土の弥生時代人骨。横隈狐塚遺跡 II 下巻、(小郡市文化財調査報告書第 27集) :1−46.

- 25. 松下孝幸、他、1986: 大村市富の原遺跡出土の弥生時代人骨。富の原遺跡群確認調査概報 V (大村市文化財調査報告第11集): 30-45.
- 26. 松下孝幸、他、1986: 歳ノ神遺跡群出土の弥生・古墳時代人骨。歳ノ神遺跡群・中出勝負峠墳墓群(広島県埋蔵文化 財調査センター調査報告書第49集): 201-212.
- 27. 松下孝幸、他、1986:中出勝負峠墳墓群出土の弥生・古墳時代人骨。歳ノ神遺跡群・中出勝負峠墳墓群(広島県埋蔵 文化財調査センター調査報告書第49集): 213-244.
- 28. 松下孝幸、1986:島根県古浦遺跡出土の人骨。島根考古学会誌、第3集:1-15.
- 29. 松下孝幸、1987:小郡市干潟下屋敷遺跡出土の弥生時代人骨。干潟下屋敷遺跡(小郡市文化財調査報告書第37集): 77-84.
- 30. 松下孝幸、1987: 弥生人の地域性。〈シンポジウム〉西南日本人一文化と人の渡来をめぐって。季刊人類学 18-4: 219-232.
- 31. 松下孝幸、他、1988:長崎県壱岐・石田町大久保遺跡出土の弥生時代人骨。長崎県埋蔵文化財調査集報 X I (長崎県文化財調査報告書第91集):77-99.
- 32. 松下孝幸、他、1989: 広島県千代田町壬生西谷遺跡出土の弥生時代人骨。壬生西谷遺跡(広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第75集):63-80.
- 33. 松下孝幸、他、1989: (弥生人の) 地域差、弥生文化の研究、1. 弥生人とその環境:65-75、雄山閣
- 34. 松下孝幸、1991:熊本市葉山遺跡出土の弥生時代人骨。交流の考古学(肥後考古学第8号 三島格会長古稀記念): 287-312
- 35. 松下孝幸、他、1991:広島県竹原市鷺の森遺跡出土の弥生~古墳時代人骨。鷺の森遺跡発掘調査報告(付編):1-40.
- 36. 松下孝幸、他、1991:佐賀県神埼町志波屋六本松乙遺跡出土の弥生時代人骨。志波屋六本松乙遺跡(佐賀県文化財報告書第103集、九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書13):第4章:1—62.
- 37. 松下孝幸、他、1991:広島県豊栄町手島山墳墓群出土の弥生~古墳時代人骨。手島山墳墓群(広島県埋蔵文化財センター文化財発掘調査報告第93集):61-80.
- 38. 松下孝幸、他、1992: 佐賀県神埼町朝日北遺跡出土の人骨。朝日北遺跡(九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(15)): 418-504.
- 39. 松下孝幸、他、1993: 具志川島遺跡群出土の古人骨。具志川島遺跡群(伊是名村文化財調査報告書第9集): 215-244.
- 40. 松下孝幸、1995:山口県豊北町土井ヶ浜遺跡第13次発掘調査出土の人骨。土井ヶ浜遺跡第13次発掘調査報告書(山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第11集):19-33.
- 41. 松下孝幸、1996:根獅子遺跡出土の弥生時代人骨。平戸市史自然・考古編:405-441.
- 42. 松下孝幸、1996: 土井ヶ浜遺跡第14次発掘調査出土の中世・弥生時代人骨。土井ヶ浜遺跡第14次発掘調査報告書(山口県豊北町埋蔵文化財調査報告書第12集): 24-20.
- 43. 内藤芳篤、1971: 西北九州出土の弥生時代人骨。人類学雑誌、79:236-248.
- 44. 内藤芳篤、他、1975: 対馬・住吉平貝塚出土の弥生時代人骨例。対馬の遺跡(長崎県文化財調査報告書20):139-147.
- 45. 内藤芳篤、1981: 弥生時代人骨。人類学講座 5、日本人 I、雄山閣、東京、57-99.
- 46. 内藤芳篤、他、1981: 弥生時代人骨。季刊人類学、12(1): 27-37.
- 47. 中橋孝博、他、1985: 金隈遺跡出土の弥生時代人骨。史跡金隈遺跡(福岡市埋蔵文化財調査報告書第123集): 43-145.
- 48. 牛島陽一、1954: 佐賀県東脊振村三津遺跡出土弥生式時代人骨の人類学的研究。人類学研究、1:273-303.
- 49. 財津博之、1956:山口県土井ヶ浜遺跡発掘弥生前期人骨の四肢長骨に就いて。人類学研究、3:320-349.

表15 庵ノ前弥生人脳頭蓋計測値 (mm)

		8 号	9 号		平 均	10号
		(女性)	(女性)	n	M	(男性)
1.	頭蓋最大長	169	175	2	172.00	176
8.	頭蓋最大幅	141	139	2	140.00	146
7.	バジオン・ブレグマ髙	131	126	2	128.50	_
8/1	頭蓋長幅示数	83.43	79.43	2	81.43	82.95
7/1	頭蓋長髙示数	77.51	72.00	2	74.76	
7/8	頭蓋幅髙示数	92.91	90.65	2	91.78	_
+8+17/3	頭蓋モズルス	147.00	146.67	2	146.84	_
5.	頭蓋底長	92	93	2	92.50	_
9.	最小前頭幅	93	90	2	91.50	_
)	最大前頭幅	117	111	2	114.00	_
l .	両 耳 幅		122	1	122	
3.	乳突幅	-	99	1	99	_
· .	大後頭孔長	36	_	1	36	_
i.	大後頭孔幅	3 1		1	3 1	_
5/7	大後頭孔示数	86.11	_	1	86.11	
١.	頭蓋水平周	496	506	2	501.00	-
	横 弧 長	_	293	1	293	_
· .	正中矢状弧長	358	_	1	358	_
S.	正中矢状前頭弧長	118	116	2	117	_
7.	正中矢状頭頂弧長	129	120	2	124.50	_
3.	正中矢状後頭弧長	111	_	1	111	_
).	正中矢状前頭弦長	104	102	2	103.00	_
١.	正中矢状頭頂弦長	112	110	2	111.00	_
l .	正中矢状後頭弧長	96	_	1	96	_
9/26	矢状前頭示数	88.14	87.93	2	88.04	_
)/27	矢状頭頂示数	86.82	91.67	2	89.25	_
1/28	矢状後頭示数	86.49		1	86.49	_

		8 号	9 号	24	均	
		•		n	М	_
40.	顔長	93	9 1	2	92.0	0
11.	側顏長	_	6 7	1	6 7	
12.	下顏長	9 8	_	1	98	
13.	上顏幅	9 9	98	2	98.5	0
5.	頰骨弓幅	[124]	[136]	2	[130.0	0]
16.	中顧幅	8 8	[110]	2	[99.0	0]
17.	顔 高	107		1	107	
8.	上顏髙	6 1	6 2	2	61.5	0
7/45	顔示数(K)	[86.29]	-	1	[86.2	9
8/45	上顧示数(K)	49.19	[45.59]	2	[47.3	9
7/46	顔示数(V)	121.59		1	121.5	9
8/46	上顏示数(V)	69.32	[56.36]	2	[62.8	4]
10+45+47/3	顔面モズルス	[108.00]	_	1	[108.0	0]
0.	前眼窩間幅	15	18	2	16.5	0
14.	両眼窩幅	9 3	90	2	91.5	0
0/44	眼窩間示数	16.13	20.00	2	18.0	7
1.	眼窩幅(右)	4 1	38	2	39.5	0
	(左)	40	38	2	39.0	0
. 2 .	眼窩高(右)	30	35	2	32.5	0
	(左)	30	_	1	30	
2/51	眼窩示数(右)	73.17	92.11	2	82.6	4
,	(左)	75.00	_	1	75.0	0
54.	鼻幅	2 5	27	2	26.0	0
55.	鼻高	4 9	4 9	2	490	0
4/55	鼻示数	51.02	55.10	2	53 0	6
57.	鼻 骨最小幅	10	12	2	11.0	0
0.	上顎歯槽長	49	5 3	2	51.0	0
31.	上顎歯槽幅	58	_	1	58	
52.	口蓋長	4 2	4 6	2	44.0	0
33.	口蓋幅	3 7	_	1	3 7	
64.	口蓋髙	11	_	1	1 1	
1/60	上顎歯槽示数	118.37	_	1	118.3	7
3/62	口蓋示数	88.10	_	1	88.1	0
64/63	口蓋髙示数	29.73	_	1	29.7	3
72.	全側面角	7 9	8 2	2	80.5	0
73.	鼻側面角	8 1	8 4	2	82.5	0
74.	歯槽側面角	68	7 3	2	70.5	

表17 庵ノ前弥生人鼻根部計測値(女性、mm、度)

		8 号	9 号		平均
				n	M
50.	前眼窩間幅	15	18	2	16.50
50 A	鼻根横弧長	19	20	2	19.50
50/50A	鼻根彎曲示数	78.95	90.00	2	84.48
57.	鼻根最小幅	10	1 2	2	11.00
44.	両眼窩幅	93	90	2	91.50
50/44	眼窩間示数	16.13	20.00	2	18.07
а.	前頭突起上幅(右)	7	8	2	7.50
	(左)	7	_	1	7
b.	前頭突起水平傾斜角	_	9 5	1	9 5
77.	鼻頬骨角	145	120	2	132.50

表18 庵ノ前弥生人下顎骨計測値(女性、mm、度)

		8 号	9 号	拉	均
				n	M
65.	下顎関節突起幅	113		1	113
65(1).	下顎筋突起幅	9 1	_	1	9 1
67.	前下顎幅	4 4	_	1	4 4
68(1).	下顎長	97	101	2	99.00
69.	オトガイ髙	29	_	1	29
69 (2)	下顎体 髙(右)	_	_	_	
	(左)	_	22	1	22
70.	枝 髙(右)	5 2	_	1	5 2
	(左)	_	56	1	56
70(1).	前 枝 髙(右)	5 2		1	5 2
70(2)	最小枝髙(右)	4 5	48	2	46.50
	(左)	_	47	1	47
70(3)	下顎切痕高(右)	1 2	_	1	12
	(左)	1 2	_	1	1 2
71.	枝 幅(右)	3 2	3 1	2	31.50
	(左)	_	3 1	1	3 1
71a.	最小枝幅(右)	3 2	3 1	2	31.50
71(1).	下顎切痕幅(右)	3 9	_	1	3 9
	(左)	38	_	1	38
79.	下顎枝角(右)	134		1	134
	(左)	_	1 2 5	1	125
68(1/65)	幅長示数	85.84	_	1	85.84
71/70	下顎枝示数(右)	61.54	_	1	61.54
	(左)	_	55.36	1	55.36
71a/70(2)	下顎枝示数(右)	71.11	64.58	2	67.85
70(3)/71(1)	下顎切痕示数(右)	30.77	_	1	30.77
	(左)	31.58	_	1	31.58

表19 庵ノ前弥生人鎖骨計測値 (mm)

		10号	8 号
		(男性)	(女性)
4.	中央垂直径 (右	16	7
	(左) 16	_
5.	中央矢状径 (右	11	9
	(左) 12	_
6.	中 央 周 (右	4 6	2 7
	(左	45	_
4/5	鎖骨断面示数(右	145.45	77.78
	(左	133.33	· —

表20 庵ノ前弥生人上腕骨計測値 (mm)

					8 号	9 号	平	均	10号
	_				(女性)	(女性)	n	M	(男性)
5.	中夕	と最っ	大径	(右)	2 2	19	2	20.50	23
6.	中乡	と最り	卜径	(右)	15	14	2	14.50	18
7.	骨体	▶最≀	ト周	(右)	56	5 4	2	55.00	6 5
7(a).	中	央	周	(右)	63	5 7	2	60.00	70
11.	滑	車	幅	(右)	19	_	1	19	_
				(左)	18	-	1	18	
12.	小	頭	幅	(右)	15	_	1	15	_
				(左)	14	_	1	14	_
12(a).	滑車幅	および小	頭幅	(右)	40	-	1	40	_
				(左)	3 8		1	3 8	_
12(b).	小	頭	幅	(右)	2 1		1	2 1	_
				(左)	20	_	1	20	_
13.	滑	車	深	(右)	2 3	_	1	23	_
6/5	骨体	▶断□	面示数) (右)	68.18	73.68	2	70	78.26

表21 庵ノ前弥生人橈骨計測値 (mm)

		8 号	9 号	平	均	10号
		(女性)	(女性)	n	M	(男性)
1.	最大長(右)	-				231
2.	機能長(右)	201	_	1	201	
	(左)	199	_	1	199	_
3.	最小周(右)	3 9	-	1	3 9	4 5
	(左)	40	3 5	2	37.50	44
۱.	骨体横径(右)	14	-	1	14	16
	(左)	15	15	2	15.00	16
a.	骨体中央横径(右)	1 3	_	1	13	16
	(左)	15	14	2	14.50	15
(1).	小頭横径(右)	_	_		_	_
(2).	頚横径(右)	1 3	_	1	13	_
	(左)	13	_	1	13	
	骨体矢状径(右)	10	_	1	10	13
	(左)	11	10	2	10.50	13
a.	骨体中央矢状径(右)	10		1	10	13
	(左)	11	10	2	10.50	13
(2).	頚矢状径(右)	13	_	1	13	_
	(左)	14	_	1	14	
(4).	頚 周(右)	41	_	1	4 1	
	(左)	4 4	_	1	44	_
(5).	骨体中央周(右)	40		4	40	47
	(左)	4 4	40	2	42.00	45
(6).	骨下端幅(右)		_		_	3 2
	(左)		_		_	33
/2	長厚示数(右)	19.40	_	1	19.40	_
	(左)	20.10	_	1	20.10	_
/4	骨体断面示数(右)	74.43	_	1	74.43	81.25
	(左)	73.33	66.67	2	70.00	81.25
5a/4a	中央断面示数(右)	76.92	_	1	76.92	81.25
	(左)	73.33	71.43	2	72.38	86.67

表22 庵ノ前弥生人尺骨計測値 (mm)

***		8 号	10号
		(女性)	(男性)
3.	最 小 周(右)	3 7	40
	(左)	_	38
6.	尺骨頭幅 (左)	19	_
6(1)	上 幅 (左)	2 9	
7.	尺骨頭深 (左)	26	_
7(1).	尺骨頭鉤状突起間距離(左)	22	_
8.	尺骨頭髙 (左)	20	
11.	尺骨矢状径(右)	1 2	1 3
	(左)	1 2	1 4
12.	尺骨横径 (右)	17	19
	(左)	1 5	18
S	中央最小径(右)	1 2	1 3
	(左)	12	1 4
L	中央最大径(右)	1 7	1 9
	(左)	17	18
С	中 央 周(右)	4 8	5 3
	(左)	47	5 3
11/12	骨体断面示数(右)	70.59	68.42
	(左)	80.00	77.78
S/L	中央断面示数(右)	70.59	68.42
	(左)	70.59	77.78

表23 庵ノ前弥生人大腿骨主要計測値 (mm)

			8 号	9 号	य	Z 均	10号
			(女性)	(女性)	n	M	(男性)
1.	最 大 長	(右)	404	-	1	404	
	((左)	_	377	1	377	_
2.	自然位長((右)	398	_	1	398	_
	((左)	_	371	1	371	_
3.	最大転子長((右)	395	_	1	395	_
	((左)		367	1	367	
4.	自然位転子	艮(右)	375	_	1	375	_
		(左)	_	354	1	354	_
6.	骨体中央矢丬	犬径(右)	26	22	2	24.00	30
		(左)	2 5	21	2	23.00	28
7.	骨体中央横行	圣(右)	26	24	2	25.00	26
		(左)	27	2 4	2	25.50	29
8.	骨体中央周	(右)	8 1	73	2	77.00	8 8
		(左)	8 3	7 4	2	78.50	9 1
9.	骨体上横径	(右)	30	28	2	29.00	30
		(左)	3 3	2 9	2	31.00	3 2
0.	骨体上矢状征	圣(右)	22	2 1	2	21.50	2 7
		(左)	23	2 1	2	22.00	2 8
5.	頚垂直径	(右)	3 2		1	3 2	_
		(左)	3 1	27	2	2.9.00	_
6.	頚矢状径	(右)	22	_	1	22	_
		(左)	2 2	2 1	2	21.50	_
7.	頚 周	(右)	90	_	1	90	_
		(左)	89	79	2	84.00	_
8.	頭垂直径	(右)	4 1		1	4 1	_
		(左)	_	39	1	39	_
9.	頭 横 径	(左)		40	1	40	_
0.	頭 周	(左)		127	1	127	_
8/2	長厚示数	(右)	20.35	_	1	20.35	_
		(左)	_	19.41	1	19.41	_
6/7	骨体中央断面示数	(右)	100.00	91.67	2	95.84	115.38
		(左)	92.59	87.50	2	90.05	96.55
0/9	上骨体断面示数	(右)	73.33	75.00	2	74.17	90.00
		(左)	69.70	72.41	2	71.06	87.50
6/15	頚断面示数	(右)	68.75		1	68.75	_
		(左)	70.97	77.78	2	74.38	_
9/18	頭断面示数	(左)		102.56	1	102.56	_

表24 庵ノ前弥生人脛骨計測値 (mm)

		8 号	9 号	<u> </u>	均	10号
		(女性)	(女性)	n	M	(男性)
1.	脛骨全長 (右)	3 2 0		1	320	_
	(左)	320	_	1	320	_
1 a .	脛骨最大長(右)	326	_	1	326	_
	(左)	327	_	1	327	_
1 b.	脛 骨 長(右)	3 1 5	_	1	315	· —
	(左)	3 1 5		1	315	_
2.	顆距間距離(右)	301		1	301	
	(左)	303	_	1	303	_
6.	最大下端幅 (右)	5 1	_	1	5 1	_
7.	下端矢状径 (右)	3 4	_	1	3 4	_
	(左)	3 4	_	1	3 4	_
8.	中央最大径 (右)	27	24	2	25.50	3 1
	(左)	26	24	2	25.00	3 1
8 a .	栄養孔位最大径(右)	28	26	2	27.00	3 5
	(左)	28	26	2	27.00	3 5
9.	中央横径 (右)	20	19	2	19.50	2 5
	(左)	20	19	2	19.50	2 5
9 a .	栄養孔位横径(右)	2 2	2 1	2	21.50	2 7
	(左)	2 1	20	2	20.50	26
10.	骨体周(右)	7 3	67	2	70.00	8 8
	(左)	7 4	68	2	71.00	8 9
10a.	栄養孔位周 (右)	82	74	2	78.00	9 7
	(左)	8 1	74	2	77.50	9 7
10ъ.	最 小 周 (右)	6 9	58	2	63.50	7 9
	(左)	6 9	60	2	64.50	8 1
9/8	中央断面示数(右)	74.07	79.17	2	76.62	80.65
	(左)	76.92	79.17	2	78.05	80.65
9a/8a	栄養孔位断面示数(右) 78.57	80.77	2	79.67	77.14
	(:	左) 75.00	76.92	2	75.96	74.29
10b/1	長厚示数 (右)	21.56	_	1	21.56	_
	(左)	21.56	_	1	21.56	_

表25 庵ノ前弥生人腓骨計測値 (mm)

		8 号	9 号	平	均	10号
		(女性)	(女性)	n	M	(男性)
2.	中央最大径(右)	15	14	2	14.50	16
	(左)	_	13	1	13	18
3.	中央最小径(右)	9	9	2	9.00	11
	(左)	_	9	1	9	1 2
4.	中 央 周 (右)	3 9	40	2	39.50	47
	(左)	_	3 7	1	3 7	5 1
4 a .	最 小 周 (左)	_	_		_	40
4 b.	頚 横 径 (左)				_	1 2
4 c .	頚矢状径 (左)	-	_		_	1 2
3/2	中央断面示数(右)	60.00	64.29	2	62.15	68.75
	(左)	_	69.23	1	69.23	66.67

表26 庵ノ前弥生人推定身長値 (cm、Pearson)

	8 号	9 号	—————————————————————————————————————	均	10号
	(女性)	(女性)	n	M	(男性)
大腿骨(右)	151.42		1	151.42	_
(左)		146.17	1	146.17	_
脛 骨(右)	150.04		1	150.04	
(左)	150.04	-	1	150.04	
橈 骨(右)		_			161.49

表27 庵ノ前弥生人推定身長値(cm、藤井)

		8 号	9 号	平	均	10号
		(女性)	(女性)	n	M	(男性)
大腿1	骨(右)	151.54	_	1	151.54	
	(左)	_	145.68	1	145.68	_
脛	骨(右)	148.27	_	1	148.27	
	(左)	148.63	_	1	148.63	_
橈	骨(右)		_			158.91

表28 庵ノ前弥生人四肢骨比 中央周の比

	8 号	9 号	平	均	10号
	(女性)	(女性)	n	M	(男性)
橈 骨/尺 骨(右)	83.33	_		_	88.68
(左)	93.62	_	1	93.62	84.91
榜 骨/上腕骨(右)	_				67.14
鎖 骨/上腕骨(右)		47.37	1	47.37	65.71
上腕骨/大腿骨(右)	77.78	78.08	2	77.93	79.55
上腕骨/脛 骨(右)	86.30	85.07	2	85.69	79.55
脛 骨/大腿骨(右)	90.12	91.78	2	90.95	100.00
(左)	89.16	91.89	2	90.53	97.80
腓 骨/脛 骨(右)	53.42	59.70	2	56.56	53.41
, (左)	_	54.41	1	54.41	57.30

表29 庵ノ前弥生人四肢骨比 最大長の比

		8 号
		(女性)
脛	骨/大腿骨(右)	80.69
	(左)	

表30 形態小変異(Non-metric crania variants)

	庵 -	 ノ前		 前	庵~	前
	8 号	·人骨	9号/	人骨	10号	人骨
	女性		女性		男性	
	右	左	右	<u></u> 左	右	左
1. Medial palatine canal	_	_		_	/	/
2. Pterygospinous foramen	-	/	/		/	/
3. Hypoglossal canal bridging	_	_	/	_	/	/
4. Clinoid bridging	/	/	/	/	/	/
5. Condylar canal absent	_	/	/	_	/	/
6. Foramen of Huschke(>1mm)	_	/	/	_	/	/
7. Jugular foramen bridging	_	/	/	+	/	/
8. Precondylar tubercle	_	_	/	_	/	/
9. Supra-orbital foramen	_	_	_	+	/	/
10. Accesory infraorbital foramen	+	+	+	/	/	/
11. Zygo-facial foramen absent		_		/	/	/
12. Aural exostosis	_	/	/	/	/	_
13. Metopism		_	-	-	-	-
14. Os incae	-	_		_	-	-
15. Ossicle at the lambda	-	_	-	_	-	-
16. Parietal notch bone	_	/	_	+	/	-
17. Transverse zygomatic suture(>5mm)	/	/	+	+	/	/
18. Asterionic ossicle	_	/	/		/	/
19. Occipitomastoid ossicle	-	/	/	-	/	_
20. Epipteric ossicle	_	/	_	_	/	/
21. Frontotemporal articulation	_	/	_	_	/	/
22. Biasterionic suture (>10mm)	/	_	_	_	/	/
23. Mylohyoid bridging	_	/		_	/	/
24. Accessory mental foramen	_	_	_	/	/	/
25. Mandibular torus	+	+	-	_	/	/
26. 滑車上孔(上腕骨)	_	_		_	/	/

[present : +, absent : −, unobservale : /]

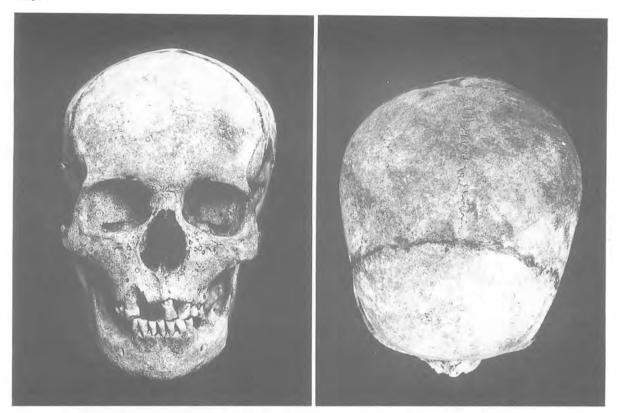
表31 歯の計測値一近遠心径 (mm) (Teeth)

	庵ノ前	庵ノ前	庵ノ前	庵ノ前
	7 号人骨	8 号人骨	9 号人骨	10号人骨
	男性	女性	女性	男 性
上顎右側Ⅰ1	_	-	-	_
Ιz	-	_	839	_
С	882	_	764	_
Рı	_	675	713	_
P₂		6 2 2	_	_
M ₁	1080			_
M ₂	9 4 8		935	_
Мз	924			
左側Iı	_	_	_	
Ιz	_	_	_	_
С	873	742	-	_
Pι	762	631	_	763
P₂	715	_	_	7 5 9
M ₁	1049	962	_	_
M ₂	979	_		
Мз				
下顎右側 I ₁	_	473	_	
Ιz	_	579	570	_
С	765	641	6 3 4	
Ρı	7 2 5	_	660	_
P₂	_	_	764	_
M ₁	_	_	1081	_
M ₂	1 1 5 2	_	1095	1105
Мз	1100			
左側 I 1	_	_	485	_
Ιz		_	5 7 9	_
С	_	630	_	_
Pι	762	_	676	_
Ρ₂	7 5 6	_	737	_
M ₁	1196	_	_	_
M ₂	1 1 7 7	_	_	_
Мз	1126	_	- ·	_

表32 歯の計測値一頬(唇)舌径(mm)

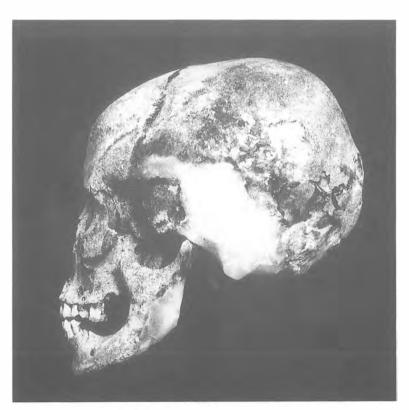
	庵ノ前	庵ノ前	庵ノ前	庵ノ前
	7 号人骨	8 号人骨	9 号人骨	10 号人肖
	不明	女性	女性	男性
上顎右側 I ı			_	_
Ιz		_	_	-
С	906	_	858	_
P ₁		875	950	_
P ₂	****	866	_	_
M ₁	1243	_		
M ₂	1231		1149	_
Мз	1102	_	_	
左側 I 1		_	7 3 8	
Ιz	_	_	-	_
С	889	772		
Pι	970	891	-	1045
P ₂	892	_	_	1053
M ₁	1 2 2 5	_	_	_
M ₂	1220	_	_	_
Мз	_	-	_	_
· 顎右側 I 1		540	574	
Ιz		600	612	_
С	8 4 9	686	755	
Pι	822	_	803	_
P ₂	-	_	8 4 9	_
M 1	_	_	1094	_
M_2	1121	_	1047	1103
Мз	1026	. -	_	_
左側 I 1		5 5 1	583	
I 2	_	592	6 3 1	_
С	_	708	_	
P ₁	812	_	828	_
P ₂	8 4 1	_	871	_
M 1	1123	_	_	_
M ₂	1077	_		
Мз	1055	_	_	_

図版1

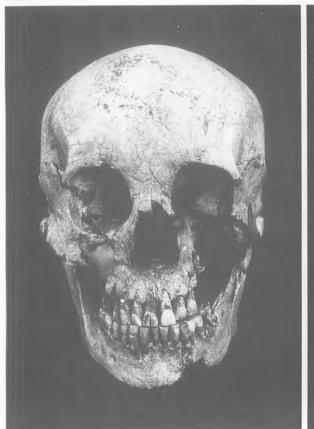


頭蓋前面 (Frontal view of the skull)

頭蓋上面 (Superior view of the skull)



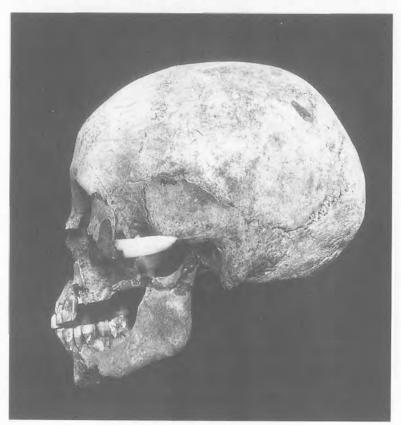
頭蓋側面(Lateral view of the skull) 庵ノ前8号人骨(女性、熟年) AnnomaeNo.8(mature female)



頭蓋前面(Frontal view of the skull)



頭蓋上面(Superior view of the skull)



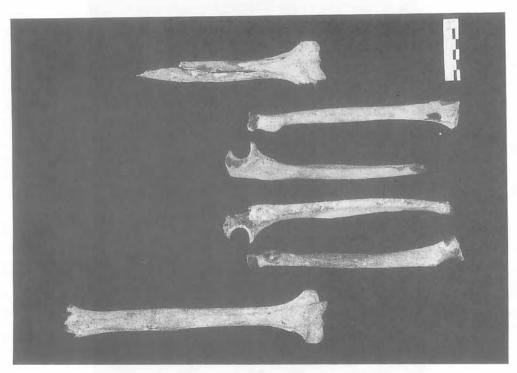
頭蓋側面(Lateral view of the skull) 庵ノ前9号人骨(女性、壮年) AnnomaeNo.9(young adult female)



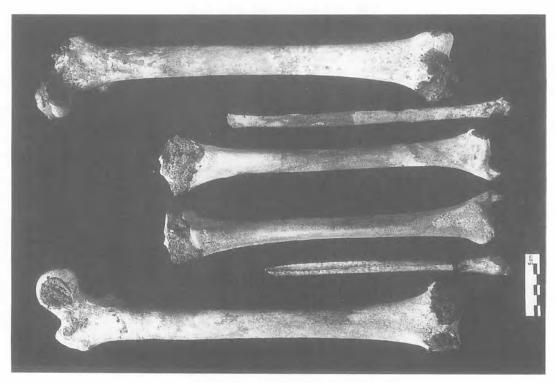
頭蓋上面 (Superior view of the skull)



楔状椎、変形性脊椎症 (Compression fracture & Osteoarthritis of the spine) 庵ノ前10号人骨(男性、熟年) AnnomaeNo.10 (mature male)

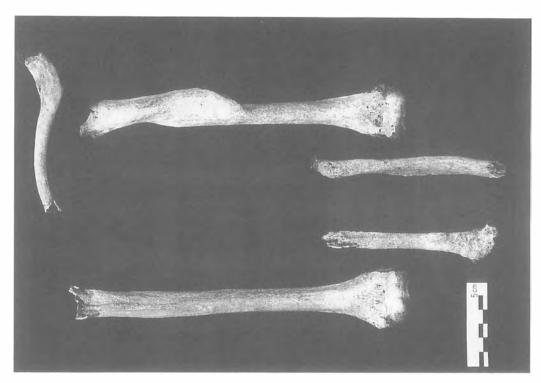


上肢骨 (Bones of the upper limb)

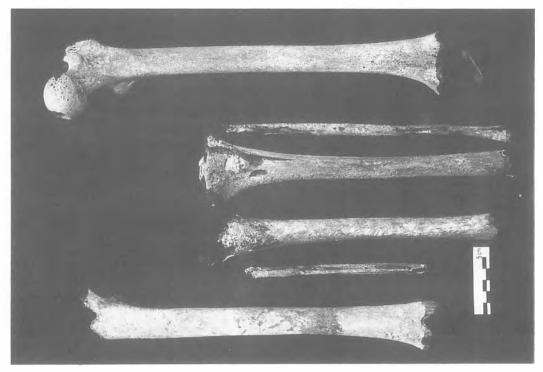


下肢骨 (Bones of the lower limb)

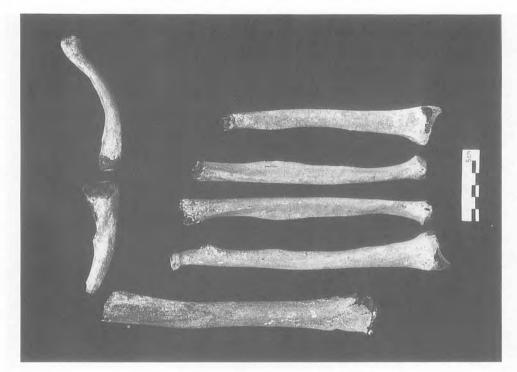
庵ノ前8号人骨(女性、熟年) AnnomaeNo.8(mature female)



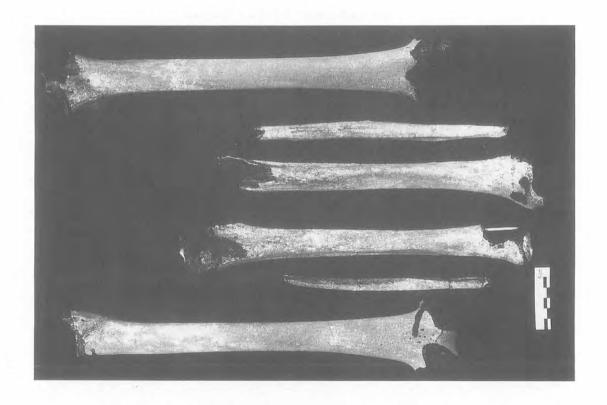
上肢骨 (Bones of the upper limb) 骨折 (左側上腕骨、右側楔骨) (fracture)



下肢骨 (Bones of the lower limb) 庵ノ前9号人骨(女性、壮年) AnnomaeNo.9 (young adult female)



上肢骨 (Bones of the upper limb)

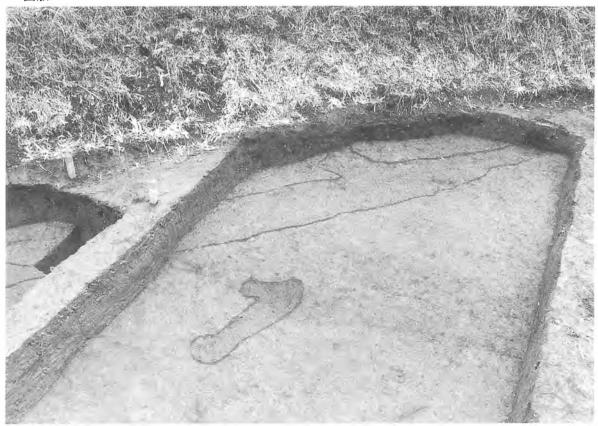


下肢骨 (Bones of the lower limb) 庵ノ前10号人骨 (男性、熟年) AnnomaeNo.10 (mature male)

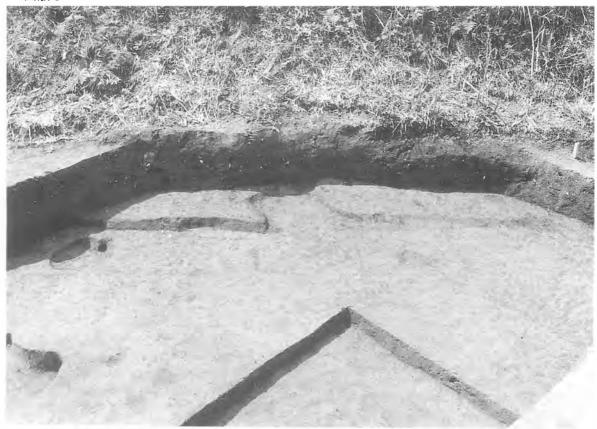
写 真 図 版



平成4年度調査区



平成4年度調査区遺構確認状況



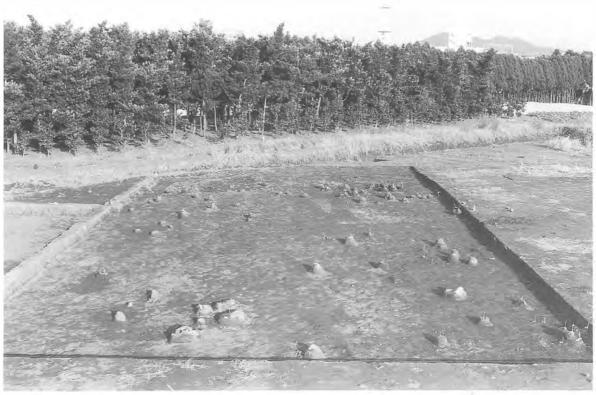
平成4年度調査区溝状遺構



平成5年度 I 区表土剥ぎ後



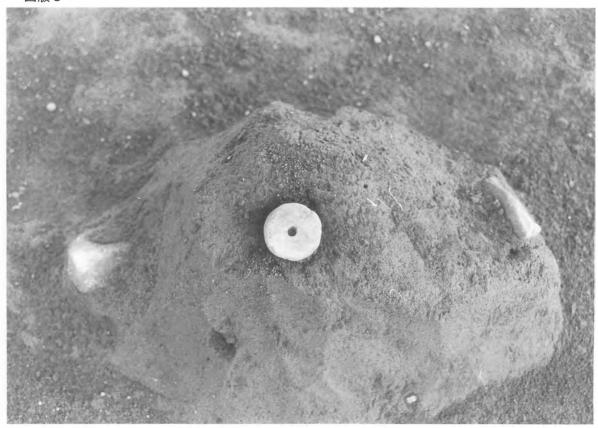
I区F-4区遺物出土状況



Ⅰ区 | -9、 | -10区遺物出土状況



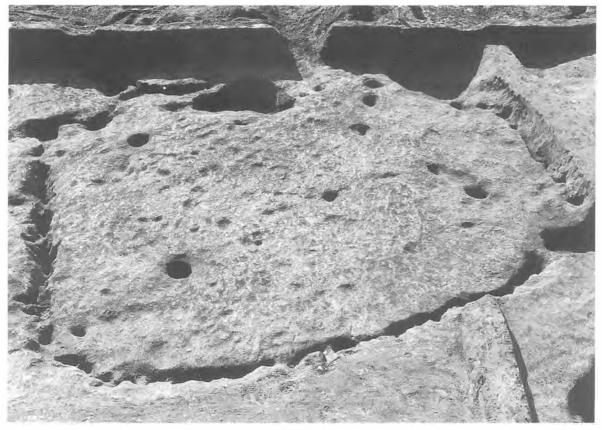
I区 | 一9区壺出土状況



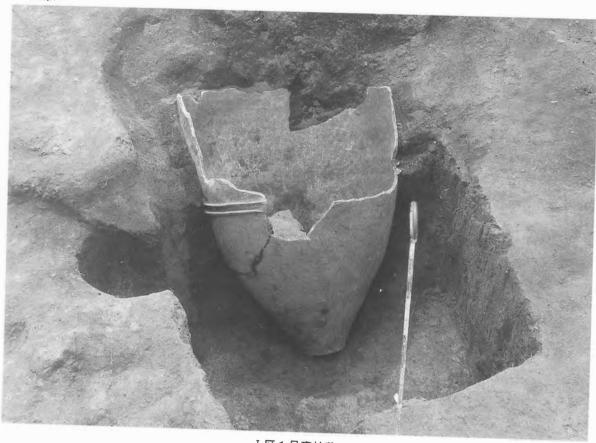
I 区 1 — 9 区紡錘車出土状況



I区1号住居跡(東より)



I区1号住居跡(北より)



I 区 1 号甕棺墓



I区2号甕棺墓



I 区 3 号甕棺墓(正面)



I区3号甕棺墓(横)

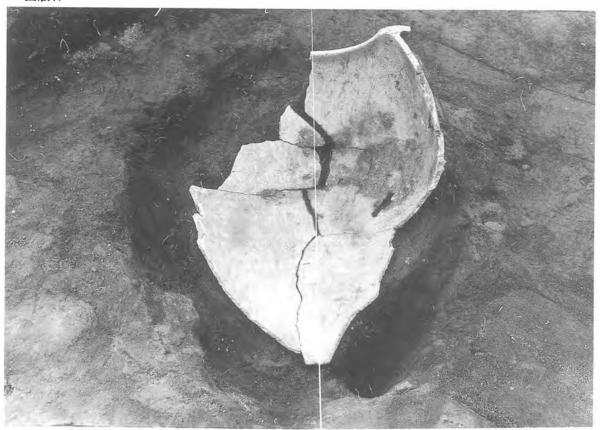


I区4号甕棺墓





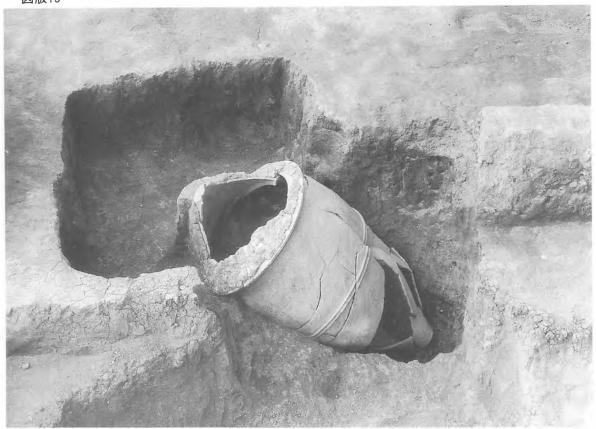
I区5号甕棺墓



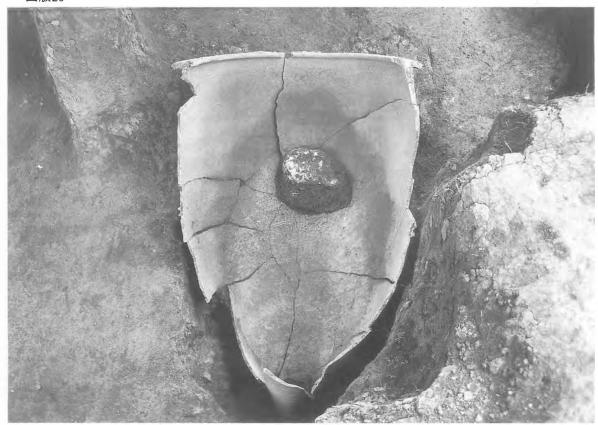
I区6号甕棺墓



I区7号、9号、10号甕棺墓



I 区7号甕棺墓



I 区 7 号甕棺墓人骨出土状況



I区8号甕棺墓



I 区 8 号甕棺墓人骨出土状況



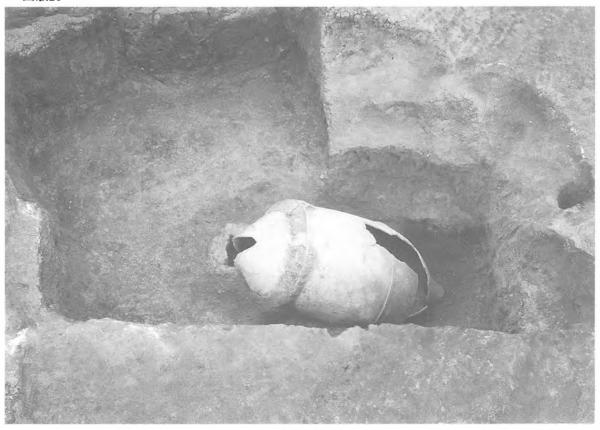
I 区 9 号甕棺墓(横)



I 区 9 号甕棺墓(正面)



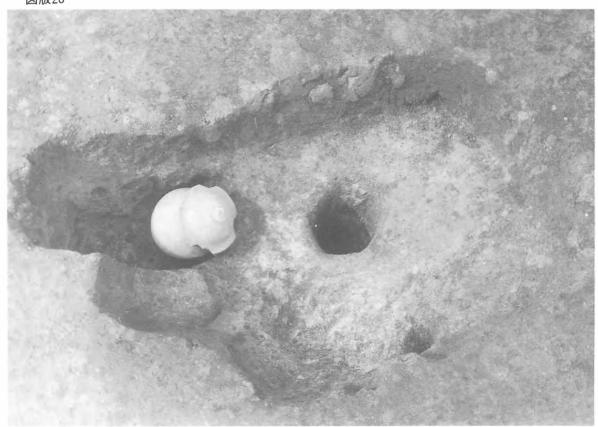
I 区 9 号甕棺墓人骨出土状況



I 区10号甕棺墓



I 区10号甕棺墓人骨出土状況



I 区11号甕棺墓(全体)



I 区11号甕棺墓



I 区12号甕棺墓



I区1号、2号土壙(木棺)墓



I区1号土壙(木棺)墓



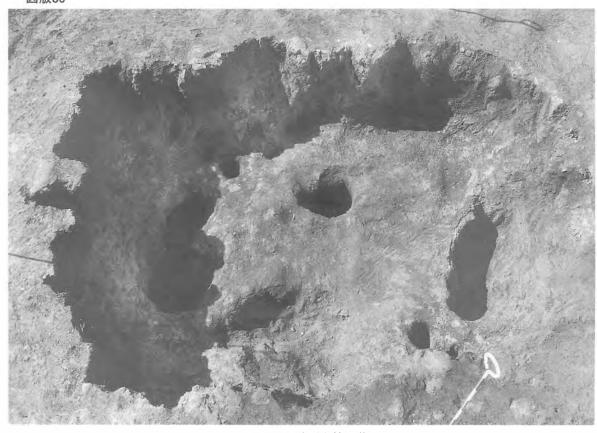
I区2号土壙(木棺)墓



I区3号土壙(木棺)墓



I区4号、5号土壙(木棺)墓



I区6号土壙(木棺)墓



I区9号土壙(木棺)墓





I 区完掘状況(南より)



平成5年度Ⅱ区表土剥ぎ後(南より)



平成5年度Ⅱ区表土剥ぎ後(北より)



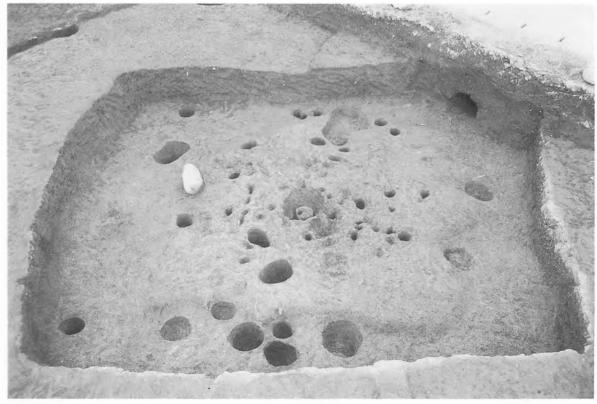
Ⅱ区1号住居跡遺物出土状況



Ⅱ区1号住居跡甕出土状況(1)



Ⅱ区1号住居跡甕出土状況(2)



Ⅱ区1号住居跡



Ⅱ区2号住居跡



Ⅱ区3号住居跡遺物出土状況



Ⅱ区完掘状況(南より)



平成7年度調査区表土剥ぎ(北より)



平成7年度調査区完掘状況(北より)



岩倉山中腹遺跡出土甕棺墓確認状況



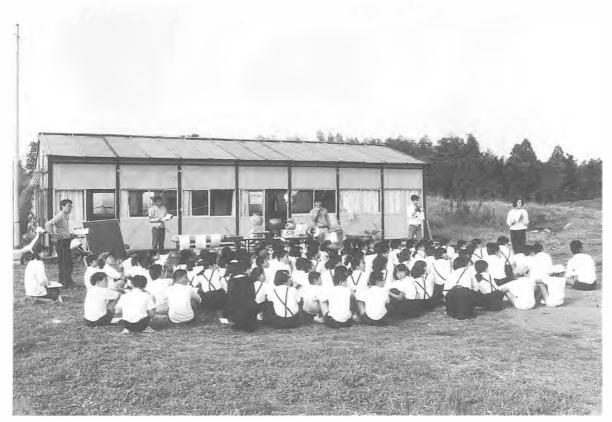
岩倉山中腹遺跡出土甕棺墓(正面)



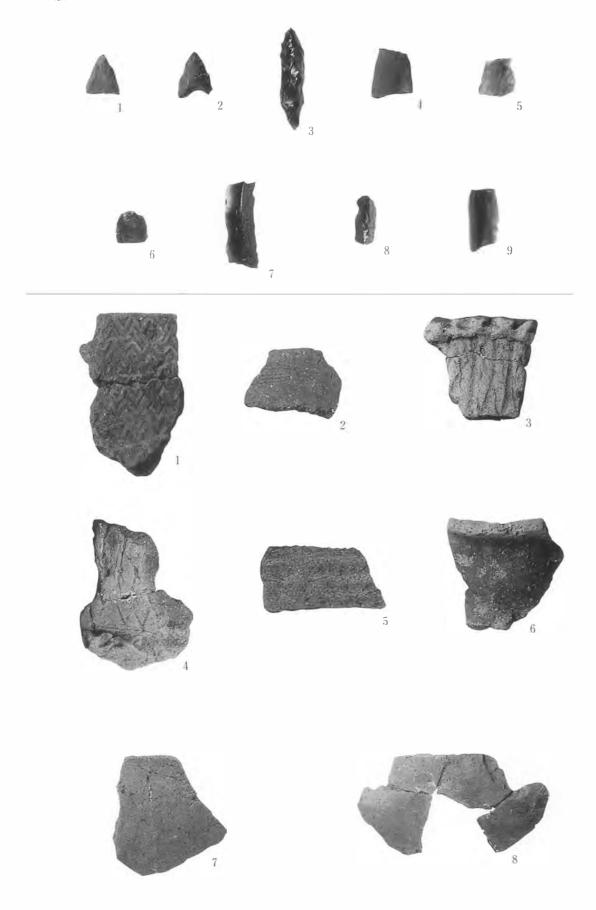
岩倉山中腹遺跡出土甕棺墓(横)



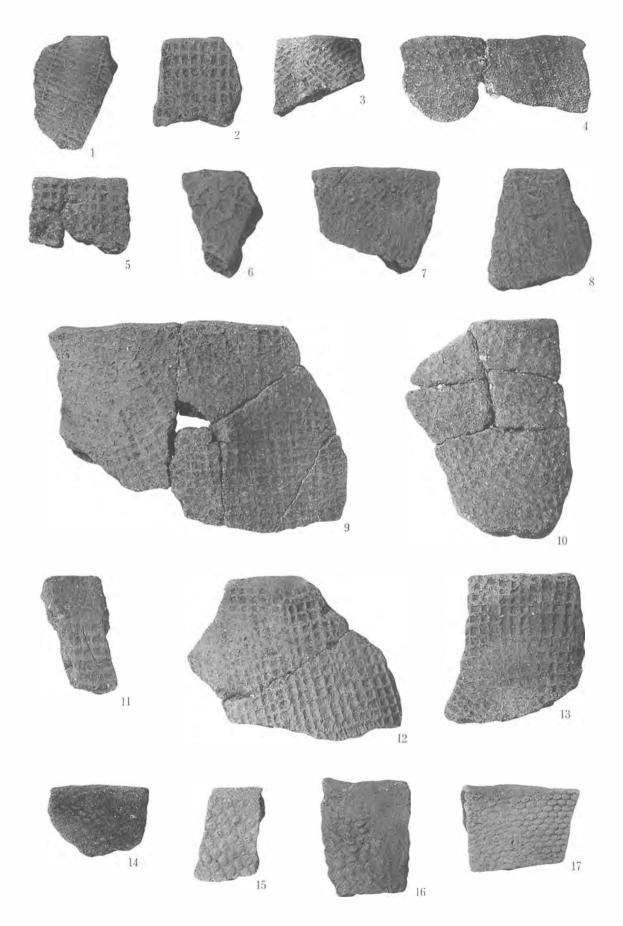
発掘作業



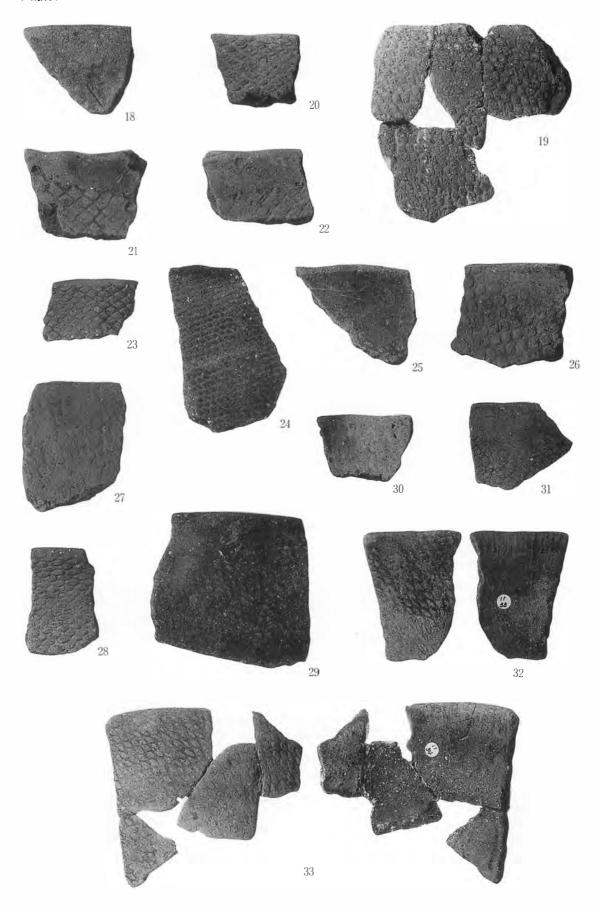
麻生田小学校遺跡見学



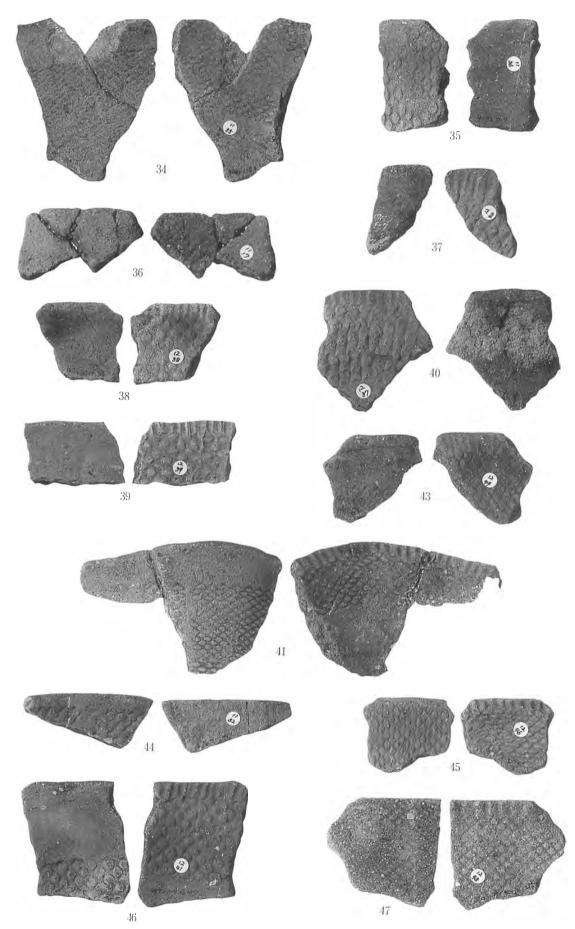
平成4年度調査区出土石器・土器



I 区出土縄文土器(1)



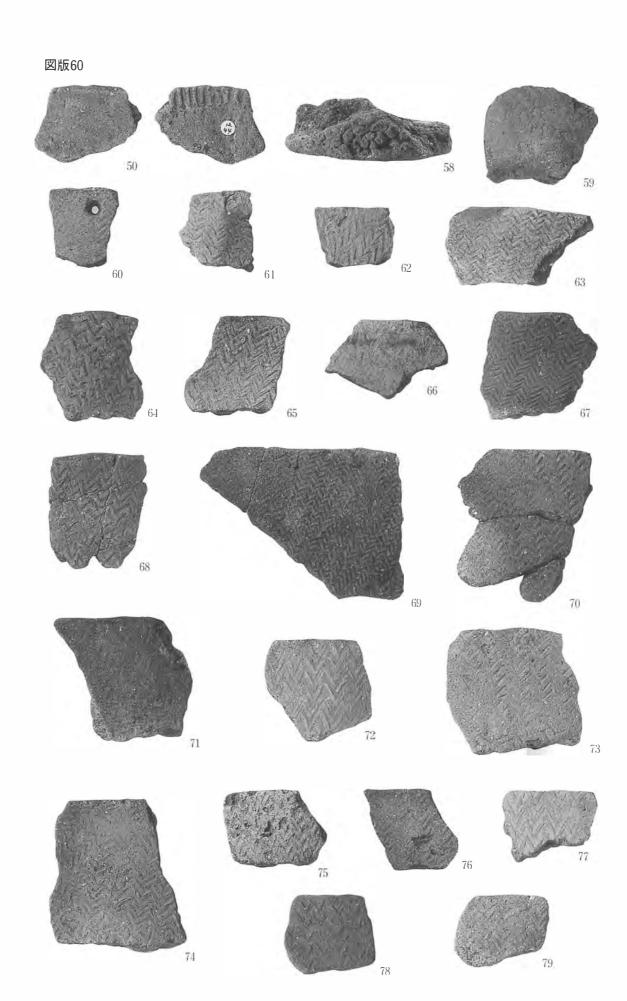
I 区出土縄文土器(2)



I 区出土縄文土器(3)

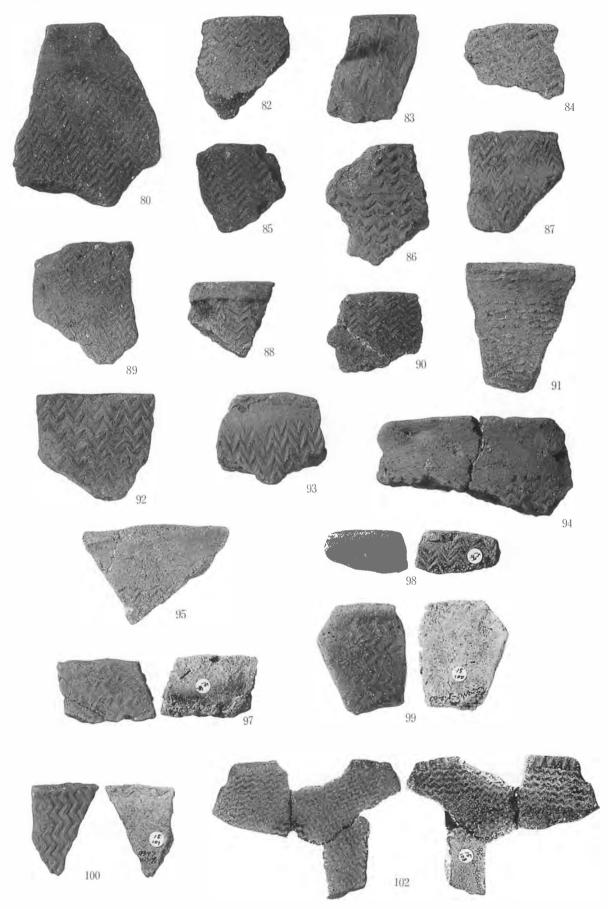


I 区出土縄文土器(4)

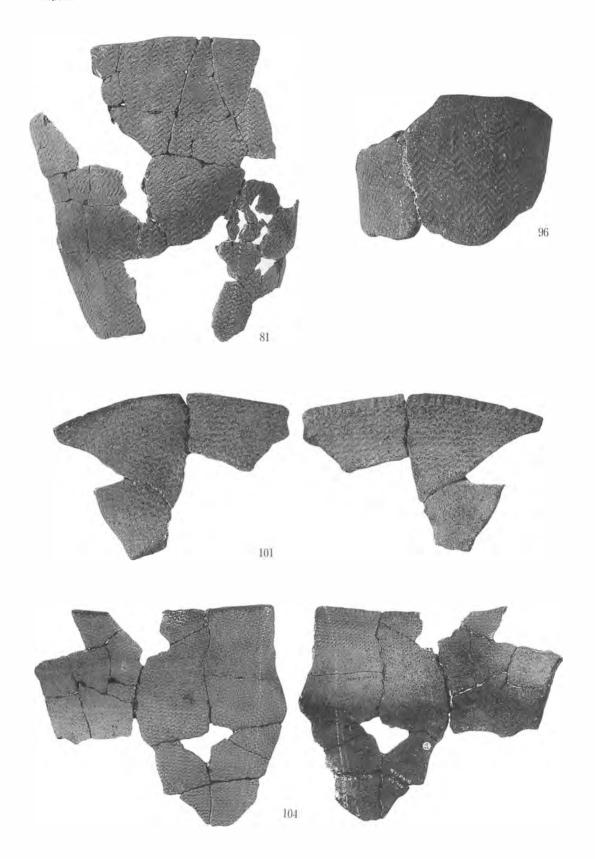


I 区出土縄文土器(5)

図版61

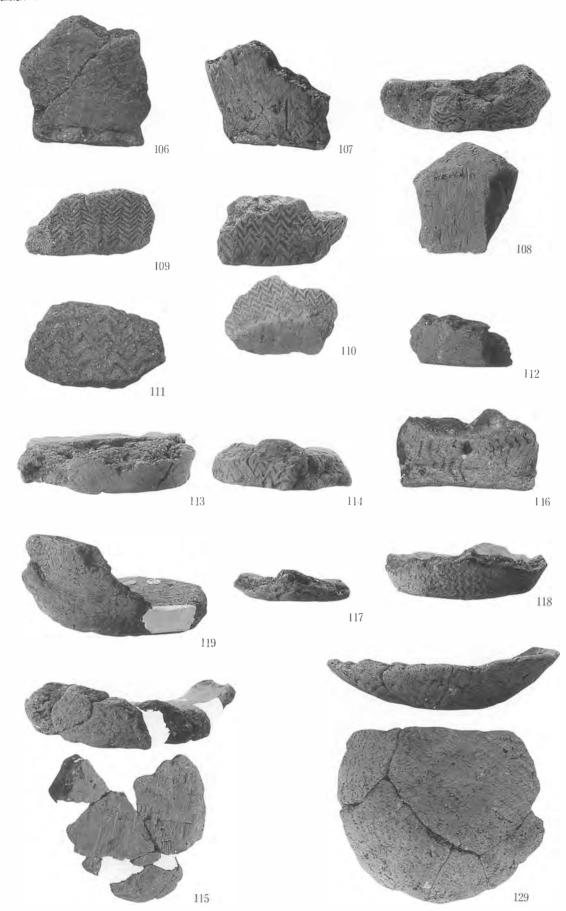


I 区出土縄文土器(6)



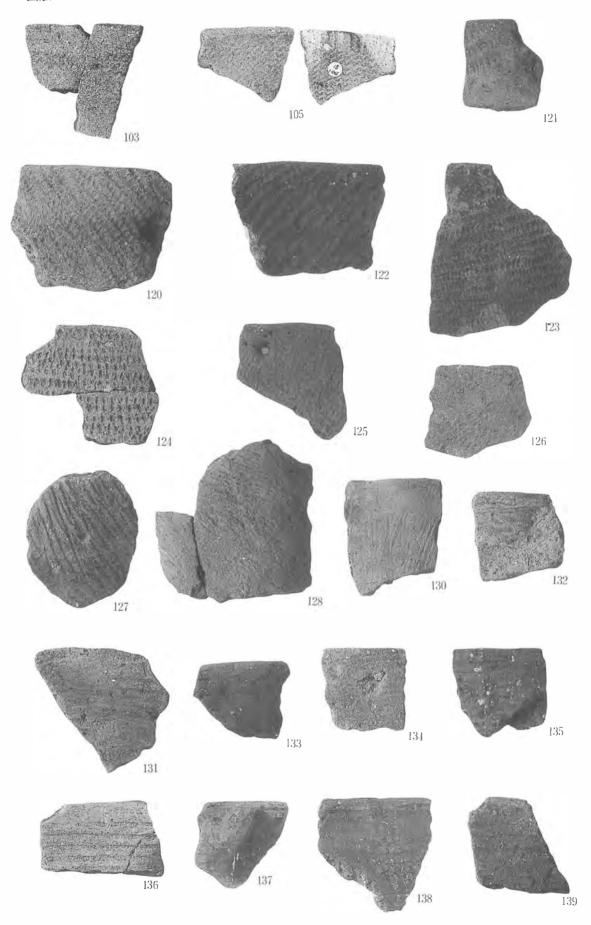
I 区出土縄文土器(7)



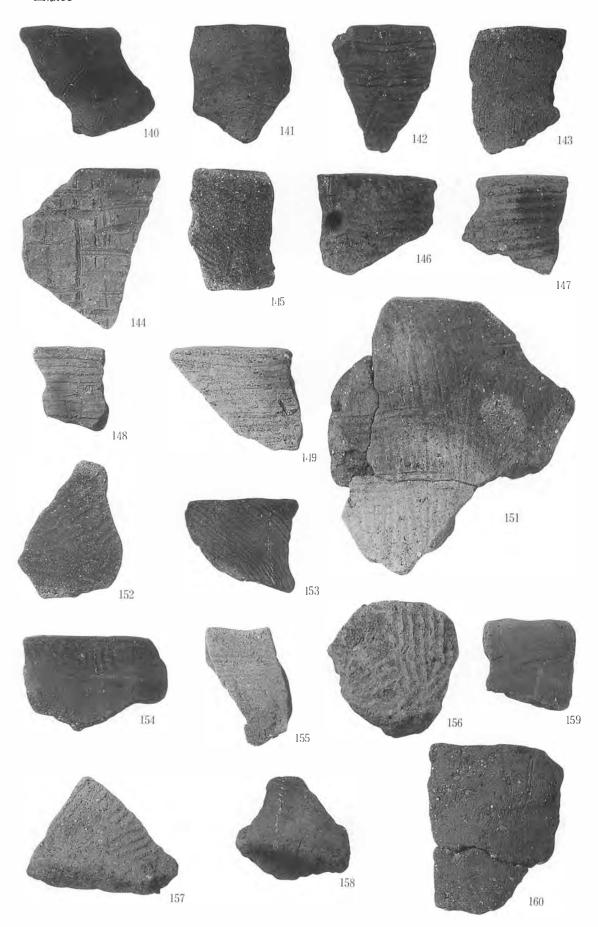


I 区出土縄文土器(8)

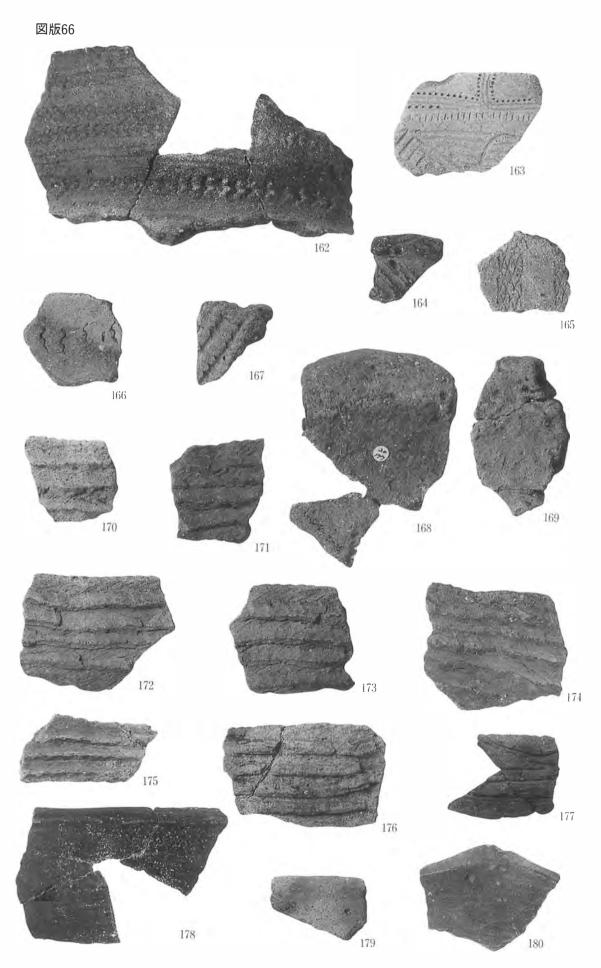
図版64



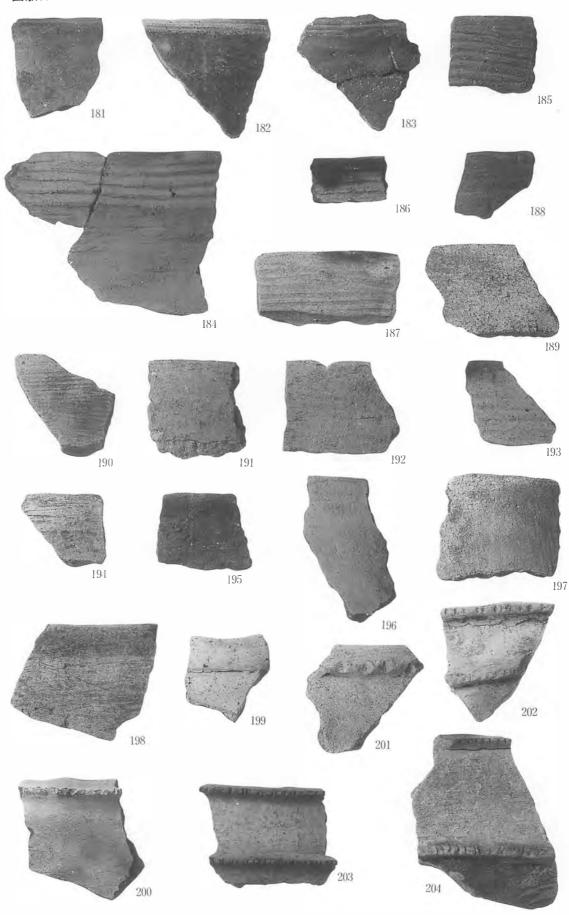
I 区出土縄文土器(9)



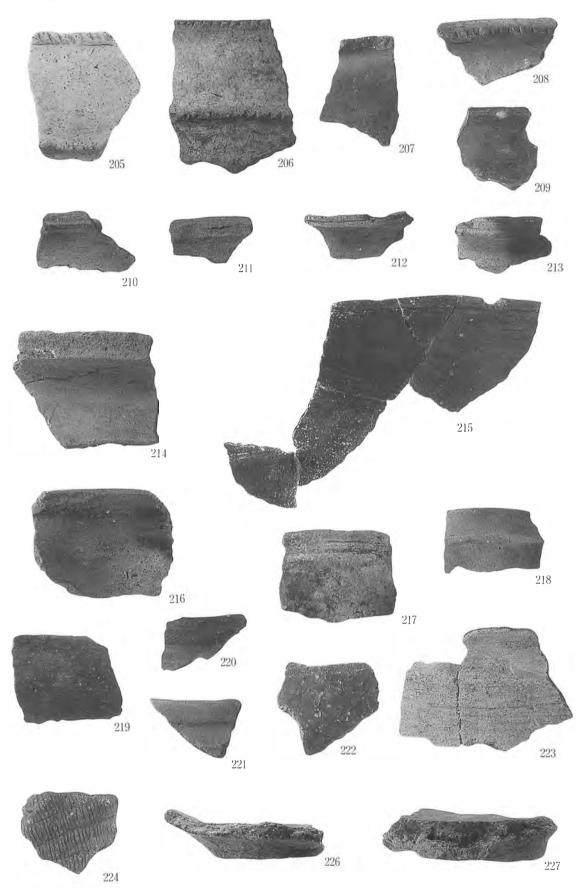
I 区出土縄文土器(10)



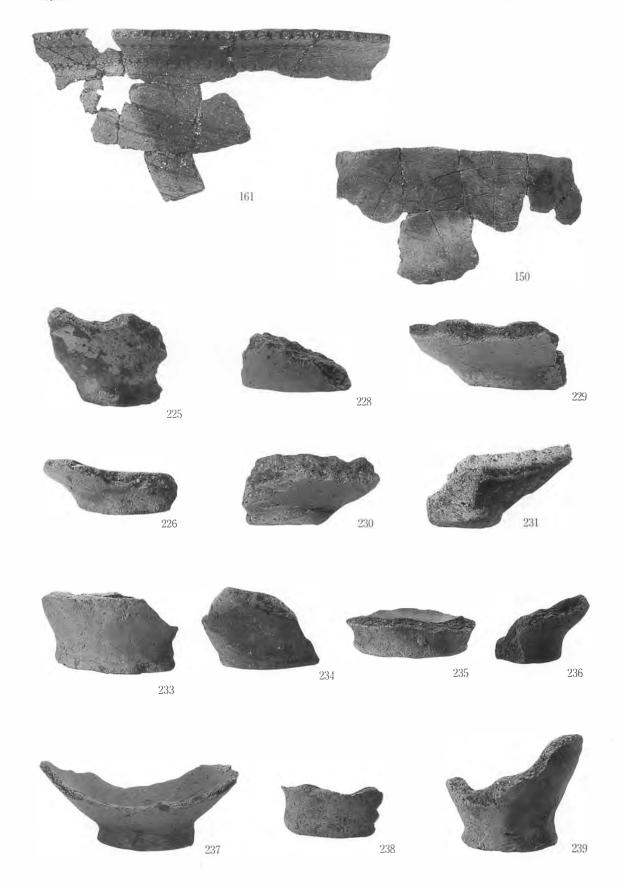
I 区出土縄文土器(11)



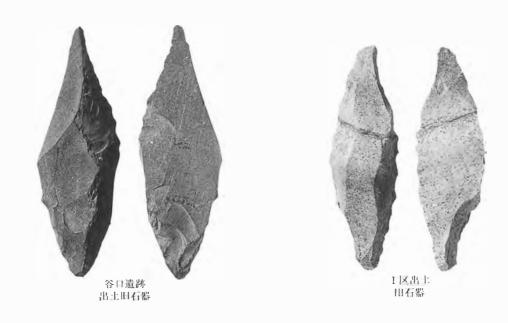
I 区出土縄文土器(12)



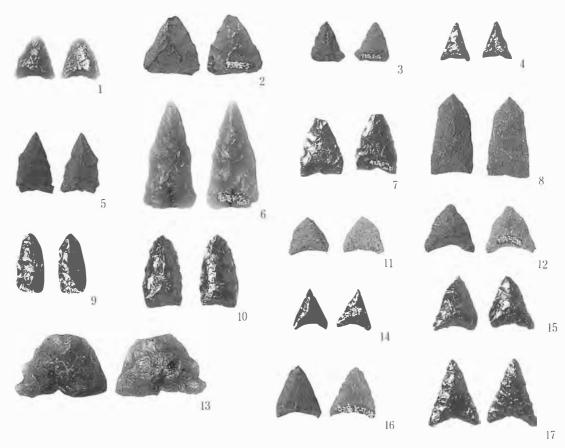
I 区出土縄文土器(13)



I 区出土縄文土器(14)

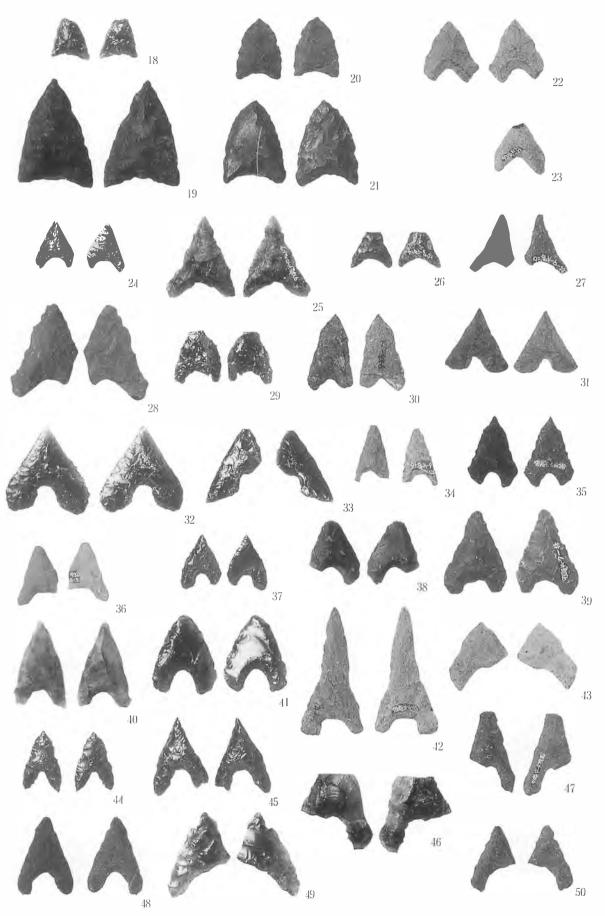


谷口遺跡及びI区出土旧土器

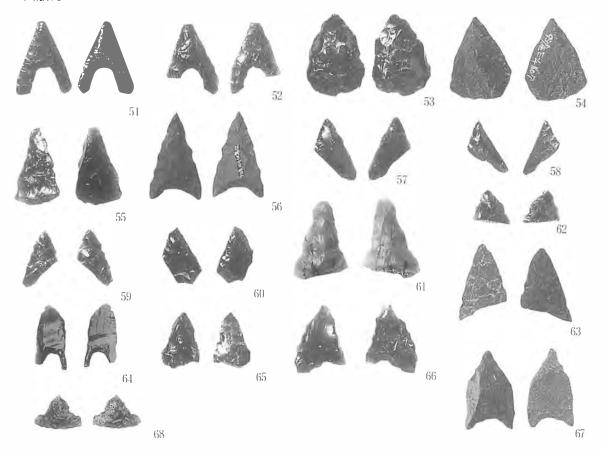


I 区出土石器(1)

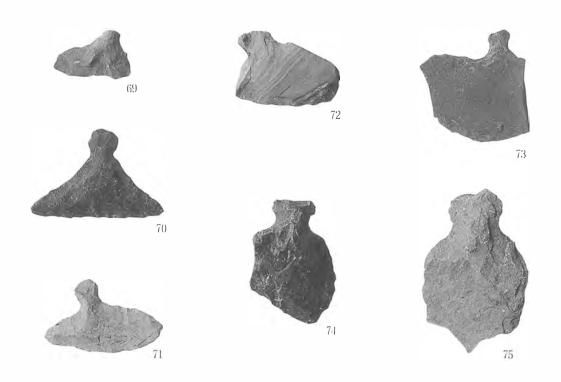




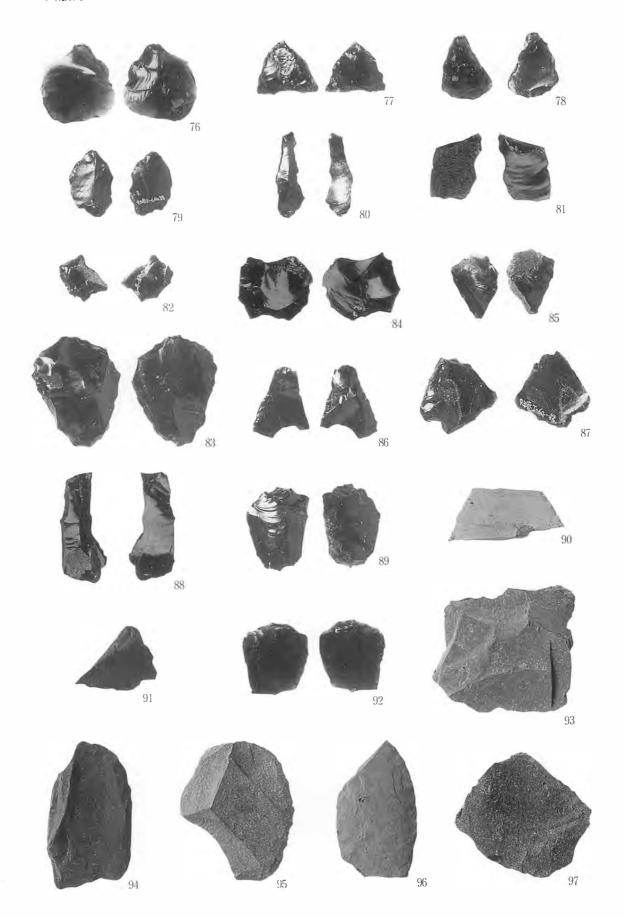
I 区出土石器(2)



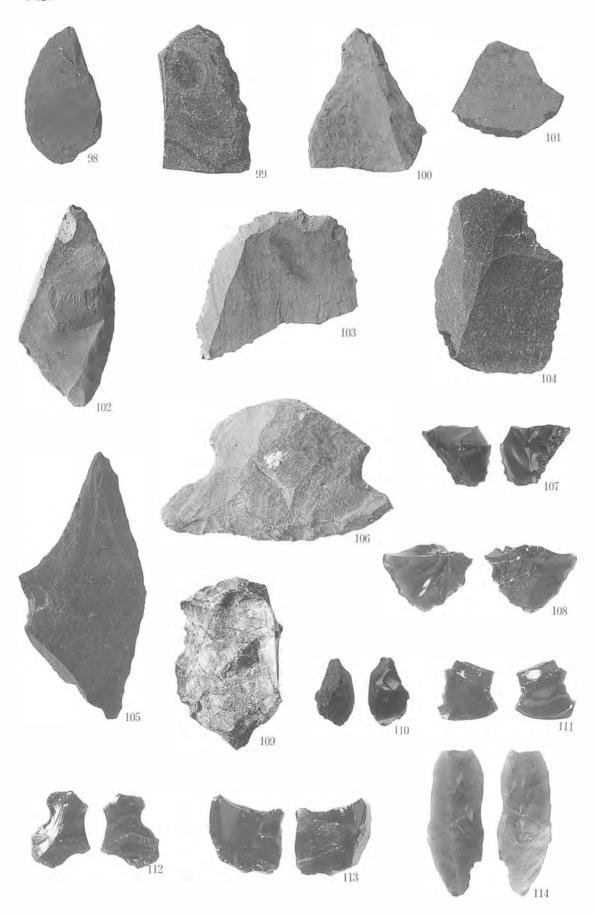
I 区出土石器(3)



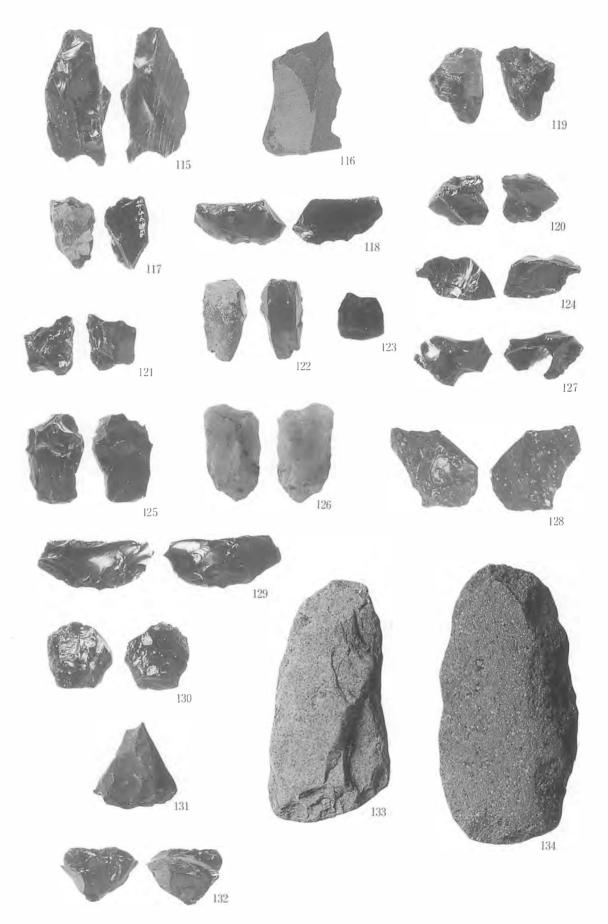
I 区出土石器(4)



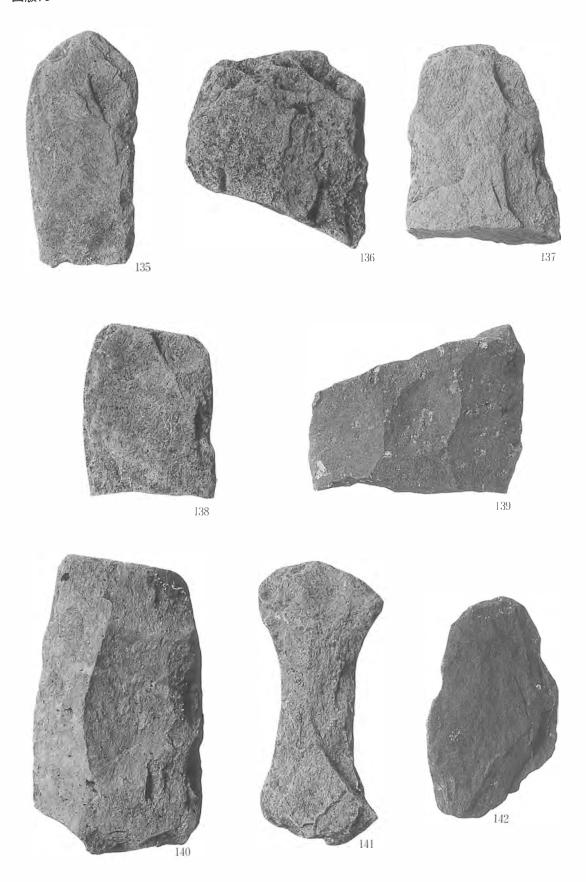
I 区出土石器(5)



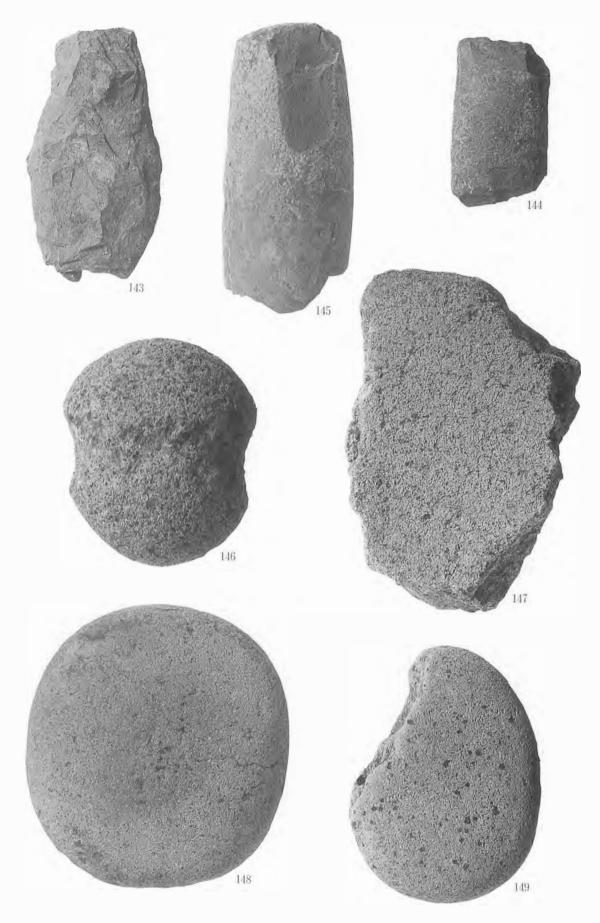
I 区出土石器(6)



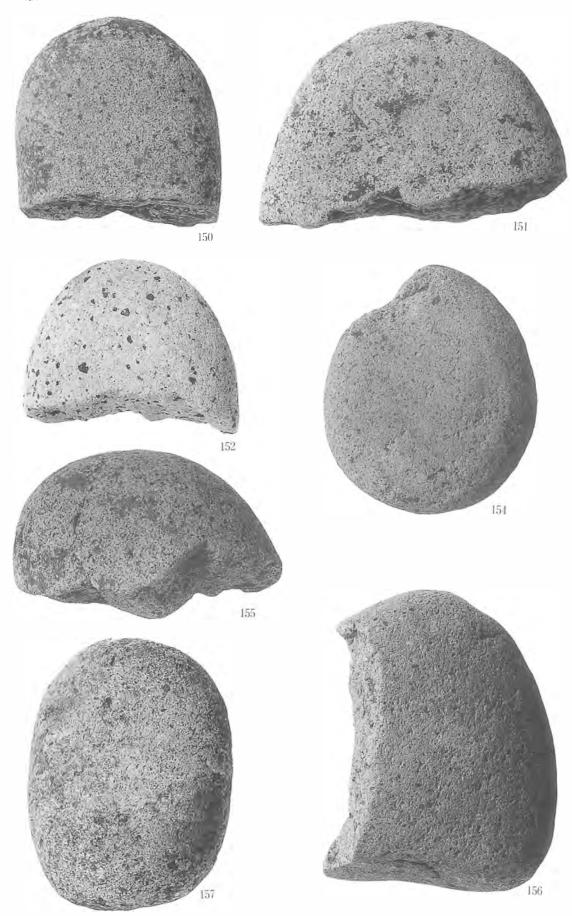
I 区出土石器(7)



I 区出土石器(8)



I 区出土石器(9)



I 区出土石器(10)

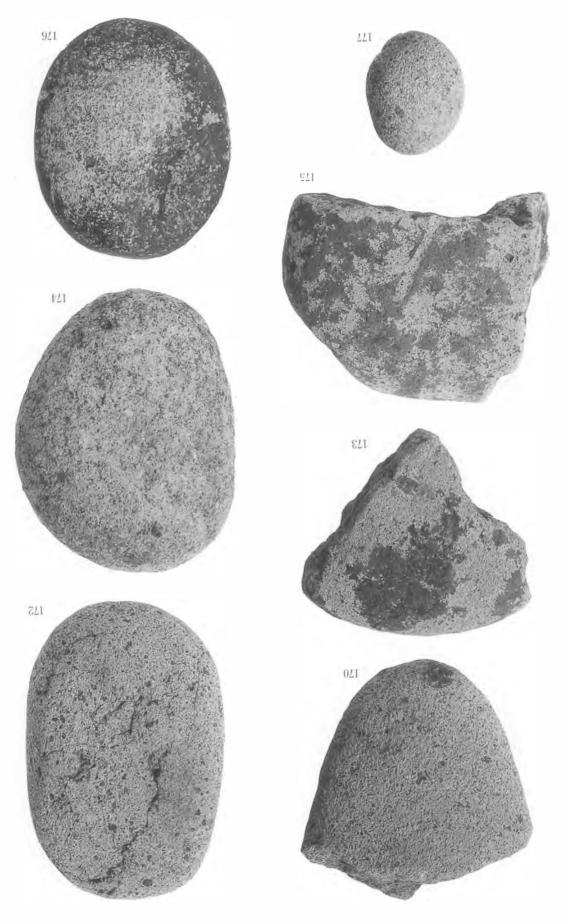


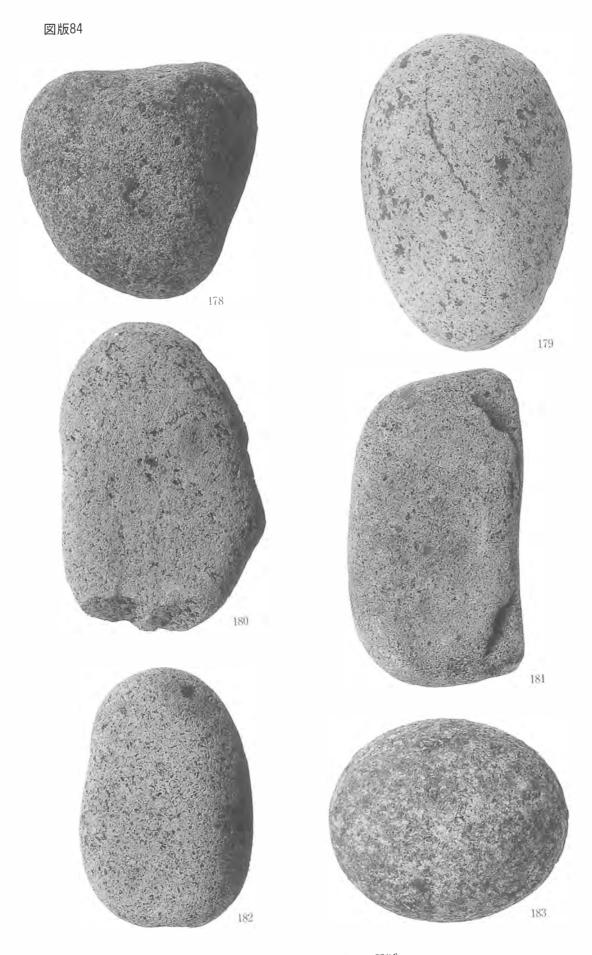
I区出土石器(11)



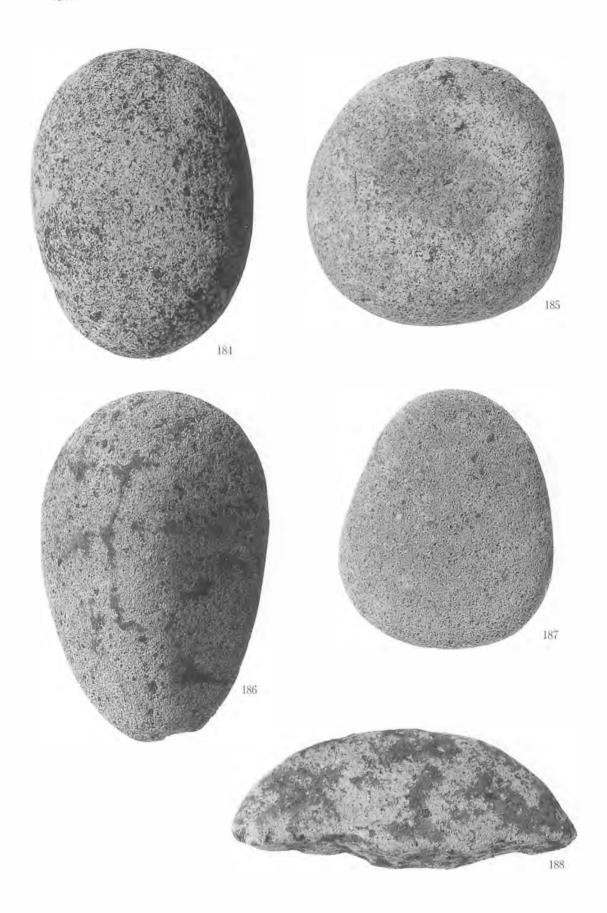
I 区出土石器(12)

I 区出土石器(13)

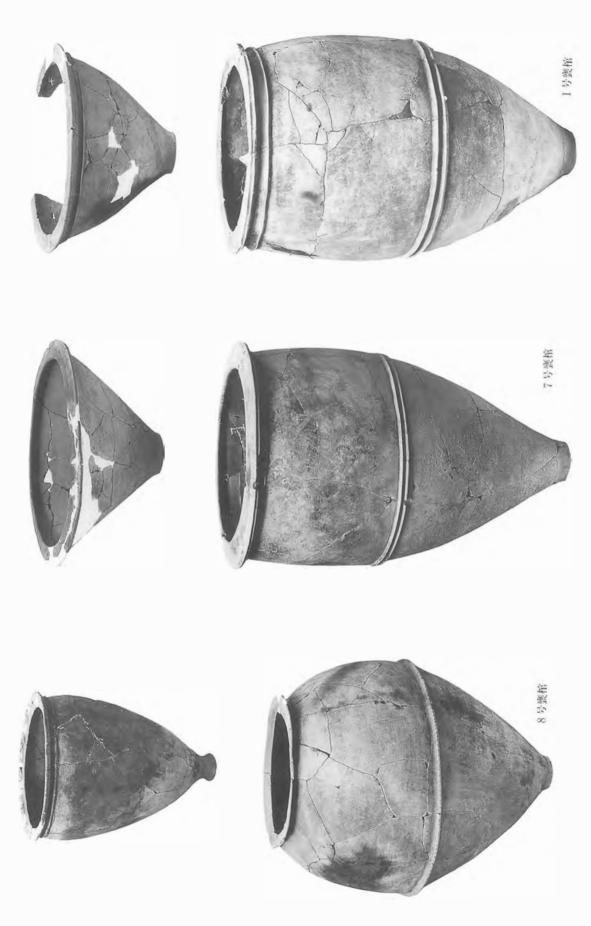




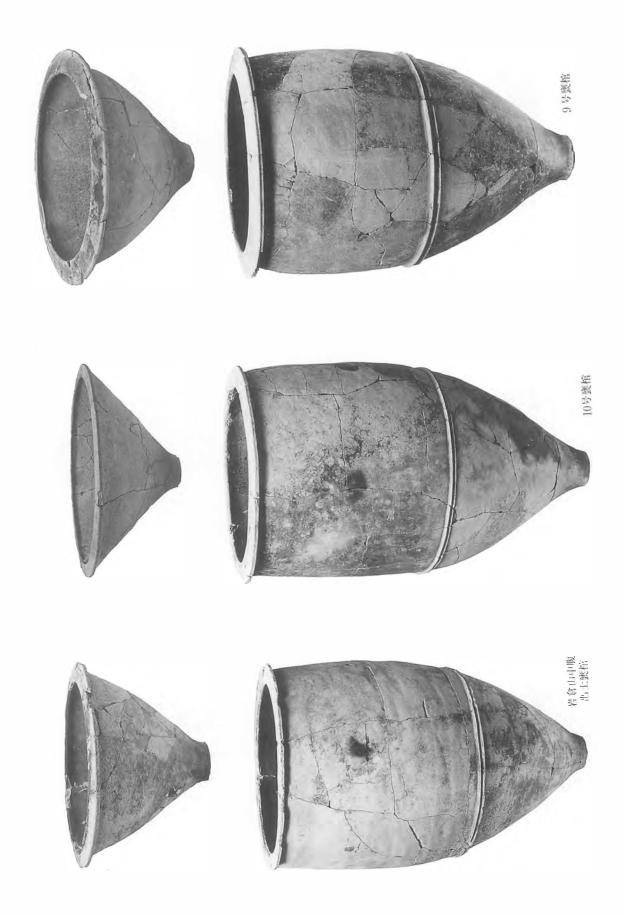
I 区出土石器(14)



I 区出土石器(15)



I 区出土甕棺(1)

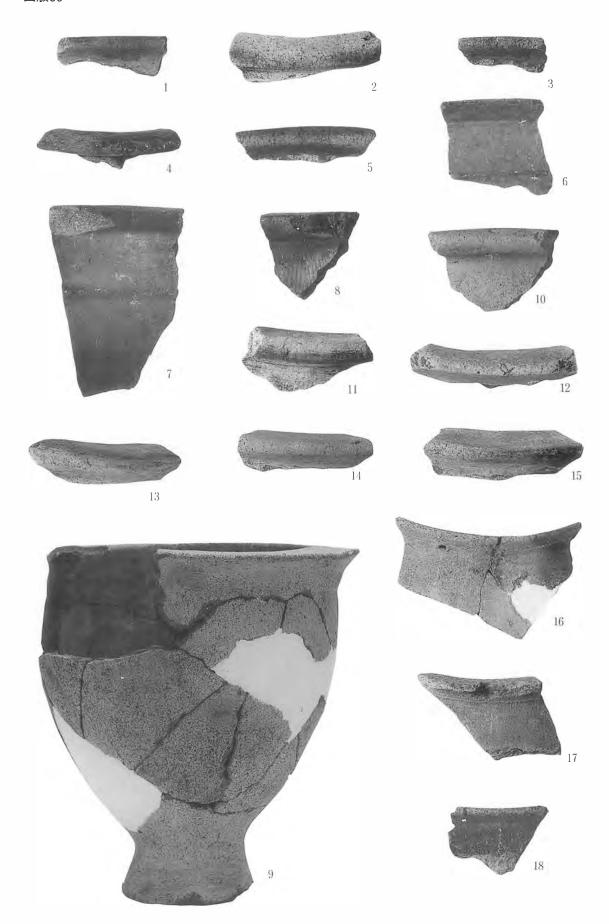


I 区出土甕棺(2)及び岩倉山中腹遺跡出土甕棺

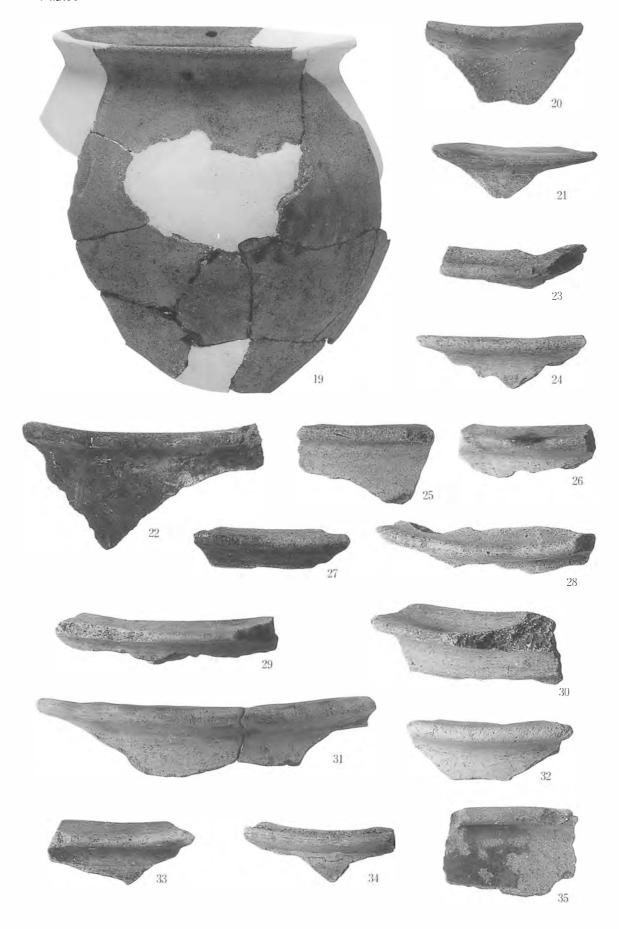
図版88



I 区出土甕棺(2)



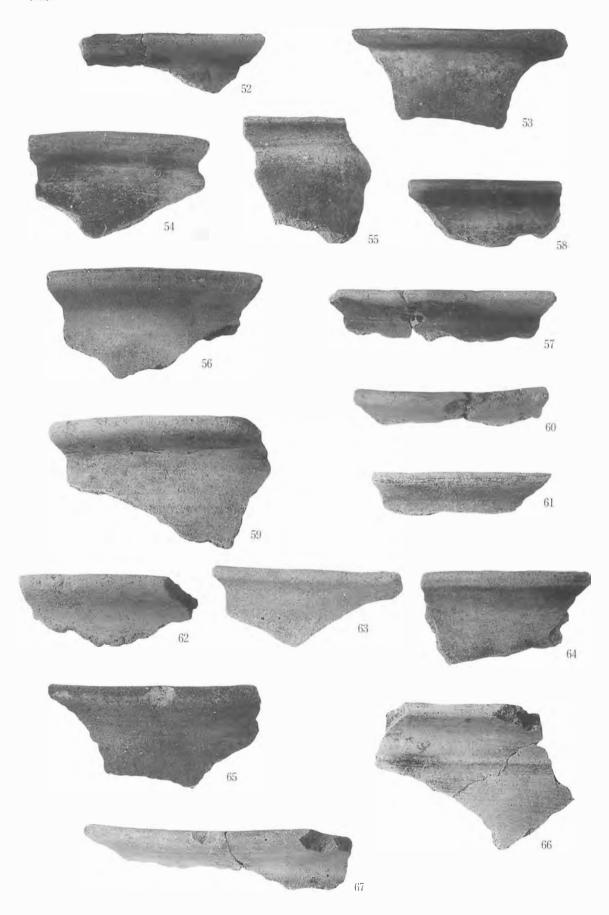
I 区出土弥生土器(1)



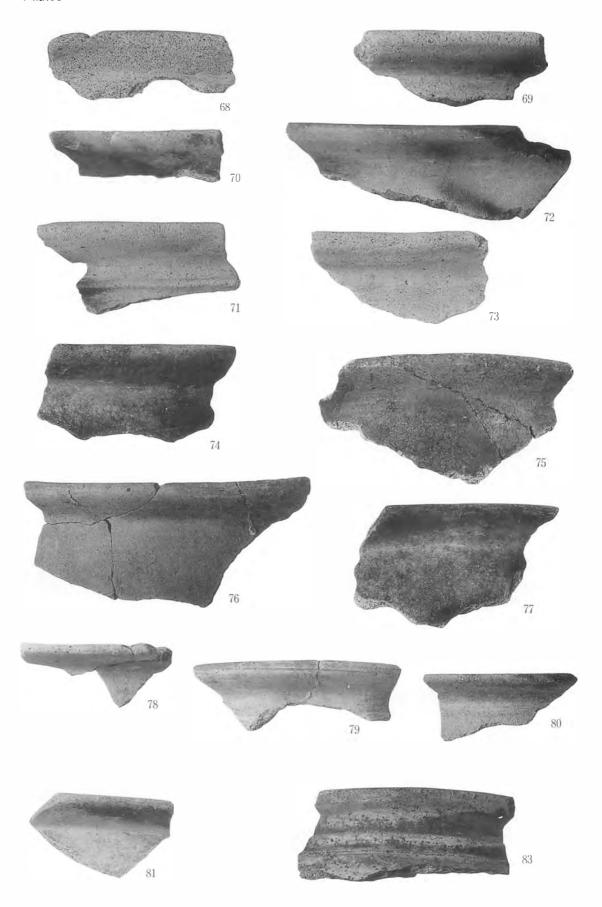
I 区出土弥生土器(2)



I 区出土弥生土器(3)

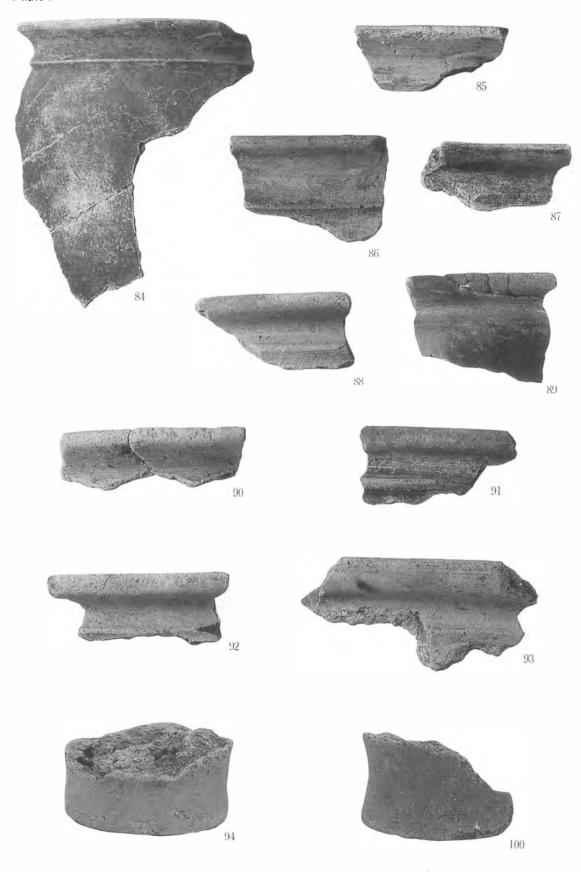


I 区出土弥生土器(4)

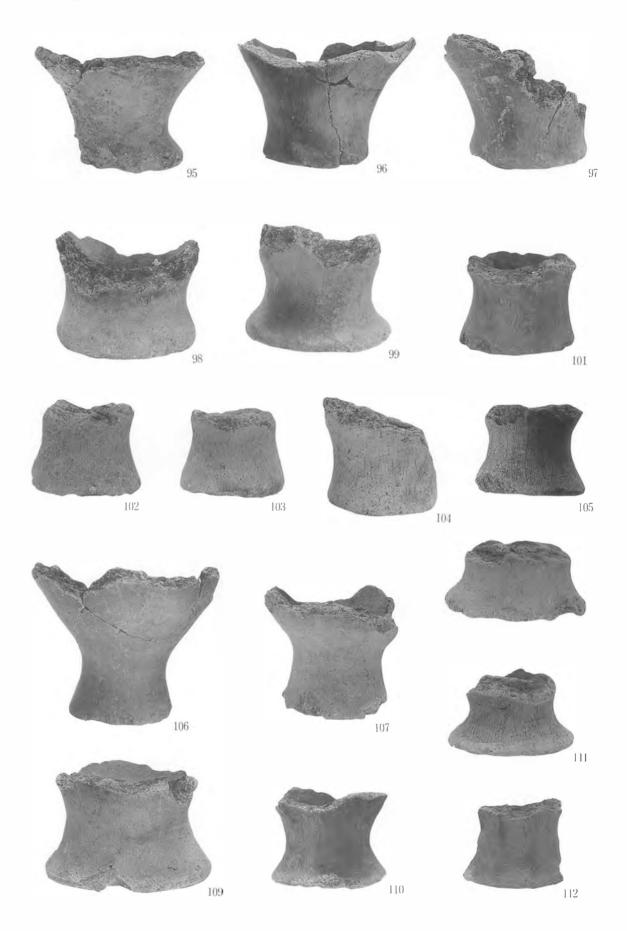


I 区出土弥生土器(5)

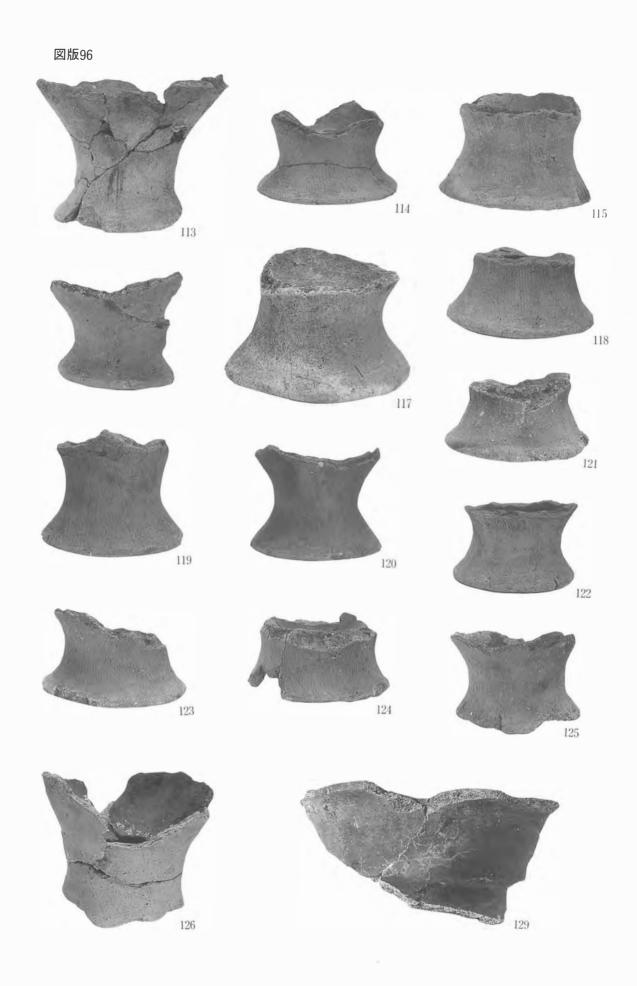
図版94



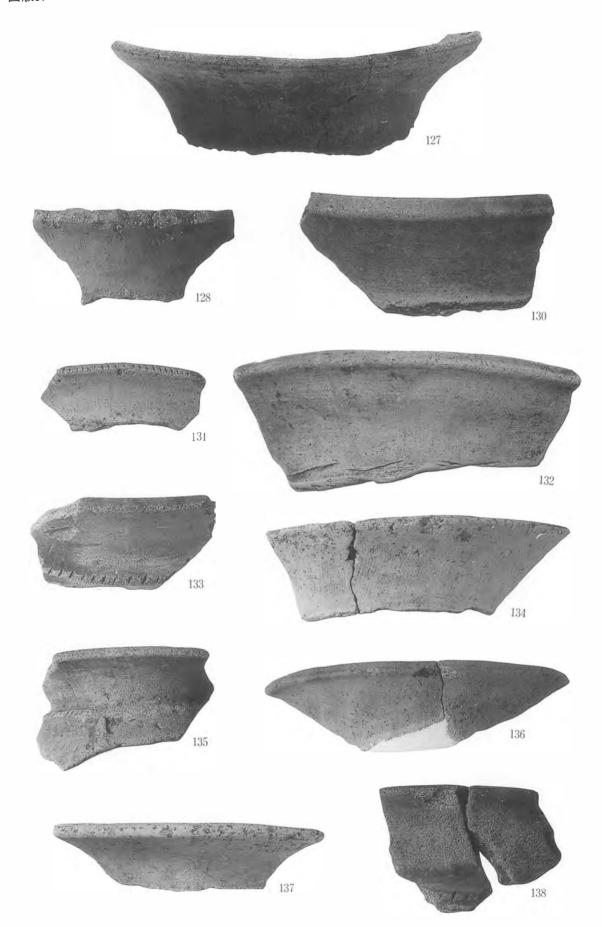
I 区出土弥生土器(6)



I 区出土弥生土器(7)



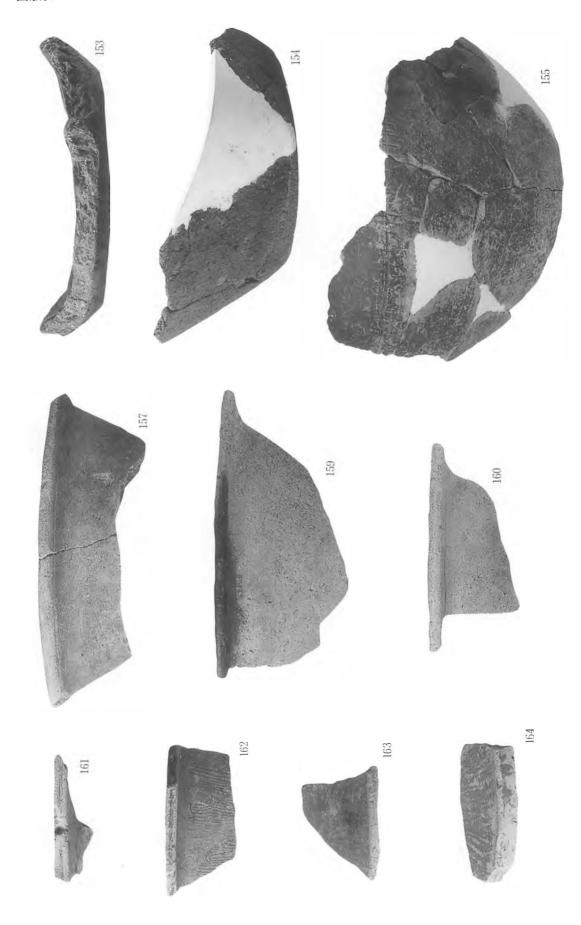
I 区出土弥生土器(8)



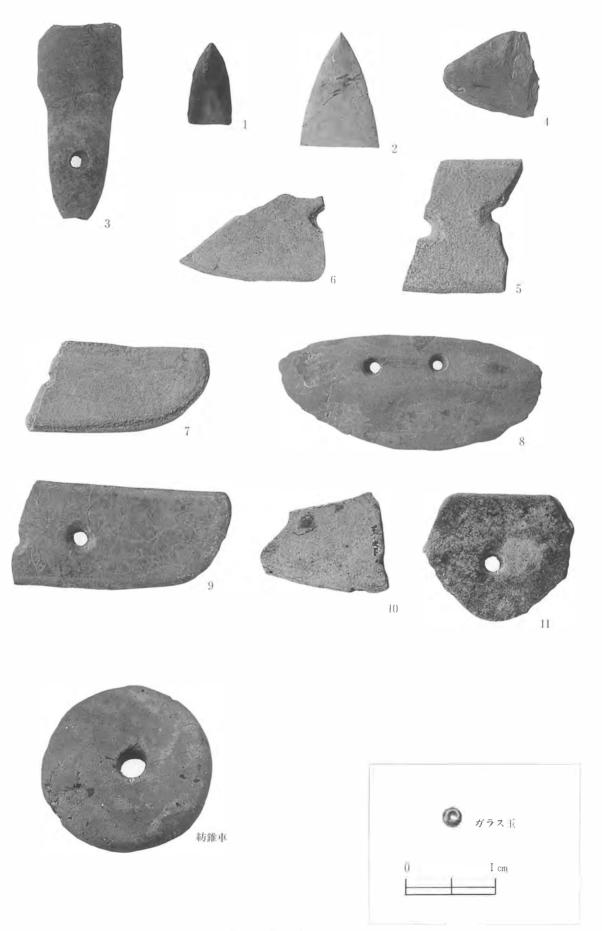
I 区出土弥生土器(9)



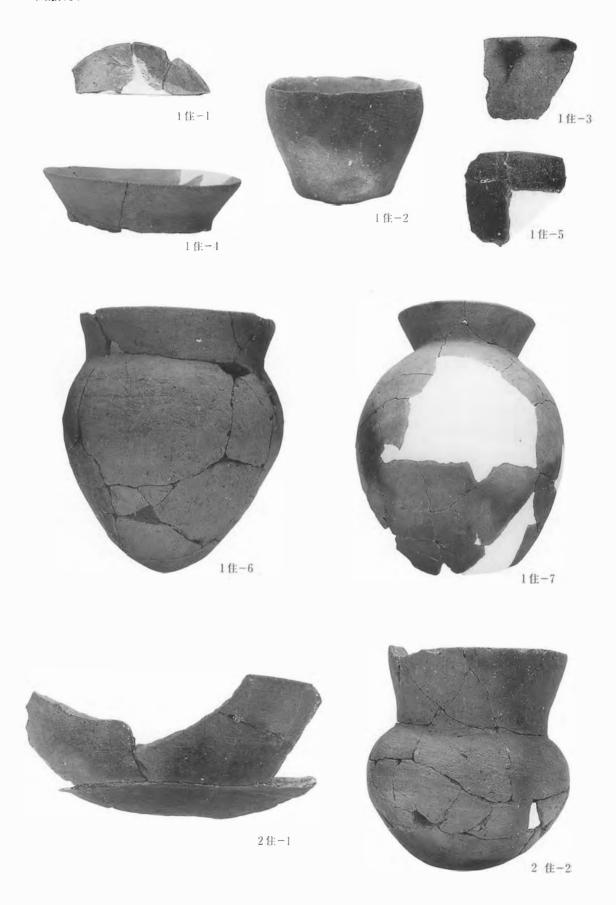
I 区出土弥生土器(10)



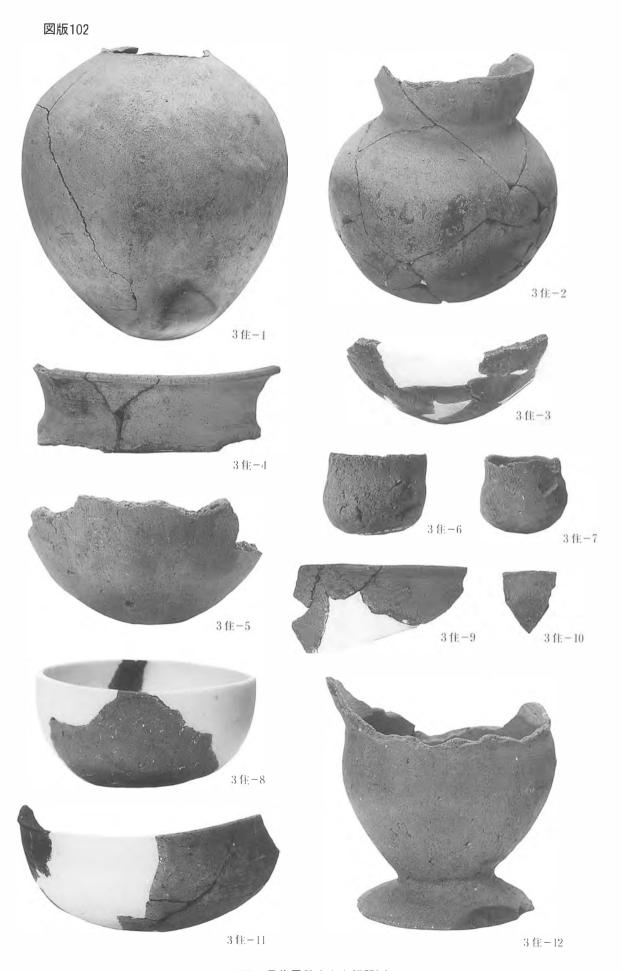
I 区出土弥生土器(11)



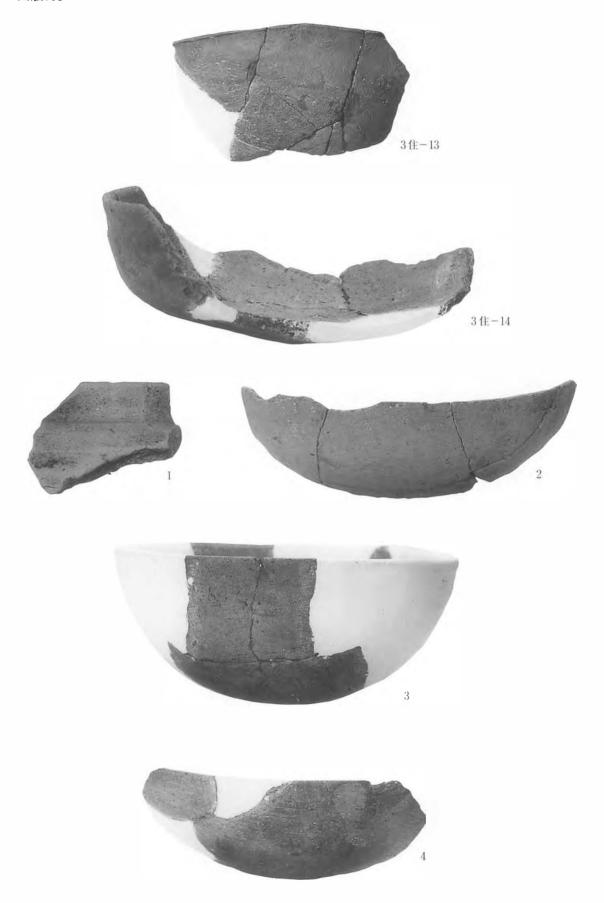
I 区出土弥生石器及びその他の出土品



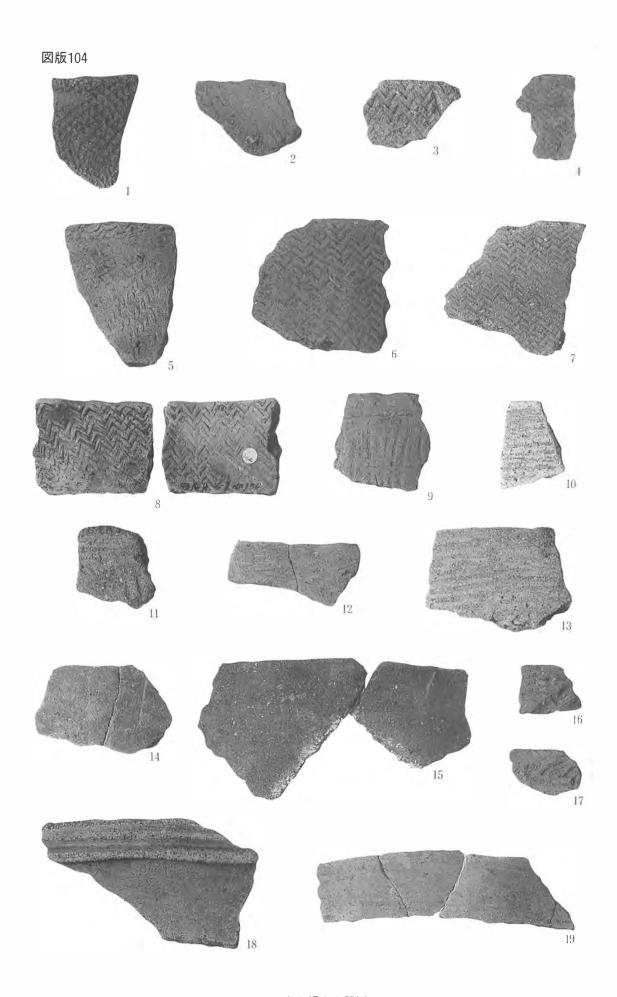
Ⅱ区1号住居跡・2号住居跡出土土師器



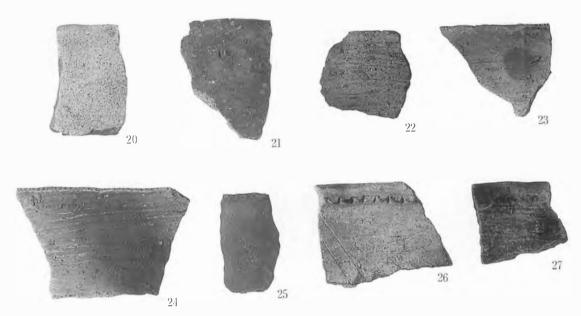
Ⅱ区3号住居跡出土土師器(1)



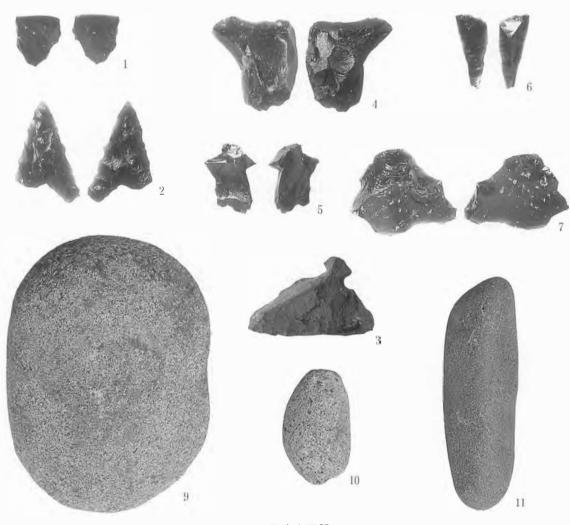
Ⅱ区3号住居跡出土土師器(2)及びⅡ区出土土師器



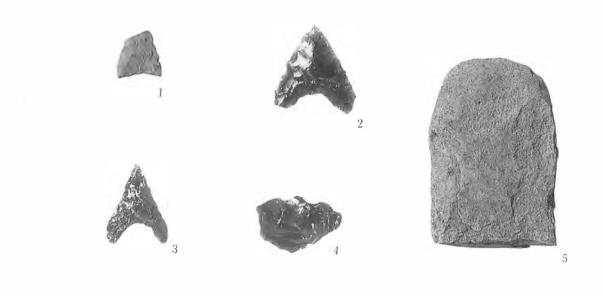
Ⅱ区出土縄文土器(1)

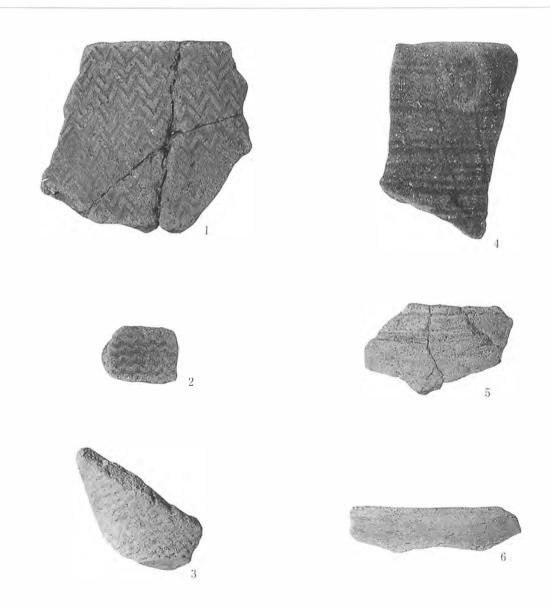


Ⅱ区出土縄文土器(2)



Ⅱ区出土石器





平成7年度調査区出土石器・土器

熊本県文化財調査報告 第160集

庵ノ前遺跡Ⅲ

一般国道3号熊本北バイパス改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 平成9年3月31日

印 刷 株式会社 秀 巧 社 〒861-22 上益城郡益城町古閑106

08 教委 教文

2 003

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 160 集を底本として作成しました。 閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用 してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用 方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名: 庵ノ前遺跡

発行:熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺6丁目18番1号

電話: 096-383-1111

URL: http://www.pref.kumamoto.jp/

電子書籍制作日: 2015年12月24日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しく は熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会

URL: http://www.kumamoto-bunho.jp/